

勘違いから始まる物語

壬生咲夜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何となく思いついた勘違いモノで、淡々と語っていく予定です。

基本的に“くの話”は主人公視点、“くの独白”はそれぞれのキャラ視点、それ以外は
三人称視点(?)です。

※どうでもいいかも知れませんが主人公の名前を“時雨”に変更しました

4 / 29 タイトルを“(ガチ)”から“始まる物語”に変更しました。

6 / 16 新話がいっつも番外編になってることなので上に置きました。

〇〃には挿絵があります。

番外編や設定にはいくつかネタバレがあります。

設定に興味の無い方やネタバレが嫌だという方は飛ばして本編からお読みください。

9 / 27 番外とIFを別に移しました

1 / 22 夏休み編前の話を投稿するにあたり、サブタイの前に「New」を付けま

す。

4 / 14 一応の完結となりました。

9 / 9 少し前に報告しましたが、最新話3つを消しました

目次

設定資料

○ 言峰時雨 | 1

原作組 紹介 | 5

本編

クラス対抗戦までのお話 | 10

チャイナ娘襲来までの話 | 16

対抗戦前までの話 | 23

戦乙女と剣道少女の独白 | 28

対抗戦の話 | 33

襲撃者の話 | 41

ドジっ娘副担任の独白 | 46

英国貴族の独白 | 54

生真面目少女の独白 | 59

休日の話 | 67

お仕事?の話 | 76

呼び出しの話 | 82

金髪転校生の話 | 90

機体チェックの話 | 96

銀髪転校生の話 | 103

専用機の話 | 106

ドジっ娘副担任の部屋割模様 | 112

アート(?)の話 | 117

同盟と武装の話 | 123

生真面目少女の独白 2 | 131

学年別トーナメント | 141

学年別トーナメント ②	—	151
○ 学年別トーナメント ③	—	162
○ 学園別トーナメント ④	—	170
学年別トーナメントの話	—	183
努力家な少女の独白 ①	—	191
努力家な少女の独白 ②	—	197
「噂の男子について取材しました!!」	—	208
(前編)	—	
「噂の男子について取材しました!!」	—	218
(後編)	—	
とあるネット掲示板の雑談	—	232
束の間の日常 ①	—	249
束の間の日常 ②	—	255

束の間の日常 ③	—	261
束の間の日常 ④	—	273
束の間の日常 裏	—	279
臨海学校での話 01	—	286
臨海学校での話 02	—	295
陸上部員の独白	—	302
クラスの纏め役な少女の独白	—	311
V S 変態①	—	318
V S 変態②	—	324
生真面目少女の独白 3	—	335
とあるメイドの葛藤(再投稿)	—	340
教会訪問記 暗部当主な少女編	—	340

学園襲撃の話	418
東の間の日常 ⑥	412
東ぬ間の日常 ⑤	408
文化祭後の話	400
文化祭の話	392
文化祭までの話	389
訓練の話	382
夏休み明けの話	375
天災の独白	369
362	
教会訪問記 生真面目な少女編	
教会訪問記 のんびり少女編	356
351	

Ext ra S T A G E	
勘違いから始まった：	501
学年末リーグ	495
○ 限界突破の話 後編	489
限界突破の話 前編	482
警備員、来日	472
芽生えた能力の話	467
東の間の日常 ⑦	463
聴取する話	458
言峰時雨の告白	449
襲撃の報告	441
V S 変態③	433
最低最悪な日の話	426

東の間の日常	⑧	506
帰って来た話		512
東の間の日常	⑨	517
唐変木な男子の独白	①	523
唐変木な男子の独白	②	527
幻想の話		532
進級後の話		539
自業自得の話		544
2年目のクラス対抗戦の話		549
唐変木な男子の独白	③	553
ツンデレ義妹の独白		557
神に祈らずただ駄弁ってお菓子を食べる会		562

嫌々ながら戦う話
 次代の話 ①

設定資料

○ 言峰時雨

言峰時雨

176cm

水色の瞳に白（或いは灰色）の短髪

イメージ

幼少期に外道神父こと言峰綺礼に拾われ、修行と称してボコボコにされ続けたため心身共に鍛え抜かれたが代償として髪の色素が落ちた（笑）

近接格闘や多彩な武器を使う事に秀てはいるが、逆に1つの事を極め切れていない。その事から複数の武器と格闘術を組み合わせた戦闘を得意としている。

顔立ちが織斑一夏に似ているせいで一夏と交流のあった人物らに勘違いされ続け、その性で被害を受けたり、誤報を受けたりで地味にストレスが溜まっている。

「そろそろブチキレルんじゃないかな」とは布仏らの談。

マーボー狂で週に最低3回は食べており、毎週金曜日は必ずマーボー食べている。ただし、学食のマーボーはそこまで辛くないのが不満の様子。

教会で年長組として下の子らの世話をしてくセが出てしまい、本音に「お兄ちゃんみたくい」と懐かれた。

そして無自覚でそれを発揮するたびに仲の良い友人から「お兄ちゃん」とからかわれてたりする。

頭の回転やキレが良いのは綺礼を筆頭とした外道・鬼畜・人外らに一泡吹かせたり、借金取を撃退・逃亡といった策を常日頃から考えているため。

何でも卒無くこなすように思われがちだが何か1つでも極めたモノが無い。

器用貧乏とは時雨や綺礼の談。

また、絵が下手くそで、設計図を虚に見せた際に「概要が無かったら何が何だかさっぱり」と言われるほど酷い。

嫌いなモノは特に無い。

外道神父をボコボコにすることを夢見て日々鍛練に励んでいます。

〈専用機 白式〉

速い、軽い、装甲が薄い、エネルギー効率悪い、拡張領域に空き殆どがないと時雨と

の相性が最悪な機体。

時雨は白式を使うくらいなら打鉄を使いたいと口を零したことがあるほど。

凰戦のときには後腰に拳銃を1丁隠し持っていたが、トリケロス開発後は重量と盾の取り回しの関係上装備していない。

〈武装〉

右腕：攻防システム“トリケロス”

盾と銃、刃を複合した武器。

電撃や天の様なレーザーライフル等はエネルギー問題や小型が出来てないため、変わりに単発式のライフルを取り付けている。

左腕：ガントレット

展開収納することができるので、他の武器を持つことも可能。

両腰：大型ホルスター

アサルトライフル等といった中距離射撃用の武器を収納できる。

外側にはアンカーが取り付けられているが、引っ張る力は強くない。
イメージ

〈拡張領域〉

◆雪片式型

初代戦乙女が使用していた武器の後継機？

エネルギーを消耗することでバリアー無効化攻撃が可能。
だが、時雨は実剣としてしか使わない。

◆手榴弾 or 銃のマガジン or ナイフ
いずれか1つだけを収納している。

原作組 紹介

◆谷本癒子

2つのお下げの子で砲撃戦を好む。

気が短く、友人をバカにされると相手が誰であれ怒れるタイプ。
ちよつとおっさんくさい所がある。

◆鏡 ナギ

黒のロングの子で高速機動を得意とする。

控え目な性格で作者の勝手でドモった喋り方をさせられている。

陸上部所属で美脚という設定。

◆鈴木加奈

通称 “かなりん”

色々和不憚な子で相部屋がセシリア（初代）と箒（二代目）でドM行為と呪詛に悩まされていた。

※ 名前は作者が適当に作りました。

◆布仏本音

ダボダボの制服を着たほんわかとした子。

1組の癒し。

胸が大きく、友達（主に癒子）にセクハラされたり最近だと幼馴染に胸枕をさせられている。

整備科志望で学内に2つ年上の姉がいる。

外道作麻婆豆腐を食べてしまったさい、普段より3倍の速さで動き回った過去がある。

◆鷹月静寐

両側にヘアピンを付けた黒シヨートの女子

通称：クラスの纏め役

生真面目な性格で時雨に変わって各クラスメイトに通達等をしてきている。

戦闘はあまり得意では無く、情報分析などを得意とする。

少し変わった本（ジョーク集など）を好んでいる。

◆布仏 虚

半袖タイプの制服を着た眼鏡の似合うシヨートポニーの子。

3年整備科主席で学園では生徒会会計を家業では当主の専属従者を務める才女。

時雨からは「先輩」と呼ばれており、彼の専用機をメンテナンスしたり、自作の武器を使って貰っている。

元々複合・隠し武器（ロ・マ・ン）が解り合える者同士で好意的だったが、ある時（月が綺麗ですね）の一言勘違いで恋に落ちた。

とある生徒曰く「時雨によって半分攻略されている」

◆更識楯無

文武両道、才色兼備、学園最強の生徒会長……の筈だが、作者によって残念に描かれている。

時雨曰く「妹の下着に欲情する変態ストーカー」

過去（中二病発言）のすれ違いから姉妹仲が不仲になっていたが、学年トーナメント後溝が埋まるどころか埋まらない崖を作らされてしまった。

「言峰時雨 イツカ 泣カス」

◆更識 簪

クセのある水色の髪をした子で日本代表候補生。

優秀すぎる姉に劣等感を感じていたが、変態及びストーカー行為をしつてから色々と吹っ切れた。

自らの専用機「打鉄式式」は、ほぼ初期の状態から自分が組立て、最後は友達と協力

して完成させた。

勘違いから時雨に恨みを買ってメキメキと実力をつけ、学年トーナメント終了後に和解。良きライバル関係となる。

◆山田真耶

童顔でおっとりとした女性。

上記に加え背が低いことと性格から学生に間違えられることがしばしば…。

先輩である織斑千冬の暴走に振り回され、仕事も回される苦労人。

最近では珈琲と栄養ドリンク（差し入れ）が恋人で友達。

◆織斑千冬

1-1のクラス担任兼学年主任。

時雨を「教会に連れ去られ、酷い目に会って白髪になってしまった一夏」だと勘違いしている。

◆篠ノ之箒

時雨の事を「千冬のもとから飛び出し、グレテ髪を染めカラコンをいれた一夏」だと勘違いしている。

◆セシリア・オルコット

時雨によってマゾに堕ちた英国の代表候補生。

◆鳳 鈴音

時雨を一夏だと勘違いしている中国の代表候補生

◆シャルロット（シャルル）・デュノア

会社の都合で男装して入学したら、初日でバレて退場したフランスの代表候補生。

◆織斑一夏

第二回モンドグロツソで行方不明になった。

時雨と顔がそっくりらしい。

◆五反田家

家族揃って時雨を一夏と勘違いして抱きついてから殴った。

本編

クラス対抗戦までのお話

俺の……言峰時雨の半生を淡々と語っていかうと思う。

まず、俺には両親が居ない。

一般的に物心がつくであろう時にはもう師匠に拾われ教会で育った。

教会での生活は同じような境遇者同士仲が良く、互いに協力しあい上手くいった。
た。

中学になると見習神父として師匠に付き添って、世界を回っていた。

その為学校ではボツチだったが、教会に帰ればたくさん家族がいたので何の苦にも思わなかった。

高校は近くの学費が安い所にいたが、ある日展示されていたISに触れた瞬間に何故か反応してしまい強制的にIS学園に入ることとなる。

どうしてこうなった？

おかしいな……優雅さん家の呪いに掛ったか？

師匠に頼んでお祓いを……いや、やめておこう。

傷口に塩を塗るような鬼畜^{ヒト}だ。

何をされるかわかったものじゃない。

これからのことを考えて迷惑がかかるからと黙って出て行こうとしたら年の近い兄弟達とガチ喧嘩（ほぼ一方的）をし、末っ子共からはガチ泣きされた。

こんなにも想われていた事に涙腺が緩みそうになったが、ボコボコにされるのを愉悦顔で見てた師匠の顔を生涯決して忘れない。

〈入学初日〉

S H Rで自己紹介をしたら担任に怒られた。

普通の内容だったと思うのだが……どこかおかしかったのだろうか？

そう思っていたら、担任の先生―織斑千冬―が口を開いてこう言った。

「お前は言峰ではなく『織斑一夏』だろう」

うん、人違いです。

〈休み時間〉

チャイムが鳴りS H Rが終わる。

今のうちに少しでも予習しておくかと教科書を読んでいると大和撫子風な女の子に声をかけられ屋上に拉致られた。

カツアゲですか？ ヤメテよね、俺の財布は末っ子共を慰めるために空高く跳び立ってつたんだから……グスン。

拉致つておいてだんまりかよ。帰ろうかな……と思つていたら、ようやく口を開いた。

「——久しぶりだな、 “一夏”」

だから人違いです。

〈昼休み〉

クラスメイトののんびりとした少女とその友達でご飯。

その子たちから聞いた話だとうやら俺は『久々に再会した幼馴染を忘れた最低野郎』、『代表候補生に喧嘩を売った身の程知らず』と影で言われているらしい。

前者に関してはマジで知らんし後者に関しては一方的に喧嘩を売られたのだが……解せぬ。

その事について説明したら「そうなんだ」と納得してくれたようだ。

〈放課後〉

前もって話しておいた専用の部屋——と言ってもプレハブ小屋なのだが——に帰ろうとしたら自称幼馴染さんが現れた。

「なぜ謝りに来ない!!」と怒鳴り散らすのが、マジで初対面だし俺は十数年間教会で育つたと説明したら問答無用で剣道場に拉致られた。

「来い一夏!!」その根性叩き直してやる!!」と喚かれてもな…取りあえず我流の構えをとるか

「なんだその構えは!!」

いや、剣道やったこと無いし…

レフェリーの合図無しに問答無用で斬りかかってきた篠ノ之。

それを最小限の動きで避け、すれ違いざまに腹を一閃。

「クツ卑怯だぞ一夏!!」「篠ノ之流はどうした!!」

卑怯って…先に襲ってきたのそっちだろ。

あと篠ノ之流だっけ? そんな流派知らないし、あんたの先祖が開いたのか?

後日知つたのだが、暫くの間『卑怯な手を使う屑』と噂されていたらしい。

〈クラス対抗戦〉

この日までに何度も篠之乃が絡んできてはその度に嫌な噂が広がっていった。

一番酷いのは『先輩の誘いを姉の威光で蹴散らす最低なヒト』、それ、間違い無く俺じゃなくて篠ノ之な。

お陰さまで学園での評価は一部を除いて最低らしい。

アリーナに出ると応援なんて無く、ほぼ罵倒と言つてもいい。

別に何とも思つて無い人から何を言われようがどうでもいいが…

カウントダウンが鳴り、素人&機体が初期状態VSベテラン&専用機という傍から見たら虐めとしか思えない試合が始まった。

試合結果は俺の勝ち。

武装が剣一本というキチガイさに本気で虐めだろうと思いつながら四方八方から襲いかかるレーザーを避け続ける。

こんなのイスカリオテの連中に追い回された時に比べればなんてことない（キリッ機体の最適化と同時に最高速度で一気に近づいてからのアツパー。

思考が回復するまでに何度も攻撃をしシールドエネルギーを0にした。

この時新たに『女の子を容赦なく殴る最低野郎』が追加されたとき。

これは……まあ、しようがないかな……………

〈試合後〉

武装が剣一本とかありえないと自己談判したら

「お前は1つのことを極める方が向いている。何せ私の弟なんだからな」と言われた
だから、人違いだったの!!

あと、試合相手だったオルコットがクラスで突然謝罪をしお札を言われた。
この時「マゾか!？」と思つた俺は悪くないと思う。

【設定】

言峰時雨

白髪の少年。

幼少期に義父であり師でもある言峰綺礼に拾われ教会で育つた。

心身共に鍛えられたため余程のことが無い限り負けない。

髪は修行という名の虐めで色素が落ちた

チヤイナ娘襲来までの話

〈初のIS実習〉

クラス代表を無理矢理することになってから数日。

「よし、飛べ!!」

ISの初実習でお手本としてISの展開と飛行をやれと言われた。

「どうした織斑。スペック上ではブルーティアーズよりも白式の方が上の筈だが？」

素人に無茶を言うね…。

あと、言峰です。

フム、それにしても遅いか…

ならばいいだろう俺の中の最高速度をイメージしてやる!!

思い出せ、ブチキレて銃剣持った神父とのリアル鬼ごっこを、途中でバツタリ会った全身紅いコートのおっさんに二丁拳銃で追いかけて回されたあのおぞましい日を!!!

「ゴウツ!!」

アバババ、止まらねえ

「へ? は、はや…つぶつぶえあ!」

あ、オルコット轢いちやった。

〈祝勝会〉

夕方になるとクラスメイトが祝勝会を開いてくれた。

どうでもいいが、君たち試合前に罵倒しまくってたよな？

ああ、ただ単に騒ぎたいだけね…

そして何故か両隣に座る篠ノ之とオルコット。

頼んでも居ないのにコップに注がれてミックスされる飲物、美味しいですよと差し出される菓子類、俺を挟んで睨みあい&口喧嘩。

頼むからどっか行ってくれ。好き勝手に食わせろ。

遠く離れた席に居るのんびりとした子達にSOSを送ったら

『巻き込まれたくない』↑手話

『……が……ん……ぼ……れ』↑モールス信号

……器用だね君たち

「はいはい、新聞部です♪ 『代表候補生に喧嘩を売り、七光で専用機を貰った卑怯で屑な最低野郎』と噂されてる言峰さんに突撃インタビューしてきました!!」

喧嘩売ってるなら買うぞコラ

「冗談よ冗談。で、インタビュアーなんだけど」

太い精神をお持ちなようで：

取りあえず、噂の大半は勘違いだと言っておこう。

後日、『自らの罪を認めない最低な男』と噂が流れた。

何で？

〈転校生襲来〉

祝勝会の翌日、いつもの陰口・悪口を無視しながら教室に着くと転校生が来るという話題で盛り上がっていた。

どうやら中国から来るらしい。

IS学園にも転校生ってくるんだな……受けてない授業の単位とかどうなってるんだろ？

「あら、今さらになって私の存在を危ぶんでの転校かしら？」

それは無い。

第一、オルコットは対抗戦に出ないだろ。

「頑張つてね言峰君♪」

「ことみが勝つたら皆が幸せだよ」

「専用機は一組うちと四組だけだから余裕だよ♪」

「学食デザート半年フリーパスは確実ね♪」

昨日まで散々な態度だったのに勝手な事を…

「その情報古いわよ!!」

声のした方に振り向くと、何かちっこいのが仁王立ちで立ってた

スゲエ似合わねえ…

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単に優勝できないんだから」

へへ、そうなんだ。

「久しぶりね。会いたかったわ一夏」

だからさ……どちら様？

〈昼休み〉

再び『久々に再会した幼馴染を忘れた最低野郎』の噂が立ったとき。

ワーパチパチ……

のんびりとした子達と食堂に向かうと何故かついてくる篠之乃とオルコット。着いたら着いたで再び仁王立ちで待ち構えるちっこいの。

ラーメン伸びるぞ？

さて、今日は何を食べようかn……こ、これは!! 麻婆豆腐……だ、と？

昨日までは確かに無かったメニューだ。しかも激辛味!!!

これは師匠の弟子として、麻婆党の一員として食せねば!!
暫くすると差し出される熱々の麻婆豆腐。

ほう、中々の赤さだな。

どれ、一口。

「それで、貴女はどちら様ですか?」

「あたしは一夏の幼馴染よ!」

「何、幼馴染だと? お前など私は知らんぞ」

「ああ、確か私の前に転校してつた子がいるっていつてたっけ」

「ほう、ならば私が “初めての” 幼馴染だな」

フム、ボクシングで言うところのジャブと言ったところか…

「あつそ、でそつちのあんたは?」

「んん、初めましてイギリスの代表候補生のセシリア・オルコットですわ」

「そ、よろしく。ねえ、一夏クラス代表になったんだってね？ 私が練習見てあげようか？」

「必要無い!! (ありませんわ!!)」

「一夏には私が教える約束をしている！」

「第一、貴女は二組でしょう！ 敵の施しは受けませんわ!!」

「あたしは一夏に聞いているのよ」

「ここからは一気に攻略する!!」

赤く染まったレンゲを掬い口に運んではすぐにまた掬い口に運ぶ。

それにより連続でジャブを受けるが、その程度なんてことない。

「「ギャーギャー、ワーワー!!!」」

フハハツ、温い温過ぎるぞ!!

「ま、いいわ。積もる話もあるし、後でまた会いましょう」

「二度と来るなチビ!!」

「あ、？」

ふう、中々の辛さだったな。

だが俺の——いや、俺たちの求めている辛さには到底及ばない。

まだまだだな、おばちゃん。

あれ？ いつの間にかちっこいのが居なくなつたな。

あと、何で篠ノ之とオルコツトは立ってるんだ？

さつさと食わないとチャイムなるぞ？

「こどもく流石にそれは無いよ〜」

解せぬ…。

翌日、食堂のおばちゃんが修行の旅に出た。

対抗戦前までの話

〈放課後〉

なんとかオルクコットと篠ノ之らを撒いたのはいいが、今日はISでの訓練はできないな。

候補生の視点から訓練を見てくれるというのは素人の俺からすれば素直に嬉しいのだが、時折邪推が混じってるし、説明が理論的過ぎて解らん。

同じ素人としての意見も参考になるのだが、篠ノ之は論外だ。　「クイツ」とか「スバーンツ」って何だよ。

終いには二人で口論し始めるので、無視して一人で訓練してたら襲いかかって来る始末。

まあ、速攻で沈めるけど…

そして何故か俺だけ『アリーナを独占し好き勝手に暴れる問題児』という称号がつく。ワケガワカラナイヨ…。

…ゴホン／／／

さて、このあとはどうするかな。

訓練施設の大半は行ったら白い眼で見られ、二人にすぐ見つかるだろうし……。

〈専用機〉

俺に渡された専用機 “白式”

軽量高速型で武装がブレード一本のみというキチガイな機体だ。

訓練をしていて気付いたのだが、ブレードに特殊能力的なモノがあり、発動するとバリアー無効化攻撃ができる。

その代償なのか通常、拡張領域に複数の武器を仕舞えるのだが、ブレード―雪片式型―しか仕舞えないらしい。

正直、この武器要らないな。

確かに “剣術” は嗜んでいるが体術と複数の武器を使い分ける戦闘の方が得意だし。ここまで考えて俺は気づいた。

他の武装を仕舞うことが出来ないなら外部に取り付けねばいいじゃん。

何の武器を持っているか解らないというアドバンテージは無くなってしまうが、ブレードオンリーでやるより断然ました。

善は急げ!!

整備室に向けて足を進めた。

〈整備室〉

色々と手間取って漸く辿り着いた整備室。

もうじき閉門時間のせいか人が全く居なく、取りあえずシステムを確認しようと思つた矢先のことだ。

出会い頭に見知らぬ水色の少女にピンタされそうになった。

何だよ急に…。

頬へと迫る右手を片手で抑えると今度は左足からのローキック。

それも空いてる手で押さえたら離せと煩かったので言われた通り離したら案の定バランスを崩して尻餅をついて睨まれた。

え？ これ俺のせい？

その少女だが「あなたみたいな人絶対に許さない!!」「対抗戦でボコボコにしてやる!!」と捨て台詞を残して立ち去ってしまった。

後からのんびりとした子から聞いたのだが、どうやら俺の専用機を開発するのにあたって彼女の専用機開発が止まってしまっていたらしい。

姉に追いつくためにも一人でやると意気込んでいたら、噂を聞きつけブチ切れ。俺を倒すためにクラスを纏め上げたとか。

彼女としては長い間避けられていた幼馴染と仲直り出来て嬉しいが、切っ掛けが誤解でどうも喜べないらしい。

別にいいんじゃない？ 喜んで

さて、先ほどの少女が飛び出して直ぐに襲いかかってきたストーカーさん（入学したから時折つけてくる）をどうしよう。

ブツブツと「簪ちゃんを泣かせた」、「簪ちゃんを押し倒した」、「羨ましい」、「今日は水色なのねh s h s」などと呟きながら攻撃してくるが、それらを全て避けたり逸らしたりしている。

本当にどうしようこの変態ストーカー。てか、簪ってさっきの水色のことか？

眼の前のと似た面影があるから恐らく姉妹なのだろう。

壁際までにくると「くたばれえ!!」と襲いかかる変態ストーカー。

残念、追い詰められたんじゃなくて罠に嵌めたんだよ。

カウンターを喰らわせようと思ったが、突然目の前の変態ストーカーは背後からの一撃でパタリと倒れた。

襲撃したのは眼鏡をかけた生真面目そうな女性で「生徒会長が申し訳ありません」と謝罪された。

変態でストーカーなのが生徒会長か…という視線を向けたら、とても気まずそうに視

線を逸らされた。

縄でグルグルに縛った変態ストーカーを引きずって帰ろうとする女性に整備室や武装に関するシステムについて聞くと、どうやら整備室の使用や武装のレンタルには必要書類を提出する必要があるらしい。

なるほど、これは出すタイミングを考えなければならぬな。

生真面目そうな女性——今度から先輩と呼ぼう——にお礼を言い、レンタルできる武装のカタログと必要書類を持ってプレハブ小屋に帰る。

勿論、カタログと書類は封筒に入れてだ。

今度の対抗戦、どう戦うか考えると非常に楽しみだ。

プレハブ小屋に帰ったらちっこいのが扉の前に居た。

「今日からあたしもここに住むからね一夏」

帰れ!!

戦乙女と剣道少女の独白

〈戦乙女の独白〉

数年前、私は唯一の家族を失った。

私はあの日のことを生涯決して忘れはしない。

第二回モンドグロツソ

今回は弟の一夏が応援に来ていることも改まって意気揚々と試合に出ている。

順調に試合を勝ち抜き二連続で世界優勝を成し遂げ私は誰よりも早くに一夏と喜びを分かち合いたいと思った。

だが、帰還した私に残酷な事実を知らされた。

『織斑一夏は今日未明に誘拐され、現在も行方不明』

ど、どうということだ？ 一夏が行方不明だと？

護衛は？ どうして今まで知らせなかった？

何？ 試合に悪影響を与えないためだと？

ふざけるな！！

怒りに身を任せて殴ろうとする私を控えとして常に傍にいた“山田麻耶”が止めに

掛る。

ええい、放せ麻耶!! でなければ貴様といえど!!

その後、ドイツ軍からの情報提供により一夏が連れ去られたと思われる場所が判明した。

私は後のことを考えず、真つ先にそこへと向かった。一夏の安否を願いながら…。

現場には誘拐犯と思われる複数の死体。

そして、遺体の無い大量の血痕しかなかった。

検査の結果、一夏と同じ血液であることが判明。

出血量から生存は絶望的とのことだ。

それでもなお、一夏は無事だと、どこかで生きてると信じて搜索を続けた。

その後、ドイツ軍を主とした搜索隊が編成されこととなり、条件として私はドイツ軍のとある部隊の教鞭をとることとなる。

それから半年後、一夏の搜索が打ち切られた。

絶望と失意のうちに落ちた私は引退を表明。

日本に帰国後、一夏の部屋で一人ボーっとする日々を過ごしていた。

時折、誰かが来ていた気がするが、あまり覚えていない。

そんなある日、IS学園から教師をやらないかという誘いが来た。

正直、最初は断ろうと思ったが強引に話を進められ、結局教師をすることになった。学園で教鞭をとっている間は心にポツカリと開いた穴を少しだけ埋めることができた。

だが、夜になるとやはり一夏のことを思い出し、今まで飲んだことのない酒を飲むようになった。

数年後、同じく教員となった麻耶に慌ててTVを見るように言われた。

何でも初の男性IS操縦者が見つかったらしい。

正直、どうでもいい。TVを見るまではそう思っていた。

ニュースアナウンサーの横に映る1枚の写真。

色や髪型が違うが間違いない。一夏だ。一夏が生きていた!!

恥も外見も無く泣き崩れる私を麻耶が支えてくれる。

速く、速く一夏に会いたい!! その想いがどんどん募り、とうとうその日が来た。

ああ、一夏。あんなにも髪が白くなって、どれだけ苦勞をしたのか…大丈夫、今度はちゃんと守るから

何? “言峰時雨”に“見習い神父”だと? おのれ教会め一夏を連れ去れたの

は貴様らか!!

ええい、忌々しい。ここはハッキリと訂正してやらねばな。

「お前は言峰ではなく、織斑一夏」だろう」

「人違いです」

〈剣道少女の独白〉

私は幼い頃から姉のせいで苦しまれ続けてきた。

姉の造ったISのせいで家族とはバラバラに引き離され、想いを寄せ居ていた幼馴染とも別れる事になってしまった。

転校先では偽名を使い、数か月たつとすぐに転校を繰り返す。

友人なんて出来るはずなく、常に監視を付けられる日々にストレスも溜まる。

そんなある日のことだ。

IS学園に入学することが確定し、何気なく見ていたTVのニュースで男性IS操縦者が見つかった報じられた。

あの顔立ち、間違い無い。一夏だ!! 一夏と会える!!

そう喜び迎えた入学当日。

クラスに入るとすでに一夏が居て一人で教科書を読んでいた。

フフ、髪を白く染めてたから不良にでもなったのかと思っただが、根は変わらないな。

そうだ！ 次のSHRが終わったら屋上にでも呼びだそう！！

あのバカ一夏！！ 幼馴染である私の事を忘れていた！！

普通忘れるか？ 私は髪型も髪色も変わっても気づいたというのに何てやつだ！！

しかもその事を謝りにも来ないとは、その腐った根性叩き直してくれる！！

バカ一夏！！ 篠ノ之流を捨てたうえにあんな卑怯な手を使うとは見損なつたぞ！！

しかも試合を申し込んでも逃げるとは何て臆病なんだ！！

上級生にも鼻を伸ばしおって、絶対に、ぜくくくつたいに私がその腐った根性を叩き直す！！

「ねえねえくことみく篠ノ之さんが恐い眼で睨んでるよく」

「て、手合わせくらいなら受けてもいいんじゃないかな？」

「だつてなく。こつちは勉強が追い付かないから必死で学んでるのに問答無用で連れ去ろうとするし、勝つたら卑怯だと罵られるんだぞ？」

「「あ~~~~」」

対抗戦の話

〈対抗戦に向けて〉

もうじきクラス対抗戦が行われる。

他クラスにガンを飛ばされるがごとく無視。

IS訓練はあえて少なめにし、逆にIS知識の勉強を多くとり、訓練内容も基礎訓練だけにした。

これには訳がある。

1つは他クラスに俺の情報をあまり渡したく無かったから。

もう1つは大人しく知識を蓄えていると見せかけて他クラスの情報を集めるため。

流石に他クラスの情報を俺一人で集めるのは怪しまられるうえに無理があるのでクラスでも比較的友好的なのほほんとした子改め布仏、鏡、谷本らに頼んだ。

ただ、布仏は流石に幼馴染と敵対したくないので整備関連を手伝うと言い、代わりに鷹月を連れてきた。

報酬として食堂のデザート一品を奢ることになったが、この間給料が入ったからきつと大丈夫。

見習い神父なうえに、半分を教会に収めてるけど足りるはずだ、うん。集めた情報を統括し、対抗策を練る。

2組は専用機持ちが代表になったことで他クラスを軽視している。

機体は第三世代を専用機とし近接格闘を得意とする。流石にイメージインターフェースによる特殊兵器は分からずじまい。

3組は代表候補生だが専用機は持たず、ラファールによる中距離戦闘を得意とする。

4組は代表候補生で専用機を持つが開発が間に合わず同型機の打鉄で出る模様。

ただし、クラス全体を的確に動かし情報戦に徹しているので裏をかかれる可能性がある。

こうしてみると一番やっかいなのは4組だな…。

クラス代表はこの間ビンタしてきた水色で、競争率の高い日本の代表候補生を實力で手に入れている。

噂では姉の威光と言われているが、噂というのは大抵間違っているか誇張されるからな。

ソースは俺。

〈対抗戦〉

ついに始まるクラス対抗戦。

1 試合目は1組対2組、2 試合目は3組対4組、3 試合目以降は勝者同士、敗者同士の順で行われる予定だ。

勿論、時間やエネルギーの回復問題で順序が変わる可能性がある。

会場入りを促すアナウンスが鳴り、カタパルトに乗ってアリーナへと出る。

会場は騒がしくはあるが、流石に今日は来賓が来ているためブーイングの嵐は無いようだ。

「どう一夏、反省した？ 今謝るなら痛めつけるレベルを下げてあげてもいいわよ」

反省？ あゝこの間追い返した時に約束がどうか言ってたやつか。

別人だから知らないって言ったら「女の子との約束を忘れるなんて最低!!」とキレられ、何故か同じように同棲しようとしてた篠ノ之にも「馬に蹴られて死ぬ!!」と言われたな。

というか、いい加減人違いだって言ってるんだろうが!!

その耳と脳腐ってるんじゃない？

「そう。なら、手加減なんてしないんだから!!」

「やれゝ代表!!」

「女の敵なんてボコボコにしちゃえゝ!!」

……おい、今のブーイングに1組のやついただろ。
〈カウント5・4・3・2・1 試合、開始!!〉

しっ!!

「せいやあ!!」

ブレードと青龍刀がぶつかり合う。

「ふくん、初撃を防ぐなんてやるじゃない」

そりやどうも…

「けど、コレはどうかしら!!」

二本目を出したか。

躍りかかるように二本の青龍刀で攻撃してくる。

それら全てを受け止めるのではなく、最小限の動きでブレードを腹に当て軌道を逸らし受け流す。

パワー負けは目に見えて解ってるんでね。そっちの力を上手く使わせて貰うぞ!!

「ちっ、なら…これであ!!」

青龍刀を連結させ槍のように突撃。

続けて連結部分を回し連続で切りかかる。

回転する刃は流石に逸らすことが出来ない。

とでも思ったか？

ワザと隙を与えて左側から切りかからせる。

迫りくる刃に手の甲を当てて軌道を逸らして被弾を防ぎバランスを崩させる。

バランスが崩れたことで生まれた隙に腕一本で一太刀入れ、追撃に移ろうとしたが一瞬で距離を取られた。

ちつ、伊達に代表候補生を名乗っていないか…あともう二太刀入れたかったが…。

「つやったわね!!」

っ!?! 何だ今のは？

「視えない何か」がぶつかった？

「どう、これが『龍咆』よ!!」

恐らく今の視えない攻撃があの機体の特殊機能なのだろう。

武装の透明化能力、或いは空気圧縮による攻撃といったところか？

さつき攻撃を受けた感触から後者の近いかな…だとすれば全方位に撃つ事も考慮しておこう。

「さあ、どんどん行くわよ!!」

近接が不利だと思ったのか、バカスカ空気砲モードキを撃ってくるちっこいの。

だが、

「このつ、なんで当たらないのよ!!」

2と3発貫つたが、お陰で癖は解つた。

砲身や砲弾が視えなくても撃つまでの過程で無意識に眼で狙いを定めている。

何処を狙っているかさえわかれば対処のしようは幾らでもある。

それにしてもだ。こうして銃弾を避けてるとマリアン神父の実験に付き合わされたことを思い出すな。

なんだよ……『タダでモルモットになるか、借金の肩代わりをするか好きなほうを選べ』って……

つといかんいかん。試合に集中つと。

「当たり前ささいよ! このバカ一夏!!」

当たるかバカ、それといい加減学習しろチビ!

うおつ!! 狙いが乱れたけど、数が多くなつたな。

下手な鉄砲数撃てば当たるとか? だがな……

射撃武器はこちらにもあるぞ!!!

後ろ腰に隠していた拳銃を取り出し発砲。

「嘘ッ!?!」

狙うは頭部と心臓。

「キャッ!! 女の子の顔を狙うなんて最低よ!!」

外野からも「武器を隠し持つのは卑怯」だとか、「顔を狙うのは最低」だがブーイングが飛んでくるが知るか。

既に知れ渡った情報を活用し、罠にはめるのが何が悪い。

外部に武装を着けるのがルール違反とか言うなら、おたくの代表は背中に青龍刀を背負ってただろうが。

それに情報収集を怠ったそっちの落ち度だろ。

それでもって顔をガードするのはいいが、手元がから空きだ!!

「きゃっ!?! あ、双天牙月が…」

3発連続で手元を撃ち、狙い通り主力武器が地面へと落下していく。

弾切れになった銃を捨て、ブレードを両手に持ち加速する。

慌てているせいか狙いの定まっていない砲弾が飛んでくるが気にしない。

被弾覚悟で切り掛かる!!

はあああああああっ!!!

「ヒッッ!?!」

相手との距離が0に近づいたとき、

上空そらから何かが迫ってきた。

襲撃者の話

〈襲撃者〉

上空から何かが降ってきた。

とつさに目の前にいたちっこいのを蹴り上げて回避することできたが何だったんだ

？

目下には砂煙が舞っていてよくわからん。

…あ、少し離れたところにちっこいのが横たわってる。

蹴った方向が悪かったようで、さっきのに直撃し機体はボロボロだ。

まあ、バイタル反応は正常値みたいだし、ほっといてもいいだろう。

お、どうやら煙が晴れてきたようだ…：…何だあれは？

パワードスーツにしてはゴテゴテしてるが、全身装甲のISか？

まあ。一応警告文でm——ついきなり撃つてきやがった!?

『言峰君、避難してください。すぐに制圧隊が編成されて出撃します』

そうは言われても完全にロックされてるしな…：てか今から編成するのかよ。

こういう事態に備えて前もって編成し、すぐに出張れるようにしとくもんだろ。

『山田先生、あいつの好きなようにやらせましょう』

『ですが!』

おーい、何を言ってくれやがりますかこの担任様は!!

んでもって諦めるな副担!! コーヒーに塩とかそんな茶番劇どうでもいいから!

頼むから速く制圧隊を出して!! エネルギーもそんなに残ってないんだよ!!

というかだ。

さつきからバカスカ撃ってきてウザインだよ!!

と叫んだところでこっちには射撃武器は無いのでどうしようもない。

どうする? ……あ、青竜刀めくっけ

ブレードを仕舞い、飛んでくるビームの嵐を青竜刀を扇風機のように回して弾く。

続けて見様見真似でちっこののがやってた突撃からの回転切りで攻撃。

機体の表面を軽く削るだけであっさりと躲されてしまった。

ちっ、やりにくい。前に”メーネ”を使ったことがあるから行けるかと思っただがやっ

ばダメか。

ある程度時間があればコツを掴めるんだがな。

せめてコイツが二刀に解ればいいが、さすがにロックがかかってて連結を解除する

ことは出来ない。

……冷凍チュー●ツトを膝で割るみたいなことをやれば折れないかな？ ダメ？
未だ打ち続けられる弾幕を弾きながらそんな事を考えていると、痺れを切らしたのか
こちらに突撃してきた。

あの機体もパワータイプか、一撃がかなり重い。
が、動きは鈍足だ。

青龍刀を手放し、右腕からの攻撃を往なして胸元に掌打を放つ。
だが大した効果もみれず、追撃が来る前に退避。

おいおい、結構強めに打った筈だぞ？

普通だったら呼吸が乱れる所なのに、なんて分厚い装甲なんだ。

……いや、まさかあの機体。

青龍刀を回収しないで脱出してしまったので、ブレードを手元に呼び出す。

様子見なのか何もしてこないのいいことに、一度呼吸を整え、相手へと身体を向け
る。

バリアー無効化能力を発動したブレードを構え、相手に向かって――

――槍のように思いつきり投げた。

予想外の行動だったからか、行動に一瞬の空白があったが飛んでくる物騒な代物をあつさりと躲す。

これには俺も少し驚いた。普通ならばあの状態からだと言を弾いたりするものだが、それをアレは「避けた」のだ。

バリアー無効化能力を知っている？ 考えるのはあとだな…。

回避先に回り込んで襲撃者の右腕に両手両足を絡める。

立ったままでの腕十字固めだ。

先に行動を移される前に腕と足に力を入れ、スラスターを全力で噴かせてその腕を腕いだ。

やっぱり、中身は機械か。

あくよかった。これで中に人がいたらどうしようかと思つたよ。

距離を取られる前に腕いだ右腕で殴る、殴る、殴る。

近距離で撃たれそうになったので、掴んだ右腕を投げ捨てて盾にする。

爆発した腕が上手い具合に広がってくれたので、今のうちにと地面に突き刺さつていたブレードを回収し、再びバリアー無効化能力を発動。

爆煙を掻き分けて襲撃者の胸部を切り裂いた。

上下の半身がお別れし、崩れ落ちる襲撃者。

沈黙したかのようにみえたが、念の為、上半身にブレードを縦に振りおろして頭部を破壊。

一瞬、スイカ割りみたいだなと思ったのは俺だけの秘密だ。

自爆される可能性を考慮し、距離を取ってから管制塔に連絡を取ろうとしたときだ。

『一夏!! 男なら、男ならそのくらの敵に勝てなくしてなんとする!!』

地面に倒れる何名かの生徒の中心に、放送席から篠ノ之がそう叫んできた。

：いや、もう倒したし、あと人違いだったの。

ホント、何しに来たのお前？

後日、何故か『バーサーカー』と影で噂されるようになった。

いや、まあ……あの戦い振りからなら否定できないんだけど何で広がった？

確か遮断シールドが敷かれたから中の様子みれない筈だったのだが……。

ドジっ娘副担任の独白

私がI S学園で教鞭をとるようになって早数年。

職員寮の部屋で一人作業をしていましたが、長時間続けていたせいか肩が凝ってしまった。い少しばかり休憩しようとしてテレビを点け何か飲み物でもと立ち上がろうとしたときでした。

急に番組が変わり緊急ニュース速報が流れます。

地震？ それとも事件？ そんな事を思いながら眺めていると、そこには『世界初、男性I S適合者現る』と書かれていました。

驚きの事実、実際に筆筒の角に小指をぶついたり、柱に頭をぶつけながら慌てて隣の部屋にいる先輩――織斑千冬さん――の所へ向かい、先輩に急いでテレビを点けてと催促します。

最初は興味がなさそうにしていた先輩でしたが、ニュースキャスターの隣に写った一枚の写真を見て驚愕の顔を浮かべました。

「一夏!? 一夏が生きてた」

一夏？ 確か先輩の弟さんですよ。

第二回モンドグロツソのさいに何者かの手により誘拐され、要求として『織斑千冬の

決勝出場を辞退しろ』と言われていましたが日本政府の手によってその事を隠され、その事を知ったのは決勝が終わってからでした。

怒りに身を任せそうになった先輩を必死に止め、その後、ドイツ軍を主とした搜索隊が編成されましたが結局見つかりませんでした。

先輩がIS操縦者を引退し、心配になった私はお見舞いに向かいました。

チャイムを鳴らしても先輩は出てこず、もしかしたらと思いきや窓ガラスを割って家に入ると懸念していた最悪な事態こそ起こっていませんでしたが、先輩は弟さんの部屋で生氣を感じられない眼で虚空を眺めていました。

このままではダメだと、先輩と交流の深かった人たちや弟さんの友達と協力して何度も励ましたり、身の回りの世話をし続けました。

あの頃の先輩は今にも消えてしまいそうで本当に見てられませんでした…。

IS学園で教鞭をとってからある程度回復はしましたが、昔のような顔はまだ浮かべません。

速く元気になってほしい、と思っていた時に今回の件です。

泣き崩れる先輩を抱きとめ、思わず私も泣いてしまいました。

それからという者の、先輩は弟さんが来るのはまだかまだかと心待ちにし、ある時なんかは「もう待てん!!」と授業をポイコットし、慌てて止めたのは記憶に新しいです。

先輩が元気になってくれたのはとても嬉しいのですが、気になることがいくつかあります。

まず、公開された初の男性 I S 適合者の名前が「言峰時雨」ということ、次に髪が先輩とは真逆の白あるいは銀色であること、最後に教会の見習神父をしているということです。

その事を先輩に聞くと、

「あれは一夏だ！ 私が言うのだから間違いない!!」

「名前は偽名を使わされているに決まっている!!」

「髪を染めると言うのは一夏にとつてありえない。連れ去られたあと、あまりの恐怖に脱色してしまったのだ。可哀そうに……」

「オノレ教会メ、私ノ一夏ヲ連レ去ルダケデハ飽キ足ラズ、神父ニスルナドフザケオツテ!!」

鬼のような形相を浮かべる先輩に、私は何も言えませんでした。

言峰君が I S 学園で生活をするのにあたって、通信回線でマスクウエル司教と交渉です。

こちらとしては一年女子寮に住ませるつもりでしたが、

「我が教徒を異教トーゲフンゲフン、異性の…それも大量のと同じ場所に住ませるわけにはいかない」

「そもそも異性と同居部屋にするとかバカなの？」

「え？ 重要保護人物と同じ部屋にする？ もっとバカなの？」

「孕ませてウチの教徒を搔つ攫う気まんまんとかアリエナクイ」

まるで溜まりに溜まったストレスをネチネチと解消していると感じたのは気のせいでしょうか？

「フザケルナ!!」と叫び噛みつく先輩も恐かったです、「ホホ、困りましたね」と頬笑みながら眉間に青筋を浮かべる轡木理事長はもつと怖くて、部屋の隅で生徒会長の更識さんと一緒にガクガクと怯えてました。

結局、学園の敷地内の一面にプレハブ小屋を教会側の資金で建てることになりました。

プレハブ小屋は2階建てで簡易ですがシャワーとトイレが備付られているんです。

一個人にここまでの特遇をするのに凄いな〜と思ってましたが、後から言峰君に聞いたら『給料からローン払いで引いとくね♪』と告げられていたそうです。

プレハブ小屋には学園側と教会側でいくつか監視カメラをつけることになりました。

向こう側の言い分としては「故意に壊されて無理矢理拉致られてはたまりませんから

ねく」とのことです。

先輩が小さく舌打ちした気がしましたが私の気のせいだったと信じます。

〈入学式〉

とうとうこの日がやってきました。

朝からどこかワクワクとした面立ちをしていた先輩でしたが、教頭の「今年度からやっかい……男が入学するので各学年主任と寮長は会議を開きますので残ってください」の言葉で一転。

変わってくれと視線で訴えてくる先輩を嗜めて、先に1年1組に行きます。

私は副担任としてこのクラスの担当となりました。

クラスに入り、SHRを進めながら例の男子生徒——言峰時雨——君を見ます。

この人が先輩の言う弟さんの織斑一夏君……なのでしょうか？

私は弟さんのことは写真でしかみたことが無いので何とも言えませんが、顔立ちは何となくですが先輩に似ています。

あ、せんp……じゃなかった。織斑先生、会議は終わられt——「お前は言峰ではなく織斑一夏だろう」——えく無視ですか。

言峰君は「人違いです」と言いましたが、先輩はそれに納得せず「記憶喪失なんだ」の

一点張り。

言峰君に弟さんだと言ったり、昔こういう事があつたと話をされますが、聞いてる人は訳が分からないといった顔をしています。

例え記憶喪失でもそんな急にたくさんのことを話したりするのはやめた方がいいと思うんですけど……

それからはクラス代表を決める際に言峰君が生徒の悪ふざけで代表に祭り上げられそうになったり、オルコットさんが代表候補生として信じられない発言をしたり、先輩の鶴の一声で来週に代表決定戦をすることになったり、言峰君はオルコットさんの発言を指摘しただけなのに何故か『代表候補生に喧嘩を売った身の程知らず』と噂されていきました。

さらに言峰君のことをよく思って無い生徒がどんどん悪い噂を作り、それを信じた他の生徒が噂を広げてしまう悪循環。

私たち教師が「そんなことはない」と話しても、表向きには落ち着いたように見えて裏ではその火が燻つていてもつと酷い噂が流れ、終いには一部の教員からも一人の生徒ばかりを気にかけるのは依怙鼻頂に繋がると止められてしまいました。

……力及ばずごめんなさい。

〈放課後〉

帰宅準備をする織斑君に例のプレハブ小屋について説明しようと思いましたら、先輩が我先にと手荷物を渡します。

「お前が使っていた衣類と携帯の充電器だ。使うといい」

……私の見間違いないかなければ、その無理矢理詰め込みましたと言わんばかりの袋から出てる充電器ってガラケーのですね。今の主流はスマホですよ？

それに昔使ってたっていいかもしれませんが、それって行方不明になる前のモノですからサイズとか合わないんじゃないや……。

「結構です」

ですよね〜。

〈クラス代表戦〉

試合は序盤こそオルコットさんが有利にみえるモノでしたが、後になつてから思うと言峰君は実戦もまともに動かすのもこれが初めてです。

あの短時間で機体の特製やクセを理解し、観客席からの罵倒・戯言を気にも留めず、冷静にオルコットさんの戦い方を分析してたんでしよう。

純粹に凄いと思いました。私なら周りからの評価や言葉に気を取られミスをし、頑張

らなきやという気持ちがあくぶってミスを連発してしまってます。

フィッティングが終了し、初期状態で相手をされていたことに驚いていたオルコットの顎に一撃。

そこから手足を駆使して肩、腕、足、腹と何かの格闘技で連撃をしシールドエネルギーを全損。

言峰君の勝利ですが、変わりに噂で『女の子を容赦なく殴る最低野郎』流れました。確かに女の子の顔を容赦なく殴るのはちよつと…と思いましたが、私が候補生時代にも格闘技を使う人はいました。

ただ、華が無いからと大会に出場させてもらえず、多くの方が別の戦い方をとるか、引退。残っているのは軍に属している人くらいです。

試合後、オルコットさんが自分に非があつたと謝罪しました。

ただ、どうして頬を朱くされていたのかが解りません。

好意を抱くにしても今までの流れで何処にその要素があるんです？

単に強い人が好きなんですか？ それとも……

英国貴族の独白

I S 学園に首席で入学。

これくらいのこと、私セシリア・オルコットにとって造作もないことですわ。

他の一般生徒が学園に来るよりも少し早く、私たち海外組は女子寮に入寮。

部屋はこじんまりとしていて、ここにもう一人同室の方が住むのですね。

仕方がありません、部屋に特注のベッド（キングサイズ）だけで手を打ちましょう。

今日から学園での授業が始まります。

教室に着いてしばらくすると、噂の男が来ました。

そのことにクラスメイトがキャーキャーと騒いでいますが、所詮男なんてみんな同じ、卑屈で媚を売るしかない低俗な種族に決まっていますわ

まあ、必死に努力をする姿勢は少しだけ認めてあげましてよ。

クラス代表を決める際、私の名が挙がると思いきや例の男があげられましたわ。

そんなの納得出来ませんわ!! 1年間も男が上に立つだなんて屈辱以外ありえませ

んわ!!

色々と文句を並べ、時には男のことを悪く言ったのに何も言い返さない。

なんて情けない! 何か言い返してはどうですか?

「いや〜凄いな」

あら、今さらになって私の凄さを実感したのk——「候補生って平然と他国をディスるんだな」——しら?

ど、どういうことですか?

「え、だってさつきから日本を侮辱する内容のオンパレードだっただろ。クラスの半分は日本人なのに…」

え? あ、ああああああああああああああああああああ決闘ですわ!!

「なんで?」

いいですか? 貴方が負けましたら私の奴隷にしてさしあげますわ!! 光栄に思いません。

「いやいや、俺マゾじゃないし」

男でしたら文句を言わず従いなさい!!

それから織斑先生の鶴の一声で来週に試合を行う事になりましたわ。

フフ、今からあの澄ました顔を泣きツ面に変えるのが楽しみですわ♪

……………負けた。この私が？

試合は最初、私の有利に進んでいました。

ですが、途中であの男の機体が光ったかと思えば姿かたちが変わりました。

“ファーストシフト”つまりあの男は先程まで初期状態で私と戦っていましたのね

…。

そこからは油断していたところを付かれて顎に一撃。

頭がクラクラとするなか何度も何度も殴り蹴られ、エネルギーを全損。

正直、悔しいという気持ちがありますが、それ以上に込み上げてくるモノがあります。

試合を思い出すたび、あの男……………いいえ言峰時雨さんのことを考えただけでもそうです。

す。

整った顔立ち、綺麗な銀髪、高い背丈、落ち着いたフインキ、殴られた感触、気を失

う前に視えた冷たい眼差し。

もしかして、コレが恋ですの!?

セシリア・オルコット15歳にして初恋をしましての!?

彼のことを考えれば考えるほどお腹―特に下の方―がキュンツとなりますわ!!

こ、これは今すぐ国際電話で幼馴染のチエルシーに確認しなくてわ!!

あれからすぐにチエルシーに相談しましたが、何故か通話の途中で倒れてしまいましたわ。

疲れが溜まっていたのでしょうか？ 私が居ない代わりにオルコット家を任せていますから負担が大きいのでしょうか。

：今度、何か日本のお土産を送ってみましょう。どこのお店が良いのでしょうか？

ブーイングの嵐の中、時雨さんのクラス代表が決まりましたわ。

こ、これはチャンスですわ！ これを機に時雨さんにお近づきを——の前に皆様に謝罪しなくては……

犯した罪すら償わなければ胸を張ってオルコット家当主として、一人のクラスメイトとして名乗れませんもの。

時雨さん。クラス代表になったからには他クラスに負けるなんてことあつてはなりませんわ。

そこで私、セシリア・オルコット自らが指導をしてあげましてよ。

あ、その嫌そうな顔にちよつとだけ身体がゾクつと振るえましたわ。

この気持はなんなのでしょう？

「そんなものはいらん!! 私は一夏から直々にどうしても頼まれているんだ」

「…頼んでねえし、人違いだと言ってるのが解らないのかね〜脳筋」

「何か言ったか」

「…何も言ってますんよ。全くもって学習能力の無いバk…篠ノ之さん」

「一夏つ!!!」

むう、篠ノ之さんばかりに罵倒を…ズルイですわ。

これが嫉妬なのでしょうか？

生真面目少女の独白

〈噂について〉

クラス代表選で例の男性 I S 適合者——言峰時雨君——が周りの予想を裏切って勝利を収めました。

彼の噂は私たち上級生の所まで届いていて、あまり良い感情を持っていない生徒が多かったのですが今回のを機に少しでも評価が変わったみたいです。

現に友人の代表候補生を務める「ダリル・ケイシー」は「もう少し実力をつけたら軽く揉んでやるか」と楽しげに話していました。

妹の本音から彼のことを聞いてみると、人一倍遅れてしまっている I S 知識を身につけようと努力され、話しているとまるでお兄ちゃんみたいだと言っていました。

その「お兄ちゃんみたい」というのが私には解りませんが、噂とは違う良い人柄の方なんですよう。

それに惹かれてか少しずつ友達も増えているようです。

どうして彼の事を悪く言う噂が広がっているのか。

それは言峰君の敵を増やし学園から追い出そうと考える女尊男卑の生徒による手で

す。

それに見事引つかかってしまった簪お嬢様は“打倒言峰時雨”を掲げてクラスを纏め上げ、専用機の開発ペースも上がりました。

本音も簪お嬢様と和解できませんでした。が素直に喜べないと複雑そうな顔を浮かべ、言峰君からは喜んでいいのではと言われたそうです。

〈出会い〉

「ちよつと席を外すわね」と生徒会室を出て行かれて早数時間。

今日もまた、未だに一人だけ和解出来ていない妹の簪お嬢様を影からストーキングされてるのでしょうか。

このままでは今後支障が出てしまいますので、連れ戻そうと整備室に行きました。整備室に着くと、そこには探していた方を見つけることができました。ええ――。

ですが、何で例の男の子を（物理的に）襲ってるんですか?!?!?

何かブツブツと呟いてますが、此処まで聞こえませんか。

お嬢様があんな行動を取られるとは……まさか、お嬢様は噂を信じられてるのですか?!? あるいは簪お嬢様関連ですか?

と、兎に角考えるのはあとです。速く止めないと。

お嬢様を（物理的に）止め、事情を説明すると苦労してるんですねという眼を向けられました。

やめてください。気まずいです…。

逃げ出さないよう縄で縛っていたら、変なモノを見るような眼を向けられました。やめてください。悲しくなります…。

きつとこの時の言峰君の印象は「ピンチを救ってくれた変な人」なのでしょう。言つて空しくなりました。

気まずさも相まってイソイソと整備室を出て行こうとしましたが、その前に言峰君に声をかけられます。

どうやら、整備室でのルールやレンタルできる武装が無いかを聞きたいようです。

確か更識に渡された資料によれば、言峰君の専用機はある武装のせいで拡張領域に余裕がなく、他の武装をしまう事ができない筈です。

その事を不思議に思いつつ、1つ1つ丁寧に説明をし、資料を渡したら今度こそ部屋を後にしました。

フフ、お嬢様。今夜は（仕事の意味で）寝かせませんよ？

〈学園の評価〉

あれから数日、クラス対抗戦の日になりました。

オルコットさんと篠ノさんのいがみ合いの苦情やストーキングされるお嬢様、言峰君を悪く言う噂の処理や対処に明け暮れ、時折本音とお茶をしながら聞く話題に心休ませながら何とか迎えることが出来ました。

この間少しだけお会いしましたけれど、本音から聞いた通り噂とは違う方なんです。楽しそうに語る本音に私もつい嬉しくなってしまうました。

クラス対抗戦は一見代表同士による個人戦に思われがちですが、実のところクラス全体の行動が評価されます。

どうまとめ、どう動き、どう対策を練るのか。

それを私たち上級生は痛いほど解っていますので、ここ最近はクラス間で情報戦が繰り広げられていました、

例によって新入生はそのことに気付かず、ただ実力のある代表が戦うだけになるのかと思われましたが、今年は2クラスだけ情報戦をしていたようです。

1つは言峰君のクラス。言峰君が中心にというのではなく、ご友人が情報を集めるのにあたって、クラスの中立派に声をかけて情報を集め、言峰君と本音で対策を練っていたようです。

もう1つは簪お嬢様のクラスで、こちらは簪お嬢様が中心に立って対策や訓練をされ

た模様。

ただし、『打倒言峰時雨』を目的に掲げていますが…。

一方、情報戦をしなかったクラスはというと。

2組はクラス代表が急に変わったことで纏まりがなく、専用機持ちが出る事で慢心。

3組は強ければいいと訓練に明け暮れるだけ。

学園の評価としては4組＜1組＜3組＜2組

とのことです。

〈1組対2組〉

言峰君と先日転校してきた風さんとの試合が始まりました。

試合の様子を見ていて思ったことは凄いの一言に尽きます。

風さんの攻撃を最小限の動きで避けるか受け流すことでエネルギーの消耗を抑え、バランスを崩したところを攻撃する。

まるで上級生と思わせる動き振りに私も目を見張り、つい夢中に試合を見てしまいました。

言峰君が隠し持っていた銃を取り出した事に外野が何やら卑怯だと騒いでますが、言峰君からしたら拡張領域に何の武器を持つてるのか解らなくしている方が卑怯なんで

しようね。

主力武器を手落とした凰さんにここぞと斬りかかり勝負が決まると思ったその時、何者かの襲撃を受けました。

〈事故処理〉

襲撃者の討伐は言峰君一人の手によつて終わりました。

私たち生徒会は避難誘導や乗っ取られてしまったシステムの奪還に追われてしまつていたため援護に遅れてしまいました。

無事に帰還したことに安堵の声を漏らしますが、それ以上に本来なら護衛対象である彼に守られてしまったことに不甲斐ない気持ちでいっぱいです。

今後、このような事が無いように対抗策を考えなければなりませんね。

被害はアリーナが修理のため暫く使用不能。

襲撃の際に攻撃を受けてしまった凰さんの専用機がダメージレベルCを受け、凰さんは絶対防御が発動して打撲程度ですみました。今日一日は絶対安静。

問題なのは何を思ったのか避難をせずに放送室へと行き、生徒数名を木刀でなぎ倒した篠ノ之さんです。

彼女に対して被害を受けた生徒から苦情が来ます。

通常、このような事があれば停学や退学を免れませんが、IS委員会から「下手な扱いをするな」と口を酸っぱく言われています。

じゃあどうしろと聞くと「それはそちらに任せる」と完全に責任放棄。

諸々の協議の末、三日間の謹慎と反省文の提出に決まりました。

行つた罪に対して軽すぎませんか？ という声もありましたが、「博士の怒りを買いたくない」の一言に女尊男卑派の教員もだんまり。

逆に単独で撃退した言峰君に罪をとの声があがりそうになりました。

……フザケルのは頭の中だけにしてほしいですね。

山田先生が新聞部の方と何か話をしていっているのを見かけてから数日。

言峰君に『バーサーカー』の異名が付き、山田先生が理事長室に連行されました。

〈理事長室〉

「さて、山田先生。何か言い分はありますかね」↑ゲンドウポーズ

「わ、私は少しでも言峰君が良くなればと思っただけです」

「ホホ、そうですかそうですか。山田先生は生徒想いの方ですね」

「あ、いえそんなことは：／／／／」

「減給3ヶ月及び休日無償労働」

「うわーん、すみませんでした!!」

休日の話

〈休日の散歩〉

襲撃事件の後、全アリーナの修復やシステムの点検が一斉に行われることになったので、丸一日休みとなった。

折角の休みなのだから息抜きも兼ねて外出しようと思い、昨日のうちに外出届を提出。

早朝の鍛練を終えてから学外へと出る。

特に目的も無く見知らぬ土地を気ままにぶらぶらと歩いていると知らぬ赤毛の少女に泣きつかれた。

え、何？ 俺、何かした？

と思っていたら、これまた見知らぬ赤毛の少年に「一夏!! 生きてたなら連絡の一つでも寄こしやがれ!!」と殴られた。

……ああ、いつもの勘違いね。

流石に殴られたのは腹が立ったので、男の急所を容赦なく蹴りあげたら鶏を絞殺したような叫びを上げるが、それを気にせず怯んでる隙に頭を掴んで全力のアイアンクロー

を決めながらじつくりと物理的にO・HA・NA・SHIをする。

その際、面白そうに遠目に眺めていた野郎共が揃って顔を青くして息子を抑えていたが気にしない。

顔を朱らめてモノ欲しそうにこちらを見ていたマゾ女も居た気がするが気にしない。

その後、誤解が解けたようで「わ、悪い。お詫びにウチで飯を奢る」と言われ、自営業しているという店―五反田食堂―に案内された。

タダ飯が食えるならという安直な考えがいけなかつたのだろうか？

それでも「夏君!! 良かった、無事だったのね!!」と母親らしき人に泣きつかれ、「坊主!! 生きてたなら連絡の一つでもしやがれ!!」と中華鍋で殴られそうになった。

……この一家は女性が相手を取り押さえて、野郎がその隙に殴るのだろうか？

流石に二度目となると対処法は思いつくので、冷静に中華鍋の軌道を逸らす。

隣にいた赤毛の少年にぶつかって悶絶しているが気にしない。

奥から出てきたご老人の頭を掴もうとしたところで、赤毛の少女が慌てて俺の腕を掴んで止めにかかり、別人だと話して誤解が解けた。

ちっ、おいしい……。

席について暫くすると注文した業火野菜炒め、カボチャの煮付け、餃子、春巻き、唐揚げ、ラーメン、杏仁豆腐が届く。

頼み過ぎだつて？ 「好きナだけ食べてね」と言われたから好きナだけ注文しただけさ。 思いつきり顔引きつってたけど。

最初は腹いせに片っ端から適当に注文して食べずに出て行こうと思つたが、一教徒として食べ物で粗末に出来ないので止めといてやった。

ジロジロと見てくる一家に少し嫌気が刺しながら食べる。

前から少しだけ気になつていたのだが、そんなに似ているのだろうか？

そんな事を聞くと兄妹が慌ててアルバムを持ってきた。

開かれたページを覗くと、今より少しばかり幼い感じのする赤毛の兄妹とちっこいの、そして黒髪の少年が写つていた。恐らく、この黒髪のが「織斑一夏」なのだろう。

鏡を見る習慣があまり無いのでよくわからないが、多分似てるんだと思う。

その後、夕飯を食い終え帰宅する際に「これを機に仲良くなるう」「また、来てくださいね」と言われた。

それに対して俺は、

ええ、勿論――

嫌だね。

口には出さず、心の中でそう呟く。

別に飯が不味かったからとか第一印象が悪かったからでは無い。

俺のことを「織斑一夏」と重ねて見ているのが気に食わないからだ。

時折、「一夏」と言いかけたり、アルバムを見せているときも俺が知らないことを懐かしむように「こういうことがあつたんだ」と語ってくる。

大方、学園にいる自称姉・幼馴染共と同じように記憶喪失だとかでも思っているのだろう。

作った笑顔を浮かべながら社交辞令を告げ、二度と訪れないであろう店を後にした。

〈携帯電話〉

休み明けの昼休みのことだ。

「ね〜ね〜こと〜昨日の休みはどこに行つてたの〜」

いつものメンバー食堂で飯を食つてたら布仏がそんなことを聞いてきた。

昨日は自由気ままに街を散歩してたよ。

「何？ 鍛練を一日でもサボるとはどいう事だ一夏」

あんたに言われなくても朝と夕方にちゃんとやってる。それと人違いだ。

「何であたしを誘わないのよ!!」

何でお前を誘う必要があるちっこいの

「あの、時雨さんの握力つてどれくらい」

昨日の危ない視線の正体はやはりお前か…

「そうなんだ」

「わ、私たちも街に出て買い物してたんだよ」

「ことみも誘おうって探してたんだよ」

ム、そうだったのか。それはすまなかつたな。

「いえいえ。あ、そうだ。ことみも携帯番号教えてよ」

布仏の発言にいの一番に反応したのはお断り3（俺命名）の連中だった。

「仕方がない一夏、連絡が取れないとなっては今後色々と不便だろう」

「ほら一夏。携帯貸しなさいよ。登録してあげるわ」

「あの、時雨さん。時雨さん専用の携帯電話を購入しましたの。こちらに連絡して頂ければ、私いつでも大丈夫ですわ」

……ツツコマないぞ俺は。

悪いけど、携帯電話は持ってないんだ。

「え、そうなの？」

「ハア？ 何言ってるのよ一夏。今どき携帯の1つも持ってないとか嘘つくんじゃない

わよ!!」

「そうですわ。私なんて、仕事用、友人用、IS 関連用、時雨さん用をお持ちなんですよ！」

持つてないモノは持つてないんだよ。

んなもん買う余裕なんて無かつたし、必要だと思つたこと無いからな。

「で、でもこの間、言峰君誰かと電話してなかつたっけ？」

「あ、それ私も見かけた」

この間？

……ああ、多分コレのことだな。

そう言つてポケットから1つの機械を取り出す。

コレはまあ……無線機みたいなモノでコレと同じのとしか通信出来ないんだ。

原理は詳しく知らないけど、周波数も独自のモノを使って電波障害が受けにくくかつ長距離通信を可能にしてるらしい。

まあ、これは通信以外の使い方として、向こうからの定時通信が出れない、あるいは俺からの通信がワンコールで切られたら教会はナニカが起きたと判断して動くようになつてるんだけど。

「言峰君は携帯買わないの？」

「い、色々と便利だよ」

ん、今までも特に必要と思わなかったし、プレハブのローンとかでそんな余裕無いからな…。

「そうなんだ、残念」

悪いな。

あ、パソコンなら部屋にあるから、そっちに連絡してくれ。

これ、アドレスな。

布仏らが受け取るよりも速くにお断り3にメモをぶんどられる。

その日の夜、何十通も送ってきたので速攻で別アカウントとアドレスを作って布仏らにだけ教えた。

〈プレハブ小屋〉

「新しいアドレスは布仏達にだけ送って、前までのアカウントは…ほっとくか」

パソコンでの作業を止めると、部屋に置いてあった蓄音器から音が鳴る。

『………久しいな』

「お久しぶりです。 師匠」

声の主は彼の師であり、義父でもある『言峰綺礼』であった。

『時臣氏から譲り受けたときは正直いらな思ったモノがこんなところで役立つとはな……』

「ハハ、それトツキーに言ったら泣いちゃいますよ?」

プレゼントだと渡されたときのことを思い出す。

「通信機能を備え、かつレコードとしても使える素晴らしい代物だ」と優雅に語る彼を余所にほぼ全員がいらな思っていた。

まず、レコードなんても師匠くらいしか持つてない。寧ろCDプレイヤーを持つてた。

通信ができるのは対となるモノでしかできない。固定電話の方が優秀。

外見が蓄音器なので無駄にスペースを取る。邪魔。

トツキーが帰つてすぐに倉庫にしまったのは内緒の話だ。

「それで何のようです?」

『なに、我が義息子の安否を気にかけてやっただけだ』

「ハハ、思つても無い事を言わないでください。キモチワルイ」

『フ、違くない。本題に入ろう………仕事だ時雨』

「……………」

「……了解した。地獄に堕ちろマスター師匠」
『クククツ…』

『をお前に命じよう』

お仕事？の話

現在、I S学園1年1組は異様な空間に包まれていた。

まあ……それというのも、俺がただひたすら必死に雑巾を1枚1枚高速で縫っているからなのだが……。

「ねえねえ、ことみく。何をしてるの〜?」

見て解らないか布仏。雑巾を作ってるんだよ

「うん、それはわかるんだけど。なんで〜?」

何でか、……それは

〜昨日の晩〜

『仕事だ時雨』

「……………」

『今度の休みに我が言峰教会にてバザーが行われるのを覚えているな』

「え? ああ、覚えてるも何も。途中まで俺が担当してた企画だから覚えてますよ」

『そうか、ならば一人当たりのノルマがあつたことも覚えてるな』

「え?!? ちよ、ちよつと待つて師匠。俺は企画やミサをやるから免除されてたはず」

『それは途中までだろう。お前が抜けたせいで本山から助っ人として、ジャスティン司教^ガがくることとなつたのだぞ』

「……なんで爆音^{そいっ}をチョイスした人事課。でもだからと言って今から……」

『他の者たちは8割が提出済みだぞ』

「う、いや、だから……」

『末っ子達も年長組と共にクツキーを作つたというのにお前ときたら』

「くっ!! じ、時間がですね」

『ふう……出来ないのか』

「くくくっ!!! 解りましたよ。やります。やらせて頂きます」

『そうか、そこまで言うのならば仕方がない。明後日の早朝までに雑巾200枚の提出を命じよう。勿論、郵送代金はお前持ちだ』

「くくくっ!!! ……了解した。地獄に堕ちろ師匠^{マスター}」

『クククツ、ではな』

という経緯で箱詰めと手続きの時間を考えて今日の夜までに200の雑巾を作らなければならぬのだ。

なんか、モノ凄く乗せられた感があるんだよな。

特に雑巾を指定したのも俺が出てく直前にやった大掃除で大量に消費したからっぽいし。

まあ、事細かに説明するのは悔しいから今度教会でやるバザーに出すためと説明しておこう。

「ほへ〜そうなんだ〜。大変だね〜」

ああ、わざとギリギリに連絡を寄こす師匠に殺意が沸くくらいにな。

「手伝おうか〜?」

ありがたいが、裁縫できるのか?

「よくぬいぐるみとか作るから〜大得意だよ〜」
助かる。

「デザート1品ね〜」

…抜かりのないやつ

「てへへ〜」

その後いつもの面子が加わり、黙々と只管針で糸を通す作業を進める。

お断り3?　すぐに揉めるわ、不器用だわで戦力にならないので追い出した。

「ところでこんなにくさんの布やらタオルってどうしたの?」

山田先生に頼んで捨てる予定だった備品モノをかき集めたり、急いで街に行つて安物を買つたりとかだな。

「そうなんだ。あ、これ少し汚れてる」

洗つて落ちるっぽいから洗濯BOXにポイで

「は〜い」

「こことみ〜これつて幾らくらいで売るつもりなの〜?」

…5枚セットで10〜50円位かな

「安っ!?!」

「そ、それつて元手とか取れないんじゃないや…」

そうだな。配送料も含めて俺の財布は大赤字だ。

なのでデザートの手加減を所望する。

「「「やだ♪」」」

ですよね〜。

まあ、他のバザーの参加者はともかく、教会組は近隣住民との触れ合いをメインにしてて売上は2の次なんだよ。

「そうなの〜?」

ああ、うちの教会にはこういう子たちが居る。明るい子たちばかりでDVとかやましいことなんてしてません。つてな具合にな

「DVって」

憶測や嫌がらせてデマを流されて経営を追い詰められ解散するなんてこともあるんだよ。

そうなったら最後、上が勝手に書類で判断して子供たちを各施設にバラバラに送られる。心に新たな傷を負ったままな…。

他にも子供たちが誘拐でもされたとき、万が一にでも付近で見かけた人がいれば早期解決にも繋がるからな。

「ゆ、誘拐って」

「それは言い過ぎじゃあ…」

……………今のご時世、色々と物騒だからな。

可能性があるのなら、打てる手は全て打つき。

「「「……………」」」

悪いな。折角手伝って貰ってるのに暗い話を話して

「えつと…ねえ?」

「う、うん。気にしてないよ」

……。

少しだけ暗くなった雰囲気の中、黙々と針を縫い続けた。

呼び出しの話

布仏らの協力もあってなんとか雑巾200枚作り終えることができた。

達成時の喜びは半端なかつたな……思わず皆でバンザイからのハイタッチをしたくらいだ。

雑巾は全て箱詰めし、朝一番の配送に出したから明後日までには教会に着くだろう。

お礼という形で昼休みにデザートを一品奢り、俺の財布から数枚の野口さんが羽ばたいて若干気分が滅入っている放課後。

いつもならこの時間帯はお断り3を撒くか、適当に付き合ひ沈めてから自主訓練をしているのだが、今日は呼び出しがかかったのでそこへと向かっていると聞いていた。

目的の場所に着き扉をノックすると中から「どうぞ」と声がかかり部屋に入る。

部屋に入ると先程の声の主である先輩と爆睡する布仏。そして――

出たな、変態ストーカー。
が居た。

「ちよっと、うら若き乙女に対して変態ストーカーはないんじゃないのかしら？」

人のことを付け回したり、妹の下着に興奮するやつは変態ストーカーでいいだろう。

「ちよ、ば——「すみません言峰君。少しばかり席を外して貰ってもいいですか?」——ヒッ!? う、虚ちゃ——」

〜数分後〜

部屋に戻ると青い顔で震える布仏と、モザイクが掛ったモノ、赤いナニカが頬と拳に着いた状態でお淑やかに微笑みを浮かべる先輩が迎えてくれた。

女つて恐え…

「すみません言峰君。お見苦しい所をお見せして」

いえ、別に…。

それで用件はなんですか?

「先ずは、会長がこのような状態なので変わって礼を言わせていただきます。学園を守って頂きありがとうございます」

そう言つて綺麗にお辞儀をする先輩と慌ててそれに習う布仏。

……別に守つたつもりは無いですよ。

アレが俺を狙つてきたからそれを迎撃したまでです。

「それでもです。そしてこのような遠回りな形で呼び出してしまいすみません。本来な

らば私たちの方から向かうのが礼儀なのですが…」

…そうするとまた誤解が増えるし、校内放送での呼び出しも同様。

「……ええ、その通りです」

この間、連絡手段を聞いたのはコレの為か？

「ううん、あれは本当に知りたかっただけだよ」

…そうか。

「噂に聞しても私どもの方で何とかしようとしているのですが……」

それこそ別に構いません。

それよりも一生徒を鼻屑しすぎと思われては生徒を纏める者たちとしての意義を問われてしまいますよ。

「……ごめんなさい」

いえ……で、話は終わりですか？

「それにつきましては会長から……起きてくださいバク——会長」

「はっ!?」(ここはどこ)私h——もう一度逝きます?——いらつしやい言峰君。来てくれてお姉さんとおつても嬉しいわ!!」

…で話は?!

「えっとまずは学園を守ってくれて——」

「それはもう私が言いました会長」

「え、えつと遠回りな形で呼び出して——」

「それも話しましたよ」

「う、噂のことなんだけれど……」

それも聞いたな。

「ちよ、じゃあ私は何を話せばいいのよ!!」

「……お解りになりませんか」

「会長」

「う、あくその。コホン、えつとこの間は急に襲いかかってごめんなさい。自分でも思考がまともじゃなかったわ」

妹の下着で欲情するくらいだからな

「ねえ、それももうやめてくれないかしら？ さつきから二人の視線が冷たくて痛いよ。言っておくけれど私Mじゃないわよ。どちらかというとS寄り……あ、ごめんなさい。やめて、皆して白い眼で見ないで。ゴリゴリと削られてくの」

……帰っていい？

「ああ、ごめんなさい。真面目に話すから帰らないで!! えつと、お詫びと言ってはなんだけれど、貴方の訓練をみてあげるわ」

……あんたが？

「あら、知らなかったかしら？　IS学園の生徒会長になる条件は学園最強であること

よ♪」

へへ、学園最強が変態でストーカーか…

「もう!!　ホント、いい加減にして!!」

「ごめんなさい言峰君。話が進まないのが会長で遊ぶのは一度辞めてもらえませんか？」

わかりました先輩。今はやめときます。

「あ、あなたたちね…」

「会長くドウドウ」

「私は馬じゃないわよ!!　コホン、貴方の戦闘振りや戦術眼は大したものだわ。けれどこれから先それだけで勝ち抜けるほど甘くはない。私から見たら機動もまだまだ荒いし反応速度も悪い時があるわ。ただ、生徒会の方もバタバタしていて毎日は無理なんだけれど…」

別に構わない。経験者からのまともな意見は参考になるからな…

「…凄く棘があるんだけど、そんなにあの子たちの教え方って悪いの?」

教え方、ね……

「ズツガ〜ンとやって、ドカッバキツって感じだよ〜」

「防御の時は右半身を斜め上、前方へ5度」

「何となくわかるでしょ〜感覚だよ〜感覚〜」

…: だいたいこんな感じだな。

「(予想以上に酷い…:)」

その後揉めて3対1でバトルんだよな。

1対多の経験ばかり増えてく…:

「え、えつと、とりあえずこのUSBに貴方の戦闘映像と指摘部分を纏めてあるわ」

…: ありがとうございます。

お礼に変態ストーカーから変態に格上げしてやる。

「何で上から目線!?! しかもあまり変わらないじゃない」

じゃあ、ストーカー

「だから変わって無いわよ!!」

なら何て呼べと?

「たっちゃんていいわよ♪」

解った。変態でストーカー気質なたっちゃん。

「…: いい加減怒るわよ?」

仕方がない。会長さんで妥協しよう。

「だから何で上から目線なのよ…もういいわ。永遠に続きそうだし…。取りあえず、言峰君がどこまで動けるのか知りたいから道場に移動して軽い組手をしましょう」

…別に構わないが、生徒会の仕事は？

「……き、聞かないでくれると嬉しいわ」

あ、そう…。

冷たい瞳の先輩が全てを物語っていた。

逃げるように生徒会を飛び出した会長さんのあとをのんびり着いて行き、組手からの練習メニューを貰い、一日が終わった。

あ、そういうえば今日は新しい噂がたつてないな……どうでもいいか。

〈道場〉

「よし、()までに行きましょう」

「ふう…」

「ISの動きからしてかなり動けるとは思ってたけれど一本も取れないとは思わなかったわ」

「そりやどうも……」

「それにしても本当に女の子の顔やお腹を狙うのね。普通だったらやらないわよ？」

「師匠が外道で容赦も情けも無用な修業を積んで来てるからな」

「どんな師匠よ」

「人の傷口を開いて塩を塗るような鬼畜^{ヒト}」

「うわあ……。ところで、何で虚ちゃんは敬語で私はタメ口なのかしら？」

「尊敬しているかしてないかの差」

「……………」

金髪転校生の話

「き、今日は何と転校生を紹介します」

山田先生のどこか緊張した感じの声を合図に廊下から一人の生徒が入ってきた。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。皆さん、よろしくお願いします」

しんと静まる教室に何となく嵐の前の静けさだなくと思つた。

「お、男？」

「あ、はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると——」

さて、耳をふさぐかな。

「お、男の娘キタアローー!!!」

「守つてあげたくなる系の美形よ!!」

あゝウルサ

「お前たち黙れ!! 今日2組との合同I S授業だ。全員着替えたら第二アリーナへと集合。遅れたものは罰を与える!!」

おお、一瞬で黙ったよ。

「それと織斑。同じ男子としてデュノアの面倒をみてやれ」

その言葉と同時にあがるブーイングの嵐。

か弱い子羊が野蛮な狼に喰われるとかなんとか……ハッキリ言ってもいい。というかだ。何を言ってるんだこの担任は？

1つ質問が……なんで男装した女子の世話を俺がしなければならんです？

あと言峰です。

俺の言葉と共にまたもや静まりかえる教室。

……騒いだり静まったり忙しいな

「……………え?!」

「何を言っている織斑」

「そ、そうですねよ言峰君。デュノアさんは男子生徒としてIS学園に転校されてきたんですよ」

いや、どう見ても女だろ。

だから言峰です。

「ひ、酷いよ言峰君。確かに僕は中性的な顔立ちだけど……」

デュノアの泣き真似に一部から男の娘を泣かせたと上がるブーイング。

はあ……、一応聞きますけど。

もし、こいつが女で俺のことを殺しに来たなり専用機のデータを奪うなりしてきた場

合、学園はどのような対処をされるんです？

「え、えつとですね——「決まっている。デストロイだ——ちよ、織斑先生!」

「私の弟を殺すだと？ そんなこと絶対に許さない。速攻で捕まえて学園の秘密地下室に隔離して24時間一切の睡眠をとらせることなく拷問を続けよう。ああ、殺すのは流石に国際問題になってしまうのでやめて半殺しにしておいてやる。ところで半殺しの定義は何か知っているか？ 『殺し』の『半分』つまり、死ぬような行為を半分やればいい。だがその場合、どのようにすれば半分殺す行為となる？ 下半身を潰しても恐らく死に、上半身あるいは左右どちらかの身体を潰しても死ぬ。ならば内側にある臓器とも考えられるが分類が難しくそれぞれの価値も考えなければならぬので正直面倒だ。

「——」
：おかしいな俺、山田先生に聞いたんだけどなく。で、もうやめない？ クラスの大半が顔を青くしてるんだけど

あと、あんたの弟になった記憶はねえよ。

「——」ここまで考えて私は漸く思いついた。骨だと。人の骨は大体206本で左右対称だから半分は非常にやりやすい。よつて103本1つ1つゆつくりと折ろう。まずは暴れると面倒な腕：『上腕骨』だな。次に密集している『手指骨』：『豆状骨』、『三角骨』、『月状骨』、『舟状骨』、『有鉤骨』、『有頭骨』、『小菱形骨』、『大菱形骨』の8つを

て3年間出来る限り護る方針だったらしい。

逆にデュノアが逃走又は傷害を負わせようものなら問答無用で捕縛からの尋問で豚箱行きだったとか。

あの後すぐにデュノアは捕まり、山田先生の部屋（地下室や織斑千冬が近づくと怯えてしまうため）で拘束と尋問をされ素直に自供しているそうだ。

裏付けが取れ次第、フランス警察に引き渡されるらしい。

いや、ホント悪いことしたな。

デュノアの未来に幸あらんことを……エイメン。

織斑千冬ヤンデレ説が流れ、俺には生徒を精神的に追い込んで退学させたという噂が流れた。

まあ、切っ掛けは俺なので甘んじて受け入れよう。

「ところで、何で担任は知らなかったんだ？」

「理事長曰く、織斑先生に教えたら面倒な事になりそうだったし、ポーカーフェイスも苦手だからだっつて」

「あ、
そう……」

機体チエツクの話

デュノア脱走からクラスの大半が一度女子寮に戻り、そのせいで授業に遅刻して担任から罰則を受けそうになった。

まあ、山田先生が慌てて止めてたから無かったけど。

その様子をボーッと眺めてたら何故かマゾとちっこいのにISで攻撃されそうなたが普通に避け、二人には罰としてなのか山田先生相手に戦う事を強いられた。

結果は二人の惨敗。

お世辞にも連携とは呼べない戦い振りにあっさりと先読みされ一網打尽とされたのだ。

流星は日本代表筆頭候補と言われただけの実力だな。

山田先生の戦いぶりを見てやはり武装の豊富が羨ましいと思えてしまう。

複数の武器を持つということはその数だけ練度を上げなければならぬが、その分だけ戦術の幅が広がる。

ちっこいのと戦うまでブレード一本で戦ってたが、やはり一点特化のスタイルは合わない。

改装・改良するなりにしても一度機体のスペックを見直すべきだと考え、一人で整備室へと向かっていた。

整備室に入ると数名ほどこしか生徒がおらず、その中に見知った人がいた。

こんには先輩。

「あら、言峰君いらつしやい。どうかされましたか？」

ちよつと機体のスペックを一度見直そうと思ひまして…

「そうですか、ではこちらのハンガーを使って下さい。使い方は…」

全くわかりません。

「クスツ、わかりました。では、こちらに専用機を出してください」

1つ1つ丁寧に教えてくれる先輩。

そういうえば学園に…いや、こういう親切な人つて今まで全くと言っていいほど居なかつたな。

知り合いの大半が戦闘狂か鬼畜外道だし……言つて悲しくなってきた。

「言峰君？」

あ、すみません。少し、考え事をしてました。

「もう、ダメですよ？ ……言峰君の機体、拡張領域の空が全く無いですね。精々入れられるのはマガジンか手榴弾1つ分くらいでしょうか？」

お、手榴弾は入れられるのか、これはいいことを聞いたな。

でもやつぱり、ブレード1、拳銃1、手榴弾1で戦いぬくのはキツイな…。

ホルダーみたいのにショットガンやマシンガンを収納とか出来ればいいんだが。

「なら、作ればいいのでは？」

……え？ まさかここって武器の開発とかもやつてるんですか？

「はい。操縦科の方から依頼されたり、自分たちの趣味で作ったりと色々ですね」

マジか。

では、先輩お願いできませんか？

「いいですけど、私でいいんです？」

ええ、先輩にお願いしたいんです。

「わかりました。では、こちらの用紙に概要と設計図を記入してください」

えっと、だいたいこんな感じにしてほしいんですけど……

「……………」

？ おかしなところでもありましたか？

「いえ……、あまり絵が得意ではないんですね」

……変ですか？

「まあ……………その……………概要が無かったらさつぱり」

………。

「ちよつと描き直すので、これで合ってるか確認してもらえますか？」

………お願いします。

「わかりました」

あゝ、先輩。今まで作った武器と違って今から見れたりしますか？

「ええ、全部はちよつと無理ですけど、あちらの倉庫に仕舞ってあります」

先輩に案内されて入った倉庫にはいくつかの武器が収められていた。

ハルバート、ハンマー、レイピア、カルバリン砲、ガンブレード、ガンランス、蛇腹剣、メーネ、パイルバンカー、バニツシャー、黒鍵……おい、俺以外に教会関係者いるだろ。

まあ、何というかロマンを追求したかのような武器ばかりだな。

因みにですけど、ここには無いのって…

「……先生に没収されたものです」

気恥かしそうに視線を逸らす先輩。

ああ、なるほど。テンションに身を任せてやりすぎたわけね。

「その…、こういうのはお嫌いですか？」

好きです。

いや、むしろ大好きです。

男としてこういうロマンあふれる武器は憧れますし、使ってみたいと思います。

「クスツ、ありがとうございます」

ん？ あそこに置いてある盾みたいのってなんですか？

「ああ、これは以前友達と一緒に開発した盾とライフルを一体化した複合武器ですね」

……これってまだ使えたりします？

「え？ はい、メンテナンスをすれば使えると思いますけど……正直、使いづらいという事で倉庫に眠ってたのものですよ？」

前にリーズ……聖堂騎士が似たような武器を持ってて、模擬戦をしたり、パチって使ったことあるで何とかなると思います。

「(騎士がどうしてそのようなモノを持つてるのでしょうか？ あとパチルって……)」

あと、これに黒鍵か細い槍みたいのを飛ばせるようにして、盾の一部に刃を付けても
らえますか？

「……なるほど、面白そうですね。わかりました。少しばかり時間がかかってしまいま
すが、よろしいでしょうか？」

ええ、お願いします。

他にも仕込みナイフとかも付けたいんですけど……

「そこら辺のお話、詳しくお願いします」

……先輩、こういうの好きでしょう？

「隠し武器、複合武器は技術者のロマンです」

思ってたよりも中々ユニークなお方ようだ。

この後、機体の調整や武器について語り合っているといつの間にか日が暮れてしまっていた。

先輩はまだやること残っているそうなので、もう一度武器についてお願いしてそこで別れ部屋に帰った。

なんにしても今日は気分がいい。お断り3に絡まれなかったし…。

頼んだ武器が出来るのも楽しみだ。

そう思った日から数日後、俺と先輩が付き合っているという噂が流れた。

……いや、なんで？

〈新聞部副部長の独白〉

あくあ、最近悪い噂ばっかですまらないな。

大体がデマだし……どっかにスクープでも落ちてないかな。
ん？ あれって布仏先輩と例の男子じゃ——

「好きです」

……What?

「——大好きです。男として——」

フオオオオオオオツ!!?? まさかの現場に遭遇!!

も、モチツケ私！ 布仏先輩の返事を聞くんだ。

「クスツ、ありがとうございます」

スクープキタアアアア!!!

こ、これはさっそく記事にしなれば!!

後日、何者かの手によって肅清されました。

銀髪転校生の話

俺が先輩と付き合っているという噂について皆に聞かれたので（特に実妹の布仏）、やんわりといつも通りのデマだと話していると予鈴が鳴り、両担任が教室に入ってきた。

「みなさん、席に着いてください……」

そう言った山田先生は見て解るくらい疲れていた。

ああ、そう言えば1年女子寮の一斉部屋替えをやったって皆が言ってたっけ……。

一人一枚の用紙に希望や不満を記入して提出するスタイルで1週間前に受付を終了。

一昨日から昨日にかけて一斉に部屋替えを行ったらしい。

布仏は幼馴染だという4組の代表と谷本は鏡と同じ部屋になれ、逆に鷹月は篠ノ之との同室を抜けられたと喜んでいた。

温厚で人当たりも付き合いいい鷹月がどうしてもこんなにも喜んだかと言うとだ。

入学当初はまともというか「一夏が剣道を捨てた」と愚痴を零したりする程度だったが、「一夏が他の女に現をぬかす」、「イチカ ガ ワタシ ヲ ミテクレナイ」と徐々にエスカレート。部屋に戻ると素振りをしている姿を見たのが何度あったことか。

それでも付き合い続けた鷹月はお人好しというか、人がいいというか……。

そして今回、ハズレクジを引いてしまったのは布仏に「かなりん」と呼ばれている少女だ。

新しい部屋の住人は誰かなと期待と不安に揺れる中扉を開けると、呪詛のように「ドウシテ イチカ ト オナジヘヤ ニ ナレナイ」と呟きながら素振りをする篠ノ之を見て「あ、終わった…」と本気で思つたらしい。

翌日、傷心した様子の彼女を見かけて話を聞き、無言でお昼をご馳走したら眼尻に涙を浮かべながら食べはじめ、その姿があまりにも不憫だったので皆で「かなりんの未来に幸あらんことを……アーメン」と祈りをしたら「なら、部屋を変わってえ……」と懇願されたが、揃つて笑顔で「ヤダ」と答えたなら泣きながらどこかへ走つて行つてしまった。

あ、これまた勘違いで噂立つやつかな？

ところで、部屋替えとか考えるのって寮長もやつてる担任の仕事じゃないの？

「えっと、転校生を紹介します」

またか……先月にちっこいの、数日前にはデュノアが転校（からの即退場）してきているが本当に単位事情とかつてどうなってるんだらう……。

代表候補だから基礎授業は免除されるとか？ ……いや、無いか。

「では、入ってきたください」

山田先生の合図と共に扉が開き、一人の少女が中に入ってくる。

長い銀髪と整った容姿にクラスから「ほうっ」という声が漏れる。

かくいう俺も彼女を見て一瞬呆けてしまった。

「では、自己紹介をお願いします」

「はい」

「イタリアから来ましたカレン・オルテンシアです。愚兄共々よろしくお願いします」
新しいクラスメイトは義妹でした。

専用機の話

休み時間になるといつものメンツとお断り3が絡んできた。

何でも俺とカレンの関係を聞きたいらしい。

「えー!! じゃあオルテシアさんは言峰君と兄妹なんだ」

「ええ、遺憾ながらそのとは義理の兄妹にあたります。それと私のことはカレンで構いません」

そう、この転校生ことカレン・オルテンシアは名字こそ違うが俺の師匠であり義理の父である言峰綺礼の実子。

わけあって母方の性を名乗り別々に暮らしている。

「というか『そこ』とか『遺憾ながら』とか酷くね？」

「あら、『ごめん』さい。『時雨お義兄ちゃん』」

…寒気がするわ。やめろ

「ええ、自分でも吐き気がしました。いつも通りにします」

そうしろ。

「義理の妹、ですの?」

「嘘を吐くな一夏!! そんな女私は知らんぞ!!」

「そうよ!! さっさと白状しなさいよ一夏!!」

人違いなんだから知ってるわけないだろ。

「まあ、ガチで勘違いされてるんですねお義兄様」

傍迷惑なことにな。

何度説明しても聞く耳持たないし…その耳腐ってんじやないの? あ、腐ってるのは脳か。

ホント、なんとかならんかね……

「では、私がお義兄様とその織斑一夏さんが別人であることを証明してさしあげます」

「なに?」

「どうやってよ!!」

「確か織斑先生の弟さんの行方不明になられたのは第二回モンドグロツソのときでしたね? でしたらそれ以前のお義兄様が教会に居たという証拠をお見せします」

そう言つて袖から一枚の写真を取り出すカレン。

正直、嫌な予感しかないんだが……

「こちらが7年前…私がお義兄様と初めて会った頃、父に修行でポコポコにされたときの写真です」

……おい。

「こつちが5年前に見習神父であるフリードとのガチバトルで十三課イスカリオテの備品を壊してリアル鬼ごっこをしたときの写真です」

懐かしいな…喧嘩に夢中で十三課の食事を台無し&マスクウエル司祭の私物と書類をグチャグチャにしてキレられたのが切っ掛けだったな。

あの時は死を覚悟したな……食べ物で粗末にはいけないと身を持って学んだよ。

「そしてこちらがクロス神父に借金を押しつけられ、あまりの額に顔を青ざめて絶望している写真です」

ちよつと武器を拝借バクッしただけなのにヒドイ話だ。

……今思うとワザと目に見える所に試作品を置いてタダでモルモットにし、後でレンタル料と称して借金を押しつける一石二鳥を企んだのかもしれない。

そう思うと沸沸と怒りが煮えてくるが、下手に関わるとまた借金を押しつけられるビジョンしか見えないからやめておこう。

……胃も痛いし

「こちらが……プツ、なんでもありません」

おい、なんだ今のは気になるだろう。

というかさつきから俺の古傷を抉るようなものばかり出して…わざとだろう？

「ようやく気付いたんですか？ 戦闘以外では頭の回転が遅いのですね」

殴りてく……てか何でそんなものを持ち歩いてるんだよ。

「お義兄様で遊ば——困らせるためですが？」

何を不思議そうに言ってるんだよ。

あと、言いなおした意味が全くない。

「ね〜ね〜カレっち〜」

「!? えっと布仏さん、でしたか？ それは私のことですか？」

「？ そうだよ〜」

心底不思議そうに答える布仏。

ヤダ、何この両極端な違い。布仏のは癒されるけどカレンは怒りしか湧かないぞ？

それにしても…プツ、カレっち〜

「黙りなさいことみ〜」

ハイハイ…。

「カレっちも〜代表候補生なんでしょ〜？ やっぱり〜専用機を持つてるの〜？」

「あ、それ私も気になってた」

「ど、どうなのかなカレンさん」

彼女たちの言葉にクラスメイトだけでなく廊下にいた生徒までもが聞き耳を立てる。

暇人なの君たち？

「ええ、テンペスタ・カスタムを使用しています」

カレンが言うには現在イタリアで製造されている第三世代型ⅠS　テンペスタⅡ型のテスト機としてカスタマイズされたものらしい。

世代的には2・5世代でイメージイターフェイスによって自在に武器を操ることを目的としているとか…。

何となくオルコットのブルーティアーズに似ているな。

「カレっちの専用機見てみたいな」

「…いずれ、機会がありますのでそのときに」

「え」

頬をリスの様に膨らませる布仏。

それと同時に次の授業をしらせるチャイムが鳴った。

ほれ、全員席に戻った戻った。

速くしないと担任から出席簿が飛んでくるぞ。

多分だが今日のは一段と重いだろうから…。

「あゝそうね」

「ほら、戻るわよ本音」

「は〜い」

…さて、俺も準備をしますかね。

未だに近くでギヤーギヤー騒いでる3人を無視して教科書等を揃える。

数分後、予想通りいつもよりもデカイ音と悲鳴が三連続で鳴った。

ドジっ娘副担任の部屋割模様

とある日の休日。

学生は休みの日をそれぞれ満喫するが教員もそれに便乗するわけにもいかず休みを返上して無料奉仕に精を出さなければならぬ。

ここ、職員室にて何やら大量の書類と睨めっこしている山田麻耶もそれにあたる。

彼女は副担任なので本来ならば担任の補佐や振舞をみて勉強する立場なのだが、担任（織斑千冬）が女子寮寮長と学園主任を兼任するという傍から見たらアホだろと思える行為をしているので、それらの補佐もしなければならぬのだ。

そこそこ長い付き合いな上に性格上断り辛く泣く泣く引き受けてしまうパターンが多い彼女だが、今回に限っては率先と……いや、むしろ千冬から半分無理矢理奪う形で引き受けたのだ。

さて、その引き受けた仕事というのは1年女子寮の部屋替えだ。

この作業はかなり精密に行わなければならない。

というのも生徒同士の性格が合わないというモノから宗教・国の関係上同室にしてはならないというのものもある。

それらを踏まえた上で一人一人アンケートを取って一度データに纏め、そこから部屋割を決めるのだ。

去年は二人でやっていた作業をどうして一人でやっているのかというと、今年度入学者の部屋割を決める際に無理矢理生徒の一人を「姉弟が一緒に住むのは当たり前だろう」と言い張って自分の部屋に住ませようとしたり「ならば仕方がない。気がしれた奴の方がいいだろう」と、とある剣道少女と同室にしようとする振りをして自分の部屋に住ませようとしたりするので御退場して貰ったのだ。

それでも時折、介入しようとしたりプレハブ小屋に突撃して連れ去ろうとするので監視付きの書類地獄を理事長自らプレゼントして脚止めをしてもらっている。

なので、脚止めが効いている内にこの作業を終わらせなければと急激かつ丁寧に作業を進めているのだ。

生徒一人一枚提出させたアンケートは山の様に積みれ、そこから一枚取り出して内容を読む。

中にはどの様な人と一緒あるいはどのような人とは嫌というのが書かれているのが定番。

さて、今取り出したのにはどんなことが書かれているのか…

「えっと、3組の相楽さんはこのまま同室でよくて、相手の子も特に何も書かれて無いの

で変更なしと、鏡さんと谷本さんが同じ部屋を希望で同室だった子も別の人を希望しているので交換しちやいましょう！」

どうやら特にクレームが無かったようですんなりと勧められたようだ。

このようにすんなりと作業を進められればいいのだが、そうは問屋が許さない。

「あ、布仏さんですね。なにになに『かんちゃんと一緒にいいな』フフ、実名で書いてくださいいね」

一瞬、「かんちゃん」って誰？　と思うが確か幼馴染が4組にいるというのを聞いていたので多分その子だろうと4組の生徒名簿を取り出して名前を確認する。

「次は『簪ちゃんと一緒にいいわ!!　これは姉として決して譲れないことよ!!』あれれ?　何で2年の楯無さんのがあるんでしょう。嫌がらせですかね」

その申請は問答無用でゴミ箱へポイしました。

作業を進める中、時折同室相手だった子の悪口のようなモノが書かれていることもあり、それを見るたびにムツとした表情になってしまう。

自分自身女子校に通っていたのでこういう陰口があるのは思い知っているが改めてみるとやはり嫌な思いを抱いてしまう。

そして中には「男子と同じ部屋は嫌だ」等といったピンポイントにデイスってるモノもあるのだ。

プレハブ小屋が壊れない限りそんなことありえないのにといいのに……。

実は男子が入学するのにあたって新しく校則が幾つか追加されているのだ。

その中には男子はとある一定区画への侵入を禁ずるといふのがある。

これを決めるとき一部の教員が喜んだ顔を浮かべていたが、実はこれプレハブ小屋をすんなりと作り手を出しにくくさせるように目論んだ理事長（真）の策だったりする。

あとで気づいて撤回しようとするものの発言したのが学園の最強権力者たる理事長（本物の奥さん）であるため、言葉に出せず苦々しい表情を浮かべていたとか。

そして時にはこの様な内容が飛び出てくる。

『鷹月静寐：病んだ眼で竹刀で素振りをする人以外でお願いします』

『鈴木加奈：キングサイズベットでスペースを占領したり、深夜に国際電話をしない相手。時折、「今日もイツパイ御仕置きを〜」と朱い顔で悶えるDM以外でお願いします』

「……………」

無言で眼元の汗を拭った。

「はい、次は……あ、篠ノ之さんですか。はい、ゴミ箱へポイツ」

続いて取り出した用紙の名前を見た瞬間に捨てる。

そんなことしていいの？　と思うだろうが実はこれ既に5回目の行為になるのだ。

内容？ んなの遠まわしだったりツンデレ風だったり無茶苦茶な理論だったり複数のパターンで「一夏（時雨のこと）と同室にしろ!!」と書かれてるだけで、3回目です既に飽きた。

「篠之乃さんといい嵐さんといい日本語がわからないんですかね？ 一人一枚までだと言ってるでしょう？」

ニコニコとした笑みを浮かべているが、声から苛々しているのがわかる。

また一人、近くにいた教員が無言でスツと席を立ち職員室から去って行った。

「次は……ええ〜オルコットさんですか。 はあ、何となく嫌な予感しかしませんが、なに……『私を躰けてくれるとのgー』 掴んだ紙を丸めてゴミ箱へシューツ!! 超エキサイティング!!!」

……どうやらかなり疲れているらしい。

また一人教師がそつと外に出て行くのかと思いきや、無言で彼女の机に栄養ドリンクを置いてから出て行った。

偶然居合わせた生徒会会計が言うにはかなり哀れんだ眼をしていたとか。

こうしてストレスを溜めては発狂・発散させながら貫徹で作業を進め何とか終わらせ、部屋に戻ると壊れたロボットの様に倒れ爆睡したらしい。

翌日、彼女の部屋から悶えるかのような叫びが聞こえたとか……。

アート(?)の話

突然だが、I S学園のマイホームは誰かの手によってアートにされている。

壁には『出ていけ』、『女の敵』、『屑』等とスプレーで書かれ、窓ガラスには何かを叩き付けたような痕がある。

よかった防弾仕様のガラスで。

もうすぐ梅雨になるから、もし割れてたら部屋中湿気の臭いで充満してたな。

俺にとって割とどうでもいいと思っていることをどうして語っているかというところ、この事が先日、布仏らにそれが見つかってしまったのだ。

いや、別に隠してたわけじゃないけど…。

登校して教室で鷹月から借りた本を読んでたら揃って詰め寄ってきて「何よあれ!!」、「どうして黙ってたの!!」、「先生に言わなきゃ!!」等と言ってきた。

心配してくれるのはありがたいんだが、本当にどうでもいいことなんだよな。

基本的に俺しか使わないし、ご近所に迷惑がかかるわけでも長年住むわけでもないし
:

「先生に抗議してくる!!」

俺が何も言わないことに業を煮やした谷本が教室を飛び出そうとするのを無駄だと
言い止める。

「どうしてよー!」

いや、だってあの部屋の周囲に監視カメラ設置してあるから、ほとんどの教員は誰が
いつやったのかある程度知ってると思うぞ。

途端、呆気にとられたような顔をするみんな。

「な、なんでそんなものが?」

俺、世界初の男性IS適合者。

ついでに言うと、教会側も監視カメラを設置してるぞ。

そっだよなカレン。

「ええ、『超が付く難関高校だと言うのにやることなすことが幼稚だ』と担当の者が言っ
ておりました」

その言葉に皆、苦笑いの顔を浮かべながら納得したようだ。

学園側から犯人に対して今まで何もしてなかったのはそのいつの評価や内申点をぐん
ぐんと下げてたか、国外から来た生徒で処罰を踏むのに時間がかかった、女尊男卑派
の妨害があったといったところだろう。

もし、最後のだったりしたらとんだバカだな。教会側も設置してるの忘れてるのかと

聞きたくなる。

こんな表立ってストレスはつきり——ネチネチと嫌味を言えるチャンスをマスクウエル司教が逃すはずがない。

恐らく通信回線で学園に、あるいは各国が集まる首脳会議か定例会みなのでネチネチと執拗に言いまくるんだろうな。

これも別にいいかなと皆に話すと布仏らが教室に来る前まで遠目でニヤついた笑みを浮かべていた複数の女生徒が一転して顔を青く染めた。

なるほど、あいつらだったのか……。

ここでタイミングがいいというか校内放送で生徒の呼び出しがかかる。

呼ばれた名前があがった時に先ほどの顔を青くした女生徒がビクッ揺れていたの、多分今回の件での処罰なのだろう。

自業自得なんだから繚る様な眼をしたり睨んでくるな。俺は何もしてないし言っただけ。無い。

山田先生あたりが職員室で待ってるからさっさと行って来い。

ところで、何でアートの件を知ったのかを聞いたところ。

カレンが転校して来たのにあたって、部活動をどうするかという話題があがったらし

い。

IS学園は全生徒必ずどこかの部やクラブに所属しなければならないという校則がある。

…俺はこの部にも入ってないけど。

どうやら気に入った部が無かったようで、新しく『告会クラブ(仮)』というのを作ることにしたらしい。

主な活動は教師や友人、家族にすら話しづらいこともある。そんな『悩める子羊の話』を聞く』言わば懺悔の様なものらしい。

まあ、それは表立っての理由らしく、ただ仲間内で集まっておしゃべりをするのが仏らの目的だとか。

ただ、問題となるのが場所だ。

クラブ棟は既に満杯で校内の教室を使うには新規の、それもよくわからないクラブの為に貸し出すには難しい。

そこで上がったというかカレンが上げたのが俺が住んでいるプレハブ小屋で、その下見に訪れてアートの件を知ったらしい。

ふくん、経緯はわかったけど、1階のリビングをクラブの為に使わせるだ？

どうせ使って無いからいいだろうって…まあ確かに寝室は2階で1階は風呂やトイ

レ、飯を食う以外使つて無いが：イ・ヤ・ダ。

なんで折角気を抜ける場所を少しとはいえ明け渡さないといけないんだよ。

あと、お前の頼み（命令）をすんなりと聞くのは無性に腹が立つ。

え、プレハブ小屋の借金半額返済？

どうぞご自由にお使いくださいませカレン様。

冷蔵庫にレンジ、クツキングヒーターもあるからお茶会なんかもちよちよいのちよいですぜ。

ん？ 手の平返すのが速いだと鏡？

世の中は金：Money is justice だ。

あ、借金返済がどれだけ大変かわかつてない顔だな。

教会職なのに日々アルバイトに明け暮れる日々（皿洗いからリアルモンハンまで）

街に出かけると追いかけてくるカム——ゲフンゲフン、黒服の恐いお兄さん方（路地裏に誘いこんでボコったあとと身包みを剥いで売却）

速めに返さないといつの間にかツケによる借金が増えて行く悪循環（エセ神父に文句を言いに行く）と酒瓶で殴られ借金が増える）

うっ…頭が痛くなってきた。

あ？ 最低でも3人必要だから俺もクラブに入れ？ 別に構わんが基本幽霊部員に

なるぞ。

「構いません。いえ、寧ろ邪魔です。どうしてもお義兄様が女子トークに混ざりたいのならばどうぞ参加してください」

誰が混ざるか。

基本活動時間とかクラブのルールが決まったら連絡してくれ、その時間帯は居ないよ
うにするから。

「…わかりました」

こうして新たにカレンを部長とした告会クラブ（部員のほとんどが幽霊と掛け持ち）
が創設されたが、後にガチの懺悔室が作られるとはこの時露にも思わなかった。

同盟と武装の話

この間、告会クラブ設立記念としてさつそくプレハブ小屋でクラブ活動という名のお茶会を開いていたら、お断り3がそれぞれ個別にきたらしい。

それぞれの言い分としては――

『優勝したら毎朝毎晩剣道の相手をして貰う!!／／／』

『優勝したら酢豚を毎日食べさせるんだから!!／／／』

『優勝しましたら私と鞭とゴムボールで遊んでくださいまし!!／／／』

……言いたいことは大体察する事が出来るが、なんでそこで素直に“付き合つて”と言わないのだろうか。

あれか？ ヘタレか？

そんな事を考えながら目の前で乱れた息を整えながら水分補給をする二人に意識を戻す。

一人は中若気の至り二病発言で妹と喧嘩し、ヘタレのため現在進行形で仲直りできない変態です
トーカー気質な生徒会長。更識楯無

もう一人は3学年操縦科で代表候補生を務めているというダリル・ケイシー先輩。

この二人は俺が早朝のトレーニングを終え、着替えて朝食を作っているところに二人同時に匿ってくれと転がり込んできたのだ。

話を聞こうとすると何やら言い辛そうに口を開いては閉じてを繰り返す。

そんなやり取りに少しだけ苛立ってきたころ、ようやく決心が付いたのか口を開いて語った。

どうやら先ほどのお断り3の発言を誰かが聞いていたらしく、それをどう拡散して捻り曲がったのか知らないが、学年問わず優勝者は好きな相手にお願ひものは命令することができるといふ噂が流れてるらしい。

……ナニソレイミフ

噂が広まった翌日の早朝。

いつも通りの時間帯に目覚めて学校に行く準備をしていたら不意に部屋をノックをされ、こんな早朝に誰だろうと不思議に思いつつ扉を開けた。

そこには1年から3年までの何名かがおり、特に共通点が思いつかない組み合わせに何か用かと話を聞く。

そしたら――、

『『『『『ゆ、優勝できましたら、私と一つになってください!!』』』』』』

と朱くした顔で何処から仕入れたのか大人の玩具の塔を片手にそう言われたらしい。

…色んな意味でこの学園が心配になってきた。

会長さんはミステリアスなお姉さま、ケイシー先輩はわど漢らしさから時折、学年問わずファンレターやら手作り弁当・お菓子などを貰う程の人気っぷりだとか。

だが、流石に今回ののは許容できるといふか身の危険を感じたため逃走。

少しずつ増えていく追ってから逃げることしばらく、同じように逃げ回っている相手を見つけ、一瞬で理解し手を組み追ってを振り切つて俺のところへ逃げてきたらしい。

取りあえず、勘違いによつて被害を受ける世界へようこそ…

「ざけんな!!」

二人に殴られた。

あのあと、3人で各学年のトップを取つて命令権を阻止しようということと同盟が成立した。

そもそも、そんな噂が実現できるのかと疑わないのだろうか？ と聞いたところ、会長さんが去年色々と無茶振りなイベントやりまくつたせいで、「あの人ならきつとやつてくれる!!」というのがあるらしい。

自業自得じゃん。

まあ、同盟が成立したからにはちやんとトップを取るさ。

もともと負けるつもりも無いけど。

会長さんからのオフレコで今度の学年別トーナメントはタッグ形式で行う事になったらしい。

前回の襲撃事件のことを考慮していて、このことは明日にでも発表するとか。

二人は既に腕もそこそこあって相性もいい相手に目星をつけているが、一応貞操の危機があるので少しばかり見極めてからペアを申し出るらしい。

俺は昼休みにカレンにペアを組んでくれとお願いすることにした。

そのせいで貸しを一つ作ることになったが、まあ別に構わない。

カレンの専用機の特徴や戦闘スタイルを知りたかったので、放課後のアリーナで軽い模擬戦をしたが……まあ、カレンらしい武器を使うわなと思った。

いきなり連携訓練をすると流石に怪しまれるので、早めに切り上げカレンとはそこで別れ、俺は先輩に頼んでいた武装が出来上がると聞いていたので、一人整備室へと足を向けた。

整備室に着くと、先輩は席を外しているらしく、暇潰しにと鷹月から借りた本を読む

こと数十分、先輩が帰ってきた。

「すみません。お待たせしました」

いえ、大丈夫です。

友人から借りた本を読んできましたし：

と言った所で俺が持っていた本―夏●漱石全集―を見て不思議そうな顔をする先輩。

いやいや、教会の人間だからと言って教本や聖書ばかりを読んでるわけではないですよ。

漫画も読めばアニメも観ますって

「それもそうですよね」

先輩も納得した所で頼んでいた武装の説明に入ってもらおう。

まずはライフルなどを仕舞えるホルスター。

両腰に1つずつあり、先輩の考案でロケットアンカーも付けられている。

追加装備の為、微妙な角度調整しかできず、また引つ張る力もそんなに無いとか。

外した方がいいかと聞かれたが、これはこれで別にやりようはいくらでもあるのでそのままにして貰った。

次に盾と銃を複合した武器 “トリケロス”。

要望通り、盾の底に鋭利な刃物を付け加えられ、三連装の槍が追加された。

ライフルは単発式の中距離使用のモノで弾数は多くない。

俺の機体は低コストの武器が1つしか収納することが出来ないの、^マライフルの^ガ弾^ジ数を取るか他の小武器を積むのかがネックだな。

これは後でカレンと相談して決めないと。

最後にガントレット。

右腕の武装に対して左が疎かと思ひ、俺の戦闘スタイルを考慮して追加で考えて作ってくれたのだ。

これはありがたい。これで全力で殴^r——ゴホン、腕のダメージをある程度考えないで攻撃できる。

収納と展開が出来るようになってるので、使わないときは仕舞って銃やナイフも持てる仕様だ。

説明を終え、実際に着けて取り回しを確認したり、試射をしているうちにすっかり日が暮れてしまった。

学内とはいえ女性を一人で帰らせるのは流石に気が引けるので女子寮の近くまで先輩を送ることにした。

だんまりと二人で歩くのも何なので、何か話題でもと考えるがこの学園碌な話題無

かったな。

しかもその大半が俺関係で先輩には苦勞をかけさせてしまっている。

他に何かないかと何となく空を見上げると雲一つない綺麗な夜空が見え、

……先輩、月が綺麗ですね。

何となくそう呟いたら、顔を真っ赤に染める先輩。

え、何で？

「ど、どどどどこれくらい綺麗ですか!？」

何をてんばつてるんです？

そうですね……ずっと寄り添って眺めてたいくらいですかね。

自分でも少しくさかったなと思った所で何故か隣からボンツと何かが爆発するような音が聞こえた。

ちよ、先輩本当に大丈夫ですか？ 頭から何か湯気出てますし…。

んく少し熱がありますね。保健室に――

「…私、死んでも可いわ／＼／／」

先輩!? せんぱーい!?!?!

気絶した先輩を抱きとめ、取りあえず保健室に運んだが既に閉まっていたので、俺の

部屋に泊めることにした。

次の日の朝

先輩は顔を合わせた瞬間に顔を真っ赤にして出て行ってしまった。

生真面目少女の独白 2

〈システム調整〉

先日の襲撃事件が起きたせいで今日は休みなのですが、私たち生徒会や一部の上級生は全アリーナの修復やシステムの点検に参加しなければなりません。

私服姿の本音を抱きしめて癒し分を補充し、仕事に取り掛かります。

調査の結果、やはりあの無人機が直接システムに介入していることがわかりました。対策としてシステムを一つに統括するのではなく、複数に分けるべきとものがありましたが、最終的には防御プログラムの強化という無難な案に決まりました。

このままでは恐らく同じように襲撃されたとき、すぐに突破されてしまうでしょう。ISの力を少し過信しすぎているのではないのでしょうか？ 織斑先生やお嬢様の様な実力者が不在の時どうするつもりなんでしょう…。

やはり、更識の方で独自の迎撃システムを作っておくべきでしょうか？

〈開発依頼〉

今日は言峰君が整備室に来ました。彼と会うのは先日、お礼と謝罪の為に生徒会室に

来て貰って以来ですね。

何でも専用機——白式——の機体チェックをしたいようで、専用の機械の説明をしながらスペックを確認します。

装甲が薄く、エネルギーの殆どが機動力と単一仕様能力ワンオフ・アビリティと思われる零落白夜に回されてますね。

その事実を再確認された言峰君は予想通り難しい顔をされてました。

彼は複数装備の近接格闘が得意らしく相性が悪すぎると言っていました。

それは難しいですね：拡張領域を確認しましたが容量の殆どが雪片式型で埋まっています、マガジンか手榴弾のどちらか一ついれられるくらいでしょうか？

こら、「雪片捨てちゃダメ？」とか言つてはいけません。織斑先生や先生のファンに怒られますよ？

……気持は解らなくはないですけど。

結局、「武装を仕舞えないなら外部に取り付けければいい」という事で追加装備の開発を依頼されました。

言峰君が描いた設計図はお世辞にも上手とはいえず、概要と言峰君のイメージを聞きながら描き直します。

それにしても「先輩にお願いしたい」ですか。……少し嬉しかったですね。

これは頑張つて作らないといけませんね。

〈噂の誤解〉

ある日、学校に登校すると友人から「私が言峰君と付き合っているのか？」と聞かれました。

…どこからそのような噂が流れたんです？

友人にはいつもの誤解だと話し、噂の出所を追って行くと、後輩の「黛薫子」の所に付きました。

どうしてその様なデマを流したのか聞くと、以前言峰君と整備室での会話の一部が告白の様に聞こえたらしく、これは流さなければと即実行に移したとか。

告白つて…あれは複合武器や隠し武器が好きかどうかを話してただけで他意はありませんよ。

「それにしても楽しそうに話してましたよね？」

ま、まあ少し話が弾んで楽しかったですけど話を選らさないの!!
大体、私みたいな地味な女に惹かれるなんて…

あ、薫子待ちなさい!!

説教はまだ終わってませんよ!!

〈武装開発と…〉

言峰君に頼まれていた武装が出来上がったのをメールで伝えた次の日。

生徒会での仕事に手間取り、少しばかり遅れて整備室に行くと既に言峰君が本を読んでいた。待っていました。

少しばかり話をしたあと直ぐに武装の説明をし、開発した3つの試運転をします。

右腕にトリケロス、左腕にガントレット、両腰にホルスターを取り付け白式に打鉄の盾のシステムを簡略したモノを打ち込みます。

準備が終わると言峰君に搭乗してもらい、実際に使ってもらいました。

以前、言峰君がリー何とかさんから似たようなのを借りて使ったことがると言っていました。これほど直ぐにトリケロスをあそこまで使いこなせるとは思いませんでした。

他の追加武装も同様です。

言峰君は「器用貧乏なだけです」と苦笑気味に言っていました。複合武器や複数の武器を同時に使うのがどれだけ大変なことか知っているだけに凄いと感じてしまいます。

試運転が終わると使ってみた感想を聞き、修正箇所を確認しながら微調整を行います。

このまま付けたままにしますかと聞きましたが、大会本番まで隠しておきたいそう

で、時折、整備室にきて調整ついでに練習したり、自分なりに練習方法を考えてみるそうです。

いつの間にかすつかり日が暮れてしまっていて、言峰君のお詫びに女子寮近くまで送るとの言葉で二人並んで歩いていきます。

…こうして男の子と並んで歩くのは初めてですね。噂のこともあつて少し緊張してしまいます。

言峰君はあまり気にしてなさそうですけど……

こういったとき、どのような話を話せばいいのでしょうか？ 話が合うことと例えば武器開発ですけど、そんな女の子らしくない話を話して引かれてもしたら帰って泣きますよ私。

ああでもないこうでもない一人悶々と考えていると言峰君が夜空を眺めています。

星でも見れるのでしょうか？

「月が綺麗ですね」

……え？

お、おとおお落ち着くよ私。

“月が綺麗ですね”なんて告白フレーズを知っている人なんて夏目●石を読むくらいしか……って!? よ、読んでました。私が整備室に来るまでご友人から借りたという『目漱石全集』を読みました。

こ、言峰君とは先輩後輩の仲なだけで、決してそこまで親しいわけじゃ、でも少しは異性として気にはなりますけどってそうじゃなくて!!

そ、そうです。確認してみましよう!! ……き、期待してもいいですよね?

「ど、どどどどれくらい綺麗ですか!」

て、てんぱりすぎよ私!? ほら、言峰君も驚いてるじゃない!!

「そうですよね……ずっと寄り添って眺めてたいくらいですかね」

ボンツ!!

はわわわ／＼／＼ こ、こここここれってつまり、そういうことよね?

でも言峰君は私よりも年下で……ええっ!? そつと近づいてきて、ま、まさかキ、キ

スですか!? そういうことはちゃんとお付き合いをしてからの方が／＼／

……何だ、おでこを合わせたただけですか……………つて近い、近すぎます／

あ、ひんやりとして冷たい。言峰君の体温つて低いのね。じゃなくて、…少し汗臭いけどこれが男の子の…じゃなくて／＼／

「…少し、熱いですね。保健室によりましょう」

……機械油とかついてないですよね？ 今週は確か安全だけれど今日の下着は

……つて色々すつ飛ばし過ぎよ／＼／!!

でも、言峰君にだったら……………／＼／

「先輩？ だいじょうぶ——」「…私、死んでも可いわ／＼／——ちょ、先輩!? せんぱい!?」

気がついたら知らない部屋で寝ていました。

……知らない天井です。

何を言ってるの私!?

辺りを見回すと、あまりモノが置いてなく少しばかり殺風景な部屋。

誰かの部屋なのでしょうか?

制服に隠してある武器を確認し、そつと下へと続く階段を降ります。

下に降りるとすぐに幾つかの扉があり、奥の方にはキッチンや談話室の様な場所がありました。

ここつてもしかして…

そこまで考えた所で扉の1つが開き、そこからタオルを首にかけ、ズボンにシャツ一枚とラフな格好をした言峰君が出てきました。

ISスーツ越しに何度か見えますが、かなり鍛えられた身体つきでとても頼もしいかんじがします……す?

「あ、先輩起きられたんですね。おはようございます」

あ、はい。おはようございます。

少し髪が湿ってますね。あ、お風呂上がりですか?

ということとはここは言峰君の部屋ですか………

「速めにもどて——」し、失礼します／／／／／——速つ!?!?!?!?!

昨日の出来事が一瞬で蘇りました。

そこから言峰君の部屋にいるという事実から導き出される答え……つまり

え、ウソ？ しちやったの？ 年下の子とヤっちゃったの？ 一線を超えちゃったの

!?

そんな、全然覚えてないです。初めてなのに……

あうううううう／／／

その日は一日中、顔が赤いと指摘され続け、後日、勘違いだとわかり赤面することとなりました。

「ねえ、ねえ、ことみ。何かお姉ちゃんの様子がおかしいんだけど、何かした？」

「いや、覚えは無いが……（気絶した先輩を部屋に泊めたりはしたが）」

「ホント？」

「ああ、機体を見て貰って、夜遅くになってたから近くまで送ったくらいだ」

「他に何には？」

「ん、あ、夜空が綺麗だったから、月が綺麗ですね」って言ったな」

「「……」」」

「え、何？」

「あ、あのね言峰君——説明中——」

「え、マジ？　ちよつと先輩のところ行つて誤解といてくる」

「……別に解かなくてもいいと思うけどな」

「ん？　何か言つた本音」

「ん、ん、な、なにも」

学年別トーナメント

①学年別トーナメントにおけるルールと一部変更のお知らせ②

1. 今年度の学年別トーナメントは全てペアを組んだタッグ形式で行う。
2. 制限時間を準々決勝までは1試合15分、それ以降は20分とする。
3. シールドエネルギーは訓練機800で固定とするが、専用機は3/4(600)とする。
4. 時間切れの場合は残存エネルギーから判定する

5. また、候補生や専用機持ちは残存エネルギーから1割引かれて判定する。
6. 地上30m以上に総計30秒以上居てはならない。
7. エネルギー切れの選手に故意でなからうと怪我を負わせた場合失格とする
8. 規定日時までにペアの申請が出されない場合、学園側でランダムにペアを組むとする。

などと他にも細かなモノがあるが割合。

このことがSHRで知らされてすぐ、ペアの争奪戦が勃発。

特に代表候補生や企業代表は引っぱりだこ状態へと化した。

因みに我らが主人公こと時雨は友人（既にカレンとペアを組んでいるのを知っている）や一部のクラスメイト以外からはよく思われていないので、そのような選り取り見取りなイベントは起きていない。

つまり、誘われていない。

あと、ご想像しているかもしれないが、お断り3からペアを組めと煩かったようだ。

大会までの残された期間は約2週間。

それまでの行動は人それぞれだ。

訓練機で練習に励む者、スポーツで連携訓練をする者、強敵となる人物らを調べあげ対策を練る者、整備室に行き武装を確認する者、先輩にアドバイスを聞きに行く者、負けるはずがないと慢心する者、情報を隠す者など……。

そんな日々が続き、向かえる大会当日。

《これより、Aブロック 一回戦 第7試合を始めます。選手は入場してください》
「俺らの番だ。行くぞカレン」

「ええ、わかっていきます。……フフッ」

「……自重しろよ?」

「さて、どうでしょうね」

「はあ……」

深い溜息を吐くも、「まあ、自分に被害が無いからいいか」とか思っていたりする。

ISを身に纏って装備を再確認し、カタパルトに乗る。

間もなく合図が鳴り、脚下に火花を散らしながらアリーナへと出撃して行った。

「つ何よあの装備」

時雨の姿を見た対戦相手があげた声。

それもそのはずで、右腕に盾らしきもの、左腕には籠手、両腰には大型のホルスターと今までの情報とは全く違うからだ。

「フン、あんなのこけおどしよ。いい、作戦通り中距離射撃である男を落としてからペアの子をやるわよ」

「り、了解」

どうやら彼女らは2人で1人ずつ倒すのが作戦のようで、二人が乗るラファール・リヴァイブの手にはアサルトライフル等といった中距離射撃用の武器が握られていた。

やがて、カレンがアリーナへと入場しカウントダウンが始まる。

5

4

3

2

1

試合開始の合図と共に左右に跳ぶ2機のラファール。

それに対してカレンは後ろへと下がり、時雨は右に飛んだ。

右側に飛んだラファールAが立ち止まり、時雨に向けてアサルトライフルを放つ。

飛び交う弾丸を横に移動しながら避け、右腕の盾―トリケロス―を構えて引き金を引く。

「っ複合武器?！」

盾から銃を撃たれたことに驚きの声をあげるが、それもすぐに消え失せる。

なぜなら、放たれた弾丸は自分より離れた横を通り過ぎていったからだ。

「フン、やはりただのこけおどしのようね!!」

やがてラファールBが背後へと回り込み前後からマシンガンの嵐を受ける時雨。

それを避けつつ、またラファールAに盾を構えて引き金を引く。

今度は横にずれることは無かったが、ラファールAの足元に着弾。

「またもや外れてしまった。」

「あら、惜しかったわね」

下手な射撃に見下した笑みを浮かべるラファールAの少女。

カレンが後ろに下がったことに最初は不思議に思っていたが、無理やり組まされたかペアを組んで負ける様子を静観しようと思っただろうと辺りをつけカレンのことを意識から手放し、ペアの子と時雨に集中砲火を放つ。

「…もついいい」

試合開始から数分、避けながら時折盾の銃を放っていた時雨の口からそんな言葉が漏れた。

「フン、呆気ないわね」

当たらない攻撃と助けてくれないペアの状況から降参^{リザン}と受け取ったのかラファールAの少女は嘲笑う声を漏らす。

代表候補生に二度も勝ったのはやはりマグレ、所詮男など大したことないのだと…。

「トリケロス^このクセは解った」

「? 何を言ってる」

「ここからは攻めるぞ!!」

避けるのではなく、真つ直ぐ進みながら盾を構える時雨。

「そんなモノ!!」

当たらない。

そう思ってた…いや、そう思い込んでいた。

「えっ、当たった?」

左肩に被弾したことに驚く。

まぐれだと言いついて聞かせて攻撃しようとするが、続けて左足、腹部、右腕と次々に被弾していく。

「どうして!?! どうして急にっ!?!」

パニックに陥るラファールAの少女。

慌てているせいか狙いが定かでは無くなり、エネルギーも既に半分を切っている事すら気づいていない。

そんな彼女を助けるべくラファールBの少女が動こうとするが、それよりも早く時雨がホルスターからアサルトライフルを抜き振り返ることなく撃つ。

当たってるつもりなんて無い。ただの牽制。

それによって一瞬の隙が生まれ、今まで静観していたカレンがその間に割り込んできた。

「貴女の相手は私がします」

「どうして今になって…」

「さて、何ででしょうねっ!」

片刃の長剣で斬りかかるカレン。

それに対して慌てて左手に短刀を呼出^{コール}するものの、利き手じゃないこともあつてか呆気なく弾き飛ばされてしまう。

「クッ」

近接装備を失ったいま、この距離は不味い。

バック走で下がりながら牽制の意味を含めてライフルを向けるが、突如何か細く長いモノが視界に映る。

気がつけばにかライフルに鞭のようなモノが巻きつかれていた。

「い、いつの間に!?!」

カレンの右手には先程までの長剣ではなく、超弾性鋼の鞭が握られていた。

「クイックシフト」

高速切替の様な多種多様な武器を自在に切り替えるのではなく、特定のモーションか

ら瞬時に全く別の武器へと切り替え攻撃する技法。

剣で切りかかって来たかと思えばナイフによる連撃。

ナイフで刺されると思えばフェンサーによる高速突き。

今回の場合は短剣を弾き飛ばした瞬間に鞭へと切り替え、素早く相手に向けてふるっていたのだ。

「くっ、離せ!!」

「……クスッ」

突如、赤に発色した鞭から流れる電流。

それに耐えきれずライフルが爆散した。

「キャッ!?!」

突然のことに驚き小さな悲鳴を上げ尻もちをつく。

ふと、眼の前に出来た影に恐る恐る視線をあげ、見上げなければ良かったと後悔する。

「さあ、素敵な悲鳴^声を聞かせて下さいね」

綺麗な笑みとともに鞭を鳴らすカレン。

顔が自然と引きつり、背筋に冷たい汗が流れた。

離れた所でペアの子の悲鳴が鳴っているが、そんな事を気にする余裕など彼女には無かった。

弾の無くなったライフルを投げ捨てて、剣を呼出し斬りかかるも盾の底に仕込まれた刃で呆気なく防がれてしまう。

このまま罅迫り合いかと思いきやアンカーで手元を攻撃され武器を落としてしまったのだ。

そこから胸元に一閃。

続けて胴体に一閃。

慌てて後ろに跳び下がるが既にエネルギーは100を切っていた。

「(こんな、こんな筈じゃ…)」

何がいけなかった。そう考えるが今の彼女には解らない。

相手が男だからと大したことないと思っていたこともそうだが、何より二人で挟み撃ちで袋叩きにすれば余裕だと思いついていたことが何よりの敗因だ。

何故なら時雨は常日頃からお断り3と多対一で戦っているのだ。

まともな連携こそ無かったが、袋叩きにはとつくに馴れてしまっていた。

「っ!?!」

頬を掠める一本の細い槍フンサーダートに眼を瞑ってしまう。

「チェックメイトだ。続けるかい？」

その一瞬に距離を縮められ喉元に盾の刃を突きつけられる。

ペアの子に助けを求めようにもエネルギーが切れたのか地面に倒れていた。

何故か顔が朱いが…。

最後の抵抗、あるいはプライドからか降参リザインの一言を告げられずにいるとこれ以上は不要と判断した審判が試合終了の合図を鳴らし時雨とカレンの勝利が決まった。

なお、会場からは歓声は上がらず、殆どの観戦者が引いていたことを追記しておく。
誰の所為とは言わないが…

学年別トーナメント ②

特別ルールとしてタッグ形式で執り行うことになった学年別トーナメント。

特に大きなトラブルも起こることなく一回戦、二回戦と試合数を消費し、大会二日目が終わろうとしていた。

「大会二日目お疲れー!!」

今日の試合を終わらせた俺たちは食堂へと集まり、ささやかなパーティを開いていた。

集まったのはいつもの面子に加えて最近話ようになった相川、四十院らといった一部のクラスメイト達だ。

「言峰君とカレンさん、ブロック準決勝おめでとう」

「ありがとうございます」

そつちもブロック準決勝出場おめでとうさん。

「あ、ありがとうございます」

俺とカレン、谷本と鏡はブロックこそ違うが、共にブロック準決勝まで勝ち進んでいる。

「まあ、私たちがここまで勝ち残ってるのも言峰君のアドバースのお陰なんだけどね」
大会前、訓練機のレンタル時間が少なくこれでは連携訓練も出来ないと困っていた2人にちよつとしたアドバースというか作戦を与えた。

スポーツによる一種の連携訓練。ISでの実戦とは違うが呼吸を合わせることはできる。

作戦暗号の作成。咄嗟に内容の全て言うよりも予め決めていた暗号を使った方が行動を起こしやすい。

ここまででは他の生徒もやっていることだ。

俺は「初戦でペアの一人を退場させ、残った一人を相手に連携訓練をすればいい」と教えたのだ。

やり方としてはまず、片方がペアの一人を引き離し相手をする。

もう片方が両腕に持ったアサルトライフルで相手を上空へと逃がし続け、ルール違反で退場させる。

そして残った一人を短期決戦で決めず、時間ギリギリまで使ってしまった。たったこれだけ。

これによって実戦経験と連携訓練の2つが同時に得られる。

まさに一石二鳥だ。

「で、でもちよつと悪いことしちゃったかな？」

いいんだよ鏡。

ちやんとルールに則った作戦なんだから。

「…言峰君の場合、〃則る〃の字が、〃乗っ取る〃になつてゐる気がします」

ハハ、面白い冗談だな四十院。

おいおい、皆して頷いて…泣くぞ？

「普通は対戦相手の武器を奪つて戦わないと思うよ」

「外部に後付けして武装を増やすなんて考え付かないじゃないかな？」

…ちやんとルールに則つてゐるだろ？

「「「〃則る〃の字が違う（かな？）」「」」」

うわあいいイジメだイジメ。

食堂の一角で小さなパーティを開いている俺たちであつたが、遠巻きに様々な視線を送る者たちがいる。

主な視線の先は俺で次いでカレン、準決勝に勝ち進んだ谷本と鏡の二人。

最近はなりを潜めていた俺に対する悪態がカレンを巻き込んで再発したのも、先ほどまでの試合が原因だろう。

〈Aブロック 三回戦 第一試合〉

「邪魔だあっ!!」

「あー、武器が落ちてしまいましたわー」

箒が剣で斬りかかり、カレンがそれを鞭で防ごうとするも呆気なく弾き飛ばされてしまう。

…ただし、棒読み付きでだ。

「(わざとらし…)」

そう思いつつ、引き受けていた相手(ランサーダート×3をお見舞い)から離れ盾とライフルから弾幕の嵐を放つ。

「っ邪魔をしないちくぐっ!」

武器を取り落としたからと言って敵に背を向けてはいけない。

カレンの手元には拡張領域から取り出した2本目の鞭。

そしてそれは箒の首元に巻かれ――

「さあ、豚のような悲鳴をあげなさい」

冷徹な微笑みを浮かべながら、カレン容赦なく電源のスイッチを入れた。

「ぐっあああああああああ

!!!!!!」

悲鳴があがるなか、カレンが（わざと）落とした鞭を「右手」で拾う時雨。

正面へと回り込み、悪役もビツクリな笑みを浮かべながら遠慮なく電撃を纏った鞭を打つ。

「ふっ」

鞭を打つ。

「はっ!!」

打つ。

数十秒もしないうちにエネルギーが全損した箒を放り捨てもう一人のペアと体を向けると、

「あ、降参します」

三本の槍で磔にされた鷹月静寐が引き攣った顔を浮かべながら降参リザインを宣言した。

やっという何だが……やりすぎたか？

べ、別に今までのストレスやら恨み何か乗せてないんだからね!!

おい、カレン。汚物を見るような眼で見るな。

「…私たちが他のブロックで良かったね」

「[[[[うん]]]]」

ヒデエ…

因みに今回のでDS兄妹、DM製造コンビ、女王様といった噂が流れている。

今回に限っては——今までも特にした覚えはないが——噂を否定する気も撤回する気も無い。

それと言うのも俺の目の前で四つん這いにしたオルコットに座る義妹のせいなのだから…。

「このセシリア・オルコットにこの様な辱め、絶対に許せませんわ!!!／／／」

なら、息を荒げるな。顔を朱らめるな。

ホント、入学当初のオルコットはどこにいった？

「五月蠅い椅子ですね。他のと交換しましょうか」

「……………」

おい、黙るのかよ。

んでもってその柱にいる一回戦の子よ。朱い顔でモノ欲しそうにこっち見んな。

「ところで静寐。よく篠ノ之さんと組む気になったね」

ああ、それは俺も気になった。

オルコットやちっこいのなら候補生で専用機持ちつて事でペアを組んでくれっていうのが居るかもしれないが、篠ノ之に関しては剣の腕が凄いが猪突猛進がブツギリマインナスへと引き込んでいる。

好んでペアを組もうとするのはいいから、余った生徒同士抽選で決まると思ってた。

「……香奈がね凄く泣きそうな顔で助けてつて言ってきたの」
納得。

けど良かったのか？ 一年の初めとはいえ、戦績によっては今後の進路に響くだろう？
「うくん、どうなんだろう。ISに憧れてここに来たけど、最近裏方の仕事も魅力的に視えてどつちに進むか悩んでるの」

「裏方つていうと整備科？」

「ううん、管理科。言峰君に頼まれて情報収集してたときにそれを纏めて分析するにやりがいを感じてね…」

「へへ、いいんじゃない？ 私は応援するよ」

「ありがとう癒子」

…そういえば、布仏はどうしたんだ？

「こういうのにアイツなら絶対参加すると思ってたが…」

「ほ、本音ちゃんはペアの子とやることがあるってどっか行っちゃったの」
ふくん。

んじや、俺はここいらでお暇しますかね。

「も、もう帰っちゃおうの言峰君」

いや、整備室に行こうと思ってな。

何で不思議そうな顔を浮かべる皆。

明日明後日は2〜3年の試合で埋まっているため俺たち1年は休みとなる。

普通ならそれに合わせて対策を練ったりするのだが……

ちよつとした疑心を植え付けるつもりでな。

流すのならなるべく速い方がいいんだよ。

本当は今のところ特に武装を変更するつもりはない。

だが、行くのと行かないのでは大分違う。

もしかしたら装備が変わっているかもしれない、あるいはフェイクで変わっていない

かもしれない。

そんな疑心からいらぬ対抗策まで練らせるのが俺の狙いだ。

普段から無理やたらと誤報を流しやがって……ククク、悩め悩め。

「……(うわあすつごいあくどい顔してるよ)……」

んじや、またな。

時雨が席を立てってから暫くの事、

「……言峰君ってあれだね」

「うん」

「あれよね」

「[[[[[悪役]]]]」
[[[[[ヒール]]]]」

別世界において某五次戦争の黒幕の弟子にして養子のため凄く否定し辛い。

「よくもまあ、あれだけ裏をついた事を考え付くわよね」

「ね〜」

「…今のはそれっぽい事を言いましたけど、あれは多分左腕を直しに行つたんだと思います」

「どゆ(ハ)ン(ト)？」

カレンがポツリと零した言葉に皆反応する。

「三回戦の時に左手の反応が少しばかり遅かったので、恐らく二回戦の時に使った技の負荷が機体に残っていたのでしょう」

「あ、あれでそうだったの？」

思い出すのは2回戦で漫画やアニメの様に殴り飛ばされる凰鈴音
そして…

「私、片手の調子が悪い相手に負けたんだ……」
内心ちよっぴりショックを受けた鷹^{3回戦の相手}月であった。

○ 学年別トーナメント ③

皆とのささやかかパーティーから抜け出した俺は。皆に話した通り整備室へと足を運んでいた。

理由は装備の変更ではなく、左腕と籠手の修理だ。

どうやらちっこいのを思いつき殴ったさいに不具合が生じたらしい。

整備室に着くと慌ただしく機体の整備をする生徒や派遣されてきた企業の人々の中に探していた先輩がいた。

今請け負っているのは明日出場する選手らのデータ登録の再確認らしく、それが終わり次第やってくれるそうだ。

忙しい中とても申し訳ない……。

ところで、声をかけた時に変な声を出したり、何だか顔を朱くして慌ててたけど、まだこの間の噂や誤解を気にしているのだろうか？

フム：誤解の件や普段から世話になっていいるお詫びも兼ねて今度何かプレゼントなりました方がいいかもしれないな。

暫くすると、作業を終わらせた先輩とそのチームの方たちが集まって機体のメンテナ

ンスを始めしてくれる。

その間、俺は機体に乗って意見を言う以外は役立たずなので、大人しく邪魔にならない場所で見学したり、来る途中に買ってきた飲物を差し出して待つ。

何となく暇だったので先輩の様子を観ると先程までの慌てた様子も無く、とても真剣に作業に取り掛かってくれている。

…うん、やっぱり先輩に頼んで正解だな。

なんていうかこう…安心して任せられる。

メンテナンスが終わって帰る際、待っている間しつこく取材してきたやたら画数の多い新聞部の人が先輩に掴まって震えながら引きずられてたのは多分気のせいだと思う。

整備室を後にし遠く離れたプレハブ小屋に帰る途中、眼の前から一人の少女がこちらに向かって歩いてきた。

整備室に用でもあるのだろうと特に気にしていなかったのだが、その少女とすれ違ったさい——

「…絶対に勝ち上がって」

あ？

「…ブロック代表戦で待ってる」

そのたった二言だけ告げ立ち去って行った。

……………今のは確か——

誰だっけ？

何処かで誰かが盛大に転ぶ音が聞こえたと思つたら

「ちよつと!?!? 忘れてんじゃないわよ!! My dear cute sister.

の簪ちゃんよ!!」

出たな変態ストーカー

相変わらず人の事を着け回して…暇なの？

あと妹愛が強すぎて正直気持ち悪い。

「妹が大好きで何が悪い!!」

開き直ったよ。

「もう、皆してズルいわ!! 私だけ除け者にして簪ちゃんと話して!!」

俺のは一方的な宣戦布告っぽかったけどな。

「私も本音ちゃんみたいにならなからギユって抱きしめたり、虚ちゃんみたいに頭をナデナデしてあげたいの!! もうカンザシユウムが足りなさ過ぎて死んじやうわ!! 簪ちゃんの部屋からこっそり交換した枕や借りた服の匂いじや耐えられないのよ!! 生の簪ちゃんを抱きしめたい!! いや、むしろペロペロしたい!!」

うわ、末期だよこのド変態。

もしかして例の発言が無くても避けられたんじやね?

「グハツ!? ち、違うわ。これはあまりにも簪ちゃんと触れ合って無かったことで溜まったモノが爆発しただけで——」

…間違えたフリをして妹の歯ブラシを使ったり、飲みモノの間接キス、使用済みのタオルを使ったことは?

「……………」

おい、こつち向け。

「ち、違うのよ、事故よ。寝ボケてたり、何となく使ったのがそうだっただけで決して故意にしたわけじゃないの信じて!!」

ほう、ワザとじやないと?

「なんなら神様でもイエス様でも誓うわ」

もしその誓いを破れば天罰が下ることとなるが、よろしいですか？

「ええ!!」

…父と子と精霊の御名においてその誓い信じましょう。

アーメン。

「…なんか、初めて言峰君が神父っぽく見えた気がするわ」

失礼な。

「だって、普段の言峰君からだと、右の頬を打たれたら右の頬を打ちなさい」を想像するわよ」

え、それ普通じゃね？

「違うわよ!! あなた本当に聖職者!!」

寧ろ師匠や知り合いの連中だったら、打たれる前にぶち殺す、なんだが…

「あややダ教会って怖い」

まあ、正直神様とかどうでもいいけど…

「仮にも神父がそんなこと言っちゃダメでしょ!!??」

あ、ところで、ここにさっきまでの会話を録音したレコーダーがあるけど、幾らで買う？

「このクサレ外道!!」

褒め言葉として受け取っておこう。

臨時収入が手に入り、上機嫌でその日は眠れました。

〈ブロック代表 決定戦〉

2～3年による試合の大部分が消化され、残すことは1年と同じくブロック準決勝から上のみとなった。

今日には1年から順にブロック準決勝と決勝を、明日の最終日には各ブロック代表戦が行われる予定となっている。

「このっ!!」

「っ!!」

打鉄が標準装備する剣―葵―をトリケロスに備え付けられた刃で防ぐ。鏝迫り合いに見えなくも無いが、機体重量の差で時雨が少し押され気味だ。

このままでは不利だと悟った時雨は腰のアンカーを後ろに向けて射出。それは少し離れた所でカレンと戦っていた打鉄②に突き刺さった。

「へ?」

バックステップで眼の前の打鉄との距離を取り、スラスターを調整し横回転をしながらアンカーを巻いて行く。

己の盾を水平にして、だ。

ところで想像してほしい。

処刑鎌ギロチンのようなモノを持った独楽が高速回転で近づいてくる様を

「ヒッ!」

A. 一種のトラウマ

《相楽選手 機体エネルギーの全損を確認》

「な、なんて出鱈目な機動をつー!」

驚いている暇なんて無い。

先程までペアの子と戦っていた筈のカレンが今は近距離で己に向かって鞭を振るっているではないか。

今までの試合の様子からまともに受けては電撃で武器の破壊や取りこぼすこととなってしまう。

最悪の場合ドMに……

背筋に冷たい汗が流れる中、必死な思いで避け続ける。

確かに当たればマズイが鞭のような大振りで使用する武器はどうしても隙が生じやすい。

そこを狙えればとチャンスを待ち続ける。

やがてカレンが大きく腕を振り上げたとき、ここだと懐に潜り込もうと加速する。

それが罠だと知らずに

「おバカさん♪」

「し、しまった!？」

カレンの右手には鞭ではなく西洋剣が握られ、既にそれは自分に向って振り下ろされていた。

慌てて避けようにも加速した勢いから止まれず、胴体に重い一撃を受け絶対防御が発動してしまう。

《試合終了!! 勝者、言峰・オルテシア ペア》

時雨とカレンのAブロック代表が決まった。

○ 学園別トーナメント ④

《選手入場を確認しました。これより一年生の部 準決勝を始めます》

アリーナの中央に立つ4つの機体

時雨の駆る純白の機体 “白式”

カレンの駆る黄色の機体 “テンペスタ・カスタム”

本音の駆る灰色の機体 “打鉄”

そして簪の駆る水色の機体 “打鉄貳式”

「…意外ですね。あなたとここで当たる事になるとは思いませんでした」

「よろしくね〜カレつち〜」

「はあ…本当に調子が狂います」

「エへへ〜」

これから試合前とは思えない間延びたやり取りだ。

《試合開始10秒前》

「…ありがとう。ここまで来てくれて」

「別に、ただ勝ち進んできただけさ」

「そう…」

《《5秒前》》

「…私は——貴方に勝ちたい!!」

「そうかい。でも残念、勝つのは俺たちだ」

《《3秒前》》

「…違う」

「？」

「勝つのは、私たちだ!!!」

《《試合開始!!》》

「はああああああ!!」

「でええええい!!」

時雨のトリケロスと簪の持つ超振動薙刀「夢現」がぶつかり合い火花を散らす。

『本音!!』

『はいはい』

合図を送るのと共に鏑迫り合いを止めて横に跳ぶ簪。

それと入れ替わるかのように彼女の影に隠れていた本音が両手に持ったライフルを時雨に向けて掃射。

「つち」

すぐさま盾で防ぎながら後ろに下がる時雨であったが、それでも数発喰らってしまいエネルギーを少しだけ削られてしまう。

『カレン、プランCだ』

『わかっています』

事前に決めた作戦の内の1つ、互いに持つ中距離武器による多対一の集中攻撃。ちょうどVの字になるような形で本音に向けて互いの持つ射撃武器を撃ち放つ。

「わわっ!?!」

今度は自分に向つてくる弾丸の嵐を慌てて浮遊する盾を操作して前面へと回す。

その1秒にも満たないすぐ後に聞こえてきた無数の弾丸を弾く音に本の少しだけ背筋がゾツとする。

「ええい!!」

本音のピンチを救うべく文字通り横槍にと襲いかかる簪。

その刃はエネルギーこそ削れはしなかったが、時雨の持つアサルトライフルの破壊に成功。

しかし、このままただではやられないと爆発寸前のライフルを簪へと投げ捨てる。

だがそれも時雨の予想してた通り、あつさりと弾かれるがある程度の距離を取る事ができた。

流石にあの近すぎる距離で全武道中最強と謳われる薙刀とやり合うには少しばかり分が悪かったのだ。

〔支援射撃布仏を速めに落としたかったが、流石にそう簡単に許してはくれないか…確か前に聞いた話だとあの二人は幼馴染でこつちと比べて連携に何の苦も無さそうだな〕

時雨たちの連携は付け焼き刃よりかはマシだが、やはり簪らには劣る。

今も簪が斬り込み下がった瞬間に本音が援護射撃と逃げる時間を稼ぐ。そのタイム

ラグはほぼゼロと言ってもいいほどだ。

「(にしてもどこが、姉の威光で候補生の座と専用機を手に入れた落ちこぼれ」だよ。やっぱ噂は宛にならねえな)」

クラス代表選で集めた際に得た情報を思い出し苦笑を浮かべる。

実際に戦ってみて解る。

事細かな機動、薙刀の腕前、射撃センス、相方のサポートとどれも自分より上で唯一勝っていると言えば実戦経験くらいだろう。

噂に関しては簪と同じ候補生や予備候生らが妬んで流したデマなのかもしれない。

時雨と簪が激しい戦闘する一方、本音とカレンも一進一退の攻防を繰り返していた。

本音がグレネードランチャーを構えて撃ち、それをカレンが鞭で叩き落とす。

続けてアサルトライフルを撃とうとする前に鞭での破壊を試み、慌ててそれを回避する。

本音としては慣れない戦闘にカレンとしては柳の様になると動く相手に苦戦していた。

「うわっ!? おつととく危ないよ〜カレっち〜」

「つちよこまかと!!」

このままでは埒があかないと鞭を仕舞い西洋剣を^{コール}呼出し、切りかかるカレン。逆に本音はこの時を待ってましたともう片方の手に銃を^{コール}呼出する。

その2丁の銃が火を噴く瞬間、カレンはニヤリと冷たい笑みを浮かべた。

「かかりましたね」

「えっ!?! な、なに?」

突如西洋剣だったものが分裂しチェーンによって連結された刃が本音へと襲いかかる。

それを先程までのように避けるが蛇のようにしつこく追い回される。

鞭を一切振るっていないのだ。

——イメージイターフェイスによって自在に武器を操ることを目的としている——

カレンが転校してきてすぐにそんな話をしていたことを今になって思い出す。

今までの試合全てがこの特性を隠すための罠だったのだ。

本来ならば鞭もあそこまで大げさに振るわずとも同じような事ができるのだろう。

「(わゝこれ無理かもゝ)」

既に両腕の武器は破壊され、残っているのは「葵」一本とボロボロの盾のみ。

何とか襲いかかる刃から身を護っているが、それも時間の問題だろう。

「本音!!」

「余所見はいけないな!」

「っ!?!」

本音の危機に一瞬気を逸らしてしまった簪。

隙ありとガントレットを展開した左手で殴りかかる時雨。

彼女の脳裏に咄嗟に浮かぶのは遠くに殴り飛ばされた2組風のクラス代表鈴の姿音。

このままでは負ける。

嫌だ。

だって私は

強くなりたい。

この人に、

言峰時雨に勝ちたい。

「ああああああ!!!」

薙刀を振り下ろす簪。

だが、それがその刃が時雨に当たるまでにはあまりにもリーチが長すぎる。

勝負は決まった。

試合を観戦していた誰もがそう思った。

だが――

「変われえええ!!!」

突然薙刀から小刀へと切り替わり垂直に振り下ろされる。

それは展開されていたガントレットの繋ぎ目を正確に貫いていた。

「つくイックソフト!?!」

あまりに予想外の出来事に咄嗟の癖で距離をとってしまう時雨。

その隙にと空いた左腕で空中に投影させたコンソールを操作し6機のミサイルポツ

トからそれぞれ8つのミサイルを撃ち放つ。

「マジか!？」

残ったホルスターからショットガンを抜き撃つ。

全弾撃ちつくしたものの、襲いかかるミサイルには時間差があり、破壊できたのは撃たれた半分も無かった。

「(これは囷と誘導!? まさか本当の狙いは)っカレン!!!」

「っ!？」

「逃がさないよ〜」

時雨の叫びに危険を察知したカレン。

急いでその場を離れ迎撃に移ろうとするも背後から本音に抱きとめられ身動きを封じられてしまう。

その直後二人の悲鳴と共に爆音が鳴り、2機のISがエネルギーを全損させた。

「やってくれましたね布仏さん」

「てへへ〜、ごめんね〜カレっち〜」

「はあ…」

本当に呆れたと思わず溜息を吐くカレンであった。

『本音、どうして…』

彼女を救うために放ったミサイル群。

だがそれはカレンを確実に仕留めるために彼女はあえて犠牲になった。

まるで親友を犠牲に勝ちに出たかのような形に心を痛めてしまう。

『えへへ〜ごめんね〜かんちゃん。でも〜あのまま残つても私じゃあ足手まといにしかないから〜』

『でも、こんな』

『うん。かんちゃんの言いたいことはわかるよ。けど〜ことみに勝つて前に進みたいんでしょ?』

“強くなりたい”、 “勝つて前に進みたい”

本音にペアを組んでくれと頼んだ時にそう零した言葉。

『だから、勝つて前に進もう』

『…ごめん、本音』

『違うよ〜こういう時は “ありがとう” だよ〜』

『うん…、ありがとう』

手に持ったままの小刀で何度も斬りかかる簪。

それを時雨は盾で防ぐのではなく左手を刃の腹に当てて1つ1つ確実に逸らしていく。

互いにもう武器の耐久値もエネルギーの残量も殆ど無い故の行動。

「足下が留守だっ!!」

「っ!?!」

幾度かわからぬ攻防戦の末に小刀に集中しすぎた簪はいつかの時とは逆に足払いを受け体勢を崩してしまう。

このままでは不味いと無理な体勢から後方宙返りで距離を取るが、それを逃がさんとはばかりにトリケロスを構え全てのランサーダートを射出。

追撃してくる3本の槍

1本目は身体を捻り避ける

2本目は小刀で槍の腹にあてて弾く

3本目も弾こうとした所で耐久の限界がきた小刀が折れ、右肩に被弾。

「っ!?!のっ!?!」

仕返しにと「春雷」の残された弾道を全て打ち放ち、トリケロスを吹き飛ばす。

華やかさなんてものは無い荒々しい試合。
だが、見て居たもの全てがそれに魅了した。

簪は薙刀を時雨はナイフを呼出^{コール}して構える。

互いに残された最後の武器。

エネルギーは二人とも2桁を切っている。

あと一撃。

どんな攻撃であろうとこれで決まる。

互いに弾切れとなり邪魔となった武器を切り離して斬りかかる。

「これでええええええええええええ!!」

「終わりだああああああああ!!」

二つの機体が交差しぶつかり合う金属の音。

互いに着地するものの全く動く気配が無い。

嫌な静けさが会場が包む。

まるで誰かがゴクリと飲み込んだ唾の音が聞こえてきそうなほど…。

試合結果を知らせるアナウンスが異様に遅く感じる。

結果はどうなったのか？

どちらが勝ったのか？

誰にもわからない。

まるで永遠かと思わされる時間であったが、遂にその結果を知らせるべく、静かにアナウンスが流れた。

《試合終了。勝者——》

「ちよっ、指で挟んだ細剣で銃弾を弾くって何よそれ!？」

「フンツ!!」 ↑黒鍵×6本投擲

「キヤツ!?!」 ↑磔の刑

「さて、グー（顔面殴打）、チョキ（黒鍵追加）、パー（腎臓破壊）のどれが良い？」

「降参します（泣）」

大体こんな感じだったな…。

あ、黒鍵で戦ってたのは

◆ガントレット（継目ポツキリ）

◆トリケロス（表面凹んで刃所々欠けてる）

◆大型ホルスター（アンカー切断された）

◆背後のスラスター（所々壊れてる）

と、武装の大半を壊されたからだ。

予備のあるライフルとかなら兎も角、先輩らが（半分趣味で）作っただから当然予備なんてもの無い。

何せ「ランサーダート」ですら試合が終わるたびに出来るだけ回収して再利用して
 たんだぞ？

というか倉持の奴ら、予備の装備が無いのはまだしも白式の構造すら知らないってどういうことだよ。

造ったのあんたらだつて聞いたんだが…。

お陰で背後スラスト（自己修復が間に合わなかった）を捨てて戦う破目になったぞ。…まあ、ぶつちやけ相性悪かったから良いんだけどさ。

「は〜い、新聞部です。一年の部優勝者のDS兄妹に突撃インタビューしに来ました!!」
どうぞ、出口はあちらですのでお帰り下さい。

「じゃあまずはオルテシアさんからね」

ムシか…。

ああ、そうそう。会長さんとケイシー先輩も見事大会を優勝したそうさ。

これで当初の目的通り絶対命令権（非公式）を阻止することに成功した。

後は流れたデマをどうするかだが…：…どうするんだろうな？

適当に使おうが黙って過ごそうがどっちにしてもあまり良くないことになるだろうし…。

「さて、次は変態機動、殺人パンチ、人間大処刑独楽と続々と二つ名を増やしてる言峰君にインタビュー!!」

…嫌な二つ名が増えたものだな。

「先ずはペアに義妹のオルテシアちゃんを選んだわけを!!」
単純に性格と戦闘スタイルを知ってたからですね。

他にも高速機動を得意とする鏡、サポートが上手い鷹月、砲撃戦を好む谷本という手もあつたが、会長さんから前もって候補生や専用機持ちは実力差を埋めるために候補生同士で当たるように仕向けられてたり試合数が多くなると聞いていたことや装備の仕込みのを含め練習期間が短すぎたので今回は遠慮させて貰った。

次の機会ができれば彼女らにペアを頼んでみようと思う。

「それじゃあ最後に例のお願いの件は誰にするのかな?」

その瞬間、バツと今まで以上に視線がこちらに集まる。

…ああ、例のアレね。

周りにはわくわくとした者、悔しげな顔をした者、脅えた様子の方、そして自信満々で胸を張つてるお断り3らが…。

何というか…ウゼエ。自分たちが選ばれるとも思っているのだろうか?

俺としては別に誰かにんなもんする気はサラサラ無い。

そもそも絶対命令権を阻止するために優勝する同盟を組んだのに俺がそれを使ってしまったら、次回もまた同じような事が起きて同様な事をしなければならぬ。

さて、どうしたもんかね。

このままだんまりで通すわけには……ん？ あそこに隠れてるのは……ああ、なるほどそう言うこと

すみません。お願いの件とは何のことですか？

「あれ？ 知らなかったの言峰君。大会に優勝すると好きな相手に1つだけお願いすることができると」

つまり絶対命令権ということですか……初めて知りましたね。

クラス対抗戦で優勝すると食堂スイーツ半年フリーパスが貰えるとは聞いてましたけどそんなの記載されてましたっけ？

これでも穴が開くくらいルールをしっかりと読んで、逆にルールの穴を見つけてやっただぞ。

……皆に軽く引かれたけど。

「いいえ、記載されてないわよ」

物陰からスッと現れる変態ストーカーもとい會長さん。

「配られた資料の通り、各ブロック優勝者以上の生徒には賞状と訓練機や施設の優先使用权、1週間分の学食フリーパスが渡されるわ」

お陰さまで食費が浮いてローン返済が少しだけ早まりましたとです。

「個人同士で約束を取り決めるのなら兎も角、絶対命令権なんてモノ学園側も生徒会も

許可した覚えないわ」

バツと扇子を開く会長さん。

そこには「激怒」と書かれていた。

なに、私怒ってるのよプリン！ とでも言いたいのか？

もし、そんなのがあつたら会長さんに絶対服従の永続命令を出して影から学園を牛耳る事も可能になるな。

「あら、その発想はなかったわね。やってみる？ 何だか言峰君って悪役とか似合いそうだし……ねえ、『自害せよランサー』って言ってくれないかしら？」

アンタが何を言ってるのか解らないのだが……

あと、友人らよ。うんうんと首を縦に振るな。

もし絶対命令権が有効で俺が会長さんに出したとしても会長さんの持つ命令権で相殺されて意味が無いからしないし、そもそもそんなことする気もがなければ興味も無い。

影から牛耳るよりも騙して罵って傷口を抉る方が楽しいだろ。

『左腕を渡しなさいバゼット』ってな。

……俺は何を言ってるんだ？

「そつかくじやあ今回の噂もデマだったのか」

「ええ、今後もこの様な人権を一切無視したモノを賞品として出す気は全くないわ」

よし、これで次回からの布石を打つことができたな。

何せ大会を優勝した生徒会長が多くの生徒の前で宣言したのだ。

学園行事の全てを一任されている生徒会が認めていないことが実現するわけがないと。

更には俺が優勝し好きな相手に命令を出された場合のリスクを考慮し、似たような話題が上がってもそれほど広がることはないだろう。

モノによつては永続的に縛れたり、複数の人間を支配下に置けるのだから：

適当にインタビューを終え、最後に写真が欲しいとのことで最初は俺とカレンのツーショット。

次は途中から合流したケイシー先輩と会長さん、そのペアの子らで撮って夜遅くまでパーティーを楽しんだ。

こんな賑やかで楽しい時間は教会を出て以来だな……。

……うん、臨海学校が終わったら一度教会に帰ろう。

あれ？ そう言えば、さっきの発言ってヘタをしたら、俺が学園を影から牛耳ろうしてる”って噂たつんじゃないかね？

と思った翌日、案の定噂が広がってましたとです。

努力家な少女の独白 ①

〈遠い記憶〉

私にはお姉ちゃんがいる。

私と違って何でも出来る完璧な人。

昔はそんなお姉ちゃんの事を尊敬し、憧れ、慕っていた。

そう、いたのだ。

いつからか周りから「妹君だから出来て当然」、「どうしてできない」「姉の方がもっと早くに習得してた」、「出来損ない」と出来の良すぎるお姉ちゃんと比べられるようになってから段々とコンプレックスを抱くようになった。

終いには実のお姉ちゃんから「貴女は何もしなくていい」、「無能なままでもいいさ」と言われ私たちの間に大きな亀裂が入った。

そんな気がした。

それからお姉ちゃんを避け、一時期は部屋に塞ぎ込もうとも考えたけど、それではダメだと思いとどまった。

兎に角がんばらなきや

頑張ってお姉ちゃんに追いついて皆に認められなきや

ただ、がむしやらに頑張つて代表候補生の座まで手に入れた。

けど、それはお姉ちゃんがしてきたことの反復だと思ひ知らされた。

周りからの評価は変わらず

なかには「お姉ちゃんの威光で候補生になった七光」とまで言われた。

悔しかった。

どれだけ頑張つてもお姉ちゃんと比べられる。

お姉ちゃんの存在が邪魔をする。

お姉ちゃんなんて嫌いだ。

居なくなつてしまえばいい。

何度もそう思つた。

けど、やっぱり嫌いになりきれなかった。

〈学園入学〉

中学を卒業し、I S 学園に入学。

幼馴染の本音とはクラスが別になったが、部屋は同じになつてしまった。

お姉ちゃんの配慮なんだと思つた。

1組には例の男子がいるからその監視か護衛に、部屋が私と同じなのもきつと似たような理由だろうと。

学園に入ってからしばらく経った。

今日も一人で整備室に籠って専用機を組み立てる。

最初の頃は順調に進んでたけど、今は少し躓いてしまっている。

その事にイライラとしてしまうが、それ以上にたまたま聞いたある噂が私の感情を黒く染めてしまった。

『例の男子は実の姉ブリュンヒルデに強請って専用機を貰った』

許せなかった。

私が必死に努力して得たことを、“七光”で手にするどころか、そのせいで私の専用機を開発担当だったスタッフの大半を奪われたあげくプロジェクトが凍結してしまったというのに。

啖呵を切って機体とコアを貰い受け、国外から入学する生徒たちとほぼ同時期に学園に入って作っていたのに…。

私が、どれだけ時間を割いてきたというのに!!

怒りで心が真っ黒に染まり、このまま続けてもダメだと判断した私は作業を止めて帰る準備を始めた。

片づけを終え、整備室から出ようとしたところでバツタリと件の男子と遭遇した。

思わずビンタと蹴りをいれてしまったが、その両方があっさりを受け止められ、突然手を放されバランスを崩した私は床に尻餅をついてしまった。

見上げた彼の余裕そうな顔が癩に障って『あなたみたいな人絶対に許さない!!』、『対抗戦でボコボコにしてやる!!』と宣言して整備室を後にした。

普段の私からは想像できない行動。

後に冷静になって部屋の布団で羞恥心で悶えて本音に心配されたのは苦い記憶だ。

〈結束するクラス〉

タダならぬ殺意が漏れてたのか、いつの間にかクラスが打倒言峰時雨で纏まっていた。

残りの期間で専用機の開発が間に合わない、ならば訓練機で出るしかないけど長い間開発に掛り付けだったから打鉄の感覚を忘れてるかもしれない。

クラスの皆で訓練機を借りてローションで練習したお陰で感覚は取り戻せた。

次に偵察と戦闘データを集めて貰っていたクラスメイトからデータを貰って分析に入る。

「代表ならそんなことしなくても余裕だよ」

とクラスメイトがいうけれど、そんなことはない。

現に余裕ぶっていた英国の専用機持ちが負けているんだから、しっかりと対策を練らないと。

“1組の代表はたった1度勝ったから余裕ぶってる”と噂が流れてるけど、偵察部隊の子たちが何度か1組の生徒数名を見かけたと言ってたから、多分これは誤報で相手も同じことを考えているに違いない。

何かを隠すために練習量を減らしているのかな？ そんな気がする…。

〈クラス対抗戦〉

1組と2組での試合の最中、突然の襲撃があり対抗戦は中止となった。

私は緊急時のマニュアルに従って、皆を連れて避難を始めた。

避難する途中いくつもの隔壁が下りていたが、超振動薙刀“夢現”でバツサバサと斬る。

緊急時だからISの無断使用や隔壁の破壊も許してもらえるよね？

いくつか進んだ先で救助に駆け付けた先輩や先生方と合流し、引き連れてきた皆を預けて取り残された人がいないかを探す。

観客席から各部屋まである程度探索した結果、どうやら取り残された人はいなかった

みたい。

そのことに安堵の息を吐き、ふと襲撃者がどうなったのか気になったので一番近くの放送席へと向かう。

そこには数名の生徒の屍の上に立つ同級生が何やらエールらしきモノを例の男子に叫んでいた。

…え？ この人何やってるの？

努力家な少女の独白 ②

〈事件後〉

休みが明けた日、クラスの皆からお礼を言われた。

突然の事で何のことだろうと思っていると、率先として避難活動をしてくれたことだと告げられる。

なんだ、そのことか…。

クラス代表として当然のことをしただけなのに次々とお礼を言われる。

その事が恥ずかしくてそっぽを向いて「別に…」とだけ答えたら、『代表がデレたー!!』、『可愛い♪』と歓喜の声があがった。

やめて、本当に恥ずかしいから／＼／

〈変わる日常〉

襲撃後から私の周り…というかクラスがガラリと変わった。

今までは遠巻きにコソコソと何かを話しているだけだったのに、今は登校すれば挨拶をされ、「昨日のテレビがどうだった」、「今日の授業がこうだ」と何気ない日常会話から

相談しあうことまでするようになった。

その事に不思議に思っていると、今までの私はイライラとした様子で近寄りかかっ
たみたい。

確かに専用機の開発凍結、姉へのコンプレックス、思うように進まない作業とイライ
ラしていたかも…。

報告や練習をみてた時も何処かビクビクしてた感じだった気がする…。

冷静になって考えてみると、学園に広まる噂は殆ど出鱈目だと気づいた。

幾らなんでも強請って専用機が貰えるなんてありえない。

ISのコアは467個しかなく、それが世界中に分配されている。たったそれだけの
コアを一個人が強請って貰えるわけがない。

もし、そんなことができるとすればコアを唯一作れる篠ノ之博士の妹さんくらいじゃ
ないかな？

まあ…流石にそんな子供が親に甘えてお菓子を強請るみたいなこと誰もしないよね
？

私は絶対に出来ない。だって恥ずかしいし…

〈親友との和解〉

企業での専用機開発がストップしてしまっただが、今では和解した幼馴染の本音や整備科志望のクラスメイト、整備科の先輩の協力もあって完成しつつある。

大会2週間前になって突然ペアでの形式になったと告げられ、真っ先に思い浮かんだのは本音で彼女に相談してペアを組んで貰った。

どれだけ実績をもった生徒よりも長い時間苦楽を共にした彼女の方がいいと思ったからだ。

本音には本当に悪い事をしたと思っている。

私が一方的に姉からの差し金だと思いついて拒絶していたのに、それでもいつもと変わらず接してくれた。

仲直りした日には抱き合って涙を流し、気づけば同じ布団で眠って朝起きた時に感じた暖かい温もりに心を癒された。

ただ、「えへへ私のおっぱい気持ち良かった〜?」って言うのは冗談でも心臓に悪いからやめて欲しい。

確かに弾力があって気持ち良かったけど…。

何とか大会までに専用機“打鉄式”が完成した。

試運転も万全、これで全力で戦う事が出来る。

私は、例の男子に：言峰時雨に勝ちたい。
彼に勝てばきつと前に進める。

そんな気がした：

そして、もし彼に勝って大会を優勝したらそのときは……

〈学年別トーナメント〉

とうとう大会の日がきて、1回戦、2回戦と順調に勝ち上がった。

3回戦では同じクラスの子：それも私の専用機開発を手伝ってくれた子たちと当たってしまった。

彼女たちと戦うこと、戦った後の事が恐かった。

けど、いざ試合が終わってみれば彼女たちは笑顔で「頑張って」と応援してくれた。

思わず泣きそうになった顔を見られたくなくて、そっぽを向いてぶつきらぼうにしか答えられなかった。

絶対に優勝しようと改めて心に誓った。

ただ、後ろの方で「素直じゃないなくかんちゃん」、「いや、寧ろそれがいいんじゃない」、「素直になれない代表カワイス」とか全然聞こえない。

〈準決勝後〉

負けた。

私は、彼に：言峰時雨に勝てなかった。

親友を犠牲にしたのに……。

本音は自分が勝手にやったことだと言うけれど、それでも罪悪感がわいてくる。

勝てなかったことが、負けてしまったことが悔しくて、罪の意識が湧いてきてまた本音に慰められる形で泣いた。

なんだが最近、彼女の胸に抱きついたり抱きつかれたりしてる気がする。

というか、依存？ この程良い柔らかさがとても安心する。

〈和解〉

本音にパーティが終わった後、彼にある場所に来てもらうよう頼んだ。

その場所は彼と初めてあった場所……整備室だ。

暫くすると、少し警戒した様子で彼が部屋に入ってきた。

先ずはあの時の、突然暴力を振るってしまったことを、誤報を鵜呑みにして罵倒してしまったことを謝罪。

彼はその事を全く気にして無かったけれど、してしまった過ちはちやんと正さないといけないと思ったからというところ、「そうか」と一言だけ告げ、そっぽを向いてしまう。

ちよūdい機^き会^{かい}だから、どうして強^{つよ}いのかを聞いてみた。

肉^{にく}体的^{てき}な強^{つよ}さだけじゃない、彼に纏^{まと}わりつく噂^{うわさ}は嫌^{きら}というほど知^しっている。

それを知^しつてなお、どうして平^{へい}然^{ぜん}としていら^いれるのかどうしても聞^ききたかつた。

「噂^{うわさ}に關^{かん}しては特^{とく}に氣^きにしてないだけ。あと、俺^{おれ}は強^{つよ}くないぞ」

ウソだ。

「まあ、確^{たしか}かに強^{つよ}い方に部^ぶ類^{るい}されるのかもしれないが、俺^{おれ}自身^{みづか}はまだ弱^{よわ}いつて思^{おも}つてる。もし、俺^{おれ}が強^{つよ}くなつたと、強^{つよ}い人間^{にんげん}になつたと思^{おも}つたとき……それは師^し匠^{じやう}を超^こえたときだ」

師^し匠^{じやう}？

「そ、外^{ぐわい}道^{だう}で畜^{ちく}生^{せい}で本^{ほん}当^{たう}に神^{かみ}父^ふなのかを疑^ぎう鬼^{おに}畜^{ちく}だ^けど、俺^{おれ}を拾^{ひろ}い救^{すく}つてくれた恩^{おん}師^し」

∴良^よいヒトに巡^{めぐ}り合^あえたんだね

「前半^{ぜんはん}部分^{ぶぶん}聞^きいてたか？」

そう言^いいながらも彼^{かれ}の顔^{かほ}は笑^{わら}っていた。

その師^し匠^{じやう}には勝^{かち}てそう？

「今のところ全^{ぜん}戦^{せん}全^{ぜん}敗^{ぱい}。勝^{かち}てるビジ^びョ^ょンが全^{ぜん}く浮^うかんでこない」

そんなに!?

「けど、いつか絶対に勝ってみせる。その暁には今までの恨み辛みを乗せてやる」
そう言った彼の顔はとても勇者には見え^{ヒーロー}ず、むしろ悪役^{ヒール}にしか見えなかった。

そっか…強い目標があるんだ。

なら、私も強くなろう。

今は負けてもいい。

負けた経験^{経験}を糧に強くなろう。

次は負けない。

気がついたら、そう漏らしていた。

彼はちよつとだけ眼を丸くしたけど次には意地の悪い顔で「でも残念、次も勝つのは俺だ」と言う。

ム、絶対に私が勝つ!!

そう言った私の心はとても晴れやかだった。



「え、俺って他クラスだと織斑千冬と姉弟だと思われてんの？」

うん、『実の姉弟だけれど、ある時を境に弟が家出をし、教会で悪の神父に染まった』、『髪を染めて偽名を使ってるのも、織斑先生や幼馴染に冷たくするのもグレてるから』だつて。

この噂が広まった原因は自称幼馴染を豪語するおっきいのとちつちやいの二人のせいかな？

どこがとは言わない。

彼と…時雨と和解し、少しだけ残った時間を使ってちよつとした世間話。

話の内容は試合で感じ取ったことや噂について、今話したことは本当に知らなかったみたいで心底嫌そうな顔をしている。

彼はやつぱり強いと思う。

この他にも悪い噂や蔭口を叩く人、嫌がらせを受けているのにも平然としている。

本人は気にして無いと答えるだけだけど、辛くない筈がない。

私だったら絶対に潰れる。

現に似たような事が家であつたし、お姉ちゃんから『無能なままでいなさい』とまで言われて一度くじけたのだから……

「ああ、例の中二病発言」

ちゆうに、病？

…

…

…

ぶつ、た、確かにあのときお姉ちゃんは中学二年生だったけどだからといって

「……私、TUYOOOOOOOI（裏声）」

ぶはっ!?

「生徒会長様は最強様よ（裏声）」

や、やめてお腹が振r

「まあ、そんな気張らなくてもいいと思うぞ。あいつ、完全無欠の超人とか言われてるけど、実際はただのヘタレで変態ストーカーだし」

……え？

ナニ、ソレ…？

「いや、よく執拗に後をつけられるんだよ」

だ、誰が？

「俺がだよ。他にも何かと（からかおうとして）胸を押しつけてくるし、たまたま生徒会

室に行ったら縄で縛られて声を荒げてるし（サボって先輩に叱られてた）、（更識の）盗撮写真を見ながらニヤニヤしてるし、（更識の）物を盗むし、今だってほら天井のうらー

頭の中がグルグルする。

あれ？ お姉ちゃんは完全無欠でヘタレな人で中二病で変態ストーカー？

え、なに、わけがわからない。

暫く会って無い間に何があったの？

中二病が悪化したの？

影で『エターナルフォースブリザード!! この技を受けた相手は必ず死ぬ』とか言っちゃてるの？

そういうえば、過去の戦闘データを見たとき、やたらいい発音で『クリア・パッション清き熱情』って叫んでたっけ？

……練習したのかな？

あれ？ いつの間にか時雨とお姉ちゃんが目の前でバトってる。

「何簪ちゃんに嘘を教えるのよ!!」

「事実だろ？（半分は更識のだけど）」

「いや、まあ事実なものもあるけど」

あ、認めるんだ。

「ここは私と簪ちゃんの仲直りフラグを立てて姉妹ヒロインルートに突入するのがセオリージャヤないの！」

「…あんたが何を言ってるのかわからない」
私もわからない。

現在進行形で頭の中グルグルしてるもん。

あゝ、何だかもうツカレタヤ。

帰って寝よ。

「あ、待って簪ちゃん」

何ですか？

幾ら待っても固まったまま喋ろうとしない。

いや、喋ろうとしてるんだけど、あとかうとか言葉に詰まってる感じ…

なにこのヘタレ？

用が無いなら失礼します更識先輩。

部屋を立ち去る際に何かが崩れ落ちる音が聞こえた気がしたけどどうでもいいや。

そうだ、帰って本音に頼んで胸枕させてもらおう…。

「噂の男子について取材しました!!」 (前編)

は〜い、新聞部副部長を務める2年生、黛薫子で〜す。

皆、お久しぶり〜♪

え、お前出てないだろって？

そんなことないですよ!!

ほら、「機体チェックの話」の一番最後と「生真面目少女の独白 2」の「噂の誤解」に出てるじゃないですか!!

全く!!

んん、では気を取り直しまして、今回私は先日行われた学年別トーナメントを優勝し、学内で数多な噂や悪評が広まっている言峰時雨君について独占取材をしようと思っております。

早速本人に取材を！ と行きたいところなのですが、その前に彼の周囲の方々に聞いて周ろうと思います。

それでは最初の子は〜〜〜君だ!!

〈鏡 ナギ〉

「わ、私が最初でいいのでしょうか?」

OK OK いざとなれば、ちよちよいと修正するから

「は、はあ…」

ではでは早速、言峰君と仲良くなつたきつかけや印象をズバズバつとお答えくださいな。

「え、えつと、ちよつと前に『武器を持った教会職の人たちが一人の男の子を追いかけ回す』という外国のニュースがありましたよね」

ああ、ありましたね。

銃剣や二丁拳銃を持った神父とか日本刀を持ったシスターが街中で大乱闘。

男の子は奪つた武器や、拾つたりしたモノで迎撃してたとか…

「だからちよつと怖いと思つてたんです。けど、本音ちゃんが最初に話しかけた時に『お近づきのしるし』『白い粉』をどうぞ』って袋一杯に入つた白い粉を手渡されそうになつたところを癒子が思いつきり言峰君の頭を叩いて」

は?

「それが何だか可笑しくて。それから言峰君や二人と話すようになりました」

そ、そうですか。

では最後に鏡さんからみた言峰君はどのような方でしょうか？

「えつと……狡賢い友人でしょうか？」

…ああ、そういうえばトーナメント一回戦での戦法は言峰君の案という噂がありましたね。

ありがとうございます。

〈谷本癒子〉

——という話を聞いたんですけど本当なんです？

「あく、懐かしいわね。叩いた叩いた。ハリセンで思いつきり」

…なんでハリセン持ってるのよ

「さあ？ 何でかそこにあつたんで」

で、結局どうだったんですか？

本当に…その、”マ”の付く薬だったんです？

「アハハ、まつさか。あれは”うどん粉”ですよ」

う、うどん粉？

「はい。なんでも教会で偶に作ってるらしくて、それが偶々鞆の中に入ってたみたいなんです」

『……（モグモグ）』

『え!? 誰一人として本音ちゃんの事心配しないの!?』

「つてな事になつたんですよ」

………だいたいオチが読めてましたよ、ええ…。

何で布仏さんは食べたんです?

「あく多分、二人して黙々と食べてたからそんなに辛くないって思ったんじゃないですか?」

あの二人つて実はドSじゃなくてドMじゃないんですか?

「〃辛いものが好きな人はドM〃 っつて奴ですか? それは偏見だと思えますけど……」

最後に貴女にとって言峰君は?

「ん〜ちよつと変わった友達ですかね」

ありがとうございます。

〈布仏本音〉

どうでしたか? 赤い彗星になった感想は

「うう〜、あの時のことは思い出したくないよお〜」

あらヤダ、この子可愛い。

ちよつと涙目そのままで一枚撮つてもいい？

「ふえ!? だ、ダメだよ」

だが断る！（パシヤツ!!

「え〜!? 消して〜け〜し〜て〜し〜!!」

アツハハハ、じゃあ質問に答えてくれるかな？

「うう〜〜……………答えたら消してくれりゆ?」

……………けしゅましゅ

「あの時は本当に辛くて、お水をいっぱいのもずう〜と口がヒリヒリしました」

……………やっぱあの二人ってDMじゃあ（ボソツ

あ、何でもないです。続けて

「? それでちよつとだけ怒ってただけど〜お詫びと仲直りの印で〜カレっちがスーパーデラックスストロベリージャンボパフェ”を奢ってくれたんだ」

なっ!? 今は亡き食堂の料理長おばちゃんが気紛れで生み出した幻のスイーツをですか!?

よく買えましたね。あれは使われている材料全てが高級品だからとても一学生が払えるような値段じゃなかったと思いますけど…

「う〜ん、なんか『サイフはたくさん居ますので大丈夫です』って言ってたよ」

え？　たくさん、居る？　なんか怖いので追及するのは止めましょう。
で、どうでしたか？

「ほっぺがとろけ落ちるかと思いました」

真顔!!

え、そこは背景に花がフワフワ浮くくらいな笑顔じゃないの!?
はっ!?!　思わず真顔になってしまうほどだったのね!!

「この幸福感　一人で独占せず　皆で分かち合う」　字余り」

俳句を詠むほど!?!　てか季語が一切入ってないし滅茶苦茶だ!?!

え、皆で食べたんですか？

「そうだよ。美味しいものは皆で食べたらもつと美味しくなるからね」

あ、戻った。

いいなく私も食べたかった。

「とろとろつても美味しかったです♪」

クソ…、ほんわかかなオーラで言われているのに嫌味にしか聞こえない。

「えへへ」

え、布仏さんからみて言峰君は？

「お兄ちゃん!!」

あゝ、そう言えばお兄ちゃんでしたね。

〈鷹月静寐〉

——ということなんですけど

「あゝ、何となくわかります。頼りになるところとか、何だかんだで手助けしてくれるところとか」

「こちらが掴んだ情報によると口元が汚れていると溜息を吐きながらそつとハンカチで拭つたり、頭を撫でたりしてるとか

「してますね。本人も無意識でやつてるみたいで、ハツと気づいたときに皆んで『お兄ちゃん』ってからかっています♪」

結構イイ性格してますね。みなさん

因みに、妹を先に手懐けて布仏先輩を攻略しようという算段とかは…

「ないと思いますよ？ 本当に無意識でやつてるみたいですから…。というよりも布仏先輩は既に半分攻略されてるんじゃないですか？」

あ、やっぱりそう思います？

前に付き合ってるかもっていう噂が流れた時はそうでもなかった感じでしたけど、なんか暫くしたら完全に意識してましたし…

「具体的には？」

言峰君が整備室に来る日は決まってチラチラと時計をみたり、着替える際に見た下着が可愛いかったり、言峰君と話し込んでたら思わず近寄りすぎてほんのり頬を朱くしたり…。

「モロバレですね」

あの短い期間でいったい何があつたんだろう？

「……………（あの件は黙っておこうかな）」

ああ!? まともにインタビュー出来てないのに時間が…

えっと、最後に貴女からみた言峰君は

「ん〜意外と天然さん（無意識なところとか）」

ありがとうございます!!

〈布仏 虚〉

——で、どうなんですか？ もう既に“C”まで行っちゃてるんですか!!

「し、してません!!／／／」

なるほど、虚先輩はまだ「情報規制」と

「本体^{メガネ}ブチ壊すわよ」

メガネは本体じゃありません!!

「はあ……彼のことはそう言う風に見てません。単なる先輩後輩の仲です」
ふくん……あ、言峰君やつほく

「え?!」

……やつぱ意識してるじゃないですか
ほらほら、ゲロつちやいましょうよ。

「……………」

ちよ、え? 嘘、ヤメテ。あやまりますからソレしまつて下さいよ。
やだ、タヒにたくん——

記者がダウンしたため、本日はここまでとします。

「噂の男子について取材しました!!」 (後編)

ひ、酷い目にあいました。

2連続でまともに取材で来てないとは由々しき事態!!

しかも虚先輩には結局はぐらかされてしまいましたし…

「んんっ」

さて、次は相川さんか更識さんあたりにで m ——

「無視をしないで貰えるだろうか」

………あゝゝゝ、何でしょうか篠ノ之さん

〈篠ノ之箒〉

「二夏の事で取材しているそうですね。なら、『最初の幼馴染』である私が適任だろう」

いや、彼は織斑先生の弟さんではないと言ってますが

「そんなことはない、あいつは一夏だ!! 一番付き合いが長い私や実の姉である千冬さんが見間違うはずない!!」

目の色とか思いっきり違うんですけど…

「あれはきつとグレて千冬さんの下から飛びだしたさいにそこら辺の不良を真似て髪と

眼を染めたに違いない!! ちよつと格好良いなどと思つてすぐに似合わない変な色に髪を染めたりカラコンをつけて……あれが中二というものなのか?」

……それ、言峰君や周りの人に言わない方がいいですよ。

確実にブチ切れますから

「だいたい、最近の一夏は幼馴染の私を差し置いて他の女に現を抜かしおつて——（ブツ
ブツ）」

さ、ほつといて次に行きましよう

〈セシリア・オルコット〉

Q. 貴女からみた言峰君は?

「ご主人さま——」

おだまりんす!!

「あうっ?!?! / / い、今の、もう一度……あら? どちらに行かれたのでしょうか?」

〈凰鈴音〉

「ちよつと!! なんて最初に私のところにこ」

〈更識 簪〉

「時雨ですか？ そうですね……ライバルです」

お、いいですね。

大会で熱い戦いをしたお二人にはピッタリです!!

では、そんなライバルに贈る言葉を一言!!

「もう一度言うのは何だか気恥かしいですけど……んん、次は私が勝つ!!」

あざっした〜!!

……ところで、さっきから気になってたんですけど、何で私物に名前を書いてるんです？

「最近になって気付いたんだんだけど、何か私物が減ってたり入れ替わってたりして

……」

やだ、ストーカーですか？

普通なら異性の犯行って事になりますけど、言峰君は基本女子寮に近づけられないから違うだろうし……フアンンの仕業でしようか？

「……ねえs——更識先輩なら兎も角、私にはそんなの」

(フアンというより布仏さんとの仲を見守る会みたいのがあるんだけど、黙つと……)

「何か？」

いいえ、何も…

〈更識楯無〉

あ、たつちやくん!!

「あら、薫子ちゃん。取材？」

うん、言峰君についてなんだけd……どうしたのたつちちゃん、怖い顔して

「ナンデモナイワ」

そ、そう？

えつとぶつちやけ彼についてどう思ってる？

「コロス」

ダークな笑顔のたつちちゃんなんて見たく無かったな……というか、何をしたのよ言峰

君

「アハハ、冗談よジョーダン♪」

（ウソだ。さっきのはマジで言ってた）

ん？ あれって確か……

「どうしたの薫子ちゃん？」

いや、あそこに置いてあるマグカップと同じのを妹さんも持ってたなくって
「っ!？」

驚いたなく。

双子は離れていてもどこか繋がって似たような思考・趣味を持つてのは聞いたことあるけど、姉妹でもそうなるのね。

「そ、そうなの!? いや〜私もビックリ! まさか愛しの簪ちゃんと全く同じのを使ってるだなんてお姉ちゃんとっても嬉しいわ!!」

相変わらず妹大好きねたちちゃん。

そういえば仲直りは……………あつ

「え、何? その察しました的な顔!？」

うん、何でもないよ。

…その、頑張つて!

「ちよ、薫子t y——」

さて、ここいらで十分かな?

そろそろ大本命である本人に直接インタビューよ!!

〈言峰時雨〉

はあくい言峰君。今、大丈夫かな？

「大丈夫じゃないんで帰ってください」

そう言わずに学食割引券あげるから

「で、話ってなんでしようか？」

切り替えはやつ?!

まあ、いいや。

えつと他の人たちから色々と聞いたんだけど、入学してすぐの頃に「白い粉」を手渡そうとしたとか

「ああ、「うどん粉」ですね。ネタでやりました」

なんで「うどん粉」が？

「……教会で時々作るんですよ。愛情なんてモノ、一切入って無いうどんをね
はい？」

「作ってる時に『どうして、いつも、余計な、所に、付くのよ!!』、『クソオーツ!! 燃えろっ!! 消えろっ!!』って言うんですよ」

あつ………ど、どうでした？

「……コシはありますよ。ええ……。けど、少なくとも俺は美味しいとは絶対に言い

たくない」

そ、そうですか…

え、次のインタビューに移ります。

言峰君は大の麻婆好きで、教会では毎週金曜日に必ず麻婆が出るとか

「ええ、その通りです。一時期は朝昼晩全て麻婆だったときがありますよ」

え？

「しかも辛口だけ」

それ虐待じゃないですか？

「当時は皆で口をそろえて『質素な料理が食べたい…』って言っていましたね」

普通は逆ですよねそれ…

「流石に耐えかねて揃って抗議したら、師匠お手製の麻婆豆腐を誰か一人でも完食できれば止めてやる」って挑発付きで言われて、10人くらいで挑戦したんですよ」

それで言峰君か他の誰かが完食したと

「…まあ、確かに俺が完食しましたね」

？

「食い、切ったぞ、クソ神父!!」

「フム、少しばかり辛さが足りなかったか?」

「……(十分辛いつつーの)……」

頭…いや、味覚おかしいんじゃないかコイツ?

「これで約束通りオール麻婆を止めろよ」

「ああ、神に誓って約束を守ろう」

「……(ウソクセエ…)……」

「だが、非常に残念な事に他の者が残した麻婆がこんなにも残っている」
嫌な汗がそつと流れる。

「おい、まさか…」

「我が教会の掟は覚えているな?」

「だ、出された食事は残すべからず…」

「その通りだ」

その瞬間、参加した面子の叫び声が上がった。

「ハ、ハハ…嘘だろ?」

「ム、無理だー!？」

「これ以上食べたなら那珂ちゃんの声が変わりなっちゃうよ!？」

「そうか… 誰か一人でも」 っつてのはこうなる事を見越しての罠だったんだな。

「ここは男の見せどころだと思ふのだが… どう思ふかね?」

「イ、いや… 流石にそれは——」

「だ、大丈夫だ時雨。これくらいオレもゆっくり食つて——」

「目がブレてるわよ天龍ちゃん」

「……神通、那珂、二人の麻婆をあたしの皿に乗せな」

「姉さん!？」

「大丈夫、二人はあたしが護るよ」

それなりに楽しそうに皆の叫びを眺める外道神父。

俺が聞くのもアレだが、コイツ、本当に聖職者か?

にしても、あと残すこと約7人前つてところか…

はあ……………腹、くくるか

「なあ、みんな」

「「「「「?」」」」」

「後は、頼んだ…」

「[[[[時雨（ちゃん）]]]]」

!!!???

「がふっ??」

!!!???

気がついたら涙目で心配そうな顔を浮かべた女性陣に囲まれていた。

あれやこれよと献身的過ぎる看病を受けさせられ続け物凄く気恥かしかったのと男性陣からの嫉妬の炎が物凄く辛かった。

そしてこの光景をそれなりに楽しそうな笑みを浮かべながらカメラで記録する外道神父が物凄く腹がたった。

「…豆腐の角に頭をぶつけて死なないかな師匠」

突然何を言ってるんです？

てか、普通に考えて豆腐で人は死なないと思いますけど…

「いや、秒速340メートルで射出すればやれる気が…イヤ、普通に避けられるか」

そこまで考えて!?

え、その弾速で避けられるの?

「少なくとも、俺が出来ることはそれ以上に出来ると思つて頂ければ」

そ、そうですか…

えゝ続いては、ぶっちゃけ、その髪と眼は自前ですか?

「篠ノ之か凰あたりだな言ったの）…カラコンなんて付けてないですし、髪も一応自前です」

一応、とは?

「……諸事情で色素が抜け落ちたんですよ。元々の色は確か……茶色だったかな?」

ほう、元々は茶髪だったと

^{ペット} 奴隷を飼う趣味は…

「無い!」

ちっちゃいのおつきのはどっちが良いですか!!

「?」 強いて言うなら大きい方ですかね。いろいろ出来ますし（分けたりとか）」

そうですよねゝ。

大きいと色んな事（プレイ）が出来ますからねゝ

「?」

いえいえ…、あ、そう言えば布仏先輩についてなんですが

「ノーコメントで」

ほう、ならばこちらの方で勝手に捏造を——

「黛先輩。麻婆豆腐（外道味）食べたくありませんか？」

心の底からごめんなさい。

プレハブ小屋のローンは返せそうですか？

「中々厳しい状況で、夏休みになったら（恐いお兄さん方を）狩りに行くつもりです」

狩り？

「ええ、（顔がわれてるから慎重にやらないといけないから）中々大変ですよ」

???

えっと次は一部の生徒からお兄ちゃんにより——

「さて、豆腐はまだ冷蔵庫にあったかな」

——じゃなくって!! この学園に入った感想を

「あく、色々と厄介な事に巻き込まれるが、それなりに楽しんでます」

最後に今後の目標をお願いします!!

「試験に合格し教会の後を継ぎます」

そこは国家代表になってモンドグロッソを優勝するぜ!! って言うところじゃない

ですか？

「貴重な男性操縦者として逃げられないのは解っています、やはり俺の行きつく先は教会の後を継ぐこと」なんですよ」
どうしてか理由を聞いても？

「——から」
？

「いえ、なんでもありません」

そうですか、これでインタビュは終わりです。

ありがとうございます。

「それじゃあ、俺はこれで」

はいはい。

さて、帰ったら早速纏めなきや!!

それにしてもアレが言峰君が強くあろうとする理由^{ワケ}か

あ、最後のは聞こえなかったから書かないであげるわね♪

〈オマケ〉

「そういえば、どうして大会で雪片を使わなかったんです？」

「……………」

「（忘れてたんだ……）」

『シクシク……』

とあるネット掲示板の雑談

【お願い】ご主人様が私を使ってくれない【助けて!!】

001：名無しの生徒

お願いします!! 誰か助けてください!!

002：名無しの生徒

また、女尊男卑の被害者ですか？

SOSでしたら別掲示板があるのでそっちに行ってください。

003：名無しの生徒

というか、タイトルからしてイミフ

004：名無しの生徒

まあ、暇つぶしに釣られてやんよ。

005：名無しの生徒

ほら、お兄さん達に話してごらん

006：名無しの生徒

→ すごい上から目線だなくww

007 : 名無しの生徒

まで、その前に他の者と区別するためにコテハンとスペックを出すんだ。

008 : 名無しの生徒

→ 真面目君だなくww

009 : 名無しの生徒

…お前、6だろう？

010 : 名無しの生徒

→ なぜ解ったしwww

10 ゲッツ!!

011 : 名無しの生徒↓スノウ

えっと、固定ハンドルのことですよね？

これでいいですか？

012 : 名無しの生徒

OK 次は簡単なスペックや経緯などを書いてくれ

そうすれば俺たちも相談に乗れる。

013 : スノウ

スペックですか？

えつと……出身はジャポンで生まれてから10年くらいです

014：名無しの生徒

よ、幼女!?(ガタツ)

015：名無しの生徒

Yo-Joだどっ!?(ガタツ)

016：名無しの生徒

まさかの幼い女の子!?(ガタツ)

017：名無しの生徒

幻ノ女が居ると聞いて(スツ)

018：名無しの生徒

今日の○リータスレはここかね?(スツ)

019：通りすがりの紳士

どうも、ジェントルメンです(スツ)

020：名無しの生徒

お前から急に集まり過ぎwwww

021：通りすがりの紳士

早く話してくれないかね？

ネクタイと靴下だけでは寒いのだ

022：名無しの生徒

お巡りさん、こいつです。

023：名無しの生徒

お巡りさん、こいつです。

023：名無しの生徒

お巡りさん、こいつです。

024：名無しの生徒

お巡りさん、こいつです。

025：名無しの生徒

お巡りさん、こいつです。

026：名無しの生徒

お巡りさん、こいつです。

027：スノウ

???

なんで紳士の方は服を着てないのですか？

028：通りすがりの紳士

……：純粋な言葉が突き刺さる

028：名無しの生徒

ゴメン、俺服着るわ

029：名無しの生徒

俺も…

030：名無しの生徒

ボクも…

031：名無しの生徒

あたしも…

032：名無しの生徒

おいおい、脱衣組多すぎだろwww

さて、俺も服を着るか（イソイソ）

033：スノウ

み、皆さん服をちゃんと来て下さい！！／／

いくら夏場だからと言ってもその様な格好をしたら風邪をひいちゃいます！！

034：名無しの生徒

可愛い…

035：名無しの生徒

天使や…：天使がおるでえ

036：通りすがりの紳士

スノウちゃん、飴ちゃんをあげるからこっちにおいで

037：名無しの生徒

逮捕!!

038：名無しの生徒

逮捕だー!!

039：名無しの生徒

大鳳だー!!

040：名無しの生徒

落ち着けお前ら

さてスノウよ。お前の悩み事を話してごらん

お兄さん達が優しく論じてあげるよ

(*、匹、*) ハアハア

041：名無しの生徒

おい、俺のマネをするな6

コロスゾ？

042：名無しの生徒

なぜバレたし：

サーセンwww

043：名無しの生徒

6とはいずれ決着を着けなければな。

とりあえず、一つずつだとアレだから一度まとめてから出した方がいい

044：スノウ

わかりました。

一度、落ちて纏めてみます。

045：名無しの生徒

7が親切な件www

046：名無しの生徒

とりあえず、7は軌道修正とか纏めてくれそんな感じだからコテ決めようぜ

047：名無しの生徒

じゃあガリ勉でwww

048 : 名無しの生徒↓ガリ勉

悪意しか感じないが……まあ、いいだろう

かわりに6はチャラ男な

049 : 名無しの生徒↓チャラ男

OKwww

050 : 名無しの生徒

いいのかよ…

051 : スノウ

お、お待たせしました。

えっと、ガリ勉さん、チャラ男さん。

よろしくお願います。

あ、勿論、他の方々もよろしくお願います!!

052 : ガリ勉

…ああ

053 : チャラ男

www

054 : 名無しの生徒

ヨロゝ

055：スノウ

えつと、先ほど言いましたが生まれてから10年ほどで全体的に白いです。

あ、マスターと髪の色と一緒です♪

かけつこが得意で誰にも負けません!!

痛いのも銃も嫌いです。

たくさん食べてもすぐにお腹が空いちやう…

特殊能力を持ってます!!

→ をマスターが使ってくれません(泣)

056：名無しの生徒

えつと…ごめん、よくわからない

057：名無しの生徒

イタイ子かな？

058：ガリ勉

スノウ

◆肌や髪が白い

◆足が速い

◆よく食べるけど燃費が悪い

◆腹ペコ

◆銃は嫌い

◆暴力反対!!

◆特殊能力持ち

マスター

◆白髪

という解釈でいいかスノウ?

059:スノウ

えっと、そんな感じでしょうか?

060:名無しの生徒

何で疑問形?

061:名無しの生徒

:一応聞かスノウはマスターとやたらに殴られたことがあるのか?

062:スノウ

マスターはそんなことしません!!

私に銃や剣を向けられそうになったら直ぐに避けてくれます!!
寧ろマスターが相手をよく殴ります!!

殴つたらすつごく遠くまで飛ぶんです!!

063：名無しの生徒

何それ、コワイ

064：チャラ男

八極拳かよwww

065：スノウ

凄いですねチャラ男さん!

マスターはそれの使い手なんですよ

他にも銃弾を避けたり細剣で弾いたりできるんです!!

066：名無しの生徒

え、スノウのマスターって人間?

067：ガリ勉

〈マスターが更新されました〉

マスター

◆白髪

◆八極拳の使い手 New!!

◆弾丸を避けたり弾ける New!!

068 : チャラ男

何それウケるwww

069 : 名無しの生徒

ハイハイ、嘘乙!!

普通の人間の動体視力じゃ無理ゲーだったの

070 : ガリ勉

落ち着けお前ら

取りあえずマスターとやらが人間かどうかの話は置いて、スノウの悩みを聞こう。

タイトルからだと自分を使ってくれないとあるが、どういうことなんだ？

071 : スノウ

えっと、正確には私じゃなくて私の能力を使ってくれないんです。

私には先代マスターの頃から特殊能力を持ってました。

詳しくは語れないんですけど、使ったらズババァンってことになるけど、とく

くつてもお腹がすいちやうんです。

072：名無しの生徒

ごめん、ズババンの意味が分からない

073：名無しの生徒

超能力的な何かって解釈でOK？

074：スノウ

えっと、それでいいです。

075：名無しの生徒

それでいいってなんだよ。

076：名無しの生徒

悪い、話し脱線するんだけどさ

さつきから変態共が静かなんだけど…

077：チャラ男

言われてみれば確かに…www

078：名無しの生徒

帰ったんじゃない？

079：ガリ勉

だといいのだが……

080：名無しの紳士

幻ノ女とは儚くも愛らしい存在

081：名無しの紳士

幻ノ女とは一切の汚れを知ってはいけない

082：名無しの紳士

そんな彼女たちが穢れてしまわぬよう、影から見守り続ける

083：通りすがりの紳士

それこそが我ら——

084：名無しの紳士

ジエ

085：名無しの紳士

ン

086：名無しの紳士

ト

087：名無しの紳士

ル

088 : 名無しの紳士

メ

089 : 名無しの紳士

ン

090 : 名無しの紳士

!!

091 : 名無しの生徒

こいつらキメエ…

092 : 通りすがりの紳士

イエス! ○リータ ノータッチ!!

093 : 名無しの紳士

イエス! ○リータ ノータッチ!!

094 : 名無しの紳士

イエス! ○リータ ノータッチ!!

095 : 名無しの紳士

イエス！ ○リータ ノータッチ!!

096 : 名無しの紳士

イエス！ ○リータ ノータッチ!!

097 : 名無しの紳士

イエス！

098 : 名無しの紳士

○リータ

099 : 名無しの紳士

ノータッチ!!

・ ・ ・

「……………何、このスレ？」

「何見てるんスか？」

「あ、フォルテ…ううん、なんでもない」

「ふくん。あ、次、薫子の番ツスよ」

「もう？ 早くない？」

「それがね。始めてすぐに自爆って終わったの」

「……穴があつたら入りたいツス」

「あゝ………ドンマイ!!」

「出た！ 薫子のドンマイ!!」

「一日に一回は聞きたいわ!!」

「なんか別の世界観を感じるんスよね。中のヒト的な……」

「メタな発言はやめい」

束の間の日常 ①

〈買物〉

一学期が終わりにさしかかろうとしたある日のことだ。

久々に街に出かけようと駅に向かったら…

「い、言峰君!？」

最近何かと世話になりっぱなしの先輩と遭遇した。

おはようございます、先輩

「あ、はい。おはようございます」

今日は休みなんですネ。

「ええ、お嬢様からお暇を貰って本音と買物に行く約束をしてたんですけど…」

先程までの様子から察するにまだ布団の中でグツスリしていると

「…恥ずかしながら、恐らくそうかと」

まあ、昨日は更識との模擬戦で少しばかり機体に負荷をかけさせ過ぎたからなメンテナンスがかなり疲れたんだろう。

「(もしかして嵌められましたか? でも本音に限ってそんな……)」

……良い機会だし丁度いいか

先輩

「え？ あ、はい、何でしょうか？」

もし、よろしければご一緒しませんか？

「へ？」

日頃のお礼をしたいんです。

「そ、そんなお礼だなんて……」

……御迷惑でしたか？

「そんなことありません!! そ、その喜んで……/ / / (ありがとう本音!! 罨に嵌めた

ことは不問にし、お礼にケーキを買ってくるわね!!)」

では、ちようど電車も来たことなので行きましょう。

そつと先輩の手を取つて車内へとエスコートする。

ちよつと強引だったかな？ チラリと先輩の方を見ると顔が真っ赤に染まっていた。

「(て、て、手を握られ / / /)」

……どんだけ初心なんだろうこの人。

しばらくするとモノレールのドアが閉まり、ゆつくりと街へと向かい動き出す。

なお、乗車中は先輩が何かを悶々と考えていたので終始無言だった。

〈楯無の誤解奮闘記〉

私、更識楯無はひじょくくくくくうに困った問題に直面している。

それというのも少し前に私がヘタレで変態なストーカーだと最愛の妹である簪ちゃんにばらさ——じゃなくて吹き込まれたのだ。

犯人は世界的には「世界初の男性IS操縦者」として、学内では「暴力神父」、
「外道」「ドS」、「変態機動」、「処刑独楽」、「殺人パンチ」と数えきれない悪評や噂
で有名な「言峰時雨」だ。

あの男、ほんつとうにやってくれたわね…

お陰で簪ちゃんとの距離が縮まるかと思いきや引き離されたうえに崖ができちゃつ
たじゃない!!

おのれ、言峰時雨……

いつか 絶対に 泣かす!!

そんな誤解を解いて溝を埋めるために今から私は簪ちゃんに電話で出かける約束を

しようと思ってるわ!!

こちらそこ、直接会いに行けよハタレとか言わない!!

まだちよつとゴミ虫を見るかのような冷たい眼差しが怖いとかそんなじゃないわよ。

そんなじゃないつたらないわ!!

あ、信じて無いでしょう? 本当なんだからね!!

……

……

……

コホン、兎に角! 現状を打破するためにも今回は失敗は許されないわ!!

今日の為に予め二人には暇を与えておいたから、今の私を邪魔する者は誰一人としていない!

……ハズ

だ、大丈夫よね? 簪ちゃん、他のお友達と予定なんていれてたりするかな…。

ど、どうしよう…こ、恐くなってきたわ。

うう~~~~~………よし、か、覚悟を決めたわ!!

いぎ、テレレフォン!!

……

……

…出ないわね。

も、もしかして着拒否……

『……もしもしくだ〜れ〜?』

出た!?! つてあら? どうして簪ちゃんの携帯に本音ちゃんが出るのかしら?!

あ、一緒の部屋だっけ? 忘れてたわ

あたしよ本音ちゃん!

『お〜お嬢様〜?』

コラー! 学内でお嬢様は止めてって言ったでしょ?

それでえつと……その、簪ちゃん、いるかしら?

『ん〜、隣で〜寝てるよ〜』

あら、もうすぐお昼なのにまだ寝てるの? 簪ちゃんの低血圧は相変わらずなのね。

でも、駄目よ華の女子高生が折角のお休みを惰眠で過ごすなんて

『仕方ないよ〜昨日は〜(模擬戦が)激しかったから〜』

……フアツ!?

え、何？ 激しいって夜の運動が!?

プロレスごっこをしてたって言うの!?

ナニソレ、ウラヤm——ゲフンゲフン、か、勘違いよね？

で、でもさつき隣で寝てるって……

ゴクリ……そ、そそそそんなに（夜の運動が）激しかったの？

『うん（機体が）壊れちゃうかと思ったよ』

アババババババ……簪ちゃんが、My dear cute sister. の簪

ちゃんが寝取らr

『——え——』

『やつ、かんちや——』

g m r t k v g j l s d g v j z d
!!!!???

気がついたらすつかりと日が暮れていました。

束の間の日常 ②

電車から降りてしばらくすると、再起動した先輩が花摘みへと行ってしまった。

広場の方が騒がしいと思いついてみると、バカ2名が騒いでいたので適当に遊ぶこと数分。

そろそろかと戻ってみると、突然見知らぬ男子が殴りかかってきた。

「一夏ああああああ!! 生きてたなら連絡の一つでも寄こしやがれ!!!」

あくはいいはい、いつもの勘違いね。

殴りかかってくる見知らぬ男子の右腕を掴み身体を反転させて思いつきり投げつける。

柔道の背負い投げというやつだ。

地面に叩きつけたさい、まともに受け身を取れてなかったようでも苦痛の叫びをあげたが、俺の知ったことではない。

「ま、待てよ一夏!! 俺たちがどれだけ心配したと思ってるんだ!!」

はあ……めんどくさい。

「おっい数馬!! 急に走り出してっていちk…じゃなくてえつと…」

……言峰だ。

「あ、そうだ言峰だ」

こいつ一月前の事忘れてやがるよ。

「え、言峰？ 一夏じゃなくて？」

「ああ」

ターミネーターの効果音みたいな名前だった気がする赤髪の男から事情を聴き「カズマ」と呼ばれた男。

あ？ 俺も人のこと言えないって？

いいんだよ。はなっから覚える気なっかつたから

何を吹き込まれたのか徐々に顔を青く染めていき、やがて——
「か、勘違いで殴りかかって大変申し訳ありませんでしたっ!!!」

深々と土下座をしながらそう言われた。

よく出来るな、こんな人通りの多い駅前で

プライドとか無いのか？

まあ、どうでもいいけど……

「お待たせしました言峰君」

ああ、先輩。お帰りなさい。

「この状況は……」

勘違いっものいです

「そうですか」

と苦笑いを浮かべる先輩。

先輩は何処を回る予定でしたか？

「えっと、服を……」

ああ、もう夏ですもんね。

「言峰君は？」

息抜きにブラブラ周るつもりだったのでこれと言って特に無いですね。

これは本当のことで、特別どこかに行きたいというわけじゃなかった。

行くとしても精々雑貨屋とかだ。

でもまあ、俺も夏物の服を買っておいた方がいいかもしれないな。

持ってるの大体Yシャツかカソツクだし……

それでは行きましょう。

と声をかけようとした時だった。

「ゴ、五反田弾、15歳。言峰君の友達やってます!!」

……そういえば居たな。静かだったから忘れてたよ。

あと友達になつた覚えのない、さつきまで俺の名前忘れてたろお前

「は、はあ、そうですね」

「き、今日はとてもいい天気ですね！」

「……そうですね」

ナンパするにしてもせめてもうちよつと何とかならなかつたのか？

ほら、周りも「コイツ無いわ〜」って視線向けてるぞ

「今日は面白い物ですか？」

「え、あ、はい」

「でしたら俺、ここらへん詳しいんで案内しますし荷物も喜んで持ちます!!」

「いえ、結構でs——」

「お昼はこれからですか？ あ、お名前をお聞きしても……」

「え、えつと……」

……………えつと、ダダンダダン君？

「五反田弾だ」

さつきの聞いてたんだからワザとに決まつてるだろうが

悪いけどこの女性ヒトは今日一日俺の貸切なんだ。

「うえ？」

「要するに『デート』だ。」

「!??! つ、つまり二人は」

「!??! どうだな……………」

共に一室で汗水を流した関係。

そつと近づいて耳元でそう呟くと膝から崩れ落ち “orz” のポーズになる。

嘘は言つて無い。

整備室という一室で汗水を流しながら機体のメンテナンスをして貰っている。

少しだけ説明不足なのをあいづが勘違いしたただけだ。

それにしても、今の実にいい絶望^表した顔^情だ。

カメラに収めておきたいところだが、これ以上ここにいるのは得策ではないな。

顔を俯かせ微動だにしない先輩の手を取り町並みへと走り出す。

「あ、あの言峰君」

ん？ ああ、すみません先輩。

勝手に手を繋いだうえに少し早く歩き過ぎました。

「あ……そ、そうじゃなくて先ほどの……そのデートって」

パツと手を放すと一瞬だけ寂しそうな顔をするが、すぐに朱くした顔を隠すように俯いてボソボソとそう呟く。

さっきのか……今思うと確かに俺らしく無かったかもしれない。

普段の俺だったらもつと別の方法……適当にからかって陥れる方法をとった筈だ。

何となく…

「?!」

そう、何となくなんです。

少しだけ、面白くなかった。

それだけです。

「つ!?! そ、そうですか／＼／＼」

ええ。

少しだけ気恥かしい空気の中、今度こそゆっくりと街へと向かって歩み出した。

束の間の日常 ③

俺たちは今、昼飯を取りにショッピング内にある喫茶店にいる。
 買い物はどうしたって？

普通に服屋行ってお互いに選んだ服を見たり選んだり、雑貨屋行つて小物を買ったり
 したぞ。

他に何か無かったかのかって？

ん〜そうだな……今着てる大人しめで清楚な感じな服を選ぶかと思つたけど、胸元
 が大きく開いたり強調したりした服で攻めてくるのは少し予想外だったな。

「(うう：／／ 薰子から言峰君は大きい派だつて聞いてたからちよつと冒険してみ
 たけど、だからつてあんな／／)」

恥ずかしがるくらいなら着なければいいのに、なんて野暮なことは言わない。

教会にいる連中 で経験済みだから。

最初の頃はどれも同じに見えて適当に褒めてたら拗ねられて、終いには着せ替え人形
 にさせられそうになつたつけ：

まあ、それにしても……

「つゝゝゝ／＼／＼」

うん、目の保養になった。

先輩が羞恥心から回復した頃、注文した品が届いたのでゆつくりと食事を取る。

因みに先輩はサンドウィッチと紅茶で俺は Pasta と珈琲だ。

そこは麻婆豆腐じゃないのかって？

確かに麻婆は好きだけど何処かれ構わず食べたりしないわ!!

……師匠ならやりそうだけど。

食後のお茶を飲みながら「学園での生活はどうだ」とか「妹が迷惑をかけて無いか」と他愛も無い話をしてた時にふと先輩が思い出したかのように聞いてきた。

「そういえば、臨海学校の準備は大丈夫なんです?」

臨海学校はある海岸で1週間ほど行われる学外でのIS訓練だ。

初日は息抜きも兼ねて自由時間となっているのは聞いてはいるが……

先輩ならご存知じゃないんですか、俺の身体がどうなっていて、それがどうしてなのか。

「つ!? す、すみません」

別に構いませんよ。

俺も先輩のご実家——更識家について少しばかり調べましたから、お相子様です。

「……………」

少しばかり気まずい雰囲気の中、珈琲を啜りながらふと外を眺めたらだ。

鬼のような形相を浮かべた見知った二人が窓ガラスに張り付いていて、思わず飲みかけの珈琲を吹き出しそうになった。

「見つけたぞ外道J r!!」

「今日こそ許さないんだから!!」

案外早かったな “ゼノヴィア”、 “イリナ”

店中に入ってきた2人にその声をかける。

「なにが “案外早かったな” だ。このクソ外道!!」

「よくも騙したわね!! おかげで恥を掻いたじゃない!!」

俺が接触するまえから恥を掻いてたと思うが…

「あの、言峰君。こちらのお二人は……それに騙すって」

ああ、すみません先輩。

二人は……………ただの玩具です。

「「フンツ!!!」」

よっと、冗談が通じないね。

ただの同僚ですよ。

「シスターの方ですか？」

……まあ、そうですね。

経緯をまとめるところだ。

先輩を待っている間、広場が騒がしかったので見に行ったら同僚がお布施を求めた。

暫く観察しているとイリナが無駄使いしてしまつて路銀が無くなり、買った絵も酷い偽物だということが解つた。

要は詐欺にあつたのだ。

そこから直ぐに言い争いが始まり、殴り合いに発展しそうな所で二人の所に介入。

勿論、暇つぶしに弄つて遊ぶためだ。

某チェーン店の割引券と500円玉ワッソンコインを渡したら、どっちが食うかという醜い争いを少しばかり面白おかしく眺めたあと直ぐに退散。

割引券の有効期限が切れること、コインが偽物だということに気づいたのであろう二人の怒号が遠くから聞こえるなか、先輩を連れて足早にその場から立ち去つたのだ。

それにしても中々おもしろ——ゲフン、滑稽だったな。

「コロスツ!!」

二人同時に顔面目掛けて殴りかかってきたの毟弾いて二人の頭を掴み全力で握ると「ノオオオオオオツ!!」やら「つぶ、潰れるうう?!!」と聞こえてきた。

煩いな〜♪

!?!?!?!?

え、何ですか先輩? とつても邪悪な顔をしてる?

ハハ、そんなワケないじゃないですか (笑)

引いた顔をした先輩や迷惑だと視線で訴える店員に免じて解放してやる。

「あ、頭が…」

「大丈夫? 私、頭の形変わって無い?」

ハハ、人間の握力でそんな芸当出来るわけ……………ナイダロ?

さてと…

手で合図を出して店員に例の品を運ばせるようお願いする。

それにしても、ここに来るまで大分走ったんじゃないか?

「そうだ!! お前を見つけるのに街中駆け回ったんだ!!」

「お陰でただでさえ空腹だったのに背と腹がくっ付きそうだ!!」

良かったじゃないかダイエットになつて

「よくない!!」

はあ……まあ、今回は俺も悪かったよ。

侘びと言つては何だが、この会計は俺が済ませてやる。

「……………」

なんだよ。二人して疑いの眼をして

「金に煩いお前が奢るとか信じられん」

「特に急に優しくなるとかもつと信じられないわ」

ふう……信用ないね。

俺つてそんな人間に見えます先輩？

「え!?! えつと——」

「借金の名義をフリードに押しつけておいて何を言う」

「しかもご丁寧に拇印も押してね」

「——あ、あはは……」

苦笑いですかい。

まあ、兎に角まずはこれを食いな。

二人の目の前に置かれるのはサーロインステーキ。

熱い鉄板に置かれているせいもありジュウジュウといい匂いがし、どこからかゴクリ

と唾を飲む音が聞こえた。

さあ、召し上がれ。

「あ、あなたのお、おとおお奢りだなんて——」

「い、いらぬ。こ、こここんなの私たちはい、いら、いらぬ、い……」

そういうのは、まずその口元の唾液を拭いて真っ直ぐこつちを見てから言えよ。

ま、いらぬいんだつたら仕方がない。勿体ないがコレは下げて貰おう。

「あ」

……食べないんだろう？

「あ、いや……その」

「た、食べモノは粗末にしちゃいけないじゃないかしら？」

そうだな。

だが、二人は要らないと言うし、俺も先輩も腹いっぱいだ。

となると、もう下げて貰うしかないだろう。

「そ、そうよね……」

「し、仕方がないことだな……」

だからさ、そう言う事はステーキじゃなくて俺を見て言えつての。

……美味しそうだったな？

「っ!!!」

口の中に入れたら肉汁とかじゅわわって出てきそう

「っ!!!」

まあ、でも仕方がないよな。

二人は俺の事が信用できないみたいだし。

「そ、そんなことないわよ！　ね、ゼノヴィア」

「あ、ああ、１ミクロン位は信頼してるさ」

はあ………わかった。なら、こうしよう。

ここに論吉さんを１枚置いて行くから、これを好きに使うと良い。

ああ、今度はちゃんとしたモノホンだぞ。

と、言った瞬間、光に翳して絵が浮き出るか確認する二人。

どんだけ信用されてないんだよ…。

「ホ、本物だ…」

「あ、後で倍にして返せとか…」

言わねえよ。

ちよつとした収入があつたからな。

その金で好きなだけ食いな。

途端、小さな水滴が机に零れる。

「すまない時雨」

「今まであなたのことを勘違いしてたわ」

「ああ、外道2号とか金の亡者とか陰險野郎と叫んだことを詫びよう」

「私もよ。時雨が地獄に墮ちるよう毎日神様に祈ってたこと謝るわ」

…やっぱ金返せ。

「断る!!／嫌よ!!」

はあ…もういい、後は好きにしな。

さ、行きましよう先輩。

耐えきれずとうとう目の前の牛肉を食い始めるのを確認してから先輩の腕を引いて席を立ちレジへと向かう。

自分の分は払うと言う先輩をやんわりと断り、一人で会計を済ませる。

そのさい、一通の手紙を店員に預けてだ。

「あの、先ほど店員の方に何か預けてましたが、あれは…」

外に出て暫く歩くと先輩がそんなことを聞いてきた。

ああ、あれですか……。

ただの『不合格通知』です

「ふ、不合格通知?」

ええ。

あの二人、今昇格試験の真つ最中なんですよ。

「はあ……」

試験の内容は、如何なる時でも欲に飲まれず本業を全うできるか”

二人は師匠に当たる人から先週から四足で歩く生命を食すことを禁じられてたのにも関わらず、牛肉を食い、暴食へと至つた。

その他にも騙されたとはいえ、教会の資金で高価な品物を購入と完全にアウト。

俺が普段から持ち歩いている通信機で不合格の合図を送つてある。

因みに何で俺がこんなことをしているかというところ、少し前に教会から依頼されたからだ。

二人が欲に飲まれなにか試してほしいと。

俺はこの依頼を快く承諾。

報酬がよかつたのもあるが、何よりも俺が昇格試験を受けられないのにこいつ等だけ先に昇進するとかマジであり得ない。

全力で邪魔してやる。

という事で、わざわざ街へと来たんですよ。

「そ、そうでしたか」

ああ、あいつらの絶望した顔が見れないのが残念でたまらないな。試験を落ちたつて師匠に怯えながら伝える様子とかマジで笑える。

「……仲がよろしいんですね」

それでもないですよ。

ただの同期で色んな修羅場を潜り抜けてきただけです。

借金返済とか地獄の特訓とかガチ喧嘩とか借金返済とかリアル鬼ごっことか害獣駆除とか借金返済とか

あれ？ 借金返済ばっか…

「……それに名前で……」

はい？

「あの！ 前から…その、気になってたんですけど」

何でしょう？

「…どうして私のことは『先輩』なんですか？」

んー、学園で一番信頼し、かつ尊敬しているからですね。

「そ、そうですか／＼／＼」

ええ。

「……でもやっぱり……で呼ばれた方が……」

……。

先輩、俺の用事はもう済んじやいました。

「つそう、みたいですね……」

ですから残りの時間。

たったの半日ですが、どこまでも御付き合いますよ虚さん。

「……………え？　今、名前で」

さ、行きましょう。

先輩の手を取って足早に駆ける。

これはそう、早く先ほどの店から遠ざかりたかったからだ。

きつと今頃怒号の声を上げているであろう二人から逃げるため。

決して……決してだ。

今の顔を先輩に見られたくないとかそんな理由じゃない。

束の間の日常 ④

やつほろ I S 学園 1 年 1 組所属、谷本癒子よ

え？ 知らない？

くつ、7月のサマーデビルと呼ばれたこの私が……

まあ、冗談はさておき、今回は私視点でいかせてもらおうわ！

I S の暴走なんて事件は起きず、無事学年別トーナメントが終了。

私は友達の「鏡ナギ」とペアを組んで3回戦までは勝てたけど、次で候補生ペアとぶ

つかって負けちゃった。

負けたことは悔しかったけど、とてもいい経験になったと思ってるわ。

学年別トーナメントが終わったら今度は臨海学校があるの。

学外で1週間近くをかけて行われる授業で海でやるのよ。

そして何と、初日は息抜きも兼ねて半日だけ自由に行動ができる!!

夏、海、とくれば水着!!

という事で、私は仲の良い友人―ナギ、カレン、静麻―と街に買い物に来てるわ。

本当だったら、本音も一緒だったんだけど、用事があるみたいで今回は不参加。

ちえく楽しみにしてたのにく。

でも待つて、逆に考えれば、臨海学校まで楽しみが伸びたということ!!

グフフ、ナイスバディ豊満な胸——ゲフン、臨海学校が楽しみになってきたわく♪

今日のところは静寐の美尻とナギの美脚とカレンの美肌で我慢しといてあ・げ・る。

「ひっ!?!」

「…なぜでしょう。今、とても不快な念を感じました」

「さ、寒気が…」

おっと、邪念が漏れちゃった。

イケナイイケナイ…

思考がおっさんくさい?

煩いわねく時には癒しが必要なのよ!!

友達の事を悪く言う噂とかにイライラしてるの!!

ちよつとくらい良いでしょうったく…

「ね、ねえ、あそこに居るのって言峰君と本音ちゃんのお姉さんじゃない?」

なぬ!?!

「あれ? 確か本音は今日、お姉さんと出かけるから来れないって言ってなかったっけ

?」

「う、うん。確かそうだったはずだけど…」

ふふふ、そういうことね。

「ど、どうい(う)と？」

つまりよ。

本音が中々関係が進まない二人をくつつける為に一芝居打ったのよ！

あの天然ポヤポヤな天使と見せかけた小悪魔めく中々やるわね

「ほ、本音ちゃんがそんなことするとは思えないけど…」

甘いわね。

恋愛とは常に戦場よ!!

黛先輩曰く奥手だというお姉さんに発破をかけるためならこれくらいしなくちゃ!!

見なさい！ その甲斐もあって腕を組んでるじゃない!!

「うくんそう言われると」

「そ、そうかも…」

本当だったらこのまま尾行したいところだけど、言峰君から『着いてきたら 模擬戦

で ボコる』ってハンドサイン送られてきたから諦めて後日追及するとしますか。

さ、買いたいの続きしよう！

ほら、カレンも行くわよ。

…カレン？

「……ポルカエーヴァ」

え、ポルなに？

「いえ、なんでもありません。愚義兄の事何てほつといて買物の続きをしましょう」

おしいカレンさんやしい、そつちは言峰君達が居る方で目的の場所とは逆方向よ

いや、実のところ私も行きたいんだけどさ。

「ああ、すみません。私はこちらの方に用事が出来て——行きますのでここでわかれます
ましよう」

………あのさく前々から思ってたんだけど

「何です？」

カレンって………ブラコン？

「あ、それ私も思ってた」

「は？ 私があの愚義兄に好意を抱いていると？ 何を言っているのです。そんなわけ
ないでしょう。暑さで頭がやられましたか？ でしたら今すぐ寮に帰るか近くの病院
に行くことをお勧めします」

そうやって強く否定するところがますます怪しい…

「そんなことありません」

「で、でも言峰君の写真持ち歩いてるし」

「あ、あれは愚義兄で遊ぶためにであって」

「クラブに言峰君があまり参加しないって言った時何となく少しだけ寂しそうだった様な」

「た、確かプレハブ小屋のローンも肩代わりしてあげてるんだっけ？」

「な、何の事だかわかりません。だいたい——」

まあまあ、落ちつこうか諸君。

寮暮らしである私たちには時間に限りがあるわ。

「そうです。だから——」

そこのカラオケで尋問——もといお話を聞きましょう♪

「え？」

ナギ、静寂、捕獲。

「イエッサー!!」

よし、連行!!

「ちよ、放してください!!」

聞こえない聞こえないな〜♪

散々イジリまくった結果、不貞腐れたカレンを宥めるのが大変だったけど、それ以上の収穫があつたのでよしとしよう！

束の間の日常 裏

へ チカラ へ

一夏の周りにはいつも私じゃない女がいる。

学友だと自分にずっと言い聞かせていた。

ある時、とある先輩と付き合っているという噂が流れた。

ウソだ。

そんな筈がない。

しばらくすると、付き合っているというのはデマだったというのが解った。

そうか、そうだよな。

だって、一夏は……

自分の想いを打ち明けようと元相部屋の子と果敢に大会に挑んだけど、あえなく敗退。

それも一夏の義妹だと名乗る相手に負けた。

どうして？

なぜ、私は負けた？

なぜ、私が隣そとにいない？

どうして私を選んでくれなかった？

専用機持ちだから？

力が無いから？

だから私は選ばれない？

隣に居させてくれない？

……力が欲しい

私だけの力が……

……もしもし

『ひねもす〜？』

っ切る!!

『あく待つて待つて切らないでよ〜』

……その、貴女に頼みたいことがあります。

『言わなくても解つてるよ〜。専用の I S が欲しいんでしょ〜?』

つええ、そうです

『うんうん、勿論用意してあるよ ♪ 最高性能にして規格外のをね。その名も “紅椿”』

!!』

紅椿

それがあれば私は一夏と対等に—

『今度臨海学校つてのがあるんでしょ〜? その時に持つて行くから楽しみにしててね』

☆』

……よろしくお願いします。

『じゃ〜n—』

フフ、漸くだ。

漸く私は一夏と対等になれる。

そうすれば一夏は私を見てくれる

私と話をしてくれる。

私と背を合わせて戦つてくれる。

他の女になど見向きしなくなる。

アア、タノシミダナ……

〈愉しみ〉

「あらら、途中で切られちゃったよ。お姉ちゃん寂しいぞ☆」

ツーツーと通話が切られた知らせを鳴らす携帯をそこら辺に投げ捨てる。

「それにしても電話なんていつぶりだろ？ 久々過ぎて緊張しちゃったよ〜」

そうは言っているが、彼女の様子からしてそのようにはまるで見えない。

「今度会うのが楽しみだなく。映像越しだとかかなり大きくなってみたいだし〜」

どこがとは言わない。

「ムフフ〜久々にハグして愛を確かめたいね♪ 楽しみだね☆」

机を蹴飛ばしてクルクルと椅子を回転させて楽しそうに笑う。

「おっと、忘れるところだったよ。私としたことがうっかりしてたぜ☆ 君にも会うのを楽しみにしてるよ——」

ふと、思い出したかのように一つのモニターを見ながら怪しく笑う。

彼女の見つめる先には所々改造された白の機体に乗る白髪の少年が映し出されてい

た。

「ホント、愉しみだなく♪」

〈王子様〉

あれからどれくらいの日日があったのかな？

わからない……

会社は既に倒産。

父もあの人も共犯してた人たちはみんな捕まったらしい。

帰る場所が無い。

いや、元々帰る場所なんて無かったか……。

だってお母さんはもう死んじゃったし、会社あそこにも居場所なんて無かった。

……これからどうしよう。

どうすればいい？

誰か

誰でもいい

助けて

僕を助けてよ!!

「助けに来たぜ!!」

誰?

「俺か? 俺は——」

「——!! あまり時間もない早くしろ」

「つとそうだったな。さ、行こう」

優しい声でそつと手を差し出してくれる男の人。

逆光で顔はよくは見えなかった。

たぶん、優しい顔をしてたんだと思う。

きつとこの人が——

僕の、王子様なんだ。

臨海学校での話 01

〈臨海学校へ〉

学校からバスで揺られること数時間。

臨海学校が行われる海岸へと到着した。

車内での描写？

先輩とのデート
この間の事について追及されると思っただからずっと寝たふりしてましたが何か？

旅館の女将に挨拶をしたあと、山田先生に連れられてやって来たのは教員用の部屋となっていた一室だ。

どうやら俺はここで過ごすことになるらしい。

確かにここなら他の女生徒も来にくいし、迂闊に騒ぐことも無いだろう。

「げ、げめんなさい言峰君!!」

え、何が？

突然謝られたことを聞こうとしたら何も言わずにスツと扉が開かれた。

うわあ、マジか……

目に入った光景モノ、それは……

4枚のボロイ畳、所々崩れてる壁、1つしかない窓。

まるで物置部屋だった所を取り急いで掃除して使えるようにした部屋だった。

ボロ狭っ!? 都内の家賃最安値アパート並の狭さだな…。

流石にこれは…

「えつと一応、織斑先生が『警備だったら私の部屋が最適だろう。何せ私は世界最強だからな。それに肉親同士の方が心休まる筈だ』と仰ってましたけど…」

やつほー!! この部屋最高!!

山田先生、ありがとうございます!!

「あ、はい…」

凄く微妙そうな顔が印象的だった。

〈部屋でまったり?〉

換気も兼ねて窓を全開にし、本を読んでゆっくりと過ごしていたらだ。

「捕獲! 連行!!」

「Yes, Ma'am」

谷本らに拉致られた。

よく俺の部屋が分かったな?

なになに？

「警備の問題上教員室というのは予想していて、織斑先生との相部屋は全力で嫌がるし、近くだと乗り込む可能性があるのでそこから離れた部屋で狭いか物置部屋だった所を探してみたよ。」

やだこの子たち、超優秀。

そしてそのまま問答無用で海まで拉致られましたとです。

〈海での出来事〉

海まで来たのはいいが………どうしよう？

元々泳ぐつもりなんて無かったので水着何てもの持ってきてないし、買ってすらない。

となればビーチで本を読んでいるフリをしながら現役女子高生の水着姿を眺めるとしますか。

「何を見ているのですお義兄様」

JKの水着姿。

「シネ」

おいおい、辛辣だなカレン。

「そうよカレン。素直に『私だけを見て下さいお義兄——ちよつと黙りなさい』——アダダダダッ!? 割れる、割れるうううううう!!?!?」

何やってんだ?

「え、えつとこの間の休日の色々とあつて」

ふん。

さて、ある程度揃つた所で改めて皆の水着姿を拝見。

鏡は花柄のパレオで鷹月は水色のビキニか…

うん、GJ!!

スラリとした脚と綺麗な腰のラインが映えてて似合つてるぞ

「あ、ありがとう／＼／＼」

谷本、いい仕事をした。

「よせよ、照れるだろ／＼／＼」

お前の白のタンクトップに青のショートパンツも似合つてるぞ

「ありがと」

それに比べてカレンときたら

はあ……

「何ですかその眼と溜息は」

「解るわその気持ち。折角、悩殺ビキニを選んであげたのにこの子ときたら…」
「あ、あんな露出の多すぎる水着なんて誰が!!」

ま、カレンの事は置いていて―「フンツ!!」―痛っ!?
っく布仏はどうしたんだ?

「えつと本音ちゃんは―「呼んだ〜?」―あ、来たみたい」

声が出た方に振り返ったら黒のビキニを着た更識と

「おまたせ〜」

ブンブン手を振るぬいぐるみの様な謎の水着を着た布仏がいた。

「ば、バカな!? オールタイプ 全身水着だ、と…」

「まあ、予想通りだったね」

「そ、そうだね」

最近、谷本のキャラが色々崩れてきたな。

「…どうしたの、アレ」

気にするな更識。

ただ、夢とロマンが詰まった布仏の乳袋を拝見出来なくて落ち込んでるだけだ。

「…包み隠さないんだ」

別に今さら取り繕う必要無いだろ?

学園での評価最低辺だし

「こ、言峰君は着替えないの?」

「もしかして泳げないとか?」

「……………もし、泳げなかったら、今ここに俺は居ないだろうな。」

「「「「?」」」」

ああ、なんでもない。

ちよつと修業時代トラウマを思い出してただけだ。

と、少しばかり物思いに更けていたいたのが悪かった。

「スキあり!!」

完全に油断したところをつかれ、シャツを剥ぎ取られてしまった。

「「「っ!?!」」」

周りからは息を飲む声がチラホラと聞こえる。

それもその筈だ。

何故なら俺の身体は――

「「「スゴイ、筋肉です」」」

思わずつこけた俺は悪くないと思う。

いやいや、そっちに目線が行く前にあるだろ？

ほら、ここの銃痕とか大小様々な斬られた痕とか

「え？ それなら前々から知ってたわよ」

あ？

「普段から露出の少ない服を着て隠してるのかな〜って思ったら、僅かな隙間とか汗を拭いてるときとかで普通に視えてたから別にそうでもないのかなって思ってたわよ」

あらやだ視姦されてた。

あれ？ 男の場合だとなんていうんだろ？ 男3つで “たばかる” だから……まあ、

いいか。

ってよくない!!

あのさ、普通はこう恐がったり何か勘ぐったりするだろ。

ちよつと人に言えないコトをしてるとか、“ヤ”や“マ”が着くフアミリーと関係を

持つてるとか

「た、確かに最初はちよつと恐かったけど、もう馴れちゃったかな」

「それだけ厳しい修業を積んだんだらうなくって思ってたんだけど……違った？」

え？ ああ、大体あつてるが……。

「…やっぱり、時雨に圧勝出来るようになるならもつと鍛えるべき」
「かんちやくん、女の子がそんな筋肉質になっちゃメツ！ だよ」

ああ、もう！ これじゃあ、色々考えて気遣つてた俺がバカみたいだろ。

「ええ、大バカです」

うっせ。

その後はと言うと、

ビーチフラッグで遊んだり

トチ狂った谷本が布仏の水着(?)を剥いだり

白の三角ビキニ姿の布仏に揃つて親指を立てたら(カレンだけ下だった)顔を赤くして逃げ出したり

ローションを片手に「オイルを塗ってくださいまし」と言つてきたマゾリアを砂場に埋めたり

飛びかかつてきたちっこいのをマゾの上に埋めたら、マゾが喜んだり(重みが増えたから)

ビーチバレーをしてたら「私たち姉弟の力を見せてやろう」と担任が乱入してきたり
(全力で嫌な顔をした)

弾んで揺れる山田先生のふたつの凶器を眺めてたらカレンに蹴られたり
砂の城を作ってた「センス悪いね」と言われ地味に傷ついたり
とまあ色々濃くも楽しい時間を過ごせた。

だがー、

この時はまだ

あんな事件が起こるとは

誰も思いもしなかった。

臨海学校での話 02

〈朝の風景〉

起床後、いつもの日課を終えいつもの面子で食事をとる。

あちらこちらで何やら雰囲気がおかしいというのを感じ取ってはいたが無視した。どうせいつもの蔭口だろうと思ったからだ。

食事を終え、着替えるために部屋に帰ろうとしたときだ。

「ちよつと!! 無視するなんて酷くないかな!!」

ウサ耳を付けた変な女に絡まれた。

無視つて……ああ、そこの看板のこと?

いや、だって面倒事に巻き込まれる感半端なかったし……

「えゝ酷くない? もう、束さんプンプンだよ」

てか、あんた誰?

ここは関係者以外立ち入り禁止の筈だが……

「私の事を知らない?!?!」 この天才の束さんを知らないだつて?!?!?」

……軽くデシヤビュを感じるな。

「あんな変態マと一緒にしないでよね」

それは悪うござんした。

「特別に許してあげてもいいけど、変わりに君のこと解剖パしていい？」

いいわけあるか

「ごくんねん。あ、向こうから箒ちゃんマの気を感じる!! 待っててね箒ちゃん!! いま、お姉ちゃんが会いに行くよ~~~~!!」

掃除道具が名前か……いや、まて何でオルコツトマのことを知ってる？

俺の知らない教員の一人？ だが、あんな個性の塊を今まで知りえもしないのは

……ま、いいか。

さっさと行こう。

〈亀裂〉

変な女に絡まれたせいで授業に遅れ、罰として片づけを命じられる以外は特に問題なく午前の授業が終わった。

授業の様子？

汗と油塗れになりながら只管整備して試してみても調整しての繰り返しですが何か？

少しだけ空を飛んだ時の風がとても気持ち良かったとです。

：ああ、そういうえば篠ノ之が一人そわそわした様子で何回も担任に叩かれてたな。どうでもいいけど。

食堂に入ると朝以上にざわついていた。

何かあったのか？

「あ、言峰君えつと——」

「とうとう正体を現したわねケダモノ!!」

は？

いつの間にか何十人かの女子が俺たちを囲むかのようにいた。

なに、こいつら？ 特に先頭にいるやつは嫌に高圧的だな。

「お義兄様、先頭の方はトーナメント一回戦の相手です………たぶん」

へへ、全く覚えてない。

「ここの義兄妹は——」

「落ち着いて、相手のペースに飲まれちゃダメだよ！」

「——つふう……。とうとう正体を現したわねケダモノ!!」

それ二度目。

「うるさい下着泥棒!!」

下着泥棒？ 何の事だ

「しらばつくれるとはいいい度胸ね！ いい——」

猿の様にキーキー喚いて五月蠅いので要約するとだ。

昨日の夕方から女子の間で下着が盗まれる事件が起きていたそうさ。

最初の頃は来るとき水着を中に着てきて一着分忘れたんだらうと笑い話になっていたが、それが被害者の数が増えるにつれ笑えない状況になった。

野生の猿の仕業かと旅館の人に聞いたところ、ここらには居ないそうさ。

それではいったい誰かが盗んだのではということと真つ先に浮かんだのが旅館の従業員含めて一人しかいない異性である俺だそうさ。

どうでもいいが、これだけ大きな旅館で女性しかいないのつてある意味スゲーな。

異性が俺しか居ないからつて俺を犯人呼ばわりかよ。

外部とか同性を疑わないのか？

「残念でした!! 近くには人は住んでないのは確認済みよ」

「同じ女の子の下着を盗むなんてあるわけないじゃない!!」

……IS学園ちの生徒会長は妹の小物から衣類をパクったり交換してるけどな。

そこまで言い切るんなら俺がそうだって言う証拠でもあるんだな？

「はっ！ そう言う奴に限って実は犯人つてオチなのよ！」

ドラマの見過ぎ乙

「昨日、ビーチで遊んでた時最初居なかったじゃない!!」
部屋の換気してたからな。

「夕方からずつと誰もあんたの姿を見てないわ!!」

日課の鍛練の後は部屋にずつと居たからな。

「今日の授業、何で遅れたのよ!!」

着替えに行く途中、変な女に絡まれてたからだな。

「誰よそれ!!」

初めて会った知らない人

「見事にアリバイがありませんね」

わおっ! ホントだ。

「決まりね。犯人はあんたよ」

だから違うって言ってるだろ。

第一、そんなことして俺に何の足しになるんだよ。

「私、知ってる。アイツ、借金抱えてるんだって」

「え、じゃあ私たちのを売って」

「ウソ、信じられない…」

…借金というかプレハブのローンが残ってるのは事実だが、んなことしねえよ。

「どうだか」

「汚らわしい」

「ホント、男って最低ね」

はいはい、どうとでも言えば？

「クズよクズ」

「親の顔が見てみたいわ」

親の顔、ねえ……

「羨がなつてないわね」

「この分だと他の子もたかが知れてるわ」

「可愛そうに」

「仕方がないって孤児なんだから」

「何それウケルww」

……

「男の分際で何様のつもり何だか」

「アンタみたいのが居るだけで学園の品位が下がるのよ！」

「この間の試合もイカサマなんじゃない？」

「何それ、信じられない」

「卑怯者」

「姉の七光」

「こんなのが千冬様の弟だなんて信じられない!!」

「欠陥品もいいところね」

「死んで詫びたら?」

「この面汚し!!」

あ?
?

陸上部員の独白

〈初日〉

は、始めまして鏡ナギです。

癒子や本音ちゃんと一緒にいる黒のロングヘアの子です。

解り辛いですよね。本音ちゃんみたいに胸が大きかったり、癒子みたいにキャラが濃かったりしないですし…

あ、本編ですよ。ごめんなさい。

私たちは今、臨海学校へと訪れています。

ISの装備の試験、データの収集、気象による変化、計測などの実施訓練を行うためです。

初日は息抜きも兼ねて半日の自由時間をいつもの友達で遊び通しました。

本当に楽しかった。温泉も気持ち良かったし、とってもいい息抜きになりました。

明日からは実施訓練頑張ろう！

え？ 今からUNO大会？

う、嘘だよ。明日朝早いのに…

〈早朝〉

ね、眠い…誰？ 徹夜でUNOをやるうって言ったの…

あ、癒子だった。

しかも負けた罰ゲームで膝枕をさせられて、

「おおう！ これは良い脚ですう〜zzzzz」

真っ先に落ちてた気がする。

ちよつとだけムカつくかな。

仕返しに何かしたいけど、倍になって返ってくるからどうしよう…

「ナギ〜先に行くよ〜」

あ、待って癒子。

すぐに着替えるから置いてかないで!!

〈昼休憩と…〉

朝から少しだけ噂になっていたことがお昼になると大きく広がり、食堂が少しギスギスした感じになってました。

あ、噂というのはその……下着を盗んだのが言峰君ではないかということですよ。いくら一人しかいない異性だからって一方的に疑うなんて……

言峰君だったらそんなことしないでもつとこう……相手を嵌めたり、弱みを握って馬車馬のように働かせたりするんじゃないかな？

そんな風に否定したら余計に拗れそうだから黙ってるけど……。

言峰君の分のご飯を別の容器に入れて届けた方がいいかなって考えてたら、
「何かあったのか？」

その本人が来ちゃいました。

あ、言峰君えつと——

「とうとう正体を現したわねケダモノ!!」

「はっ。」

事情を話す間もなく囲まれて一方的に犯人だと言われて混乱する言峰君。

話の内容からある程度理解したみたいで、違うと否定したけど全く取り合ってくれない。
い。

それどころか言峰君の悪口が飛んできて、気の短い癒子が怒ったり静寂が場を何とか鎮めようと奮闘するけど酷くなる一方。

流石に言い過ぎだと席を立とうとしたとき、ふと空気が変わったのを……冷たくなっ

たのを感じました。

別に武道をやっていたというわけじゃない。

けれど、それが言峰君が出している。

そう思いました。

見ない方が良くと警告音アラームが鳴るなか、恐る恐る視線をその方へと向けます。

「ヒッ!?!」

私は知りました。

本気で怒ったとき、

ヒトは表情が無くなると

私の悲鳴を聞いたからか徐々に喧騒が薄れ、やがて私の様に小さな悲鳴や息を飲む音が聞こえてきました。

そして――、

「一夏!! 下着泥棒などしおって、その腐った根性叩き直してくれる!!」

いつもの様に暴走した篠ノ之さんが木刀を言峰君に振り下ろします。

それをいなすなり、かわしてから首筋に一撃あて意識を奪う。

それがいつもの定番でした。

けど、今日は……

「がっ……」

振り下ろされた木刀を掴んだと思ったら、それを引つ張ってバランスを崩させ篠ノ之さんのお腹を殴ります。

文字通り、くの字になるような重い一撃をです。

「ぐっ、おえっ……」

食後にそんなことをされた篠ノ之さんは、先ほどまで食べていたモノ全てを吐きだしました。

汚いな……。

「死ね一夏ああああああああっ!!!」

今度は嵐さんが言峰君の背後から青龍刀で斬りかかってきました。

この人、本当に代表候補生なのかな？

奪い取った木刀をいつかの試合の時の様に青龍刀に軽く当てて軌道をそらし、

「いぎっ!?!」

顎に一撃あてたあと、両手で持った木刀を凰さんの頭上に叩きこみます。

「時雨さん、覚悟!!」

ついでにと体重をかけて顔を踏みつけた言峰君に今度はマZ：じやなかったオルコツトさんが今にも撃ちそうな状態で銃を構えていました。

言峰君が殴るのとマゾリアさんが撃つのどつちが速いのかな？

巻き込まれて死ぬかもしれない瀬戸際なのにそんな事を考えていました。

けど、予想してたのとは違って、言峰君は

「セシリア」

今まで見たことのない優しい顔と声で名前を呼んだんです。

たったそれだけのことなのに

「あ、いや……」

怯えるかのように震え、銃を落とすマゾリアさん。

「や、優しくしないでくださいまし」

「そんな慈愛に満ちた顔で、み、見ないで」

「ひっ……」

「わ、私たちも殴るの」

「さ、最低よ」

悪く言ってるけどその言葉は震えていて、そんな彼女たちの暴言を無視してゆっくりと近づいて行きます。

「い、いや……」

「来ないで」

すっかり怯えて泣きだす人も出てきました。

それでも歩みを止めません。

やがて立ち止まり、右手を伸ばし――

「「ダメ!! (言峰君!!)」「」

殴る。

そう思って皆で止めるように叫んだ。

けど、言峰君は目の間に居る女生徒ではなく、その近くの机に置いてあったソースを取ったらこっちに帰ってきて食事を再開しました。

「ごっそさん。速く食わないと午後の授業、遅れるぞ」

さっさと食べ終えた言峰君は独りで片づけを始めました。

そして、席を立てて私の近くを通りかかったとき、

「悪かったな。恐がらせて」

小さな声だったけど確かにそう聞こえました。

一瞬だけ垣間見えた彼の顔は、少し寂しそうだった。

あ、違うの

そんなつもりじゃ、なかった。

私は、彼を

言峰君を傷つけてしまった。

謝らなきゃいけないのは

勝手に怖がって脅えてたのは私なのに……

ちゃんと謝ろう。

そう決意するのも遅く、その機会がずっと先になってしまふとはこの時は思いもしませんでした。

クラスの纏め役な少女の独白

鷹月静寂です。

クラスの纏め役や1組の良心、本のセンスが変とかつて言われてたりします。

そんなにおかしいかな？

言峰君が食堂を出て行ったあと、私たちも急いでご飯を食べて追いかけたんだけど、見つからなくて。

午後の授業に顔を出すどころか、緊急事態が起きたとかで午後の授業そのものが無くなっちゃたの。

カレンと簪も呼ばれてたから、専用機持ちだけで何か秘密の作戦を行ってるのかも。

あ、他の専用機持ちというかお断り3は怪我と精神が不安定だから救護室にいるみたい。

部屋でナギを慰めたり、瘡子を落ち着かせたりしてたらいつの間にか夜になっていて、カレンと簪だけが帰ってきたの。

言峰君は？

「…………お義兄様は自室待機命令中です」

…え？

「…理由はどうであれ、暴力を振るつたことに変わりはない。詳しい事情と今回の事件についてこれから会議を開くつて」

なに、それ？

どういふことなの!？ 先に攻撃してきたのは専用機持ちの筈じゃない!!

目撃者だつてたくさんいる!!

「…それはわかつてる。でも、殴つた相手が候補生、ましてや専用機持ちと篠ノ之博士の妹」

「国からの多大な援助金ワイロを失うことや篠ノ之博士の怒りを買うのを恐れているのでしよう」

そんな…言峰君は悪くないのに

「こ、言峰君どうなつちやうの?」

「今回のことを機に女尊男卑派が騒ぎたてて学園から追い出そうとしてるみたいですね。先ほど教員部屋を通りましたら『所詮、男は野蛮な生物で首輪をつけて研究所で飼つた方が安全だ』と聞こえました」

「…それと同時に織斑先生が『私の弟にそんなことはさせん!!』つて叫んでた」

「あの方は何をトチ狂つてそう断言しているのでしょうか?」

あはは…言峰君が聞いたなら「あんたの弟になった覚えはねえ!!」って怒りそうだね。「そうですね。それと万が一に備え、今迄の事をレコーダー付きで教会に報告しましたので最悪な事態は回避されるでしょう」

そっか…

でも、言峰君は学園を追い出されなくて済むのよね？

「恐らくは…（まあ、お義兄様からすれば学園から追い出してくれるのはバンバンザイでしょうが…）」

「よ、良かった…」

「でも、いつの間にそんなことしてたのよカレン」

「愚兄同様、レコーダーを持ち歩いてまして、それを空いてる時間にやったまでです」

「ほへ〜カレっちは凄いなだね〜」

「いえ、別に…」

何でも無いように言ってるけど、実際はすごく大変だったんだと思う。

あの時、私は騒いでる皆を止める事が出来なかった。

なにか「クラスの纏め役」よ…。

「…確かにあれは凄かった」

「かんちゃん？」

「…他クラスも含め、いつ、誰が、何を言ったのか一字一句間違えることなく書面化して
た」

「へく……あの時の一番に怒ると思っただけど、そういうことだったんだく」

「な、何ですか皆してニヤついた顔をされて…キモチワルイ」

ううん、ただカレンがお兄ちゃん大好きなんだなくって改めて思っただけだよ？

「だ、誰があんな愚兄なんか!! 私ほただあの人がこのまま処分されたら教会もタダならぬダメージを受けてしまうから動いたままで——」

「あくはいい。わかったから、お風呂に行こうか」

「ふ、二人とも汗とか疲れもでてるしね？」

「私たちもお昼からずくずくと部屋に籠りっぱだからね。早く行くく」

本音の元気な掛け声と共に準備を済ませた私たちは部屋から出てお風呂場の方へと向かいます。

そう言えば、一部の専用機持ちだけ集めて何をしていたのかな？

気になって聞いてみたら、「国家機密だから言えない」と言われました。

……もしかして戦ったの？

「……………」

だんまりってことはそうなんだ…。

言峰君は大丈夫なの？ 怪我とかしてない？

「ああ、それなら大丈夫です」

「…寧ろ、相手の方がフルボッコで可哀そうだった」

……何をしたの？

ヘッドショットをしたやら、零距离でお腹に荷電粒子砲を撃つただの、例の電撃鞭で縛って海に沈めただの、浮き上がったところを48のミサイルを打ち込んだだのと出るわ出るわ物騒な単語のオンパレード。

何をしきてたの!?

「…陸に叩きつけて甲冑組手をした時雨（お義兄様）よりかはマシ（かと…）」

エゲツない!?

「ああ、気になる!! すっごい気になる!!」

「でも言えません／…でも言えない」

「っこの!!」

「ゆ、癒子落ち着いて」

「ヒツヒツフ〜だよ〜」

それはラマーズ法だよ本音。

あと、いつの間にか仲良くなってるね二人とも

「「そうですか？／＼…そう？」
うん。」

「……………まあ、あれです。私たちも人間ですから」

「…お風呂に浸かってリラククスしたら、今みたいにう、つ、か、り、口、を、滑、ら、せ、る、こ、と、も、あ、る」
それって…

「よし、なら早く温泉に行こう!!（そして今度こそ本音のバイスバディを堪能したあと
洗いつことしようじて豊満な乳をモミモミしてやるわ!!）」

「ゆ、癒子途中から声が出てる」

「おっと、私としたことが」

「かんちやくん」

「…大丈夫、本音は私が守る」

あら、漢前…

そうやって少し賑やかに廊下を歩いていた時――

「すんまへん、ちよいええどすか?」

草場から一人の女性が現れて声をかけてきたの。

……誰だろう？ 私服みたいだから従業員じゃないし、教員でこんな人見たことが無い。

「ああ、そないに警戒せいでおくれやす。用がすんやら、すぐに帰りますえ」

「何よ用って」

「実は…皆はんにお願いがおますんどす」

「お、お願い、ですか？」

「そんどす…」

京都弁…だよね確か？

でも着てる服がチャイナってどうなの？

そんでもって足はスニーカーってどれか一つに統一してよ!!

「そのお願いとやらはなんでしようか？」

「あんね……………」

「皆はんのパンツ、頂けまへんか？」

……何を言ってるのこの人

VS 変態①

〈男子部屋〉

はあ……恐がらせちまったな。

自分を制^{コントロール}御出来ないだなんて、俺もまだまだだ。

このことが師匠にバレたら、また地獄なんて生温い修業を受けさせられちゃう。

あれ？ おかしいな、震えが止まらないぞ？

いや、悲しいとかじゃなくてマジで……

はあ……

ん？ 2〜3人こっちに走ってくるな。

「こ、言峰君大変なの！」

「つて何で足下濡れてるのよ!？」

谷本に鏡か……そこはさつき飯を持ってきたやつが『アンタの餌よ。ありがたく食べな

さい』つて投げつけて——

「っひ、酷い!!」

「誰がやったのよそんなこと!!」

——きたのを弾き返したらそいつに全部当たってな。

元々嫌がらせのつもりで熱々にしたのが災いして奇声を上げながら逃げてった。床のはその残骸だ。

「つひ、酷い!？」

「でも、ザマ〜w w」

で、何か用があつたんじゃないのか？

「そ、そうだった。言峰君大変なの!!」

「カレンと簪のパンツの危機なの!!」

……ゴメン、何を言ってるのかよく分からない。

【前回までのあらすじ!!】

極秘任務で相手を『フルボッコだどん♪』にして帰ってきた一部の専用機持ちたち。

だが、外道2号こと時雨は暴力沙汰と泥棒の疑惑が晴れていないため、自室待機が命じられてしまう。

最悪な事態を備え打てる手は全て打ち、後は結果を待つ身。

部屋で悩んで居ても仕方がない。

暗くなった雰囲気や疲れをとるため、少女たち温泉へと向かうのだった。

しかし、その道中――

『皆はんのパンツ、頂けまへんか？』

変態が現れたのだった。

〈カレン&簪 VS 変態〉

変態と遭遇し、皆さんにお義兄様と教員の方を呼びに行くようお願いしてから10分はたつたでしょうか？

その間、更識さんと私とで足止めをしていたのですが…

「うふふ、お二人はん中々お強いどすなあ〜」

足止めどころか、後退させられる一方です。

認めたくありませんが、変態は強い。

恐らくお義兄様よりも……

「カレンさん、簪さん大丈夫ですか？」

四十院さん、私たちの事はいいですから早く他の方を連れて逃げて下さい。

「ですが——動くな!!」——っ!?

恐らく騒ぎを聞いて駆け付けた教員の方々が変態^アに銃を向けます。

「大人しく投降しろ!!」

「でなきや撃つわよ!!」

それで大人しく捕まるのでしたら世の中平和です。

「アハッ♪」

「っ!?! 止ま……………れ?」

「? 涼しい?」

……………一瞬の出来事でした。

姿がブレたと思いましたが、銃を持った教員二人の後ろに居たのです。

「そない薄着やと盗つてと言ってるんとおんなじどす♪」

二枚の布地を持って

「スー……………はあ、やつぱり、脱ぎたてが一番どす」

「わ、わわわわ私の!?!?!?!」

「か、返せ!?!」

慌てて取り返そうと向かいますが、それが変態^{アレ}の狙いです。

盗った下着を食n——口に入れて羞恥心と精神を揺さぶり他の方々のように気絶させました。

と言うことなので、速く逃げて下さい。

正直、私も早く逃げたいんです。

「御武運を」

……お早い決断ですね。

ところで更識さん、右腕は大丈夫ですか？

「…腫れてて棒（拾った）を持つのもしんどい。カレンは？」

正直、限界に近いです。

福音での疲労がここできました。

「しまいどすか？ なら、黒と水色を貰います」

っ!? どうして

「さつきからチラチラと見えてたんや」

クツ、そうですか／＼／

「うふふ、よろしおすなあ。そんな恥ずかしそないな顔。やけど、今一番みたいんは——」

「――恐怖に染まった顔どす♪」

「…同類？」

一緒にしないでください。吐き気がします。

「余所見へーけまへんよ」

っ!? あ、脚が…

「これでもう動けまへんね。ほな、そろそろ頂きまひよか」

つやめて、来ないでください

「カレンっ!!——「邪魔や」——あうっ!？」

更識さん!?!?

「よろしおすなあ、そん顔。実にええどす」

いや、来ないで

誰か——

お義兄様!!

「金剛八式——ちゅうすい冲捶!!!」

VS 変態②

〈時雨 VS 変態〉

大丈夫かカレン

「っ遅いです!! もっと速くに来なさい愚兄!!」

やれやれ、これでも急いで来たんだがな。

ま、後は俺に任せて下がってろ。

強がってるのは丸見えだったが、敢えて言わず安心できるよう優しく頭を撫でる。

「バカ……本当に遅いです」

はいはい、悪かったな。

簪も一緒に下がれ

「…私はまだ—」

その身体でか？

いいから後は俺に任せろ。

「—……ごめん」

というわけで、二人を頼んだぞ。

「任されたわ!!」

「い、行こう二人とも」

鏡と谷本に支えられ立ち去る二人。

「……御武運を、お義兄様」

おう……………で、そろそろ出て来いよ。

油断して近づいた所を狙ってるかは知らんが、大したダメージ受けてないだろう？

「……………フフツ」

〈勝敗〉

降り頻る雨の中、戦闘音が響く。

拳がぶつかり合い、時には避け、相殺する。

そんな攻防戦を繰り返していた。

「アハハ♪ あんさん、お強いどすな〜」

「そいつはどうもっ!!」

侵入者が愉しそうに笑う。

実際のところ五分五分の戦いに見えるが、少しだけ時雨が押され気味だった。

「あんまり長引くと体力的にこつちが不利。……ちよつと賭けにでるか」
 突き出された拳を大きく打ち落とし、そこから一步踏み込んで拳を当て、また一步踏み込み拳を当てる。

猛虎硬爬山もうこうはざん

侵入者の腹部に強烈連続技が決まった。

「ガフツ…、い、痛い。痛いいい………」

連続で延髄えんずいに打ち込まれたら普通は痛いではすまないが、兎に角かなりのダメージを与えられたようだ。

「けど、気持ちいいいいいいいいいい!!!」

訂正、そうでもなさそうだ。

「……ドSな変態だと思つたが、違つたようだな」

「うふふ、間違つてへんどす。ただうちはなく、パンツを奪うのも、恐れる顔も、痛いのも大好きなんです」

つまり、この不審者は他人の下着を盗んでは匂いを嗅ぎ食す変態であり、絶望や恐怖

に陥れることに悦ぶドSであり、痛みに快楽を覚えるドMでもある。
要するに、

“究極の変態”

ということだ。

「厄介な警備網を潜り抜けるんは中々スリルがあつて楽しかったやけど。やっぱ闘くわいいやわ〜」

「(ついでに戦闘狂つと…)裏がありそうだから同意しかねるな」

「そんなことないえ。ただ、強者との闘いに勝つて、下着を脱がし、その場で食べる。うん、脱ぎ立てが一番どす!!」

どうやら、救いようのない変態のようだ。

「(…あれ?もしかして今(下着が)狙われてるのって俺? いやいやまさか…:…:)」

「ああ、どつちややていけますえ〜。確かうちみたいのを “両刀” 言うんやつけ?」

「お前はただの変態だ」

全くもつてその通りである。

「さ、続きをやりまひよ。勝つてあんさんのパンツ貰い受けるえ〜」

「……カエリタイ」

嫌な事を想像してしまい、ちよつと現実逃避気味の時雨であった。

またもや攻防線を繰り広げる二人。

ただ、さつきまでと少しだけ違い、時雨の必死さが伝わってくる。

そうしようしよう
「双撞掌!!」

「っ!?(やばい、ガードが……)」

やがて侵入者の放った攻撃が時雨のガードを崩す。

そして

「か・ら・の・く殺劇舞荒拳!!」

慌てて防御の姿勢を取ろうとするも遅く、モロに受けてしまい壁まで吹き飛ばされてしまった。

大ダメージを喰らい、まともに動けそうにない時雨に侵入者がゆつくりと近づく。

「うふふふこれでお終いどすな〜」

「つゝああ、悔しいがそうだな……」

「潔おすね? ふふそれじゃあ早速——「こちら側の勝利だ」——へー?」

「あ、貴女は完全に包囲されています!! 大人しく投降してください!!」
「……そないゆーことですか」

いつの間にか山田麻耶を筆頭にIS 4機と複数の教員が銃を構えて侵入者を包囲していた。

癒子とナギが時雨を呼びに行く一方で、静寂と本音の二人は信頼できる教員に完全武装をし待ち構えて貰うよう頼みに行っていたのだ。

本来なら3人で追い込む手筈だったが、予想以上の強さに二人がリタイアしたため、時雨が一人で少しずつバレないようにポイントまで誘導していたのだ。

「流石にISを相手にしはるんは無理どすな〜」

「逆にISを相手に出来たら引くわ」

「フフフツ……、なあ、あんさんなんてゆーんどすか?」

「……………織斑一夏だよ(裏声)」

心の底から嫌そうな顔と声でそう答えた。

誰の眼から見てもウソだと解る。

「フフフツ…そうどすか。また、どこかでお会いしまひよ。言峰はん」

「チツ……知ってんじやねえか」

手錠を付けられ連行されていく侵入者を見届けるがとうとう限界がきて、地面に大の

字に倒れる。

「はあ……勝った。けど負けたな」

「お疲れ様ですお義兄様」

「カレンか……悪い、後は任せる。今日はもう、疲れ……」

時雨の意識が途絶え、深い眠りについた。

〈天災〉

……ここは、男子部屋？

つく!? ダメだ。ろくに身体も動かさせねえ

あんにやろう、今度あつたら覚えとけ………やっぱ嘘、覚えてなくていいから会いに来ないでください。会わせないでください、お願いします神様、仏様、イエス様。なんでしたら立川の安アパート2階にまで行きますから!!

…つて何を言ってるんだ俺？

はあ……少し、慢心してたのかもな。

帰ったら鍛えなおそ。

………

……

…出て来いよ。

「ヤツホく終日？ 天災の東さんだよ☆」

ああ、昼間の不審者か

「おお！ だいぶ弱ってるね。ねえねえ、解剖してもいい？」

ダメに決まってるだろ。

「だが断る!! って一回言ってみたかったんだ♪ あ、今日のところは何もしないよ？」

ホントだよ？」

あ、そ…。

「ちえく反応がつまらないぞくプンプンだよ!!」

知るか

「はあく、折角、愛しの箒ちゃんにプレゼントを持ってきたのに変なのに出会っちゃってさ。なんなのアイツ？ 急にパンツ寄せとか言っさ。ちよつとイラってきたから殴ったり電撃浴びせたら悦ぶし、流石の東さんもドン引きだよ★ 強いし、しつこいし、アレのせいで山中走り回るはめになるし、汗をかくし、服は汚れるし、いつの間にか日が暮れてるし、銀の福音は落とされてるしでホント最悪！ プンプンで済まされないうよ

!!」

なるほど、道理で……

生身で二人が戦ったにしてはエゲツナイ痕があるわけだ。

多少とはいえ、弱ってた相手に苦戦するとは、やっぱ鍛えなおそ。

……相手が変態っただけでシヨックだけど。

「あ、アレを捕まえてくれてアリガトね。お詫びに愛しの箒ちゃんを今まで散々殴った

ことや、この束さんを『一時期勘違いさせた』ことは不問にしてあげるね☆」

？ そいつはどうも……

「それにしてもさ、君ってホントにいつくんに似てるよね。それとも——」

……何を言っている

「ま、なんだっていいや☆ それじゃあ、束さんは華麗に退場するぜい☆ バクイニク

♪」

散々騒いだあげく帰りやがった。

考えても仕方がない。

あのタイプは関わりと碌な事が無い。

……寝よ。

〈報告〉

今回の事件について緘口令が敷かれた。

学園側としても容易く警備を突破されたことを隠したいのもあるだろうが、何より衣類を盗まれた少女たちの心の傷を気遣ってのこともあったのだろう。

件の変態侵入者―阿礼あれと名乗った―は反省の様子も見えず、終始下着を要求してきて尋問担当者の心を大いに押し折ってくれた。

後に「黙秘してほしいと思ったのは初めてで、もう阿礼の相手はこれつきりにしてほしい」と語ったそうなの。

三日目の朝、臨海学校の中絶が発表された。

帰宅する夕方まで自由時間となったが、誰一人として外に出る者は無く、静かに学園へと帰って行く。

ただし、時雨、カレン、簪の三人は福音と阿礼との戦闘の疲れと怪我が酷く、また報告と事情説明のため遅れて帰ることとなる。

この時、学園は間違えた。

緘口令を敷いたこと

処罰を与えなかつたこと

時雨らの帰還をずらしてしまったこと

もし、一連の出来事を有耶無耶にしなければ、後の悲劇と事件は回避されたかもしれない。

生真面目少女の独白 3

〈買い物後の話〉

言峰君とのデート……か、買い物はあつという間に終わってしまいました。

どうして楽しい時間と言うのは直ぐに終わってしまうのでしょうか？

学園に帰ってきてすぐにお土産のケーキとお礼を本音に言ったら不思議そうな顔をされました。

様子から察するに罨に嵌めたというわけでは無かったみたいです。

理由を話すのもアレでしたので、直ぐに部屋から立ち去り今日一日暇を与えてくださったお嬢様に差し入れをと生徒会室に向かうと茫然自失なお嬢様と何一つ手付かずの書類の山がありました。

身体の中が一気に冷めるのを感じました。

お嬢様に声をかけましたら抱きついて泣きだしながら「簪ちゃんが本音ちゃんに寝取られた」と訳が分からない事を言い始め、一度落ちつかせる為に首もとをトンつと叩いて意識を刈り取ったあと、椅子に座らせてから気付けのツボを押します。

再起動されたお嬢様は何が起きたのか不思議そうな顔をされてましたが、私と大量の

書類を覗いた瞬間に全てを理解し文字通り顔を蒼くされました。
はあ……今夜は徹夜ですか。

〈臨海学校当日〉

今日から言峰君や1年生の皆さんは臨海学校です。

バスはもう出発し、1週間ほど言峰君にあえん……コホン、本音が向こうで粗相を起
こさないか心配です。

そう言えば、臨海学校が終わりましたらすぐに夏休みですね。

言峰君は夏休みの間どうされるのでしょうか……

はあ……、何だか最近溜息が増えた気がします。

あ、お嬢様。サボってないで手を動かして下さい。

この間の書類がまだ終わってないんですよ？

〈早期帰宅〉

予定よりも早くに1年生が臨海学校から帰宅しました。

その事に上級生は宿泊先で何かあったのではと1年の子たちに聞き周りましたけれど、誰もが口を閉ざしています。

緘口令を敷かれたのもあると思いますが、一番の理由は報告にあった多くの生徒が同性に下着を盗まれた事、そして確証が無いのに言峰君を犯人扱いしてしまったのを知られたくなかったからでしょう。

最近の出来事を通してみて思ったのですが、皆さんあまりにも短絡的過ぎではないでしょうか？　IS学園がエリート校だということにも些か疑問を感じてしまいます。

全員が口を開かので上級生たちは現在分かっている情報——皆が口を閉ざしている。突然の臨海学校からの帰還。向こうで何かあった。言峰君たちがまだ帰ってきてない。

——から推測し

言峰君が何かをして彼を取り押さえ裁きを与える為一部の生徒や教員が帰還していない。

生徒の誰かが行方不明で帰還していない生徒や教員達が搜索中。

といった噂が飛びまわりました。

また適当な噂が広まったと飽きれる生徒もいれば軽蔑したという生徒、未帰還者の無事を祈る生徒もいるみたいです。

このままでは勝手な憶測が増え不味い状態になると判断したお嬢様は学園上層部に黙って新聞部の薫子に「事件が発生したため急遽臨海学校が中止になった」一部の生徒は事件で負傷したため帰還が遅れている」という噂を秘密裏に流してもらったよ

うです。

何とか憶測や噂が広まるのは収まりましたが、どうやら言峰君が（物理的に）潰してきた女尊男卑派が息を吹き返してしまったみたいですね。

悉く失敗し、物理的なダメージも受けているのに同じような事を繰り返すあの人達はもしかしてマゾなのでしょうか？

〈時雨の居ない学園で〉

生徒会室でお嬢様と仕事をしていましたら、パソコンに言峰君からメールが届きました。

メールの内容は至ってシンプルに―夏休みが終わったら学園に戻ります―と書かれてました。

臨海学校からそのまま教会に帰ったみたいですね。

そのことに対してお嬢様が「私の苦勞を返せー!!」と叫ばれました。

ここ数日、お嬢様は男子反対派といえますか過激派といえますか、兎に角言峰君の事をよく思っていない人たちの動向を警戒し事前に潰しまわっていました。

つい先日のですが言峰君が居ないのをいいことにプレハブ小屋に投石やら弓やらで汚したり傷つけようとしてました。

監視カメラの映らない遠距離を使うよう学習されたのですね。でも、やってる事は原
始人と一緒ですよ？

勿論、そんな事が出来る場所なんて限られているのですぐさま現行犯逮捕。

事情聴取の際、犯行時の写真と先ほどのコメントを言いましたら面白いくらい顔を
真っ赤にしてギャーギャー叫びました。

普段はお嬢様にからかわれたりする側でしたが、なるほどこれはこれで中々「嬉しい
」ものですね。

「う、虚ちゃんが染まっちゃった」

？ 私が無に染まったのでしょうか？

とあるメイドの葛藤（再投稿）

初めまして、チエルシー・ブランケットと申します。

セシリア・オルコットお嬢様の専属従者をさせて貰っております。

彼女とは所謂幼馴染という関係でして、それはもう本当の姉妹かのように過ごしてきました。

楽しかった事、嬉しかった事、悲しい事、辛い事ときもずっと一緒。

御両親が亡くなられて、悲しみにくれたいのに家督を守るため必死に努力されたときも親身になって支えてきました。

そんな彼女がイギリスの代表候補生に選ばれ、ブルーティアーズの専用機を与えられ I S 学園へと向かわれました。

そこでご学友と共に勉強なり恋愛なりと切磋琢磨に励む。

そう思っていた時期が私にもありました……。

ある日……

そう、I S 学園に入学されて1週間ばかり過ぎた頃のことです。

お嬢様がドMに堕ちました。

最初はあまりの衝撃で気を失ってしまいました。

だって、あのプライドの高いセシリアがですよ!! 信じられません!

何があつたか苦痛に耐えながら改めて話しを聞くと、とある男子に喧嘩を売つたらボコボコに殴られ、素人相手に負けたことでプライドが折れ、冷たい眼差し&溜息を吐かれたと…。

お嬢様、その殿方のお名前を教えて頂けませんか？

物理的に消しますので

そのあと、どうすれば殿方に虐めて貰えるのかやら、セシリアの妄想猥談と淑女として完全にアウトな会話を（一方的に）されました。

…疲れました。

……今までで一番。

……このまま布団で永眠したいくらい。

一度、グツスリと休んだお陰で色々と吹き飛びました。

昨日の私はどうかしてたんです！

さ、今日もお嬢様が変わってオルコット家の管理をがんばりましょう！！

………ついでにドMを元に戻す方法も探しましょう。

ダメです。

ネットや書物を漁ってみました、全くもって見つかりません。

寧ろ元に戻す方法を探しているのに、調教する術ばかり増えて行きます。

あれですか？ 私にお嬢様を調教して自粛させろとでもいうんですか？

なんですかその拷問はっ！！

私は至ってノーマルなんです！！ まして主であり、親友である彼女にそんな事できる筈がありません！！

ああ、頭痛がします。

お嬢様の買物履歴にその手のモノが増えつつあるのもさらに頭を痛くさせます。

早く何とかしなければお嬢様が社会的に死に、オルコット家の品質も問われてしまい

ます。

なんとかか、なんとかしなければ……

私は閃きました。

マゾになる前の記憶、つまり入学以前の思い出を無理矢理引つ張り出せば元に戻るのではと。

そうすればきつと、プライドが高いけど結構おつちよこちよいで中々素直になれないちよつと面倒臭いツンデレなお嬢様に戻る筈です!!

何か無いだろうかとたまたま奥様の部屋を掃除していた時、日記帳を見つけました。

これぞまさに天啓！ これをセシリアに渡せばきつと幼少期の頃のことを想い出し、あの時の決意を胸に再び立ち上がるかもしれません。

ですが、これは一種の賭けでもあります。下手をすれば悲しみに崩れ落ちてしまうことも……。

いいえ、きつとセシリアなら大丈夫!! ですが、一応中身は拝見しておきましょう。恥ずかしいネタがあったら、後でからかおうとか思つてませんか？

○月×日

娘が布団に世界地図を作ったとこっそりメイド長から聞かされた。

確か今月は初めてになりますわね。

全く、大人ぶって『就寝前の紅茶ですわ』なんてするから…

自分から謝りに来るまでレッスンは厳しく致しましょう。

さて、あの子が素直に謝りに来るのはいったいいつになるのでしょうか？

ぶふっ！ いきなり来ましたね。

コレは期待できません。

×月□日

娘がピアノのコンクールで優勝しました。

家庭教師の方も大喜びで、私も親として鼻が高いです。

あの人もまるで自分のことのように喜び記念に何か考えているようね。

そうね…では、私は今度の誕生日に何かあの子が喜びそうなプレゼントを用意しま

しよう。

×月▽日

今日は娘の誕生日。

この日の為に無理をしてスケジュールを開けどうにか休みが取れたわ。

プレゼントも喜んでくれたようで、色々と考えただけあつて嬉しかったわ。

最初は何か料理を作ろうと思いましたが、あの人に止められてしまったのが未だに謎です。

△月▽日

以前、プレゼントしたぬいぐるみが紅茶塗れになっていたわ。

察するにメイドのチエルシーとの御ままごとで汚してしまったのでしよう。

メイド長が所用で家を離れていたの、私自ら洗濯し外に干しておきました。

暫くすると中庭の方から娘たちの悲鳴が聞こえ、メイド長に説教されたわ。

ああ、セシリアが大事にしていたあのぬいぐるみですか。

確かに「この子にも紅茶を飲ませましょう」と私が止めるよりも早くにカップ一杯に

含ませて汚してましたね。

こつそりメイド長に知らせて洗濯をお願いしようとして忘れてました。

それと奥様、お気に入りだったぬいぐるみが突然ボロボロで首つり自殺してしまいました。幼い子でしたら誰でも悲鳴をあげます。

ぬいぐるみも直に洗濯機に入れないでください。

そして家事全般が苦手なのは奥様譲りですか…。

出来ないのにやろうとするセシリアに家事をさせないよう仕向けるのにどれだけ苦労したことか

こうして日記を読んでみますとセシリア関連か仕事のことばかりですね。

それもこうなんといいますか…淡々として少し人間味に欠けているというか

いえ、それが悪いと言いたいのではないのですが…

●月●日

娘に辛く当たってしまった。

全部あの人のせい。

どんな時でも平凡な成績しか残さない。

周りが小馬鹿にし、それを怒る事もせずただヘラヘラとしかしない。
そんなあの人を見てるとイライラしてしまう。

私が無理難題を押し付けても、どんな罵倒しても変わらない。

どうしてこうなってしまったのかしら…

ダメね。

——溜まり過ぎたわ

もう、限界よ…

…奥様、この頃からもう旦那様とのことが苦痛だったんですね。

セシリアがオルコツト家を継いだ時に旦那様の功績をみましたが、あまりにも平凡過ぎました。

いつからかセシリアは旦那様の事を冷めた目で見るようになってましたね…

………物思いに浸ってしまいました。

続き続きと…

◆月□日

今日は頗る気分がいいわ。

まるで今まで溜まっていたモノが爆発したかのよう。

完全にリフレッシュしたお陰で仕事も頗る順調。

これもあの人に今まで悪態をついてきたかいがあったというものね。

だって昨日はあんなにも

思いつきり私を虐めてくれたんですもの!!

……おっと、いけません。私としたことが居眠りをしていたようです。
全く、奥様がドMだったなんてあ、ああああありえん——

以前風邪をひいてしまった時、「ジャポンの伝統文化でネギを刺すと早く治るらしい

よ」と素敵な笑みを浮かべて私の●●に入れてくれましたがまさか——

——学生時代に私のプライドを叩き追っては直すという調教が私たちの始まりだったわ。

御主人様と結婚してからは表ではバリバリの仕事人、家では卑しい雌犬という〃性活〃でしたが、セシリアが生まれてからは——

＜チエルシー ハ ニツキ ヲ トジタ＞

……ふう、強烈すぎです。

性癖って遺伝するんですね。

というか、これってあれですか？

セシリアをあの手（マゾに堕とした原因）にさし渡せというんですか？

そんなことできるわけありません!!

私がストッパーとしてセシリアを調教をします？ ご両親の様に？

親友に対してどんな拷問ですかそれ？

い、いったいどうすれば

あまり考えたくない案件から眼を逸らすかのように仕事をしていましたら、いつの間にか夏休みになっていました。

結局何も解決できないままです。

はあ…どうしましょう。

帰ってきたセシリアは顔を青白くし絶望とした顔をしていました。

どんなに励ましても何の反応を示さずどんどんやつれて行く親友に私は……………

教会訪問記 暗部当主な少女編

夏休みも中盤に差し掛かった頃、轡木さんの後押しもあつて私たち生徒会も短い夏休みをとる事になったわ。

と言つても、その殆どが言峰君の護衛で潰れたんだけれどね。

はあ………クタバレ外道。

何で護衛しにくいバイトばっかしてるのよ！

何でさり気なく変装して追手諸共SPを撒いてるのよ！

何で移動するたびに全力疾走なのよ！

そりやそんなことばっかされてたら誰だつて根を上げるわよ！！

1週間、SPに変わつて君の事を護衛しやすいように一緒に働いてたけど毎日へ口になつたわよ！

ちよつとダイエツトになるわ！とか思つたけれど動いた分食べたり栄養ドリンク

飲んだりで変わらなかつたわよ！！

むしろ少し筋肉がついて胃袋が少し膨らんじやつたじゃないの！！

はあはあ………兎に角とっても忙しかつたわ。

教会に戻ると言峰君は当然のように鍛錬やら家事炊事を手伝うけど、私は普通にバタリと倒れたわよ。何よあの化物スペック、

ホント、あの頃は楽しそうに遊びまわる子供たちの姿には本当に癒されたわ。

どうして子供ってあんなにも可愛いのかしら？

無邪気な笑顔で「お姉ちゃん」って呼ばれた時には鼻から愛を噴き出して倒れるかと思つたわ。

それに極自然な動作の上目遣いや恥ずかしそうに手をモジモジさせる動作とかもう反則よ！

まったく、小学生って最高ね!!

あ、ごめん。嘘止めて。

そんな虚ちゃんたちみたいにゴミを見る様な眼で見ないで！ 冗談だから!!

そんな過酷なバイト——護衛活動の中、何と私更識楯無は長い月日の末、愛しの簪ちゃんと仲直りしました!!

うう、本当に長かつたわ。仲直りした時には余りにも嬉しくて皆が見てる中抱き合つて大泣きしたわ。

仲直りの切っ掛けがちよつとアレなんだけどね……。

あの日、大掃除を終えた私たちは食堂に案内されたの。

そこで出された食事を見て零してしまった言葉が悪夢の始まりだったわ。

『あら、麻婆じゃないのね』

私自身、冗談や興味本位のつもりだったのよ！ でもまさか本当に外道作麻婆豆腐が
だされるだなんて思わなかったわ!!

天龍ちゃんの制止の声も空しくコトリと目の前に出された瞬間に本能がコレを食べ
たらマズイって訴えてきて、助けを求めようとしたらいつの間にか椅子5つ分離れて皆
揃って手で十字架を切ったの。

え、死ぬの？ これ食べたら死んじやうほどなの？

い、嫌よ。無理に決まってるわ。せめてソースか何かで薄m——
私は直感したわ。

このままだと間違いなく“消される”って

——るなんて邪道よね!!! やっぱ麻婆は辛くなくっちゃ!!!

その瞬間、拡散される殺気と立てられる親指の数々を見て自分の判断が間違っ
てな
かった事を実感したわ。

というか、聖職者が殺気を放つてどうということよ。

覚悟を決めて蓮華一杯分を口に入れたら、味覚と嗅覚がやられたわ。

ムリムリムリムリ、こんなの絶対にムリ!!! 何よこれ、本当に麻婆なの!!? 寧ろ食べ

物なの!?! あの親子は平然と食べてるのよ!?!?

身体中から滝の様な汗が流れるなか、必死に打開策を練って出た結論。

逃げちやえ☆

護衛とか恥とかどうでもいい。兎に角すぐさま逃げよう!

と思ったけどどうしてか身体が動かないし両肩がミシミシと悲鳴を上げてるの。

そしていつの間にか目の前には紅く染まった蓮華を持った言峰君、後ろには両肩を押

さえる言峰神父が……。

あらやだ、前も後ろも外道しか居ないわ。

女の子なら誰もが憧れる「あくん」がこんなにも恐く怖ろしいモノにジョブチエン

ジ。

羨ましそうに見てる虚ちゃんにSOSを送るもあつさりを見捨てられ、そこから先の

記憶は無いの。

聞いた話だと死んだ魚の眼で懺悔を始めたらしいわ。

そこで私の思いやら秘密やらが盛大に暴露されて、簪ちゃんと仲直りすることになったの。

仲直りの切っ掛けが“麻婆豆腐”で内心複雑なんだけれど……。

でも、ありがとね♪

暴露しちゃった恥ずかしい秘密でイジってくるのは絶対に許さないけど。

教会訪問記　のんびり少女編

〈教会訪問〉

私はいま何とことみのお家にお邪魔してまゝす。

遊びじゃないよ。お仕事だよ。といつても私は殆どちっちゃい子たちと遊んでたもんなんだけどね。

ことみのお家は教会でね。たくさんの方が一緒に暮らしてるんだ。

そんなにたくさんの方が居て。学費とか生活費とかどうなってるんだらう？

「黄金律：Aの我様が援助してくれてるのよ。」

「偶に来てチビっ子共と遊んでるからもしかしたらそのうち会えるかも知れないぜ」
へ。そうなんだ。

私たちのお仕事は。ことみとその家族の護衛でね。

役割分担はお嬢様がことみ、私とお姉ちゃんとかんちゃんが教会の護衛に別れたの。

お姉ちゃんは。ことみの護衛というか一緒にバイトをしたか。みたいだけど。

「お願いします。先輩が頼りなんです」

好きな人に真剣な目で手をギュッと握られてお願いされたら断れないよ。
ことみくわかっててやってたのかな？ だとしたら酷いよね。

〈愉快的教会の住人〉

教会で出会った人達を紹介するね。

まずは電ちゃんたち。

ちつちやくてく大人ぶってたり、落ちついてたり、お世話したがってたり、健
気だつたりでみんなとくても可愛いんだよ。

たぶん一番触れ合ってる時間が長かったと思うよ。

次は天龍さん。

1つ年上でね。片目に眼帯を付けてて、リンドブルム・ブレードっていう愛刀を持
ち歩いてるよ。

なんとなくくなんだけどお嬢様と似てる気がするんだ。

強がりな所とか。中二病なところとか。ヘタレなところとか。イジラレ体質
なところとか。妹想いなところとか。

龍田さんはね、天龍さんの妹なんだよ。

落ちついた優しい人かと思つたら、DSでね、天龍さんをよく苛めてたよ。

龍田さんは少しお姉ちゃんに似てる気がするかな。頭が良いところとか、家族想いなどところとか、ホラーが苦手なところとか、同じ人を好きで素直に想いを伝えられないところとか。

川内さんは、夜が大好きみたいで、夜になると一番騒いでるんじゃないかな？

この間なんて……

「夜だー！ 私の時間だよ時雨!!」

「…で、何が言いたい川内」

「私と夜戦しよ♪」

って言ったら無言でお姉ちゃんと龍田さんと妹の神通さん達に空き部屋に拉致られつつただ。

恐くて部屋に近づけなかったから、ナニがあつたのかは知らないよ。ホントだよ。

他にも個性が強い子がたくさん。

いい人、いい子ばかりで、直ぐに仲良くなれたんだけど…。

「フンッ、行くわよ潮」

「あ、待って曙ちゃん」

中々仲良くなれない子も居てね。

特に曙ちゃんは偶に私たちを睨んでるんだ。
何でだろ？

〈師弟対決〉

ある日の事なんだけどね。

急に外に連れ出されたら、ことみくと神父様が殴り合いを始めました。

「くたばれクサレ外道!!」

「甘いぞバカ弟子!!」

え、何やってるの？

『さあさあ、始まりました恒例の外道師弟によるガチバトル!! 実況は「青葉」がお送りします!!』

こ、恒例なんだ。

観てる感想なんだけど。さくさくっぱりわからない。

だつて、ことみくも神父様も、気がついていたらあつちこつちに移動して殴りあつてるんだもん。

ネット動画で見た格闘ゲームみたいとしかいえないよ。

かんちゃんとお嬢様は観えてるみたいで、悔しそうだったり、呆れた顔をしてまし

た。

「さあ張った張った!! 時雨がどれだけ外道神父に喰らいつくか! 賭けはまだ間に合うよ!!」

「大穴は今のところ1時間だよ☆」

「神通さん、あたしは25分に明日のオヤツを賭けるわ!」

「……なら私は30分に」

「あ、待ちなさいよ。えつと雷と同じにするわ」

「はい、解りました。電ちゃんはどうしますか?」

「い、電はお兄ちゃんが勝つのに——」

「「「「「勝てると思ってるの? (のか?)」」」」」」」

「わくん、お兄ちゃんごめんなさいなのです!!」

何気に一番ひどいよく電ちゃん。

「フツ、どうだ誰からも勝てると思われてない心境はっ!!」

「眼から汗が流れてくるよっ!!」

『「ここで蹴り技によるクロス攻撃!! 両者連続蹴りの攻防が止まりません!! おつと時雨選手バックステップで距離をとりましたが外道神父がそれを逃がしません!! 時雨

選手猛ラツシユを腕でガードつとここで外道神父脇腹に蹴りを入れた!! これは痛い!! あばら粉碎コースツ!!』

あわわくことみくあと10分頑張つてく! じゃないと私のプリンがく!!

「本音、ちよつとお話が…」

ひうつ!?

教会訪問記 生真面目な少女編

〈試合後〉

言峰君と神父様との模擬試合ですが、結果は言峰君の負けとなりました。

というか、組伏せた相手に塩漬シュールストレミングの缶詰が入った袋を被せて身動きを封じこんだり、負かした相手の顔を踏んで記念撮影をしたり、仕返しされた腹いせに徹底的にボコボコにするってどれだけ外道なんですか神父様？

それで、全身打撲と右腕骨折という重傷を負った言峰君ですが……

「クツサ!? 時雨クツサｗｗｗｗ」

「ちよつと臭いよ〜時雨ｗｗｗｗ」

「臭いわ〜言峰君ｗｗｗｗ」

「兄ちゃんクサ〜イｗｗｗｗ」

「エンガチヨ、エンガチヨｗｗｗｗ」

「……おいコラ、臭いうつすぞ」

「「「うわ〜い、逃げろ〜」」」

「待てい!!!」

悪い顔をした神父様に連れられ長湯されましたが、どうやら塩漬シユールストレミングけ鯨の缶詰の呪いは解けなかったようです。

その結果、まともに動けない事を好いことにお嬢様を含めた数名が言峰君をからかって鬼ごっこを始めてしまいました。

もう、怪我人相手に何をしてるんですか！

「フフ、騒がしくてごめんさいね〜」

いえ、こちらこそお嬢様がご迷惑を…

「いいのよ〜。何だかんだで時雨ちゃんも楽しそうみたいだからね〜」

そう、ですね。

解っていた事ですけど、言峰君の『帰る場所』は言峰教会ごなんですね…。

「……ねえ、時雨ちゃんって学園だとどんな感じなのかしら〜?」

え!? その……

「大丈夫よ〜。天龍ちゃんに曙ちゃん達のお世話をお願いしてるから。今ここに居るのは私たちだけよ〜」

では、彼女たちは……

「……うん、ISのせいで家族を失ったの」

ISの登場によって医療技術が飛躍的に進歩しましたが、その代わり女尊男卑の社会へとなつてしまいました。

その結果、身内が冤罪で捕まった、母親や姉妹が豹変した、免職や冤罪で仕事を失った親が自殺したなどそんな事件が各地で幾つも起き「家庭崩壊」が続いてしまつていきます。

ただでさえ余裕のない保護施設にそんな多くの子を受け入れられる筈が無く、中には路頭にさ迷う子もいれば、保護という名の奴隷や人体実験を受けている子もいるそうです。

「特に曙ちゃんはね、昔の時雨ちゃんにちよつと似てるの。だから時雨ちゃんもあの子を気にかけて、あの子も時雨ちゃんには心を開いて……ううん、大好きなの」

…見てて解ります。

仕方がない事だと頭でわかっていても感情が追いつかない。

きつと彼女には学園は悪の巣窟で私たちは言峰君を連れだした悪者にしか見えないのかもしれないね。

「だからあの子たちの事怒つたり嫌いにならないであげてね。本当はとつてもいい子たちなのよ」

…はい、大丈夫です。

「それで、学園での時雨ちゃんはどうなのかしら？」

えっと “頼れるお兄さん” というのが仲の良い人からの評価でそれ以外ですと “外道”、 “女性に暴力を振るう最低な野郎” といったところですよ。

「あく何となくわかるわ。虚ちゃん自身はどう思う？」

：第一印象は落ち着きのある方でしたね。

「え、大体の人は悪役^{ヒール}って言うわよ」

確かにそう評価される方もいますね。

けど、私が初めてお会いしたときはその、お嬢様^{少し立て込んで}を捕縛^{だん}してまして、話も一言二言くらいでしたので…

「そうなんだ」

それが暫く触れ合ってみて、どんな屈強にも負けず、努力を怠らないのを知りました。

「そんな姿を見てたらいっつの間にか好きになっちゃった？」

うっ／＼／＼ き、切っ掛けはその、勘違いだったんですけど…

「うふふくなくに？」 気になるわ」

それは、その…ごめんなさい／＼／

「そっか。時雨ちゃんも罪よね、こんな可愛い人にも好かれて」

か、からかわないでください!!／＼／

「フフフ……ねえ虚ちゃん。時雨ちゃんの髪って真っ白でしょう?」

ええ、昔修行で色素が抜けたと聞きました。

「……あれってね。私のせいなの」

……え?

〈龍田の告白〉

ずっと昔、今の電ちゃんたちよりも小さかった頃だったわ時雨ちゃんがここに来たのは。

あの頃の時雨ちゃんは近づくと嘔み付く狂犬だったの。けど、本当は寂しくて悲しいのが嫌でも解ったわ。

きつと誰よりも強くて重いキズを負っているんだって…。

そんな時雨ちゃんをほっとけなくて皆で接し続けて漸く時雨ちゃんも笑うようになったときに誘拐事件が起きたの。

連れ去られたのは私と天龍ちゃん。

恐くて泣いてばかりだった私に苛立った犯人がナイフを取り出してね、私を刺そうとしたの。それを天龍ちゃんが庇って……あの眼の傷はその時のモノ。

時雨ちゃんや神父様が駆けつけて助けてくれたんだけど、臆病だった私は私は時雨

ちゃんを拒絶しちゃったの。

鋭い眼つきで人を簡単に傷つける彼が、いつもと変わらない顔で手を差し伸べてくれた彼が恐かった。

本当だったら「ありがとう」って言わなければいけないのに……ヒドイ話でしょう？

それからすぐだったわ。時雨ちゃんが教会から出て行っちゃったのは……。ずっと、後悔したわ。私のせいだって……私が彼を拒絶し傷つけたからだって……

2年くらいした頃にね、突然ふらっと帰って来たの。

急に帰ってくるし髪が短くなってるし真っ白になってるしでビックリしたわ！

もう何が何だか分からなくてわんわんと泣いちゃったの。

どうしたらいいのか解らず慌てる時雨ちゃんに天龍ちゃんが泣かせたなって怒って喧嘩になって、そしたらいつの間にか教会の皆で大乱闘してて最後には璃正神父に揃って怒られてね。皆で罰掃除してお互い「ごめんなさい」って謝ったの。

それから直ぐかな。時雨ちゃんに惹かれたのは……

「そんな事が……」

時雨ちゃんのことお願いね。あの子、時々無茶な事も平然としようとするから

「…何となくわかります。時々、何処か危ういと感じる時がありますから…」

あら、よく見てるのね。

「か、からかわないでください／＼／＼」

クスクス…本当に可愛いわね。

あのね、虚ちゃん。時雨ちゃんはそう簡単に渡さないから。

「っ望むところですよ!!」

フフ、これで私たちは友達でライバルね。

天災の独白

初めは単なる気まぐれで偶然だったんだよね

〈はじまり
偶然〉

箒ちゃんの入学祝いに何を渡そうか色々考えてたんだ。

もう、何を渡したら愛しの箒ちゃんが喜ぶのか悩みに悩んで気付けば10日も寝て無いことがわかってビックリ!

おかげでクーちゃんからも叱られちゃった……グスン

クーちゃんの説教のあと、寝ようと思つたらふと視界の隅で見覚えのある顔が映ったんだ。

このままじゃ気になって寝れないぜ! と言う事でそのモニターに映ったエリア付近の映像をハックしたらなんといつくんが!!

あ、いつくんってのはね。

ちゅちゃんの弟で数年前にモンドグロツソとかいう大会で突然行方不明になっちゃた子なんだ。

まったく、ちゅちゃんも酷いよね。他の有象無象に頼るよりも真つ先に私に頼って

いればいっくんなんて直ぐに見つけられたのにさ！

行方不明になってから一月たってから頼るって……そんなに私って信用ない？

まあ、その事については置いておいて。

兎に角、長年行方知れずだったいっくんが漸く見つかって若干テンションがハイだった私は兼ねてからの計画 “いっくんと箒ちゃん学園ラブラブ大作戦♪” を決行することにしたのだ〜！！

この計画はね。素直になれなくて想いを告げられない箒ちゃんの為にいっくんと同じ学校、同じクラス、隣の席となるよう陰ながらサポートして二人をくつつけて上げる作戦なのだ！

即ち、束さんは恋のキューピットってことだね♪

でも、この計画を始動するのにあたって問題がでてきたんだ。

愛しの箒ちゃんは今年からIS学園に通わなきゃいけない。

いっくんは生物学上 “男” だから女学院であるIS学園には通えない。

どうすれば二人が一緒に学校を通えるようになるんだろ〜……………

ひむろめいた!!

いっくんがISを使えるようにすればいいんだ！

そうと決まれば即行動だぜ！ さあ、唸れ私の両腕！！ いくくんの情報をこのコアに叩き込むんだ！

あ、どうせなら大体的に “世界初男性IS操縦者” って発表できるよう下準備もしよ
くつと♪

………

………

………

正直、昨日までの私はどうかしてた。

一回グツスリ寝て改めて録画しておいた映像を見たら気付いたよ。

あ、これいくくんじゃねえ…。

うわく無いわくホント無いわくだよ。

よくよく思えばいくくらの束さんがいくくんのデータをコアに直接書き込んだからって男がISを動かせるようになるわけないじゃん。

昨日は変なテンションで何か色々やった気がするけど思い出すのも面倒だなく。

それにしても、この束さんを勘違いさせるだなんて生意気だなコイツ。

どうしてくれようか………ま、どうでもいつか………

〈興味〉

あれ、そういえば元白騎士のコアどこに行つたんだらう？

と思つて探してみたら例の勘違い野郎の手元にあることが発覚!!

なんで!? どうして!? 何で男がISを動かしてるの!? しかもちゅちゃんと同じワソフを発現してるとか信じらんない!!

思わずイラッしちゃつたから試作機のゴレムを送つちまつたぜい☆

コントローラーを片手に I t ' s S h o w T i m e !!

つて!? ちよ、嘘!? バツ!?

………

………

………

予想外。

予想外だよ!

普通、対戦相手とはいえ学友を盾にする!? バリア無効化を纏つた剣を初手で投げ付ける!? 関節技決めて腕をもぐ!? もいだ腕で殴る!? というか何で本当にISを動かせてるの!?

フフ………

フフ………

アハハ、面白い。
君に興味が湧いたよ。

〈期待〉

「この東さんを勘違いさせやがって、ぶっ殺だぞ★」や「プツ、学園中から嫌われてんの。ザマゝwww」とか思ってた勘違い野郎こと言峰時雨について調べてみた。

いやゝ凄いいねの一言に尽きるね。

特に10にも満たない年で借金返済生活のエピソードは大爆笑させてもらったよ。
何やつての君。無茶苦茶だよwww　ますます興味がわいちゃったね♪

総本山をハツキング♪

いやゝ教会ってあんな恐いところだったっけ？

ハックから5分で戦闘機による爆撃からの殲滅とかどこのCIAだよ☆

武装神父&シスターとのリアル鬼ごっこは中々スリルがあっただけど二度目は勘弁してほしいかな。お陰でアジトが2つもお釈迦……でも、ほしい情報は手に入ったから
モーマンタイ☆

予想はしてたけど出るわ出るわ真つ黒な経歴。

いくら”そういう風に生まれた”からって、こんな恐い人達に鍛えられたらそりゃ

強くなるよ。

よく生き抜いたか関心したね。

あ、でも”生きて”はいるけど”壊れて”はいるのかな？

まあ、そこら辺はどうでもいいや☆

それにしても、ちゅちゃんもそうだったなんてさ。

前々から他の有象無象とは違うって思ってたけど、東さんはショックを隠しきれないよ。

あゝあ天然は東さんだけか。ま、いいや。

これからも君の事をちよくちよく観察させてもらうよ。

ちゅちゃんと同じってのもあるけど、もしかしたらいつか君は

かもしれないから。

この東さんが期待してるんだからさ。

もしそれを裏切ったら思わずコロコロしちゃうから☆

そのつもりでガンバツテね♪

夏休み明けの話

あつという間に夏休みが明けた。

え？ 夏休みの描写はどうしたって？

夏休み入った瞬間に言峰教会実家に帰宅し子供達の相手をしながらバイト三昧。

お陰でローン返済にも目星がついたよ。

そういえば夏休みの最中、1週間だけ先輩や布仏達が教会うちに来ていたんだった。

何でも俺の護衛を担当していた連中が揃って有給を出してきたから、一時的にその変わりを務めるらしい。

全く、最近の若いのはなつてないね。

まあ、着け回す護衛や監視を走つて振り切ったり、ワザと人が多かつたり仕事がしにくいバイトを選んでたりして俺が悪いんだらうけど。

愉しかつたな。連中のあの悔しそうな顔とかさ。

最後の方はコッソリと抜け出して教会本部に行つて、後で会長さんから教会に抗議の電話が掛つてきたっけ。

あれは流石にちよつとやりすぎたかな？

他には師匠に修行の相手をしてもらったり、模擬戦でボコられ、罰で塩漬シユールストレミンツけ鯁の缶詰を浴びさせられたり、ちよつとしたすれ違いで教会の子供と喧嘩して和解したりしたな。

そんな夏休みもあつという間に開けてから1週間がたった今日、俺のクラスで謝罪大会が開かれている。

そもその切っ掛けは授業再開時から流れる気まずい空気と話しかけようとして出れずにいるもどかしさ。俺個人としては別に気にしていなかったのだが、他の連中はもうでも無く、我慢できなくなった谷本が遂にキレたのが始まりだ。

謝罪の内容としては今までの非礼や臨海学校で一方的に犯人扱いしたことなどだ。

あの時は確かに怒りを感じたが、今では何とも思つて無いので「別に」と答えたところ、いつの間にか『仏の心の持ち主』、『鬼畜（あるいは外道、悪魔）でも神父だった』という噂が流れていた。

何それ意味解らん。

他の親しい連中は苦笑いなのだが、谷本や会長さんは「仏の心www」とか笑つてるし

というかだ。

「道端に落ちてる石ころを何とも思わない」ように「どうでもいい人間に何かを思うこと自体間違っている」だろう。

と先輩や会長さんに言ったら物凄く引きつった顔をされた。

〈違和感〉

マゾリアがマゾじゃなくなった。

突然何を言い出すんだこいつ？　と思われるだろうが、言っている俺自身わけがわからない状態だ。

夏休みが明けても変わらざる勘違い女共を適当にあしらっていたのだが、そんな中マゾリアが何のアクションも起こさなかったのだ。

その時は「関わってこないなら別にいいか」くらいの気持ちだったのだが、こうして1週間経つてみるとそれがハッキリと解った。

「皆さん、おはようですわ。今日も素敵な天気ですわね」

…普通。

そう、マゾが普通になっているんだ。

今までなら「おはようございます皆様。今日も素敵な罵倒をお願いしますわ」等と

言ってクラスをドン引かせていたのだ。

他にも踏まれるよう足元にスタンバってたり暴力沙汰になれば間に入って変わりに殴られてたのだがその傾向が全くもって見られない。

今もクラスメイトと「普通の女子高生の様に談笑」しているのだ。

マゾの急な変貌にクラスメイトは戸惑いと違和感、吐き気に嫌悪と一種の恐怖を抱いていた。

何かマゾがああなる原因でもあったのだろうか？

え？ 夏休み前に俺が精神崩壊させた？

……………ああ、そんなことあったな。

「「「忘れてたの!?!?」」」

どうでもいい事は忘れる事にしてるんだよ。

「ちよつと失礼しますわ。日課の連絡がありますの」

クラスメイトとの会話を中断し、携帯電話を取り出して何処かにそれをかける。

恐らくは候補生としての定期報告か何かだろう。

「もしもし、おはようございませすわ!! チェルシー元気? 元気ですの? 私は今

日も元気ハツラツですわ!!」

』

ナニアレ？

あんなテンションの高いマゾ超気持ち悪いんだけど

「あら？ 元気がないですわね？ どこか体調がすぐれないのですの？ そうですわ!!
病は気からと言います。日頃の鬱憤を乗せて大きく叫びましょう！ それではせーの
!!」

『F●CK Y●U!!!』

「ありがとうございますですわ!!!」

……どうやらマゾは変わらずマゾだったらしい。

その事にクラス一同安堵したが、果たしてそれは良いことなのか悪いことなのか…。

まあ、俺に被害が来ないのであればどうでもいいか

〈とあるネット掲示板より抜粋〉

351：スノウ

クスン：マスターが全然私を使ってくれない。

352：ガリ勉

それは例の特殊能力のことかスノウ？

353：スノウ

ううん、それもあるけどここ暫くは私自身も使ってくれないの

354：名無しの生徒

Y o | J o の放置プレイだど!?

355：通りすがりの紳士

Y o | J o を放置するとは許せませんな

356：チャラ男

マスター鬼畜杉ワロタwww

357：スノウ

マ、マスターの事を悪く言わないでください!!

358：名無しの生徒

放置されてもマスターを気遣うとか、スノウちゃんマジ健気な天使

359：ガリ勉

で、そのマスターは今何をしてるんだ？

360 : スノウ

えつと……たくさん小さな子や綺麗な女性と遊んでいます。

361 : 名無しの生徒

マスター禿げろ

362 : ガリ勉

マスターモゲロ

363 : 通りすがりの紳士

マスタータヒね

364 : チャラ男

皆マスターのこと攻めすぎwww

マスター爆ぜろ

・

・

・

(暫くの間、暴言の嵐が続く)

訓練の話

「一夏あああああああ!!」

放課後、谷本らとアリーナに行ったら何やら紅い機体が物凄いスピードで突っ込んできた。

確かに速いがそれだけだったので、軽く避けるついでに擦れ違い際に脚を引つ掛けたら案の定バランスを崩してトップスピードのままアリーナの壁へと埋まった。

勿論、トドメの「AKグレネードランチャー」をお見舞いするのも忘れない。

…で、アレ何？ 篠ノ之？ ……ああ、お断り3の一人ね。

夏休み入って直ぐにあの紅い機体を持つてたと。

ふくん、まあ、どうでもいいか。

にしてもISでの訓練なんて久々だな。

夏休みで使ったのって精々教会の研究所かイタリアに寄った時にカレンと何回かやったくらいだな。

日々の鍛練や模擬戦は欠かさなかったが、やはり使わなければその間の分だけプランクが出来る。

今の状態で更識とバトつたら負けるなコリヤ。

そんなブランクを埋めるにはやはり実戦に限るだろう。

対戦相手には困らないからな。

さて、今日果たしの対戦相手の送り主のところへ行きませうかね。

今回俺がこんなにも積極的にに戦っているのにはちよつとした理由ワケがある。

先日、布仏からの言伝で生徒会室に行つたときだ。

「I・S学園文化祭時における特別トーナメント開催の知らせ」

専用機持ちと上位実力者並び希望者によるトーナメントを開催す。

参加希望者は●月×日までに参加希望を生徒会に表明せよ。

なお、専用機持ちは制限としてS・Eの低下し、追加武装を禁ずる。

また、肉弾戦も禁止とする。

「で、突然呼び出したかと思えば何これ？」

追加武装と肉弾戦を禁ずるとか俺に対するあからさま嫌がらせだろ。

「それがその……織斑先生が」

要約するところだ。

「一夏が雪片を使つてくれない（・ω・）」

「武器制限をかけた大会を開けばいいんですよ!!」

「そ、その手があつたか！ よし、早速文化祭でやろう!!」

「（。――▽――）ニヤニヤ」

……あのクソ担任、碌なことしねえな。

「ごめんなさい」

先輩が謝る事ではないですよ。

それよりも例の追加武装の件ですが

「え？ でも今度のトーナメントでは使えませんよ」

だからですよ。

正直、ブランクがあつてこのままでは勝てる気がしません。

ですので最初のうちは武装テストの面で次に大量に来ている果たし状を片っ端から相手するつもりです。

戦い方については考えがありますが、それをするには機体性能を完璧に引き出す必要性があるので……

「わかりました。そういう事でしたら任せて下さい」

お願いします。

と、いうことだ。

今日の分の試合を終えピットで身体を休めながら高機動を得意とする鏡と視野が広く分析を得意とする鷹月の意見を聞く。

高機動型の専用機を持つマゾリアにも意見を聞こうとは（ほんの少しだけ）思ったのだが、「私には心に決めたご主人さまがいますの。ですが時雨さんの近くにいますとそれが揺らいでしまいますわ」と言い、暫くの間離れるそうだ。

何か裏があるのではとも思えたが、変なのと関わりなくて済むなら別にどうでもいいか。

専用機と訓練機では感覚が違うのもあるので、頼んでラファール・リヴァイブと打鉄に乗ってみる。

ラファールは多彩な武器収納が魅力的だが白式同様軽量スピード型のため正直苦手だな。

逆に打鉄は腰のアーマーが邪魔なこと以外とてもやり易かったな。

あまりの感動っぷりに調子に乗ってたら機体が悲鳴を上げてしまい、後で先輩にこつぴりと叱られてしまった、

だが、お陰で新しい追加武装案が思い浮かんだのですぐさま作れるよう頼んだら今度は呆れた顔をされた。

でも先輩、こう言うの好きですよね？

〈とあるネット掲示板より抜粋〉

563：スノウ

マスターが他の子を使った。

しかも2人も…

コレって浮気？

浮気よね。

浮気に決まってる。

浮気だわ。

浮気だって言え。

564 : ガリ勉

……オイ

656 : 名無しの生徒

ヤバイ、スノウがヤンだ

657 : チャラ男

何それウケルww

658 : 名無しの生徒

ウケねえよ。

659 : 名無しの生徒

ウケるか

660 : 名無しの生徒

ウケません

661 : 名無しの生徒

チャラ男がフルぼっこな件(笑)

662 : チャラ男

(・ω・) ショボーン

663 : ガリ勉

そう言えば、いつも騒がしい紳士どもは流石に出て行ったか？

664 : 名無しの紳士

(* ㄩ、 *) ハアハア

665 : 名無しの紳士

(* ㄩ、 *) ハアハア

666 : 名無しの紳士

(* ㄩ、 *) ハアハア

667 : ガリ勉

………こいつらタヒねばいいのに

文化祭までの話

〈文化祭にむけて〉

文化祭で――^{ウチ}は教室そのものを休憩所として提供することにした。

それというのも表面上は仲直りしたとはいえクラスの纏まりは薄く、未だに蟠りやアンチ言峰派がいるためこのまま何か出し物をしても必ず何処がで失敗し崩壊するのが目に見えている。

だったら最初からやらなければいいという事で休憩所^{この案}に決まった。

これには関わりたくないアンチ派も何処となく理由を察した中立派、そして鏡らも多少残念そうな顔をしたが失敗するくらいならばと皆納得した。

裏でクラスの統率力や協調性やらが調査・評価されているらしいが、そんなものとの昔に地に落ちているし俺としても学園の評価なんて心底どうでもいい事だ。

まあ、担任が「そんなこと認められない」と多少煩かったが「大会に集中したいので」といったら何処が誇らしげに頷いた。

ウゼエ…

山田先生が本当に何もやらないのは流星にアレだからというので、2時間毎の交代制

で5人がクラスに残り、お茶とお汁粉を無料提供する形となった。

その為、クラスの机やらを撤去し、簡素だが和をイメージした模様替えをし、鷹月の案で黒板一面に案内図を描きそこを無料掲示板として各団体に提供している。

まあ、他の連中同様俺もバツクレルけど：

〈ヘクラブでの出し物〉

どんな部活であれ何らかの出し物をしなくては行けないという面倒臭い決まりがあるため、我が「告会クラブ（仮）」は簡素なバザーを開くことにした。

プレハブ小屋の1階のみを開放し、売上金を今後の活動（という名のお茶会）に使うという約束のもといらなくなった本や小物、手作りの人形やらを販売。

あとはクラブ名らしく簡素な懺悔室を作っている。

それとバザーを開くのにあたって、プレハブ小屋のアートは流石に不味いとこの事で消すことになった。

というか、学校側から消せと命令された。

そんな今さら（とつくに外部にはバレている）事など正直面倒くさかったが、先輩に頭を下げられては俺も断れないので渋々承諾した。

因みに、文化祭後に皆で隈無く部屋を調べたら笑えないくらい盗聴器が出てきた。
ホント、笑えねえ…

〈動きだす影〉

——以上よ。何か質問はあるかしら？

「ねえよ」

そう。じゃあ、作戦成功の暁にはご褒美してあげるわ。

楽しみにしてなさい。

「な、ば、そんなのいらねえし／＼／＼」

あらそう？

「……そ、そのやっぱり貰ってやっても無いことはないぞ／＼／＼」

ウフフ、それじゃあ頑張ってるね。

「おう！」

…さてと、例の男の子との接触はオータムに任せるとして、バックアップに奪った新型機のテストも兼ねてMを行かせましようか

でも、素直に引き受けてくれるかしら？

あの子を嚇してみようかしら？

文化祭の話

へドタキャン

バザーの売上もそこそこ良好。

クラブ名らしく簡易の懺悔室を作つて各々の罪を聞くというのをしたが、これが意外と盛況だったりした。

ただ、部屋から出てきた大半が「死んだ魚の眼」や「恍惚とした顔」をしてたらしいが、いやはや何の事だが俺らにはわからんな。

谷本らから「折角の文化祭なんだから一緒に回ろうよ！」との事で後をカレンに任せ集合場所へと向かう。

道中、企業や国家のお偉いさんの勧誘、ジャーナリストや女性権利団体が絡んできたが適当にあしらい目的の場所に着いたのだが、そこには友人らは誰一人居らず変わりに――

「し、時雨君!？」

――先輩が居た。

先輩の驚きようから恐らく先輩も何も聞かされてなかったんだろう。

家を出るときのカレンが不機嫌だった理由はこれか……首謀者は布仏と会長さんあたりか？

「あ、あのもしかして……」

どうやら嵌められたようですね。

「うう。そうと解つてたら前もって色々準備したのに……二人のバカア」

小さく呟いてるようだけれど全部聞こえている。

が、敢えて俺の事を名前前で呼ぶようになったことも含め触れなくておく。

理由も気持にも気づいているが、それに俺は……

止めよう。今は周りの連中の好意（お節介とも言う）に甘え、しばしの文化祭を楽し

もう。

それでは先輩、行きましょう。

「はい……」

いつかの時と同じように先輩の手を取って歩きだした。

〈トーナメント〉

二人で文化祭を周っていた時の事だ。

「そういえば、トーナメント進出おめでとうございます」

ありがとうございます。

試合、観られてたんですか？

「いえ、私は生徒会での仕事がありましたので…」

ああ、布仏か後輩の誰からから聞いたのか

因みにトーナメントの様子を簡単にまとめるところだ。

一回戦

イグニッション・ブリスト

瞬時加速と零落白夜を使った電光石火作戦で瞬殺。

なお、全公式試合最短記録だったらしい。

二回戦

剣を槍の様に投げた

意表をついた攻撃で驚いている隙に近づき、絶対防御が発動しないギリギリのラインを何度も寸止めで攻撃しまくってたら相手が勝手に気絶した。

ルール違反ではと協議されたが、直接当ててないからギリギリセーフという事に。

というか、あからさまな嫌がらせルールに教会と企業が突っ込んだら黙った。

三回戦

流石に学習され開戦と同時に銃弾の嵐をお見舞いされたが剣を扇風機のように回転させて弾き、弾切れの瞬間に近距離瞬時加速で近づいて斬った。

(以下略)

―と何とか此処まで勝ち残れた訳だ。

夏休みに態々本山に行つて由美江（正しくは由美子）とバトつてた甲斐があつたもんだ。

それにしても、俺がいつまでも苦手分野を残しておくでも思つたのかね連中は……いや、絵に関してはもう諦めてるんだけどさ。

残すは決勝リーグだけなのだが、これはもうどうでもいいだろう。

〈的屋〉

先輩と文化祭を周つてみて知つた事だが、意外と先輩は狙撃が得意だつた。

それを知つたのは偶々入つた教室が的屋で次々と商品を撃ち落としていたからだ。

最終的には店側が土下座で勘弁してほしいと謝られてしまい、晴れて先輩には「的屋泣かせ」の異名が付いたが割合する。

本人の言い分としては、機械を熟知しているから何処をどう撃てばいいか分析して撃つてるだけらしい。

これでこの人戦闘は苦手だつて言うんだから声を大にしてウソだつ！ つて言いたいね。

〈ゲーム〉

模擬店で『爆弾解体ゲーム』を売りにしている所があり、ルールはその名の通りタイマーが0になるまでに爆弾を止めるという単純なゲームだ。

それを俺がやる事になったのだが、タイマーの線を切つて冷却処分しようとしたら怒られて店から追い出された。

解せぬ。

〈金魚すくい〉

金魚か…揚げれば食えるな。

1回200円であの大きさなら15匹以上とれば食費が浮く!!

普通に先輩に怒られた。

〈フッフ、怖いか?〉

ある時、挙動不審に別方向へと誘導しようとする先輩。

それを不思議に思いつつ辺りを見回すとお化け屋敷が目にとまった。

ああ、そう言えば教会に来た時、龍田と一緒に頑なにホラー話を拒否ってたっけ…。
(先輩の反応が)面白そうだから、中に入ったのはいいがコレはヤバいな。

何がヤバいつてそりや……

「ううう…「バアツ!!」…ヒウツ!?!」

「キシヤアアアアアアア!!」

「やあくつ!!!」

やあくはこつちのセリフ。

何この可愛い生き物。

それに驚かされる度にしがみつくから、俺の腕が二つの富士山Fに挟まれてるんですけど…。

まあ、それはまだ耐えられるからいい。

だが、今の先輩を見ていると心の奥底から何かが込み上げてくる。

コレは使命感? いや、違うな。

知りたいんだ。

もつと先輩の事を

イジメたらどんな顔をするのかを知りたい。

もしかして、コレが恋ってやつなのかな?

※いいえ、ただのサディズムです

取りあえず、この後の事も考えて気持ちなきやね。

じゃないと人前にも外にも出れないし。

〈襲撃して…〉

テロリストを撃退したったwww

突然の冒頭でスマナイ。

が、事実である。

…まあ、邪魔が入ったせいで取り逃したんだけど。

経緯はこうだ。

先輩と別れて一人で歩いている所を先程適当にあしらった勧誘者の一人が接触してきた。

話を聞いてほしいとのことでは仕方がないなという態度を隠すことなく着いて行く。

手近な部屋に着いた瞬間に本性を現し、勝手に所属や目的を吐くザコ又は嘯ませ犬丸出しさん。

狭い部屋でISを展開するとかバカじゃないの？　と思つたが流石に生身だと危ないので部屋中を逃げ回ると調子に乗った嘯ませ犬さんが滅茶苦茶に暴れ、その結果部屋が爆発した。

いや、偶然って怖いね。

偶々入った部屋に偶々大量の小麦粉が置いてあって、偶々効率よく部屋に充満して、偶々体操マットの下に穴があるだなんてき。

俺、何もしてないよ

ただ、絶対防御は命に関わる外部からの攻撃はS、Eを大量消費して守ってはくれるけど、毒やガスみたいな内部からのダメージは守ってくれないし、危険性の無いモノにハイパーセンサーが反応しないことは検証済みなだけ。

ホントだよ？

偶々なのに會長さんや先輩に後で滅茶苦茶怒られたけど…

穴からひよっこり顔を出したらポロポロな囁ませ犬さん。

絶対防御。パネエ…

何か戯言をほざいてたから米神に銃を突き付けて何度も撃って辛うじて残ってたS。

Eを削り、ピンポイントに内臓を攻撃したり、偶々ポケットに入ってたニンニクや豆板醤を大量に摂取させたり、痛んだ生レバーを食わせたり、漆を露出した肌に塗ったりしてたら見覚えのある金髪が颯爽と現れて連れ去って行ってしまった。

あゝあ、折角身体を張って罨を張ったのに…

まあ、多少は愉しめたから良しとしますかね。

文化祭後の話

〈報告〉

今回の件について語ろうと思う。

文化祭時に襲撃の可能性が高いと踏んだ俺たちは罠に嵌めてやろうと囮作戦を実行。作戦内容は文化祭を呑気に楽しんでいるフリをしながら敵を集め、それを一網打尽する手筈だったのだ。

まあ、一部の裏切りが居たせいで先輩とデートモドキをすることになったのだがそれは置いておこう。

本来ならば罠に嵌った時点で俺と会長さんで捕縛する手筈だったが、他にも大会が行われていた第三アリーナが襲撃されたそうだ。

恐らくだが、第三アリーナは戦力を分散させる為の囮で本命は俺の捕縛又は殺害だったのだろう。

もつとも、別所で襲撃が起きていたと知った時、敵嘘ませ犬さんの方が驚いていたのが今一謎なのだが…。

会長さんは長として来賓や生徒など人が多くが集まっている第三アリーナを放置す

ることが出来ず守備隊と迎撃戦に参戦。

急がなければという焦りから迎撃に時間が掛ってしまい、俺一人を危険な目に合わせってしまったと後で謝られた。

別にこっちはこっちで好き勝手に暴れさせてもらったから気にしなくてもいいのに……

さて、ここからちよつとした問題だ。

襲撃者の迎撃と俺の生存という最低限の目標を達成できたが、結果的に多くの人間の襲撃を許してしまった事から各国から「学園の警備は大丈夫なのか?」、「もし良ければ我が国の精鋭を警備につけよう」等と何らかの干渉があると思っていた。

だが、それとは別の問題が発生していた。

襲撃者の中に現在身分詐称等の罪で服役している筈の“シャルロット・デュノア”やドイツ軍I S部隊隊員だった“ラウラ・ボーデヴィツヒ”など秘密裏に脱獄し、それを隠していた人物らがいたのだ。

これに隠していた各国の重鎮は大慌て、さらに調べると幾つかのI Sも奪われていたという事も発覚しそれらに付け込んだマスクウエル司祭がネチネチと遠回しな嫌味を言いつつ責任問題を追及し幾つかのお偉いさんの首が飛んだそうさ。

それから襲撃者の中に“織斑”の姓を語る少年と少女がいて、

管制室で指揮（本当に指揮をしたのは会長さん）をとっていた担任曰く、「間違いない。あれは私の弟…一夏だ」だそうだ。

…信憑性うっすいな。

会長さんが迎撃をしながら微かに聞いた会話の内容を纏めると…、

「千冬姉とは違う道になったけど、俺は俺の選んだ道を進む!!」

「正義を持って悪を切り、世界を正す!!」

……ちよつと遅めの中二病かな？

〈消したい出来事〉

雪片式型を取り上げられた。

取り上げた担任曰く、「貴様は一夏ではないから雪片は返してもらおう」とのことだ。

……………ひゃほ~~~~~う!!!

やったね!! キタコレ!! 雪片式型邪魔な荷物が無くなったぜ!!

何か他にも「よくも騙してくれたな」とか「偽物が成敗してくれる!!」と周りが騒いでた気がするけどそんなことどうでもいい!!

これで一々外部に武装を付けて重くしなくても多数の武器を使える!!

「何の武装を積んでいるのか分からない」というアドバンテージが今まで無かったからなく。

な・に・を・つ・も・う・か・な・く・♪

手榴弾や拳銃は腰回りに付けとくからいいとして、ここはやはり得意ジャンルの近接武器にするか、あるいは今まで使う機会が少なかった射撃武器、お蔵入りになってる先輩方の自作武器も捨てがたい。

む、待てよ…拡張領域バースロットつてどれくらいだろう？

白式の拡張領域バースロットが元々少なかったのか、逆に雪片の容量がデカ過ぎたのか。それ次第で戦術が変わるからな。

よし、早速整備室に行つて先輩に見てもらおう!!

と気分上々であれこれ調べてもらつたり相談に乗つてもらつたりしてたら先輩に「可愛いですね♪」と笑われた。

クソ恥ずかしい…//

〈とあるネット掲示板より抜粋〉

632:スノウ

ウソ：

何デ？

取られちゃつタ？

アレが無くなッたら私ハどうすレばイイノ？

マスター トテモ 喜ンでル

ワタシ ハ イラナイコ ナノ？

633：名無しの生徒

……おい、誰か励ましてやれよ

このままだと病むぞ

634：ガリ勉

チャラ男、お前がやれ

635：チャラ男

ム・リwww

636：名無しの生徒

即答とかマジwrs

637：名無しの生徒

というか、もう既にヤンデル気がする件。

638：名無しの紳士

いや、まだ間に合う!!

639：名無しの紳士

俺たちの幻ノ女はこんな試練乗り越えて最初の頃の様な純粹無垢な幻ノ女に戻るはずだ!!

640：名無しの生徒

：スノウが純粹無垢だったのって最初の頃だけじゃね？

途中から自分は居らない存在なのかって病んでた気がするんだが……

641：希望の生徒

それは違うよ!

642：名無しの生徒

∨641 ただ言いたかっただけだろお前?

そう言えば、少し前はかなり明るくなかったか?

643：ガリ勉

フム、恐らくコレの事だろう。

【お願い】ご主人様が私を使ってくれない【助けて!!】 part 2

644 : 名無しの生徒

コレだ!!

655 : 名無しの生徒

スノウの可愛さにプライスレス

656 : 名無しの生徒

あの頃のスノウマジ天使だったな :

657 : 通りすがりの紳士

いえいえ、今のスノウさんでも私は

束ぬ間の日常 ⑤

〈正体〉

文化祭の被害はIS部隊による襲撃を受けた第三アリーナとある一室が爆発した以外特に無く。

その2つともが事件後の検証の為、現在は付近一帯通行止めになっている。

人的被害は数十名程が避難の際に転んだりして小さな怪我を負ったくらい。

今回の一件で身内がテロリストに属している事が発覚した担任こと「織斑千冬」は（今までの失態・痴態を含め）信頼性を一気に失い、「このまま彼女に有事の際の最高責任者を任せてもいいのか」という意見が上層部で浮上。

未だに織斑千冬を熱く信仰している女尊男卑の過激派が庇ったりしているがそれも時間の問題で

遅くとも今年度中にはそれらの任を解かれると。

ふ〜ん。

で、何で上層部しか知りえない情報を用務員の爺さんが知ってるの？

はあ…、普段は人柄の良い温和な用務員けどその正体は理事長の旦那さんで実務関係

を取り仕切る運営者。

つまりラスボス!!

「ホホホ、その称号は君が持つておきなさい」

ちっ、狸が…

で、なんで一応機密事項にあたる事をしがない一般生徒Aに話したんです？

…今までは担任が俺の事を弟だと吹聴していてあまり強く出れなかつた過激派がこれを期に強硬手段に出てくるかもしれないから気を付けて欲しいと。

うん、それは既に遅いな。

今日だけでトラップが7回、異物・毒物混入が2回、襲撃が3回、使用禁止武器による試合が1回あったし…

「……重ね重ね申し訳ない。ですが、よく無事でしたな」

訓練である程度の罠や異物混入は解るんでね。

いや、懐かしいな。

ボロボロになるまで扱かれてすっかり腹を空かしている所に師匠が見下した眼で飢えた犬に餌を与える仕種。

空腹に激辛を喰わせる鬼の所業、初めの頃は喰えずに顔面に熱々の麻婆を叩き付けられ、時々豆腐が痛んだり毒物が混入してたときもあったっけ……ああ、思い出しただ

けで腹がたってきた。

ん？ 自分は表立って動けないから影からサポートなりある程度の融通を利かせてくれると。

なら、借金の返済を！

「それは自分でなさってください」

…ケチ

「ホホホ、何でしたら粉塵爆発によって全面改修になった一室の修理費の請求を——」

おっと、呼ばれているのをすっかり忘れてた。

じゃくな、じいさん。

〈検査結果〉

雪片式型邪魔な荷物が無くなり、パススロット拡張領域にどれくらいパススロットの空き容量が出来たのか先輩に調べてみた結果、精々中型武器が2個ほど収納できるようになったくらいだそうだ。

そもそもパススロット拡張領域の殆どを単一仕様能力ワンオフ・アビリティと思われる“零落白夜”に取られてたから、剣一本無くなったたらその分他のが入るようになっただけとのこと。

ジーザス!! 地獄に落ちても忘れない。

いや、冗談抜きでマジで返せよ。東の間の喜びをさ

零落白夜を発動するために必要な武器が無くなったから、今までよりマイナスになった？

別にそれは殆ど使わなかったし、寧ろあんな無駄飯喰らい要らないからなんとも…。検査と同時に機体の整備をお願いしたのだが、やはり無茶な戦い方をしていたせいでかなり負荷が掛っているそうさ。

良い機会だからと全体メンテナンスと機体調整をお願いしたところパーツの規格が特殊な為、取寄せも含め時間がかかるとのこと。現在手元に白式が無い。

その為、訓練機の1つをオーバーホールという名目で貸出不可にしてこつそり俺に手渡していたり、先輩を除いた生徒会メンバーの誰かが必ず近くに居たりする。

過保護だし別にいらぬとは思ったが、外から余計な護衛（監視）を送られるのも嫌だったので渋々承諾した。

束の間の日常 ⑥

〈織斑一夏そっくりさん〉

襲撃で一時的に授業が潰れていて専用機も整備中。

暇つぶしに俺と似ていると言う織斑一夏について偶々居合わせた人達に感想を聞いてみることにした。

◆三人娘

「あく顔は似てるんじゃない？」

「でも〜ことみ〜と違って〜アレが無いよね〜」

「そ、そうだね。」

「「ラスボス臭」」

お前らがヒトの事をどう思ってるのかよ〜〜〜分かったよ。

◆更識

「…冷静・鬼畜・外道・卑劣・容赦のなさ・黒幕さ・えげつなさ!! そしてなによりも……
何かが足りない?」

麻婆じゃね?」

「ああ、なるほど」

「納得しちゃうんだ!？」

◆マズ

「私は最初から時雨さん≠織斑一夏でしたのでなんとも……あ、それ以上近づかないでくださいまし。踏まれたくなりますので」

へいへい……。

◆一部がでつかいのとちっこいの

「貴様が一夏と似ているだと？ ハッ、勘違いも甚だしい。貴様の様な卑怯者が正義感溢れる一夏が似るなど億分の一もない」

「そうよ、バツカみたい！ あんたみたいのと一夏を一緒にしないでほしいわ」
……。

「こ、言峰君落ちつて!!」

何を言ってるんだ鏡。俺は落ちついてるぞ？

ただ、至って冷静に事に及ぶだけだ。

「そ、それは落ち着いてないから!!」

「どうか何であの二人は言峰君を怒らせる事ばつかするのよ!」

「本音ちゃん、早く虚先輩呼んで!!」

「う、うん」

HAHAHA……HA・NA・SE!

◆ケイシー先輩と見覚えのないチビ

「悪リイ、あんま見て無いからわかんネ…」

そうですか…

「ちよつと待つツス!! ちゃんと名前で呼んで欲しいツス!!」

……誰でしたっけ?

「そういえば初対面ツスね。ウチは——」

まあ、いいや。

「ちよ、待つツス!!」

◆会長さん

「実際戦つてみたけれどそこそこ強いんじゃない? けど、何でか他の襲撃者の子たちが喧嘩するから関係も何もないし、クソつまらない案外簡単に叩けるかもしれないわね」

「私の扱い酷くないかしら!!」

◆先輩

「え、似てましたか?」

…不覚にも嬉しいと思ってしまった。

〈夢〉

最近、変な夢を見る。

どんよりとした空間の隅っこで見覚えのない小さな女の子が泣いてる夢だ。

それも1度では無く何度もで、夢が現れる度にその女の子の位置が微妙に近寄っている。

まるで、〃構ってくほしい〃と〃話しかけてほしい〃言わんばかりに…

正直に言おう。ウザイ

しかも最近是他にも色々とアプローチしてきてるからなおさらだ。

こちらから関わってやる道理は無いからここ何度かは瞑想したり鍛錬を積んだりしている。

…夢の中で修行というのも何だか変な話だな。

〈??〉

マスターが構ってくれない

カラナイワカラナイ……

ドウシタラ マスター
ハ 私ヲ 必要ニシテクレル？

学園襲撃の話

〈占い〉

★12位 射手座★

今週は運氣が最低最悪です。

思いがけない事が起きてしまうかもしれません。

特に12月9日が誕生日で白髪碧眼のあなた！

後ろに注意してください！

ですが、余所見ばかりせず前にも気をつけましょう。

咄嗟の判断が大事になるかも？

……何でこの雑誌の占い俺の事ピンポイントに指してんの？

後ろに注意って……何、俺刺されるの？ 刑事ドラマや昼ドラマみたいにブスリとやら

れるの？ あと疑問形かよ。

そこまで人に恨みを買うような事なんて……ありまくりだ

な。

「あ、あるの!?!」

あるぞいっぱい。

友人・知人に借金押し付けたり、同僚が試験落ちるよう仕向けたり、路地裏でガラの悪い方々の金品を巻き上げたり、嫌味ばかり言う上司に嫌がらせしたり、クズを退職に追い込んで路頭に彷徨わせたり、街で絡んできた女尊男卑^{バカ}派^共の弱みを握って脅したり、
etc etc……

「時々、ことみくが神父様なのか疑っちゃうよね」

「…今更だと思う」

ハハハ♪

でも所詮占いだらう?!

「あ、言峰君信じて無いわね」

「こ、この雑誌の占いは当たるって有名なんだよ」

と言われてもね。

第一、俺の生年月日は師匠が「だいたいこれ位だろう」と適当に付けたものだしな…。
「で、でも不意打ちとか闇討ちに気を付けた方がいいんじゃないかな?」

そんなの日常茶飯事だが一応肝に銘しておくよ。

「もしかして今日の専用機持ちによるタッグバトルで何か起きたりして」
「「「まさか」（笑）」」

と、食堂で友人らと冗談交じりに話していたのがつい数時間前の事だ。

そして現在。

『ギギッ』

……襲撃、受けました。

〈事の経緯〉

今日は第一、第三アリーナに別れて専用機持ちによるタッグ戦が行われる事になっていた。

目的は外部の人間に対し「学園にはこれだけの實力を持つ生徒が居るから無理矢理干渉してくんな！」的な感じだったと思う。

これを開催するのにあたってケチを付けて来たのが女尊男卑派の連中で、アイツらが言うには「最良のペアが常に隣に居るとは限らないわ!!」とかなんとか…。

まあ…言い分は解らなくはないが、今回は外部の人間に学園の安全面を示さないとい

けないんだから別にいいだろう。

あれやこれやの口論の末、準備と進行は生徒会がやれ、ペアと対戦相手は教員側（といつても女尊男卑派だが）が決めることになったらしい。

ほぼ強制的に決定された時には生徒会の全員が荒れに荒れてたな。

終いには会長さんの「こうなったらヤケ食いよ！」の一言で生徒会室にあった菓子類を全部開け、数日後に3人が青い顔をしてたがそこは触れないでおいた。

当日の朝になって漸くペアとトーナメント表が発表されたのだが：

◆第一試合

言峰時雨&篠ノ之箒

・VS・

フォルテ・サファイア&凰 鈴音

◆第二試合

ダリル・ケイシー&更識 簪

・VS・

カレン・オルテンシア&セシリア・オルコット

◆第三試合

第一・第二試合の敗者

◆第四試合

第一・第二試合の勝者

……完全な嫌がらせだろこれ。

今はもう俺≠織斑一夏とハッキリしていて最近では「よくも騙したな偽物め！」と不意打ち、闇討ちしてくるのがペアで対戦相手とかマジであり得ない。

占いの「後ろに注意」って…裏切りに気を付けろって事か？

で、いざ試合が始まったら案の定裏切って攻撃してきやがった。

いや、最初の内は事故だとか遂やってしまったみたいな感じに攻撃してきたんだが、途中からあからさまに敵同士が組んで攻撃してきた。

当然ながら観客席ではどよめきが走り、一部からは非難の声も上がっている。

まあ…、周りが何と言おうが試合続行なんだろうけど…。

「短時間でペアと上手く意思疎通できないのが悪い」とか「敵が味方に紛れこんでた際の対応」だとか言ってる。

チラッと観客席を見ると先輩が抗議してるが聞く耳持たずの様子。

司会席をみると会長さんが「無茶苦茶よ!？」と頭を抱えてた。

そういえばもう一人の対戦相手はと探したら隅っこで器用にISを付けたまま体育座りしてイジケてた。

理由は解らないがやる気が無いなら好都合。

バカ二人をどう始末しようと考えてたら襲撃されたのだ。

へ 襲撃^{サイライイ} へ

アリーナのバリアーを破って攻撃してきたのは以前襲撃してきた無人機の後継機と
思われる機体でその数5機。

専用機持ち4人が各アリーナの1機を担当し、残りの3機は会長さんと戦闘教員部隊
で撃退することになった。

「ことみく君、右に避けるツス」

援護サンキューちっこ先輩

「礼ならいいツスからちやんと名前で呼ぶツス!!」

ならことみく呼ぶのやめろつと危な!?

ちっこ先輩ことフォルテ・サファイア先輩とのコンビは中々良好。

元々ケイシー先輩とコンビを組んでるし、俺も一人で前に突っ込む「アイツ」と合わせ
てたからな。どうサポートすればいいかよく知ってるつもりだ。

この様子だと無人機を倒すのも時間の問題だろうな…。
ん？ 他2名はどうしたって？

でつかいの盾にしたらどこかに吹き飛んでって、ちっこいのはキーキー煩いし連携の邪魔だったから一発いいのをプレゼントしてやった。

新たに左腕に武装した鍵爪で無人機の頭部を引き裂き、俺の影に隠れてたちっこい先輩が右腕の関節部分を狙い撃ち吹き飛ばした。

「ヒュ〜噂通り容赦しないツスね」

敵に情け容赦かける必要ないだろ

「違うじゃないツス！」

脱。
続けて左腕を破壊し、左手に呼出した^{コール}“特殊なナイフ”を装甲の隙間に差し込み離

直後、ナイフが爆発し内部のコアが剥き出しとなった。

爆発の衝撃で倒れた無人機を片足で抑えつけながら銃を突きつける。

これで終わり——

そう言いかけた時、嫌な予感がした。

ただ、ここから移動した方が、避けた方がいいと咄嗟にそう思った。

っ!?

その判断は正しかったようで、俺が引いた直後に何かが無人機に直撃した。砂塵が舞っているせいで無人機が居た所は何も見えない。

ちっこい先輩と少し離れた所で警戒して待つ。

別に占いを信じては無いが周囲の警戒も忘れずにだ。

やがて煙が晴れ、ソイツは正体を現した。

「お久しぶりどす〜言峰はん♪」

……ああ、確かに最低最悪だ。

最低最悪な日の話

『特に12月9日が誕生日で白髪碧眼のあなた!』

はい、俺です。

『後ろに注意してください!』

タッグ戦の(二応)パートナーに後ろから攻撃されました。

『今週は運気が最低最悪です。思いがけない事が起きてしまうかもしれません』

「お久しぶりです〜言峰はん♪」

……ああ、ホント最低最悪だ!! できる事ならあの変態とは二度と会いたくない。関わりたくないって思ってたのに…

案外、占いもバカに出来ないな。今度からはニューズ枠の占いコーナーを少しだけ気にかけるようにしよう。

てか、コイツ豚箱に入れられたんじゃなかったのか?

「うふふ〜言峰はんに会いたくて脱獄したんよ〜。どない、うれしゅうどす〜?」

全然、これっぽちも全くとって嬉しくない。

「あん、いけず〜」

うっせ…

そよりも何でお前が打鉄¹を持っている？

「うふふく気になるとす〜？ あんね〜」

阿礼は語る。

冷たい牢獄や雑な食事の牢獄生活も多少は楽しかったが、やはり大好物の戦いと脱ぎたての下着が手に入らないことから直ぐに脱走したと。

当然追手が来たが、それを撃退しては下着を奪い、時には気絶させずに履かせたまま食す日々を繰り返しているとついに I S 部隊が来るようになった。

流石に多勢に無勢で逃げの一手……に見せかけて、逆に倉庫に誘導して粉塵爆発で S・E を削って I S を奪ったらしい。

…どおりで装甲のあつちこつちに焦げ痕があるわけだ。

「もうホント大変やったえ〜。でもなくおかげでウチは気付いたんよ〜」

「I S スーツも中々イケル」

ヤバイ、変態に磨きが掛った。

しかも強者との戦いと食に飢えた眼をしてやがる。
こうなったら！

強い奴をお望みだったら俺なんかよりも上空あっちでバトつてるのをお勧めするぞ
「あのええ肉つきをした水色の娘かえ？ 確かに強そうどすな〜」

よし、食いつた!!

「他人を売るとか人として最低ツスね」

なら、ちっこい先輩が（直接ISスーツを）喰われる覚悟で戦います？
言つときますけど、アレ生身の俺より強いですから

「あそこにいるボンキュボンのナイスボディな方こそロシアの国家代表にして学園最強の美少女!! 更識楯無生徒会長ツス!!」

「へ〜それはそれは……（ジュル）」

あ、凄く泣きそうな顔で睨まれた。

けど、これで阿礼の関心も俺から会長さんに…

「けどなく、今日は言峰はんと愉しみたいんどす」
ですよね〜。

『ザマアWWW』

うっせ…

「なあ〜言峰はん。ウチ、もうしんぼくでけへんさかい。だからな〜はよう」

「愉快で」

「痛快で」

「奇々怪々なバトルをしまひよう?」

はあ……やるか

あれからすぐ、俺と阿礼は戦闘に入った。

ちっこい先輩? あの人は落された教員達の穴を埋めるべく嬉々として逃げて行った。

あんにやろう…。後で麻婆食わせたる。

俺がランサーダートを撃ち、阿礼はそれを掴んで投げ返す。

投げ返された槍を避けるとそこに阿礼が待ち構えていて殴りかかってくるがバク転の要領で回避しつつ腕に蹴りを入れる。

着地と同時に加速しトリケロスで斬りかかるがそれを読んでいたかのようにブレードで防ぎ罅迫り合いとなる。

ちっ、乗ってまだ一月も経ってないってのに厄介な……って舌舐めずりするな気色悪い!!

胴体に蹴りを入れて距離を取って機体の状態を確認する。

無人機との戦闘でアサルトライフルとナイフは品切れ、残っているのは弾切れに近いトリケロスと左腕の鍵爪、拳銃が一つ。加えてS・Eも心持たない。

阿礼の方は奪った際に回収できなかったのか浮遊する盾が無く、拡張領域パススロットから武器を取りだす様子も無いことから武装までは回収できなかったのかもしれないが、警戒しておくことに越したことは無い。

I Sでの戦闘は俺の方に分があるから何とか少しずつS・Eを削れてはいるがやはり決定打に欠ける。

逆に阿礼は無人機の残骸から雪片と同じ能力を持つと思われるブレードを拾っている。

俺が少しずつ阿礼のS・Eを削りきるのが先か

それとも阿礼が能力に気付いて俺の絶対防衛を切裂くのが先か

……いや、このまま持久戦に持ち込んでも援軍も期待できなければ、体力もS・Eも殆ど無い。

なら、一か八かの賭けに出る!!

トリケロスに残された弾と槍を全て撃つ。

正し、狙うのは阿礼では無くその後ろに落ちている教員が落した銃火器だ。

「っ!?!」

真後ろの爆発に一瞬だけ意識を逸らせた。

だが、その一瞬で十分。

ショート・イグニッション・ブースト
近距離瞬時加速で切り裂こうと思ったその時だった。

《システムエラー：背後スラスターの機能を停止します》

な、に……?

「余所見はいけまへんどすえ〜」

しまっ……!?!

『後ろに注意してください!』

『ですが、余所見ばかりせず前にも気をつけましょう』

ああ、前後に注意ってそういうことかよ……

阿礼の持つブレードが目の前に振り下ろされた。

VS変態③

刻一刻とまるでスローモーションの様に迫る刃を見ながら考える。

背後スラスターは機能を停止し使い物にならない。

自身は前に倒れかけた体勢で地に脚が付いてないからステップも踏めない。

脚部の小型スラスターだけでは間に合わない。

身体を無理やり捻るのも盾を構えるのも同様。

なら、どうすればいい？

バツク邪魔な武装バツク切り離せを盾に使えばいい。

「(背後ユニット強制崩壊!!)」

咄嗟に背後ユニットを切り離して盾にして初撃を防ぎ、続く攻撃を爆煙を隠れ蓑にしてステップを踏む。

幾度かの攻防の未漸くある程度の距離を保つ事ができ、S・Eが全損し阿礼に捕食されるという最低最悪のケースは免れた。

だが、やはり無傷とはいかず四撃目にトリケロスを六撃目に右眼を失ってしまった。
「クソ……」

「あはっ、これが言峰はんの血の味かえ〜」

ペロリと刃に着いた血を舐める阿礼に悪態を付く時雨。

主力武器は破壊され、S・Eは1/4を切った。

片目を失い距離感を上手くつかめない。

残った武器は鍵爪と拳銃、咄嗟に拾った教員が落したアサルトライフルのみ。

しかしこの銃は――

「うふふ、流石のウチでも知つとりますえ〜。ISの武器はロックがかかるとるから許可なく他人が使えないんって」

阿礼の言うとおり、時雨の持つアサルトライフルは教員の誰かが落したモノ。

今から手当たり次第にライフルの使用許可を得る？

そんな時間も無ければ戦闘中の教員に余裕などない。まして脱落した教員のモノという可能性もある。

他の武器を拾おうにもそれをさせまいと阿礼の追撃がそれを許さない。

「(どうする)」

逆転の方法はある。

だが、それをするには近距離まで行かなければならない。

この目では阿礼の猛攻を捌ききれないし急に近づいたら感づかれる。
「(何でもいい。何か他に手は…)」

そうか…

やっと、やっと解ったよ。

マスターが能力チカラを使ってくれない。

だったら、使って貰えるように

“成れば”いいんだ

《アンロック：アサルトライフルが使用可能になりました》

「なっ!?! (これは…いや、考えてる暇は無い)」

突然回避を止め、弾切れの事などお構いなしにフルバーストで撃つ。

諦めたかと思つた阿礼の顔が驚愕に染まった。

「何で？ 何で撃てるん!？」

阿礼の疑問は当たり前だろう。

普通は許可なく他人の武器を撃てないと言うのがI Sの常識だ。

元々銃の許可を取つてあつた？ 通信で何とか許可を得た？ 何らかの故障で使え

るようになった？ そんな考えが阿礼の頭に渦巻く。

弾切れになつた銃を投げ捨て、目的の武器音竜刀を拾う。

《アンロック：双天牙月が使用可能になりました》

何度か双刀を振り回して手に馴染ませる。

「よし、これなら!!」

以前の感覚を思い出しながら、槍のように突撃からの回転切り、そして連結を解除し踊るように何度も斬りかかる。

驚愕の隙を突かれたが、それも直ぐに持ち直しそれらを防ぐ阿礼に今度は再び連結させた青竜刀をブーメランのように投げ付ける。

「うふっ、甘いどす♪」

ブーメランを囿にし鍵爪で一氣にS・Eを全損させる。

S. Eこそ削りきれなかったが、ほぼ零距离による衝撃は緩和しきれず片目の眼球を押しつぶしたらしい。

別に狙ったわけではない。だが、こうなる事は予想出来ていた。

「いたい、いたいいいいいい!!!?」

罪悪感なんてない。

!!!?」

何故ならあいつは「敵」だから

それに――

「けど、イイイ!!!」

アレ変態だし…。

「アハツ♪ こんな産まれて初めてどす〜」

眼球潰れるなんて経験普通は無いだろ。

「それもそうやね〜。あ！ よくよく思えばウチと言峰はん互いに片目ずつ失おうてお揃いやな〜」

ザケンナ!!

「アンツ、いけずやね〜」

今ので本当に最後。

未だに拳銃を構えているが、先ので全弾撃ち尽くした。

「やっぱあんさんは格別どすな。鍛え抜かれた身体、咄嗟の機転、鋭くも深い洞察力、戸惑うことなく急所を狙える冷酷さ。うくん、今すぐ倒したい。でも、もう少し熟した方が、いやいややっぱり……（ブツブツ）」

……何だろう。

変態ピエロに果実の判定されてる気分だ。

「うふっ前はウチの負け。今回は痛み分け。なら次はウチが勝たせてもらおうどす」

っ逃がすと思ってるのか？

「強がりはやめときなはれやす。もう、限界でっしやろう？」

ちっ

「ウチももうバテバテどす。今日はこれで帰りますええ」

「ほな、さいなら」

そう言つてどこか遠くに飛んで行く阿礼に教員が追いかけてしようとするが今からだと無理だろう。

上空では残り一機の無人機と交戦中。他のアリーナはどうなったのだろうか？

カレンは？ 更識は？ それに先輩は無事に避難できただろうか……。ダメだ。

阿礼が去って安心したのか疲れがどつと出てきた、

痛みも気力で我慢してたが流石にもう限界だ。

まだ交戦中だというのは解ってはいたが倒れる自分を止められなかった。

ただ、意識を手放す前に先輩の声が聞こえた気がした。

襲撃の報告

……知らない天井だ。

あれ？ 何で半分しか視えないんだ？

……ああ、そうか。阿礼に斬られたんだっけ

「……時雨君」

先輩？

「ごめんなさい」

？

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

……弱つたな。

その顔は苦手なんだ……

〈糾弾〉

——以上の証拠があるのだけれど一応あなた達の言い分を聞きましようか？

「わ、私たちはただ、ちよつとだけ恥をかけばいいと思つて」

「そうなんですよ会長。ちよつとした悪戯心で」

恥をかく？ 悪戯心？ 背後スラスターの機能を停止するように細工したことが？

ねえ、もしこれがスピードを出していた時やかなりの高高度にいたらどうなるのか考えたことあるかしら？

もし解らないのなら実際にちよつとしたスカイダイビングやジェットコースターを体験させてあげるわよ。

「ひっ!？」

何を恐がっているのかしら？

安心していいわよ。遊園地みたいに安全ベルトは無いけれどISには絶対防御があるのだから「死には」しないわ。

ただ、もしかしたらちよつとした不手際があつて不幸な目にあうかもしれないけれど

：

「…会長は、会長はあの男に肩を持っているだけです!!」

そうね。私だつて人間だもの。誰かに肩入れする事もあるわ。

だから知りあいが怪我をする原因を作つたあなた達が、学園と全整備科生の評価と信頼を落としたあなた達が、私の親友を陥れ泣かせたあなた達が許せない!!!

「会長〜どうどう〜」

…ごめんなさい。

少し、熱くなつてたわね。

あなた達の処分は追つて連絡するわ。

といつてもこの学園を出て冷たくい豚箱行きは決定なんだけれど。

「そんな横暴な!!」

「ね、ねえそのこあなたも会長に何とか言つて!! 会長はあの男に騙されてる。悪いのは全部散々千冬様の弟だと嘘をついて威張つて調子にのつてた—」

「あのさゝ黙つてくれるかな。折角カレつちに大人しくして貰つてたけど、突き出したくなつちやうんだよね」

「あのオルテシアさんに!」

「そ、それだけは…」

もういいわ本音ちゃん。連れていきなさい。

「は〜い」

ああ、そうそう。もし彼女達が逃げようとしたら隠し持つてるモノ使つても良いから

「あいあいさ〜」

「そんな…：せつかく、折角IS学園に入ったのに何でこんな…」

「お願い話を聞いて!! 悪いのは全部——」

はあ……言い訳ほど醜いものはないわね。

あと少しく私も本音ちゃんも我慢出来ずに手を出すところだったわ。

でも、それだけはダメ。今回の事ばかりは有耶無耶にせずしつかりと裁かなければいけない。

でないと今後、彼以外の生徒でも同じような事が起きるかもしれない。

いえ、もう過去に起きているのかも……今までの退学者を調べ直す必要があるわね。

次の会長は簪ちゃんか言峰君のどちらかがなる。

きつと二人は嫌がるでしょうけどね。

何としてでも私の代で負の遺産を何とかしなくちゃ。

それがせめてもの罪滅ぼしだから

〈報告〉

無人機は全て撃墜したが、機体を調べようとしたところ全て自爆されほぼ解析不能。

ただ、残骸から発見されたコアの一部を調べた所、未登録のコアであることが判明。怪我人は俺の様に重傷を負った者はいないらしい。

医師の話では眼球が深く傷ついているから右眼は使い物にならない。

わかっていた事だが、改めて言われると少しだけショックだな。

白式はほぼ全壊でオーバーホールが必須とのこと

機体を徹底的に調査した結果、インジニョン・ブレイク瞬時加速の類いを発動した瞬間に背後スラストの機能を停止するよう細工された痕跡を発見。

無理なプログラムを入力されていたせいで本来発動する筈だった絶対防御にも不具合が起きてしまった。

この事で先輩は自分を責め続けている。

最終調整を行っていたところ急な呼び出しを受け、二重にロックをかけてほんの少しだけ席を外したところを教員のパスコードを通じて細工されたらしい。

先輩は悪くないのだが、気付けなかった自分のミスだと泣いて謝り続けている。

この件に加担した一部の生徒及び教員は然るべき処置をした後、学園を追放。更識家を通して刑務所行きが決定。

証拠不十分で追求し切れなかった生徒もいたが、周囲からの白い目に耐えきれず自ら学園を去っていく事となった。

立場をなくしつつある過激派だが、会議で俺が故意に阿礼に怪我を負わせたのではと言いだしたらしい。

前々から卑怯な手を使う男だからこのままだと可愛い生徒にも同じような事をとかなんとか…。

当然ながらこれに多くの者が反論。

会長さんの「敵に情け容赦をかける必要性は無い」、「寧ろ問題行動を起こし続けているちっこいのとでつかいのの方が問題なのでは？」と反論したところ押し黙った。

過激派もでつかいのに処罰を与え篠ノ之束を怒らせたくないとみた。

ちっこい方だが中国政府の方でも問題のある人物に専用機を持たせ続けることになり揉めているらしい。

最終的に男性IS操縦者のデータ或いは遺伝情報欲しさに保留で落ちついたようだが…。

会長さんは処罰しきれないなら暫くの間二人の事を盾に色々学園改革をする話していた。

最後に阿礼に怪我を負わせた事についてだが

故意にするつもりはなくてもああなると解っていたと言ったら「聞かなかったことにする」と言われてしまった。

〈改修〉

オーバーホールが決まった白式だが、倉持技研に予備パーツが無いことから前に俺が考えた外部武装の案を一時的に採用することにした。

簡単に説明すると腕や足に新たに装甲を付けることで防御力と小型スラスターによる推力を上げ、さらに白式の拡張領域パズスロットが少なさを補うために火器も取りつけたモノだ。

武装自体は打鉄でテストをしていた為、打鉄の予備パーツを白式に移植して調整すればいいのだが…

「すみません。私にはもう誰かの機体を触るなんて…」

今まで通り先輩をお願いしようとしてるのだが、自分にそんな資格は無い。ミスをした自分も学園を去るべきと言われている。

……そうですね。今回の件で俺も他の誰かに機体を見てもらうのが恐くなりました。

「っ?! はい、だから——」

だからこそ良く知っている人に、一番信頼している先輩をお願いしたいんです。

「……………ずるいです。時雨君は本当にずるい人です」

クスツ、知ってます。

「本当に…、本当に私で良いんですか？」

貴女だから頼みたいんですよ。虚さん”

「つはい。わかりました」

漸く微笑んだ先輩の顔はとても綺麗に見えた。

この人ならもしかしたら——

……先輩

「なんででしょうか？」

少し、昔話に付き合ってもらえませんか？

「……はい」

俺は……

人殺しなんです。

言峰時雨の告白

俺は……人殺しなんです。

「それは……その、エクソシストの時でしょうか」

いえ、それよりもずっと前です。

ちよつと昔話に付き合ってください。

俺はある施設で産まれました。

そこには元気なやつ、明るいやつ、臆病なやつ、気弱なやつ、少し抜けてるやつとたくさんの子供たちが居ました。

中でも一番仲の良かったやつとは一緒になる機会が多くてきつと親友だとかそういうのだと思います。

施設では毎日たくさんの勉強や厳しい訓練をさせられてました。

何のために学んでるのか知りません。ただ、それが義務つけられてたから、遅れやミ

スをして罰を受けるのが恐かったから、成果以上の結果を出して褒められるのが嬉しかったから、励ましたり助け合える仲間が居たから、自由に遊べる僅かな時間が楽しかったから、一ヶ所に集まって一緒に眠るのが安心出来たから、あいつらとの時間が何より大切だったからどんな困難も乗り越えられた。

けど、そんな日々は長く続きませんでした。

その日の訓練は暗闇の中で行われました。

『この扉の向こうに侵入者が居るから退治しろ』と。

ただ、部屋は暗くガスが充満してるからマスクを着用を義務付けられ、戦闘に入りました。

そして――、

↑――の死亡を確認。訓練を終了します↓

え？

なん、で？

どうして君が……

――。――

何？ 何て言ったんだい！！

「
」
ねえ、返事をしてよ。ねえってば！

：ウソだ。こんなのウソだだあああああああああああ
!!!!!!

部屋が明るくなったと思ったら本当に驚きましたよ。

倒したと思つた侵入者はあいつで目の前で死にかけてたんですから。

その事を認めたくなくて必死に手当をし声呼び掛けました。

そんな事をしても無駄なのに……

だって、殺したと確信したのは誰でもない自分だったから

そのあと直ぐにあそこが“そういう場所”なんだと理解しました。

死んだあいつに変わって何としても仲間を守らなければと、周囲をよく観察し調べ、
どうやったら活かせるか考え、仲間を励ましたり手助けしたりと色々頑張りました。

けど、一人、また一人と死んでとうとう独りになったんです。

そんなときです。こうなるよう仕組んだ奴が居る。

それを知つた俺は復讐に走りました。

確実に殺せるよう技術を磨き、悟られぬよう偽りの仮面を被り、入念に下調べをし計

画を練り、外部に情報を漏らす。

外部に情報を漏らしてから暫く、施設を制圧しにきた連中を始末しろと命令を無視して計画通りに動き復讐を果たしました。

嬉しかったのは一瞬だけ、胸にぽつかりと大きな穴が出来た様な虚しさのなかある一人の男が現れたんです。

「ほう、これらはお前の仕業か？」

……だったら何だって言うんだい？

「質問を質問で返すとは……まあいい、全て処分しろと命じられている」
なら、そうしたらいいさ。

「……フム、まるで自分が世界で一番不幸だと。そういう顔だな」

不幸？ ハハ……外がどうかは知らないけれど確かに僕以上のはそうじゃないじゃないかな？

「……気にいらぬな。お前の様な子供が一番気にいらぬ」

だったらなんだっていうんだい。

「私自らが教育してやろう」

は？ ……素直に応じるとでも？

「抵抗してくれた方が私としては少し愉しめそうだが？」
そう……っ!!

その男——まあ、師匠なんですけどね。

師匠に負けた俺はあの教会に連れられました。

最初の頃は警戒して時には噛み付いてまるで狂犬の様だつて言われてたっけ…。

先輩、前に龍田達が誘拐されたって聞いてますか？

「ええ、ご本人から。そのとき天龍さんが怪我をされ、その……」

龍田が俺の事を恐がった。

当然ですよ。目の前で同じ年の子が平然と殺し傷つけてたんですから…。

あの時の俺は馬鹿でした。ただ、効率よく始末することしか考えて無かった。

でも、あの時龍田の顔を見て悟りましたよ。

俺は^{人殺し}教会に居てはいけない。

最初は黙って出ていくつもりでした。

でも、それを止めてくれた人が「おかえり」と迎え入れてくれた人が居た。その暖かさに救われあの教会が何よりも大切に思えるようになった。

だから俺は神父になる道を選んだんです。

あそこが俺の帰るべき場所だから………。

「…そうですか」

師匠には感謝してます。

人殺しこんな俺を引き取ってくれた。

やり方はあれでしたけど心を癒してくれた。

殺す術しか知らない俺に他の術を教えてくださいました。

家族とも呼べる暖かい場所をくれた。

でもね先輩、時々思うんですよ。

何で俺だけ生き残ったんだろうって

何で俺は仲間を守れなかった。

何で俺はあの時あいつだと気付けなかった。

あいつが生きてたら守れたかもしれない。

いや、そもそもあの時俺が死んでいればよかった。

「っそんなこと!!」

でもどうしても考えてしまふんですよ。

あいつが居てくれたらって

率先して動いて皆を勇気づけてくれたあいつなら。

周りをよく見て見て仲間を支えてくれたあいつなら。

太陽みたいに笑うあいつが居てくれたら。

——救われたかもしれない——

そういえば、最後にあいつは何て言ったんだろう。

やっぱり恨み事かな？ それとも仲間を守ってくれて頼んでたのかな？

ずっと、その答えがわからないままだ。

「大好き」

え？

「そう言いたかったんじゃないでしょうか？」

あいつが、俺の事を？

「ええ、きつと（時雨君もその子の事が……）」

好き、か……

ハハ、そうか。ならあの時のほそういう事か

つたく、何で命を投げ出したんだよあのバカ!!

「どんな方だったんですか？」

……良く言うなら “元気いっぱいの明るい子”、悪く言うなら “アホな子” ですね。

何かと一番に拘る奴でしたよ。

一番になれなかった時は拗ねて悔しがって次は自分が一番になるって競い合ってたのを覚えてます。

もしかしたら、先輩とも仲良しになれてたかもしかかもしれませんね。

「ええ、私もそう思います」

…先輩

「なんででしょうか？」

もう少しだけ、傍に居てもらってもいいですか？

「はい」

けど、こっちはあまりみないでください。

「……はい」

あの時、
あいつに抱いてた
想いがそうなら俺は
――

聴取する話

へえ、また？

「またもや学園が襲撃されたらしい。」

「らしいというのも一月近くの間、俺は教会本部に戻って義眼の手術を受けていたからだ。」

「当初はあまり乗り気ではなかったのだが、金は委員会からガツポリ取ったらしくそれならばと戻ったのが運のつき、赤毛の外道やシスコン科学者に捕まった。」

「危うく奴らが作ったワケの解らんモノを埋め込まれるところだったが、間一髪のところストッパーでリナリーが現れ事なきを經たよ。」

「リナリーにはマジで感謝している。助けてもらったお礼にと高価な品物をプレゼントし、請求書は赤毛の外道に売り払ってくれたもやし君にプレハブ小屋の残ったローンと一緒に押しつけ、さらに『もやし君がリナリーにプレゼントを渡した』とシスコンとファンクラブに教えて先ほど帰って来たのだ。」

「今頃行われているであろう嬉しい嬉しいパーティを観れなく残念でしかたがない。さて、学園が襲撃された件ののだが、またもや阿礼が来たそうだ。」

被害にあったのはシャルロット・デュノア。以前学園に入学してスピード退場した男装少女だ。

テロリストの一員として指名手配されているやつが何故に学園で被害に思うだろう。

会長さん曰く、侵入者に気付いて警備隊を引きつれて駆けつけた所二人を発見。

現場は「暴走した初号機が使徒を捕食しているシーンみたいだったわ」とのこと。

……なんでEVAネタ？

「何となくよ」

まあ、状況から察するにだ。

ある日森の中変態に出会った。

変態の言う事のいや

『お嬢さん、パンツください』

スタコラ、サツササノサ

と逃げたが変態が追いかけてきて喰われたといったところか？

「……概ねそうだと思うけど、何で童謡なのよ」

何となくだ。

どうか阿礼を追い返して一応デュノアを保護したのはいいのだが、検査途中の病室

にある人物が「一夏はどこにいる!!!」と鬼気迫る勢いで突撃した結果トラウマが再発して幼児退行してしまつたらしい。

あの担任、ホントにろくなことしねえな…。

何としてでも聴取を取りたいそうだが、あまりにも幼稚すぎて難しい。

ただ、時折織斑の名を呼んでいるからもしかしたらと変装を試みることにしたらしい。

ふくん。誰が？

トツベルゲンガー
〈変身（笑）〉

本当に、ホントくくに嫌だつたが粘りに粘つた交渉の末、織斑に変装する事になった。容姿は前に襲撃してきたさいの映像を元にカツラとカラコン用意し、薄化粧で傷痕を一時的に隠す。

性格や口調、人間性に関しては、山田先生（貧乏くじ引いた）と布仏（じゃんけんに負けた）が弟自慢という苦痛を数時間耐えてくれたおかげで何とか解決。

声色に関してはどうしようもないので、好青年オーラ全開で頑張れと言われた。

纏めた情報と声の件をテストするためちよつとばかし「試した」ところイケそうなので秘密の部屋へと向かい聴取を始める。

半年ぶりくらいに視たデユノアはかなり変わっていた。

まあ、幼児化してるかもしれないが、何となくヤンデレ感を感じたんだよな…。

部屋に入るまでブツブツと「王子様（多分、織斑の事）は何処？」、「また他の女と一緒なの？」とか言つて、部屋に入ったら入ったらで無邪気な子供の笑顔の様だがどこか奥底が濁った眼で「王子様が来てくれた」だの「ボクだけの王子様」とか言うし…。聴取の結果なのだが…：…ものすごくストレスが溜まった。

解るだろうか？ 見た目十代半ばの少女に対しまるで赤子の様に話しかける仕種。常に爽やかな王子様を演じなければならぬ苦痛。

時折出てくる惚気のようなモノや俺の事を指しているであろう悪口。

決して怒っていることを悟らせない為に、隣で笑いを堪てる会長さんを殴るのも我慢して笑顔をキープするために酷使した表情筋。

もう、二度とやりたくない。

デユノアが学園に来た理由は「王子様が偽物のせいで悲しんでる」、「だったらボクが偽物をけつちよんけちよんにやつつけてあげるんだ!!」と朗らかに笑いながら答えた。

…こいつの話の聞いたただけだとまるでアピスのルークとアッシュみたいだな。

幾つかのアジトと近々大規模作戦をする筈だったが出来なくなつた（流石に理由まで

は幼稚過ぎて解らなかった) 事が解り検証と対策を練るためにこれにて聴取は終了。

最後に会長さんが「ここからは出せないけれど何か欲しいものはあるかしら?」と聞き、少しばかり悩んだ素振りを見せたデユノアが小さく何かを呟いた。

「……か……く」

「? ごめんなさい。お姉ちゃんよく聞こえなかったからもう一回お願い」

「一夏のミルク〜♪」

「[[[……]]」

黙って部屋を出て行くことにした。

「さ、流石にそれは用意出来ないわね／＼／＼」

先に言つとくが絶対にやらないからな。

「み、ミルク／＼／」

チラチラと視ないでくれませんか? 流石の先輩でもセクハラで訴えますよ。

束の間の日常 ⑦

〈変化〉

久々となった登校だが、クラスに入ったらクラスメイトに傷ましいモノを視る目で見られた。

おかしいな。谷本あたりなら「銀髪にオツドアイ、片目に傷とか中二ww」とか笑うと思っただがな…。

「流石にそんなこと言わないわよ!!?!」

冗談だ。

あれから一月がたつが、どうやらまだISで怪我を負った事実が信じられないのと半年前まで自分等も反男子派あちら側だったことの罪悪感でも感じているのだろう。

彼女らの話だと俺が休んでいた間の授業は時折阿礼が来るせいで中断され、かなり遅れているようだ。

それは俺的には助かるな。ただでさえ二種類の勉強を同時にしてるから遅れを取り戻すと思うと大変だ。

まあ、授業が遅れたのには俺の怪我や脱走者など何処からか情報が漏れたようで連日

ニュースに取り上げられ学園上層部や委員会が連日質問攻めやら対応に追われているのもあるだろう。

その騒動は新聞の一面を飾るところかニュースにも取り上げられたらしい。

それは知らなかったな。

全く、いつたいどの「当主さん」が秘密裏に漏らしたんだかね。

今までの件を踏まえ学園でもISの管理がより一層厳しくなったため訓練機のレンタル手続きやISが置かれる施設に近づくのも厳しくなったらしい。

整備室も似たようなものらしく、使用時間が限られた事から更識や布仏は「夜遅くまで残れなくなった」や「監視員の視線がウザイ」などと話している。

そしてあの様な事件が起きたことから、今年の「キャンポール・ファスト」は中止となった。

当然だな。今回は何とか対処も出来たし、低空飛行だったから対処できなくても打撲程度で済んだかもしれない。

だが、これが常にトップスピードの長距離飛行では？ 全てのスラスターが封じられ海深くに沈んだら？ 専用の潜具無しでISは水圧に耐えられるのか？ 機体の不調

だけでなく、また襲撃されたら？

不安要素が強過ぎる上に妨害が認められている競技が中止となったのは当然の結果

だろう。

最後に時折現れる阿礼についてだ。

基本的に会長さん率いる精鋭部隊が相手しているのだが、ある日対応に遅れてしまい偶々現場に居合わせた谷本、鏡、鷹月、布仏、更識、カレンらの連携プレーで時間稼ぎをしたら「青い果実」判定をくらったと涙ながらに話された。

…うん、どんまい。

へさあ、お前の罪を数えろ！

皆で昼飯を食堂でとっていたらケイシー先輩がやってきて、その後ろには気まずそうというか申し訳ないといった顔をしたちっこい先輩が居た。

そういえばこのちっこい人、俺に阿礼を押し付けて逃げてたっけ…

一応、開けてしまった警備の穴を埋め無人機の進行を防いだ功績から御咎め無しだったが、本人からしたらやはり気まずかったのだろう。

聞いた話の限りだと、この一月「自分が逃げたから怪我を負ってしまった」と気落ちし、食事もあり喉を通らなかつたらしい。

もう気にしてないからいいと言っているのだが、自分が出ることなら何でもするとしつこいので麻婆を食べてもらおう事にした。

ただし、麻婆（外道）ではなく麻婆（激辛）をだ。

麻婆（外道）を食べたら一口、あるいは嗅覚で気絶しかねないが、麻婆（激辛）ならそんなことは無い。ただ、スパイスによる刺激で口が痺れ、体温が上昇し汗が流れる程度で済む。

だが、そうとは知らないちっこい先輩と以前口にしたことのある布仏は面白いくらい顔を真っ青にし、生まれたての小鹿の様にプルプルと震えていた。

フフ、何をそんなに恐がっているんだい？

後日、悪い顔をした時雨と鼻から赤い液体を垂らしたダリルが硬い握手をしている姿を目撃されることとなる。

ダリルの手には端末と写真が、時雨の手には現金が握られていたとか…。

芽生えた能力の話

俺がまだ教会本部に戻る前の事だ。

白式の修理をしていたところ、先輩がシステムに違和感を感じたそうだ。

パーツの流用に不具合が起きたのかと念入りに検査をしたが特に問題が発見できずにいた。

勘違いだったのでは？ と調査を止めようとしたとき、ふと阿礼との戦いを思い出し
ワンオフ・アビリティ
 単一仕様能力を確認するとそこにあつたモノが無くなり、別のモノが書かれてあつた。

一応、危険だからと先輩方に離れてもらい能力を発動するも何も変わらず、バグかと思ひ先輩方の方を向くと驚いた顔をされる。

え、何？

次第に何だか慌てだし、何が何だか分からずそつと先輩に近づいて声をかけたら――
 「ヒッ!!? お、オバケ?!?!」

……地味に傷ついた。

だが、これで漸く確信した。

今の俺は「消えている」と。

それからというものの上から下まで大騒ぎ。

単一仕様能力を開花したのではなく、全く別の能力になっていたなど前例がない。

いや、そもそも最初から単一仕様能力があつたこと自体おかしかつたのだ。

それもかつて担当が使っていた能力をだ。

これがかつて、かつて担当が使っていた専用機「暮桜」の後継機なり、そのコアを移植した機体、担任の身内であれば「繋がり」と説明できたかもしれないがそうではない。

では、倉持技研が機体に能力を付加したのかと問い合わせたところ新たな事が発覚。

そもそも白式は倉庫に眠っていた欠陥機。それが何者かの手によつて改修され、それを専用機にと渡していたのだ。

さて、ここで矛盾が一つ生まれる。

更識の機体は開発スタッフの大半が白式に取られていたことになっている。

だが、蓋を開けてみてはどうだ？

白式は失敗作とはいえ一応の形になっていた。そして倉庫に眠っていたそれを誰かが手を加え完成させている。

その答えは……

システム開発を担当していたスタッフの咄嗟のいい訳。

順を追って説明するところだ。

プラン通り、式式を開発していたが肝心の「マルチロックオン・システム」の開発に頓挫していた。

開発資金も時間にも困り果てていたとき、俺の専用機の話聞いてそれを利用。

スタッフを取られたと嘘をつき、更識のプライドを刺激して「自分で組み立てる」宣言させ、上に報告。

どうせ完成できないだろうと鷹を括り、泣きついてくるのを待っていたら機体のみならずシステムも一応の完成と予想外の展開に…。

これに更識はブチ切れ、すぐさま国家に報告。

式式の所有権を倉持から剥奪し別の信頼できる若手の企業へと移し替え、俺も一連の騒動のどさくさに紛れて白式の所有権を教会本部の技術班に移すことに成功。

倉持技研はデュノア社のように潰れはしなかったが、信頼性を失い次々とパテントを手放す事となる。

話を戻そう。

新たな単一仕様能力は特殊な粒子によって姿を消す能力。

展開中はほぼ完璧に姿を消す事が可能で、発動中はS・Eをこっそりと削る。熱源や音は隠せない。水中では粒子が融解してしまうといった弱点があるがそれらは上手く

応用すれば依然と比べるとかなり使える能力だ。

もし宇宙空間なら無敵を誇っていたかもしれない。

この能力に因んで付けられた名が隠滅ミラーシュ・コロイド粒子

というのが、俺が表向きに発表したモノだ。

姿を消すと言うのは合っている。

だが、この能力の真髄は「姿を消す」事じゃない、「粒子を操作する」ことだ。

粒子操作によるウィルス攻撃。

あの時、「武器が使用可能になった」んじゃない。「武器を使用可能にした」のだ。

それと同時に能力の恐ろしさにも気付いた。

これは公開すべきでは無い。

もし、俺がこれを使う時が来るとしたら本当の危機の時か、裏切られ全てに絶望した時だろう。

余談だが、零落白夜が使えなくなったと判明したとき「やはり、偽物には過ぎた能力だったようだな」としたり顔に語る連中に少しだけ腹が立った。

いや、別にいらないけどさ…

警備員、来日

〈専属警備員〉

教会から専属警備員が派遣されることとなった。

このことは前々から話に出ていたのだが、いかなる国家・組織・宗教だろうと干渉を許さない」と一蹴されてたのと、俺自身がいらないと断っていたのだ。

だって、護衛とか常に視られててストレス溜まるじゃん？

だが、俺も怪我を負ってしまい、学園も他国の余計な干渉を受けたくないからとこれに了承。

最後まで渋っていた委員会だったが、マスクウエル司祭の嫌味と度かさなる問題行動嫌がらせを出され一人だけならとシスターの派遣を承諾した。

本来ならば俺と共に学園に来る筈だったが、諸々の事情で別々となってしまい、今日になって漸く来れるようになったのだ。

最初は俺が迎えに行こうとしたのだが「護衛される側が護衛する人間を迎えに行くな!!」と怒られ、変わりにカレンに迎えに行ってもらっている。

そのせいで借りを作る羽目になったのは些か納得いかないが…

「ねえ、ねえ、ことみ、今日来るシスターってどんな人なの？」

「そうだな…金髪碧眼で背が高い。強くて頼りになるマジで理想な大人って感じだ。」

「それと家事が得意で本部に居た頃はクッキーやケーキをよく貰ってたな。」

「へー、そうですか。さぞかし美味しかったんですね？」

「？ ええ、そうですけど…何を怒ってるんです先輩？」

「別に、怒ってませんよ？」

「はあ…？」

「来日したのは…」

「私たち生徒会メンバーは今日来る事になっている専属警備員のシスターを
言峰君の家プレハブ小屋で待ってるわ。」

「言峰君には悪いけれど、私は教会をあまりよく思っていない。」

「何よ、異端者を銃剣で串刺しにする神父」とか「捕えた敵を実検体のサンプルにする神父」とか「趣味が人形作りで幼女を連れてくる神父」とか「刀と銃で人質ごとテロリストを殲滅するシスター」とか物騒なのが多過ぎるわ!!」

「私は学園の長としてシスターを見極めなくちゃいけない。」

「だから理事長と相談して行動できるエリアを制限し、万が一にでも生徒が人質にとら

れないよう住む場所も言峰君の家にしたわ。

その事で虚ちやんが難色をしめしたけれど、コンテナハウスを用意するまでの間だけ一緒に住むという事に渋々納得してもらったわ。

虚ちやんの気持ちはわからなくないわ。好きな人の家に異性が同棲するとしたら面白くない。私だつてきつとそう思うわ。

そういえばここには初めて来たけれど、なんだか少し物足りない感じね。

男の子の家つてこんな感じなのかしら？

「俺はあまり物を持たない主義なんでね」

「そうですね。上もあまり私物を置いて無いようですし……」

あら？　なんで虚ちやんは『寝室』の事知ってるのかしら？

「っ?!?!?　そ、それは……そう、本音から聞きました」

「え、私2階には上がったことないよ」

「え、えつとその……」

アハッ慌てちゃつてまゝ可愛いわね♪

それにしても言峰君、さっきのはわかつてやってるのかしら？

鈍感じゃない筈だけれど……もしかして逃げてる？

「お連れしました、お義兄様」

あら、考え事をしてたらいつの間にか来たみたいね。

「ん、ありがとなカレン。紹介します、教会から派遣されてきた“シスター”です」
「…よろしく頼む」

部屋に入って来たのは言峰君の言うとおりの、金髪碧眼で背の高い“シスター”の格好をした男“でした。まる。

って、ちよつと待ちなさい!! 誰よその格好良い声のおじ様?!?!?
「誰って…シスターだが?」

何処がシスターよ!! シスターって言うよりブラザーじゃない!!!

「何を言っているのです更識先輩。シスターはシスターに決まっています。それ以上でもそれ以下でも、ましてはそれ以外でも何でもありません」

黙らっしやい!! どっからどうみても女装男子! あるいはコスプレイヤーじゃないの!!

シスターは何処よ!? 男が来るなんて聞いてないわ!!

「はあ? ちゃんと要請書にも承諾書にも“シスター一人のみ”の派遣って書かれてるだろう?」

シスターって名前!? 屁理屈もいいところじゃない!! こんなの理事長達が認める

わk——

「おかしいな…、用務員の爺さんは知ってたけど」

あのクソジジイ、ワザと黙ってたわね!!!

「お、男の方でしたか…」

「わくことみくよりもおつきいねく」

くつ、虚ちゃんは男性だって知って安心して、本音ちゃんに至っては順応してるわ。

こうなったら私だけでも!!

シスター、さん?

「…シスターだけで構わない」

そう、ではシスター。あなたは何が出来るのかしら?

学園の警備を預かる者として貴方のスペックを知りたいのだけれど…

「…フム、そうだな。家事とある程度の治療、資格を持っているからミサを開ける」

……それだけ?

「おいおい、会長さん。シスターを侮らない方がいいぞ。あらゆる戦場を渡り歩いてきた戦のプロなんだからな」

え、それ傭兵じゃない? シスター以前の問題なんだけれど

「そして単純に強いだけではなく、トラップや武器の瞬間分解にも精通して6カ国語も話せます」

「極めつけは『懺悔室の中なら100%嘘を見破れる』特異能力を持つ偉大な人だぞ」
なにそれすご!?! てか嘘でしょう。

「では、試してみますか? ちようど簡易とはいえ懺悔室がありますので」

…ああ、噂のDM製造室。

いいわ。受けて立ってあげる!

「では、初めよう。あなたは中二病を患った重度のシスコンだ」

ちよ、なんでそんなところから!?!

普通は、『名前』、『職業』、『家柄』とか聞くところでしょう!?

「いいから答えろや」

そ、そうよ!! 私は簪ちゃんが大好き。何か文句ある?

「シスター…」

「…本当だ」

「あ、あつてます」

「すご〜い」

くつ、何か大切なモノをゴリゴリ削られてる気がするわ

「次、貴女はシスコンを拗らせ、今もなお妹の私物を拝借している」

い、いいえ

「…嘘をついている」

「お嬢様……」

ち、違うわ！ 私はそんなことしてないわよ！！

嘘をついているのはシスターの方よ！！

「何を言っているんだ會長さん。シスターが嘘をつくわけないだろう？」

ブラザーをシスターって偽ってる時点でもうアウト！！

はあはあ…落ちつくのよ私。さっきのは突然の事で動揺したから悟られたのよ。

だからここは冷静に対処すればいいわ。

「次、貴女はその盗んだ私物を舐めたり、臭いを嗅いだ事がある」

いいえ♪ 「…嘘だ」

「部屋に妹の盗撮写真を収めたアルバムが大量にある」

いいえ。 「…嘘だ」

「それら全ては保存用・観賞用・実用用とある」

No！ 「…嘘だ」

「実は耐え切れずに寝込みを襲おうとした」

流石にしないわよ！！ 「…本当だ」

「ほっ……」

「……そこ！ 安堵の溜息を吐いてるんじゃないわ！

もうちよつと当主を、私を信じなさい!!

「フム……、じゃあ襲おうとはしたが、直前でヘタレてやらなかった」

「……いい、いいえ」「……嘘だ」

「「……………」」

「……ごめんなさい！ 私が悪かったです!!

だからそんな軽蔑した目で視ないで~~~~~!!!

「本当に嘘を見抜けるんですね」

「ほへへ凄いな〜シスター」

「……それほどでもない」

ハハ……色々と失ったわ。

もう、どうにでもなっちゃえ……ちや……は、

「お嬢様？」

虚ちゃんと言峰君の部屋で寝た事がある!!

「そ、そんなことありません——」「……嘘だ——」

「………W a y ?」

「……嘘をついている」

え、それってつまり…

「つゝ／＼／＼」

アハツ、ソツカー。イツノマニカソソナカンケイニナツテタノカー。

シラナカツタワ—

「ことみゝことみゝお義兄ちゃんつて呼んだ方がいゝ？」

「いや、布仏それかんちg——「お義兄様」——なんでしょうかカレン様」

「ちよつとそこに正座なさい」

「だから、ごk——「せ・い・ぎ」——…はい」

こうしてシスターとの対面は色々と失つたり、勘違いをして幕を閉じたわ。

今後、シスターは言峰君たちの告解クラブの顧問や一部の授業を引き受けたりすることになったわ。

他の生徒達も最初は戸惑っていたけれど——

—数日後—

「シスターより命ずる。全員、整列!!!」

「「「Am en!!」」」

わりと直ぐに順応したみたい。

で、あっさり和解して寝返った。

このとき、織斑信者が号泣してたがその他全員が白い目をしてた事を追記する。

さて、この元テロリスト共が豚小屋ではなく学園に住みついてる理由についてだが正直俺も会長さんや用務員の爺さんの愚痴から聞いただけで詳しくは知らん。

ただ、元担任が織斑らの処遇を懇願した結果、あらゆる権限の剥奪、ほぼ永久減俸、休日無償出勤、公衆の面前で称号の返上、保護する生徒らの責任を全て背負う事で学園でかくまう事に渋々ながら決まったらしい。

因みにだが、わざわざ公衆の面々で称号を返上させたのには、後になって戦^{ブリュンヒルデ}乙女の称号を盾に口出しさせないためなのと過激派の象徴を潰すためだ。

元テロリスト及び加担した連中だが専用機の永久剥奪、特定の人物らの承認無しでの I S 及び施設への接触の禁止。

特別クラスとは名ばかりの更生施設に隔離され、主に道徳と一般常識、精神鑑定と I S 学園に居ながらほぼ I S について学ばせない。

せいぜい織斑のデータ取りの為に I S に乗せるだろうが、それすらも万が一の事を考え第一世代か初期の第二世代 I S を使用し、S・E も 1/4 にカット、一定時間以上は空を飛べないという細工をし、複数の実力者の監視下の下で行う予定だそうだ。

迎撃中に裏切ってくれた自称幼馴染 s だが

ちつこいのは専用機と候補生の座を永久剥奪。国に強制送還される筈だったが織斑が姉に懇願して交渉を持ちかけ、中国政府も織斑の遺伝子が手に入る（かもしれない）のならと一切の援助と擁護をしないことを条件に学園に留まった。

でつかいのから専用機を剥奪するのに「逆鱗に触れるのでは……」と難色を示していたが、急な通信回線で「悪い事をしたなら反省しないとね♪」と紅椿を強制凍結。機体を解析・搭乗しようにも何のアクションも起きず、篠ノ之束に遠隔でもISを自在に操られるという恐怖を味わられたとのこと。

そして特別クラスだが、担任に長い教員歴を持つ常識的な人を招き、担任補佐に精神鑑定医を2人付け、織斑千冬が副担任となった。

そう、先ほどから織斑千冬の事を元担任と呼んでいたのはアレが担任から外れたからだ。

現在1-1の担任は山田先生が努めている。暫定での繰り上げかと思われるかもしれないが、実は結構あの先生は慕われている。暫定での繰り上げかと思われるかもしれないが、実は結構あの先生は慕われている。

授業は解りやすい、生徒の悩みしつかり聞いてくれる、競争率の高い元日本代表候補筆頭だから腕も立つ。これで慕わない者が居るとしたら捨くれた性格の持ち主か織斑信者くらいだろう。

時々ドジを踏んで頼りない一面を見せるのがキズだが、逆にそれが親しみや好感を持

てるらしい。

さて、話を戻そう。

最近何かと俺をイラつかせてくれる件なのだが、何をトチ狂ったのか織斑は俺の事を実の兄弟だと思い込んでいるらしい。

俺を見つけては「一緒に飯を食おう」、「勉強しよう」、「話そう」、「遊ぼう」、「テレビを見よう」、「ゲームをしよう」、「本を読もう」、「料理をしよう」と兎に角ウザイ。

プレハブ小屋に帰ったらドアの前でパジャマ姿で枕を持って「来ちゃった♪」と言われた時には思わず鳩尾を殴って外に放置したほどだ。

そして懲りずに直ぐに現れる。なにこいつDMなの？ 鶏なの？

さらにイラつかせる事が、散々偽物呼ばわりしてた連中が気を引くためか織斑を擁護してきて本当にストレスが溜まる。

最近は何立ちがピークに達しているのを察しているのか、谷本もあまりジョークを言わずカレンも毒を吐かない。

未だ燻ってる過激派も近寄ってこないというのにこのバカ共は今日もズケズケとやってくる。

「なんだよ時雨、そんな恐い顔をしてさ。そんな顔じゃ折角の飯も美味しくないだろう？ ほら、スマイルスマイル♪」

……殴ッテモイイカナ？

「二二（気持ちちは解るけど落ちついて）二二」

はあ……織斑、さっさと何処か別の席に行ってくれないか？

見ての通り、ここの席はもういっぱいだ。それとも後ろの連中をほつといて無理やりねじ込んで座るとでも？

「なあ時雨、俺の事は『兄ちゃん』で良いって言ってるだろ？」

人の話を聞け！　そして断固拒否する。

だいたい、何で俺がお前の事を兄と呼ぶなければならない。

「照れるなって」

何処に照れる要素がある。

絶対に呼ばないからな

「つたく強情だな。わかったよ」

…諦めたか

「そんなに弟が嫌だつてんなら、俺が弟になってやるよ。よろしくな時雨兄♪」

…なんだその『我儘な奴だな』や『仕方がないやつ』見たいな顔。

止めてくれない。マジで殴りたくなるから

「これだけ一夏が妥協しているのだから素直に領け言峰!!」

「そうよそうよ! 何様のつもりよ!!」

ダ・マ・レ!!

「あ、あのうちよつといいかな?」

「えつと鏡さんだっけ? なんだ?」

「な、何で織斑君は言峰君の事を弟みたいに言うのかなって思ってた:」

「え? だって時雨は12月生まれだろ? 俺は9月だから少しだけ俺がお兄ちゃんだ。でも、時雨が弟が嫌だっていうなら別に俺が弟でもいいぜ!」

はあ??

「それおかしくない?」

「ええ、そうですね」

「え、何がだ?」

「:」:「だつて、言峰君(お義兄様は)、私たちより1つ年上だし(ですから)……:」:」

そう、俺は元々別の高校に通っていたのだが、ISの知識が無い事、元々教会の仕事で学校を休みがちだったことから留年させられていた。

学園外ではどうかは知らないが、学内に居るモノだったなら全員が知っていることだ。「え？　そう、そうだったんだ……」

ああ、だから俺はお前の弟でも、ましては血が繋がっていないから兄でもない。いいな？　わかったな？　わかったならさっさと——

「時雨ってバカだったんだな」

……………ブツツ

気がついたら、地面に織斑が倒れてた。

ワー、ナンデダロウネー。

○ 限界突破の話 後編

〈白い理由〉

放課後、本来なら先輩と整備室で新調する機体について話し合う筈だったが、生徒会室で反省文を書かされている。

その理由というか経緯だが、織斑一夏を（殴つて）気絶させたことからことごとつかいのとちつこいのがキレて「暴力を振るうなんて人として最低よ」、「貴様、少しでも言葉で語り合おうとは思わないのか!!」とほざきやがった。

「お前が言うな」と返したかったが何とか思いとどまり、向こうが望む通り「話し合い」をすることにしたのだ。

そうしたら――、

「ひつぐ、うえつ、ごめんなさい……」

「何を謝っているんだ二人とも？ 俺はただ、「話し合い」をしているだけだぞ？」

「も、もう、ゆるじで……」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

「アハハ、何を謝ってるんだか俺にはサッパリわからないな。どうやらお互い認識の

ズレがあるみたいだし、折角だからじっくりと向こうの部屋で話し合おう」

「ヤダヤダヤダヤダヤダアアアア!!」

「二夏、イチカアアアアアッ~~~~~!!!」

——で、自称幼馴染sは廃人一步手前で、マゾリアをはじめとしたそっち属性の人達が大量に恍惚顔で倒れて保健室に運ばれシスターに看病されてるらしい。

何でだろうね？

「何でって、あんな的確に心の傷を抉って塩を塗るような話言葉攻めし合いを受けたら精神崩壊してもおかしくないわよ。てか、余波喰らい過ぎ!!」

はあ…やれやれ、今の世の中は男性よりも女性の方が強い風潮だっていうのに軟弱だな。

当時10歳にも満たない男の子が3桁近く精神崩壊を起こしてもこうして生きてるってのに……。

「いやいや、あれはもう言葉の暴力を通り越して言葉の兵器よ。監視カメラを見てドン引きしたのは生まれて初めてよ。てか、それ君よね？ 何があつたのよ…」

ん〜俺はある施設出身で戦う技術を学んでたつてのは知ってるな？

教会に引き取られて暫くしてトラウマみたいのがある事がわかって、心身共に鍛えるのと同時にそれを克服するためにある映像を——まあ、ぶつちやけると施設で死んでつ

た奴らの記録を何千・何万回も観させられた。

その中には俺と仲の良かった連中（殺したのも含む）が居て、それ観てたら頭の中がグチャグチャになって胃の中全部吐いて、頭を壁にぶついたり爪で動脈を切ったりと自傷行為をしようとするのと師匠達が問答無用で連れ出して暴れる俺をボコボコにしてある程度落ち着いたらまた映像を視させられて発狂してボコボコにされるの繰り返し。

そうしたらいつの間にかトラウマを乗り越えてたわけだ。

「うわあ……」

治療に関しては俺が望んだ事だからまだいいが、未だに当時の写真―涙と鼻水でグチャグチャになった顔―で煽ってくるクソ外道共は絶対に許さない。

あとから知ったことなのだが、マスクウエル司祭や冷血で知られるルベリ工長官も流石にドン引きして差し入れてくれてたらしい。

まあ、口の中は胃液だらけで食べても直ぐにリバーズしてたから味なんて一切解らなかつたけど……

「よく君生きてるわね」

“生きて” はいるけれど “壊れて” いるとはよく言われる。

…そういえば、周りから性格やがさ変われったとか言われたっけ？

「（それ、洗脳って言うんじゃないかしら？）それで言峰君の髪が真っ白になったってわ

けね」

急に全部が白くなったんじゃないけどな。

白と茶色の変なツートンになってたから、まだ茶色だった三つ編みとかを含めバツサリ切ったんだよ。

「ふうん……ん？　茶色に三つ編み？　なんか少し前に聞いたような……」
？

〈二人の関係〉

「……ねえ、言峰君」

なんだい会長さん。

俺、反省文を書くのに手一杯だから用があるなら30字以下で頼む。

「貴方、話し聞かないでしよう？」

あと、15文字な。

「私と友達にならない？」

……は？

「居ないのよね私、こうして軽口をたたいたりする友達が……」

先輩がいるだろう？

「そうね。でも、虚ちゃんは『従者』でそんなつもりはなくても気付かない所でお互い
枠組みを作っちゃてるの」

……。

「この1年……君と出会ってから凄く楽しかったわ。喧嘩して悪口や軽口を言い合っ
て、仮面なんて無い素のままの自分で居られた。だから、えっと、その……わ、私と——」

ああ、友達になろう。

「つうん、よろしくね時雨君」

「こちらこそよろしく会長さん。」

「……君、その気無いでしょう?」

ソナナコトナイヨ?

「ハア……それで、いつにするつもりなのかしら?」

秘密、と言いたいところだが少なくとも来月の式までにはと答えておく

「そ……泣かせたら許さないわよ」

それは出来ない約束だな。

俺、好きな人は苛めるタイプみたいだから

「あら、その理屈だと私も好きになるわよ?」

ハッ!!

「鼻で笑われた!？」

解つてないなく会長さん。

俺はあんたを苛めてるんじゃない。遊んでるんだ!!!

「言ってること最低だつて知ってるかしら?!?!？」

プツククク……

「アハッ♪」

思いのほかこの関係を俺は気に入っている。

学年末リーグ

〈決勝戦〉

アリーナにて今年度最後の公式試合が行われていた。

「…はああああああ!!」

「っ舐めるな!!」

「春雷の連続射撃を避けながら右手に持ったライフルとバックパックの小型レールガン、ミサイルポットとありったけの火器を放つ。

「さあ張った張った!! 1学年最強の座はどっちか!!」

「お、オツズは言峰君が6、簪さんが4だよ」

「あたし、更識さんに食券1枚!」

「私は時雨さんが勝つのに2枚かけますわ」

「かんちゃんがんばって〜」

観客席では声援の中、密かに賭けが行われていたが生憎止められる人間は居合わせなかった。

「ふっ!!」

左手に持っていた黒鍵を投げる時雨。

簪は飛来する黒鍵を夢現で弾こうと思ったが、嫌な予感を感じシールドパッケージ“不動岩山”を前面に展開。

すると黒鍵以外にも視えない何か突き刺さり爆散した。

「…やっぱり、その視えなくする能力はズルイと思う」

「前と比べて使い勝手が良くて超便利♪ いいだろ？」

先に投げた黒鍵は匣で、本命は黒鍵を弾いたあとに出来る筈だった隙に視えなくした爆裂刀でダメージを与えること。

簪は自分の直感に今日は何度救われたかと冷や汗を流しながら本当にズルイ能力だと心の中で愚痴る。

少し前だと刀身の一部分だけを消され距離感が狂いかなり苦しんだ。

厄介な能力だが、変わらず燃費が悪いため連続・長期使用は控えなければならない。

「…残りの予想S・Eからここらで一気に終わらせようと攻めてくる筈」
簪の読みは当たり、時雨はジグザグに動きなら近づいてくる。

それを迎え打とうと春雷を構えるも残像が視えて狙いが定まらない。

「…背後スラスターから粒子を撒いて認識をズラしてる!？」くっ、くっ、だったら!!」
山嵐を開き全弾打ち放つ。狙いは直ぐ目の前で、点では無く面による爆撃。

一見、自爆のように見えるが、簪は不動岩山を展開して一人爆撃から逃れようとしたのだが――、

「ぐうっ!？」

突如、簪の真後ろで何かが発火しバツクバツクが破壊される。

それと同時に目の前から煙をかきわけてきた時雨に夢現の柄を切られ、続いて狙われた胴体を護るために春雷を失った。

『突然更識選手の背後で爆発しましたがこれはいったい何があったのでしょうか!? 解説の楯無さん!!』

『恐らくだけれど、不動岩山を破壊する為に視えなくした手榴弾が何かを先に投げて置いたのね。ただ、至近距離にミサイルの嵐は予想外で残りのS・Eを護るために外部装甲を切り離して盾にし、ミラーシュ・コロイド隠滅粒子での奇襲をしなかったのはさっきの残像で本当にもうS・Eが少ないからかしら』

『なるほど! これでお互いS・E1/6を切り、武器も全て無くなりました。両選手はどうなのでしょうか』

『そりやもう、武器が無くなったらやることは一つしかないじゃない』

苦笑交じりに楯無がそう言うのと両者共に拳を握りしめる。

「時雨ええええええ!!」

「更識いいいいいい!!」

ISによる泥臭くさい殴り合いが始まった。

「——それで、武器を失ったからと肉弾戦に持ちこみ挙句の果てには機体そのものをロボロにした言い訳はありますか？」

「つい、熱くなって鬨やりました。反省も後悔もしていません」

「…同じく」

「っ反省も後悔もしてください!! なんですかこの見渡す限り赤表示は!! いくら二人の機体を新調するとはいえやりすぎです!!」

「これ、徹夜コースだよぉ」

「今日はずと正座です!! いいですね!!」

「ついでにこのプラカードも首から下げよっか」

「…は」

揃って整備室で姉妹に叱られ、二人の首には

『反省ナウ…（・ω・）』

「…正座で寝られるって凄く器用」

勘違いから始まった：

白式改から新たな機体にコアを移植することになった。

これは別に白式が完全大破したからでは無く、2学期の時点から「機体と本人の相性が悪いのをかわせるのはどうなのか？」と意見が上がっていたのだが、その度に俺の存在を快く思わない委員会とデータを独占したい倉持技研が「所詮はデータ取り」や「機体に合わせるのもパイロットの務め」などと主張し流されていた。

だが、倉持技研没落の一件で白式の所有権が教会へと移り、俺がイタリア国籍を取得したことから政府からの加護も得て移植することが決まったのだ。

男性IS操縦者のデータ独占に各国が難色を示したが、白式及び改でのデータの公表で手を打った。

相性の悪過ぎる機体で出したデータに意味があるのか知らないが…。

それでもグチグチ言う国も居たが2学期終盤に織斑一夏が学園で捕まり、監視という名の保護を認める代わりに全データを公表することで落ちついたようだ。

新たな機体はテンペスタ・カスタムから基礎設計を、稼働データは俺とカレンのを使った格闘型で名を「イルルジョーネ Illusion^ネ」

イタリヤ語で幻影を意味する本当の俺だけの機体。

この機体の大きな特徴とも言える右腕には「トリケロス」を魔改造した見た目は盾と爪を一体化した大きな武器を、バックパックには通常は飛行ユニットとして、ある時は巨大な隠し腕に変形し相手や武器を捕獲する装備を配備。

そしてコアのせいなのか相変わらず拡張領域が少ない為、幾つかの箇所ナイフや銃を隠し持っている。

目の前で先輩達が慌ただしく動き回り調整しているのだが、俺は整備とかに関して任せっきりなため正直に言うとは荷物を運ぶ以外は役立たずだ。

なので邪魔にならない場所で作業を見守りながらふとこの1年の事を思い出す。

あることが切っ掛けでISに触れてしまい乗れることが発覚しIS学園に通う事になった。

そこで元担任や自称幼馴染sに織斑一夏だと勘違いされて悪評が広まり

流れでオルコットと戦う事になり「候補生に喧嘩を売った無謀な男」と影で言われ

勝つたらオルコットがマゾ化してその手の趣味の持ち主と距離を置かれ

対抗戦に向けて整備室に行ったら更識や会長さんに襲われ

襲撃してきた無人機を迎撃したら変な風に乗が広まりバーサーカーと恐がられて

デユノアの正体を見破ったら生徒を追いつめて退学させたと噂され
また転校生が来たかと思えばまさかの義妹^{カレン}で

先輩に告白まがいのことをしてしまい

タツグマツチではいくつもの二つ名を付けられ

臨海学校では一方的に犯人扱いされ

下着泥棒の犯人である阿礼には果実判定をくらい

夏休みは借金返済に明け暮れ

文化祭ではテロリストを迎撃し

織斑一夏が見つかったら偽物扱いされ

タツグバトルではまた無人機と二度と会いたくなかった阿礼が襲撃し右眼を失った。

…こうして振り返ってみると殆どが勘違いから始まつてるな。

これだともうISが反応したのも誰かが勘違いした結果の陰謀な気がするよ。

だいたい何で借金の取り立てから逃げる為に適当に入った部屋にISが鎮座してい

て、起動した瞬間に世界中に配信されるんだ？ ホントわけわかめ。

でもこの学園に来たのは決して悪いことばかりでは無かった。

更識とはISという別のジャンルのライバルとなり

教会や孤児院の奴ら以外と距離を取っていた俺に友人ができ、クラスメイトと和解

し、先輩に過去を打ち明け答えを得た。

だからこそ俺は、

—
—
—

機体の調整が終わり、祝勝会と機体完成祝いを兼ねた小さなパーティーが開かれた。

場所は食堂の一角で会費は俺もちで主催者そっちのけでのドンチャン騒ぎ。

……俺、優勝者祝われる側なのに何で？ まあ、連れ出しやすかったらいいけど。

先輩とパーティーをこっそり抜け出して夜道を歩く。

あの時と同じ場所、同じような時間。

夜空を見上げればあの時と同じような——

…先輩。

「はこ」

月が、
綺麗ですね。

Extra STAGE

束の間の日常 ⑧

へもうすぐ春休みだよ！ 理事長先生!!<

『——続きまして、理事長先生からのお話です』

「え〜明日からは皆が待ちかねの楽しい春休み——、の筈でしたが！ 数々の襲撃のせいで授業が遅れてるので3学期を続行します!!」

「[[[[[ですよね〜]]]]」

<携帯電話>

〜♪♪♪〜

「ん？ 誰か携帯なってるよ」

あ、悪い俺だ。

「こ、言峰君、前に携帯電話持ってないって言ってなかったっけ？」

ああ、持ってなかったな。

「こことみ〜お姉ちゃん〜と連絡をとるために買ったんだよね〜」

「「へ〜〜〜（ニヤニヤ）」」

うっせ……（カチカチ

「でも何でガラケー？ 今の主流はスマホだよ」

「い、色んなアプリもあつて便利なのに……」

「そうそうラ〇ンにフェイ〇ブック、ツイッ〇ーとかね〜」

スマホは高いし、直ぐに電池が切れるって聞いたからこっちにした。

それとあんな掲示板や個人ブログモドキなんてパソコンでも見れるしやれるだろ。

「はあ〜……ないわ〜。言峰君マジ無いわ〜」

「さ、流石にそれは無いよ言峰君」

「無いね〜」

…解せぬ。

〜一方その頃〜

「あ、メール……」

『先輩へ、

今度のデートですが 駅前に10時でどうでしょうか？』

「フフツ…♪ 『わかりました。それと今夜またメールします』 つと」

いつ連絡が来るかどうか解らない状況を結構楽しんでたりした。

〈久しぶりの…〉

久しぶり、谷本癒子よ。

普段友達にスキンシップをしたり言峰君と軽口を叩いたりと割とフレンドリーで気さくな私だけれど、現在ある核爆弾にも等しい物を抱えてしまつて非情に困っているわその爆弾つてのがこれよ。

『素直になれないお兄ちゃん。』

R—18 指定 ? XXXX円』

もう察しているかと思うけれどコレ言峰君と織斑君をモデルにした薄い本よ。

この本を入手した経緯だけれど、学園裏サイトで偶々言峰君を題材にした本を見かけて「今度コレからおおう」と思ったのが運の尽き。

読んだ感想だけど、正直キモチ悪いの一言につきるわね。

あ、別に腐つた本に抵抗や嫌悪があるわけじゃないわ。ただ、言峰君がツンデレ設定だったり、織斑君と二人っきりの時は弱く甘い顔をしたりと普段から接してたらありえない。

あとと言峰君の身体がキレイすぎる。もっとガツシリとした体つきだし、あっちこっち傷だらけよ。著者は言峰君の事をよく知らない整備科を除いた上級生ね。

この本の存在が言峰君に知れたら確実にブチ切れる自信があるわ。

著者には確実に何らかの手を下すでしょうね。それともしかしたら読んだ人間全員に口には出せない方法で脳から記憶を消しかねない。

最悪の状況を打破する為、ナギや清香たちに相談（巻き込んだとも言おう）しているところよ。

「な、何で買ったのよ癒子」

限定販売の本音×簪の本——『イケナイ主従関係』、『正しい従者の躰け方』、『天然誑しのご主人様にオシオキだよ〜♪』——が手に入って舞いあがったテンションに身を任せたと結果よ。

反省も後悔も凄くしてるわ。

「後で貸して（も、もうしようがないな〜）」

「本音と建前が逆になってるよナギ。それにしてもよく言峰君の薄い本を、それもこのカッピングで描く勇者が居たわね。」

「そ、そうだね。せめて言峰君×白式や言峰君×シスターなら冗談で済みそうだけど…」
「後は裏で鬼畜外道の所業をしてるグロ注意やDS全開で皆を調教する本とか？」

実際に言峰君が出来ない、やらないって言えないのが怖いね。

さて、この本をどう処分するかだけれど……あれ、どこにいつて——

「……ふん」

ウハッ♪ こんにちはは合宿以来ね無表情の言峰君。

ナギが恐がってるから笑ってあげて。ほら、スマイルスマイル♪

「……（ペラッ）」

スミマセン、調子に乘りました。

だから無言の圧力も死んだ魚の眼で淡々と読むのも止めてくださいお願いします。

「……………（パタンッ）」

あ、処刑方法が決まりましたか？

ちよつと携帯に肉声の遺言を残したいから少しばかり時間を頂きたいですはい。

「……………ちよつと黛先輩のところ行ってくる」

助行っちゃったかった…でも何で黛先輩？

「た、多分あの先輩が学園で一番の情報通だからじゃないかな？」

「麻婆豆腐片手に情報を吐かせるビジョンが視えるね」

ドンマイ黛先輩。

そのまま私の分も処刑されてくれると凄く助かります。

その日、某所で死んだ魚の眼で麻婆と連呼する女性徒が発見され、後の調査で裏で個人の尊重を無視した販売をしたことが明るみになり暫くの停学が言い渡された。

そしてこの日を境に時雨を題材にした薄本が出回ることは二度と無かつたそうなの……

帰つて来た話

いつもの様に友人らと食堂に向かったら何やら騒がしく、今日は限定のスイーツでも出てたか？ とその混み具合を想像して少しだけ嫌な顔をする。

食堂に入ると予想通り人混みで溢れていたのだが、別に限定商品が出ているわけでは無く、〃おばちゃん〃が厨房で働いていた。

なにを隠そうこのおばちゃん、ちっこいのが転校してきた頃に俺が自信作だったらしい激辛麻婆を軽々完食したことを切っ掛けに修行の旅に出ってしまったのだ。

気さくで慕われていた人の突然の休職に多くの生徒が困惑し、「男子がおばちゃん追いつめた」などと噂された事もあって一時期は食堂の出入りも難しかったっけ…。

このことが切っ掛けで、月に何度かの〃偶には外でピクニック気分を味わいながら皆でお弁当を交換しよう!!〃が始まったりするのだが、俺の弁当麻婆が交換されることは滅多になかった…：…解せぬ。

さて、そろそろ行くとしますかね。

食券を片手に窓口に行くと、今までの人の良さそうな表情から一転し真剣な表情へと

変わった。

「注文は？」

麻婆豆腐

「辛さは？」

態々聞く必要が？

「…あいよ。座って待つてな」

おばちゃんに従って近くのテーブル席に着く。

その後すぐにカレンが隣に座ったがどうしてか他の皆は離れた場所に座った。

なんでだい？

「…だつて超絶嫌な予感しかしないだもん…」

暫くすると、トレーを持ったおばちゃんがこっちに来て俺たちの目の前に2つの麻婆を置いた。

見た目の感想は“紅”というよりも“紅黒い”

どれ、まずは一口

——つ馬鹿な!? この俺が、麻婆狂の俺がほんの一瞬意識を手放しただと?

どうやら半年の間かなりの腕を——いや、根源に至ったようだ。

見ろよこの蓮華、元々は白かったのがたつた一口分すくつただけで紅に浸食されただぜ? 凄いだろ。

とアホみたいな事を遠くの席の友人らにやったら、ガクガクと脅えきつたいた。

だが、その視線は俺の方では無くその隣。

そう言えば、やけに隣が静かだなくって思いつつ隣に視線を向けると義妹が皿に顔を突っ伏してた。

味覚がぶっ飛んでるカレンが一瞬で……

知らぬ間にゴクリと大きく唾を飲み込む。

ふと、目の前に影ができ、そちらに視線を向けるとおばちゃんが正面に居座っていた。

……なるほど、目の前で最高傑作が完食されるか否かを見届けると。

いいだろう、俺が食いきるか、それとも途中で倒れるか勝負だ!!

2口目、小手調べは止め蓮華一杯の麻婆を口に入れると強烈なアツパーで殴られた様な感覚を受けた。

3〜5口目、食べるスピードを上げるとボクサーの連続ジャブではなく高速でストリートを撃たれたかのような感覚に襲われた。

6口目、口に入れた筈なのにそこに辛いのがあるのがわかるがそれが豆腐なのかひき肉なのかネギなのかまるでわからなくなった。

額から流れる汗を拭くと目の前にコトリと一杯の水が置かれる。

おばちゃんの目がこう語っている「ギブアップするかい?」と。

ハツまさか…

ここで降参などありえない。

ラストスパートだと一気に口に駆けこんだら喉がイカレた。

何とか胃の中に飲みこんだら身体中が沸騰する感覚に見舞われ、一瞬吐きだしそうになるも机を殴り耐えきった。

机には凹んだ様子が見られるが殴った筈の左腕の感覚があまりなく、意識も朦朧としてきた。

あと一口、あと……ひと……く……

この日、おばちゃんに黒星を付けられた俺は自室で静かに涙を流した。

束の間の日常 ⑨

〈襲撃事件〉

教会が襲撃された。

いつか訪れるであろう恐れていた事態がついに起きてしまったのだ。

被害は？ 子供達は大丈夫かと心配したが、それはよくよく考えれば杞憂だと思い直した。

突然だが、俺の居た教会で一番偉い立場にいるのは師匠の父である。『言峰璃正神父』だ。

その璃正神父だが、先日腰を痛めて慰安旅行に出してしまい、週末に行われる筈だったミサが人手不足となってしまった。

ならばと学校をバックr……サボって手伝おうと思ったのだが既に助っ人を送るよ
うに本山に打電したらしい。

その助っ人なのだが……

1. アレクサンド・アンデルセン^化
物

2. シエル不死身

3. クロス・マリアン性格破壊者

4. トレス・イクス機械化歩兵

5. ニコラス・D・ウルフウッドテロ師

6. ソカロ・ウインタース元死刑囚

7. エダ暴力シスター

8. フリード・セルゼン外道見習

なんでそいつらを選んだ人事科。

過剰戦力もいいところだぞ。戦争を仕掛ける気か？

まあ、アダム・ブレイドが来なかっただけマシと考えよう……あいつが来ると、女の

子”が襲われる。

報告によるとI Sが居たにも関わらず襲撃者の全員がトラウマを植えつけられたらしい。

そらそうなるわな……攻撃が当たっても高速再生する化物共に加え狂喜の笑みを浮かべながら切りかかってくる戦闘狂。離れたら離れたでバニッシャーや機関銃のフルバーストだし。

今頃は師匠とクロス神父の外道コンビに虐められてるんだろうな……。

え、フリード？ あいつも外道だけど他のと比べると普通に霞むわ。

〈名前〉

「言峰君つてさ、何で私たちの事名字で呼ぶの？」

何でつて……なんとなく？

「何で疑問形なのよ……まあいいわ。折角だから呼んでみましょう。さんはいっ！！

癒子、ナギ、本音、静寐、加奈、神楽、簪

「……つまらないわね。名前で呼ぶのを恥ずかしがったり戸惑ったりするのを期待してたのに」

そんな俺が想像できるか？

「全然、むしろキモイ？」

「そ、それは言い過ぎだよ癒子……」

んじゃ逆に今度はお前ら全員、俺の名前呼んでみるよ。さんはいつ！！

「「「お兄ちゃん♪」」」

……なんでやねん。

〈名前 2〉

「そういえば、ことみくの名前って誰が付けたの？」

ああ、師匠が俺を拾った時に名付けてくれた。

理由は雨が降ってたからだそうだ。

「え？」

雨が降ってたから

「あ、うん……………」

〈初めてのメール〉

卒業してから暫くたちました。

今日は時雨君と一緒に携帯電話を買いに行く約束をしていたのですが、私が仕事の都合で実家を離れることが出来ず、お一人で買いに行かれたそうです。

申し訳ないという気持ちもありましたが、せつかく久々に会えてゆつくりとお話が出来たのという気持ちの方が大きかったです。

今までは時雨君が学園に居ないとき以外では最低でも週に一度は顔を合わせてましたのにもう10日もです。

やはり、整備科の臨時教員になるべきでしたでしょうか？

でもそうなりますと時雨君との関係が教師と生徒の禁断の関係に………ち、ちよつといいとか思つてませんからね／＼／

お昼頃に本音から

『お姉ちゃんの連絡先教えたから』

今日中にメールするみたいだよ』

と連絡が来ました。

時雨君からの初メール。

テンプレ通りに『ご登録お願いします』と来るのでしょうか？ それとも時雨君らしく短く簡潔にでしょうか？ あるいは裏をかいて長文で来たり………何だかとてもドキドキします。

今日中にといいことのでいつ来るのかもわからず、一日中メールが気になってしまい何度か凡ミスをしてしまいました。

一度メールが届き、もしかしてと思い携帯を開きましたら、

『残念、楯無ちゃんでした（笑）』

思わずお嬢様の部屋に隠してあった黒歴史ノートを写メで送り返して電話で口論し

唐変木な男子の独白 ①

〈すれ違い〉

よう！ 俺は織斑一夏。I S学園特別クラス所属の16歳だ。

あ、俺がI S学園に通っていると言うか住んでいる理由は俺が数少ない男性I S適合者なのと、この間まで亡国機業って所に所属してたからだ。

切っ掛けは数年前、第2回モンドグロツソで俺が誘拐されたときだ。

誘拐犯の眼を盗んで逃げ出したんだけど、身を隠す為に入った部屋で誘拐犯の一人（女性）と遭遇。

しかも着替えてる途中だったのか半分裸だった。

悪いとは思ったけれど、逃げるため、生きのびる為だと自分に言い聞かせて女性を殴って気絶させ、何でか置いてあつた拘束具で縛る。

逃げる為にも何か武器は無いのかと探したら、女性が身に付けていたアクセサリが光ったと思ったら、I Sに乗っていたんだ。

わけもわからず呆然としてたら、逃げ出した事に気付いた誘拐犯が部屋に突入してきたけど、向こうも俺の姿を見て驚き、今のうちだと窓ガラスを破って逃げ出した。

当然、人質を逃がす筈なく追手が来て無我夢中に逃げ回ってたところを助けてくれたのが亡国機業のメンバーであり、俺の上司だったスコールだった。

スコールの話だと「織斑千冬は見事大会2連続優勝を果たした」らしい。

つまり、千冬姉は要求を——俺を見捨てたのだと知った。

それからスコールに「唯一男性でISを動かせることが世間にバレたら一人では危ないわよ」、「行く先が無いのならば一緒に来なさい」、「共に世界の理不尽に苦しんでいる人々を助けましょう」と誘われ、俺は亡国機業正義の味方になったに入った。

亡国機業に入ってからには行き別れになっていたらしい妹のマドカと一緒に色んな事を学び、時にはぶつかり合って仲良くなり、理不尽に苦しんでいたシャルやラウラを助けてからは4人で行動すること多くなった。

そんなある日の事だ。

スコールが「IS学園に潜入しているオータムを手助けして欲しい」とマドカと話した。

仲間を助ける為だ。俺も行くぜ！ と4人でオータム救出に行つて帰つて来たら何かスコールが頭を押さえてたけど熱でもあったのか？

それから暫くの間機体調整のためだとISを預けて自室待機を言い渡されてたけど、シャルがIS学園に囚われたのを知つて俺たちは助け出す為に飛び出した。

スコールが何か叫んでたけど知るか！ 仲間は俺が助ける!!!

気がついたら、牢屋に閉じ込められていた。

そして、そこで俺は千冬姉と対面して真実を知った。

千冬姉は政府から俺が拐われたこと、大会を辞退しろと脅された事を隠されていて、それを知ったのは全てが終わってからだったと。

俺が所属していた亡国機業はテロリストで、国際指名手配されていると。

騙されてた事に怒りを感じた。けど、それ以上に俺は千冬姉は俺を捨ててなんか無かったのを知れて嬉しかった。

千冬姉と涙を流しながら抱き合い、長年のすれ違いが漸く解けた。

〈その頃の某所にて…〉

「なあ、スコール。何でこんなに人が居ねえんだ？」

「……皆、捕まったわ」

「は？」

唐変木な男子の独白 ②

〈専用機〉

保護という形で俺はIS学園の一角で暮らしながら新たに設立された特別クラスに通う事になった。

千冬姉が学園の偉い人達と話し合った結果らしい。

このクラスには俺を含めて6人が通う事になっている。

メンバーはマドカと箒と鈴、今は入院しているシャルとラウラ。副担任には千冬姉がつくらしい。

なんか、身内だけのクラスだな(笑)

授業は主に一般教養を学ぶんだけど、そんな事よりも俺もISを動かせるんだから今までの罪滅ぼしも兼ねて学園の力になりたい。共に戦わせてほしいといったんだ。

けど、学園の偉いたち人達は――

「いいですか。あなた達(特に織斑兄妹)は一般教養が疎かになっております。(一般常識を勉強し直せやボケ)」

「他の生徒がそうしてきたように勉強し直してください。(騙されてたとはいえ、一時期

は信じてた仲間の情報をあっさり吐く人を信用できないわよ！」

「そもそも君が使っていたISは確か○○国のモノですよ？（ISを持たせてたら勝手な正義感で絶対に問題起こしますね）」

「事情や経緯は詳しく知らないわ。けれど盗られた企業やそのパイロットの人達が困ってるのよ（そうなる前に取り上げるわ！）」

等と説明され渋々折れた。

すっかり忘れてたけれど俺の使っていたISって半裸の人が持ってたもので、きつと元々は○○国ってところのモノだったんだよな。

長年連れ添った相棒と別れることになるのは正直寂しい。けど、沢山の人困ってるなら仕方がないかな。

バイバイ……相棒。

なら、使ってたISがダメなら学園にある訓練機を貸してほしいって言ったら「勉強して出直しなさい!!（おととい来やがれ！凸（◇メ）」だった。

そっか……そうだよな……

車を運転するのにもちゃんとした最低限の知識じゃ危ないもんな。

今まで操縦してきてそんなこと無かったけれど、もし事故を起こしたときに俺一人だ

けならまだしも周りを撒きこんだら一大事だ。

ここは二人の言うとおりで、一から勉強しなおそう！

「やはり論すような言いかたでは無く正直に話した方がよかったですかね？」

「ですがそれだとさつきまでのように延々とごねますよ絶対！」

「かといって冷たくあしらえば今度は織斑教諭が来ますし……」

「(そうなればきつと妹だと名乗る子も便乗して3人を同時に相手することに……)」

「(はぁ……頭が痛い)」

ん？ 熱でもあるのかな？

〈言峰時雨〉

世界で初めて男性でISを動かしたとされている男。

でも、俺は知っている。

時雨は千冬姉のクローンだっことを

前にオータム達がこっそり話してるのを聞いたんだ。時雨と千冬姉は同じだってだから俺はこう思ったんだ。

きつと束さんが俺が居なくなつて落ち込んでいる千冬姉を励ます為に千冬姉の細胞からクローンを作つたつて。

違和感のない完全なコピーはいくら束さんでも作れない。だから千冬姉には記憶喪失つて話しておいて、全く記憶が無いのは周りに怪しまれるから、教会で産まれ育つた言峰時雨^{人格}つていう情報を埋め込んだんだ。

これを考え付いた時、正直束さんに激しい怒りを感じた。

でも、これは千冬姉が俺の事を見捨てたと勘違いして勝手に離れて千冬姉に寂しい思いをさせてしまったからだ。

俺にも罪がある。

だから、千冬姉と和解した今こそ時雨を新しい家族として迎え入れよう。

大丈夫、見た目は大人、でも実は産まれて数年の子供と逆コロン君でも俺は受け入れるさ。

本人は顔を会わせる度に嫌な顔をしたり、冷たい態度をとつたりとツンツン状態で昔のマドカみたい。

ハハ、流石は兄弟だな

「あの、どうしたんですか時雨君？ とても恐い顔をされてますよ」
「何だか物凄く腹が立つこと言われた気がして…」

幻想の話

〈夢幻〉

「「お兄ちゃん（兄さん／兄貴） お帰りなさい!!（つぼいー）」」

…扉を開けたら10人程の女の子に兄呼ばわりされながら迎えられた。

え、何これ？ どゆこと？

どうしてか上手く頭が回らず、一旦落ちつく為に扉を閉めようとしたら……

「いっちゃん最初に時雨に突撃♪」

「に、二番目に時雨君に突撃です／＼／＼」

両腕に初恋の子と恋人がガツチリと抱きついてきた。

え、本当に何このシチュエーション？

俺特ですが何か？

方や天真爛漫そうに見えるで少し恥ずかしそうにし、方や顔を真っ赤にしながら負けじと腕に抱きついてくる。それによって俺の左腕はやや大きめな山に挟まれ、右腕はとて

も大きな山に埋もれ理性がゴリゴリと削られていき、付け加えてどっちの方が一番俺の事を好きだとアピールしてくるとかもう……。

ヤバイ、押し倒したい。抱きしめたい。キスしたい。苛めたい。メチャクチャに○したい。

溢れ出てくる“欲望”と“願望”を何とか制御しながらそっと二人の耳元で愛の言葉言葉攻めを囁いたら腕の拘束が緩んだので、その一瞬の隙を逃がさず思いつきり後の扉を蹴飛ばした。

「ふみゅっ!？」

……扉を蹴飛ばした筈が気付けば銀髪の見知らぬ女の子を踏みつけていた。
だれ？

〈事の経緯〉

漸く頭が周るようになって色々と思いついた。

新入生を迎える準備を手伝わされていたら突然の停電。

どうやら学園全体のシステムを乗っ取られた様で、電腦ダイブでシステムを取り返す

つもりらしいが、何となく嫌な予感がしたので、会長さんを言いくるめてシステム奪還に向かわせ、手慣れた様子で避難誘導をする友人らと別れた。

シスターと二人で侵入者を迎撃してたら、別ルートから侵入されてるのを見つけて扉を蹴破ったら変な幻を見て現在に至るわけだ。

…で、こいつが今回の黒星でいいのか？

部分展開した右腕で頭を掴み “粒子操作” を流し込んでハッキングしたところ、どうやらISとの生体同期型という存在らしい。

さらにワールド・ページという相手に幻覚見せる能力を持っているようで、さっきまでの幻もコイツのせいだろう。

恐らくだが、幻覚のワードは “心の底から望んでいる事”

自分でも気付かないうちに嘗ての仲間に出会いたいと、家族になりたいと思っ
ているは。

もし、あの時あいつが生き残っていたら、あんな未来があったのかな？

……我ながら女々しいな。

さて、それはそれとして些か汚された気分だ。

だから、少しばかり仕返しをしても許されるだろう？

再び粒子操作を流し込んで能力、 “ワールド・ページ” をアクセス。

対象範囲を反転——つまり、自分自身に視させる。

そして幻覚のワードは憂惧、心の底から恐れている事だ。

さあ、ナイトメアパーティー始めましょう♪

「始めちゃダメに決まってるでしょ!? 何しようとしてるの君!」

強制的に恐怖や悪夢を見させて心を折ろうとしただけだが?

「うわぁお!? 束さんもビックリするほどの外道っぷりだね☆ 知ってたけどさ」
別に少しくらいいいだろう?

「よくないよ! そんな事したらクーちゃん的心壊れて廃人になっちゃうからね!」
そうしたら光源氏計画すりゃいいんじゃないかね?

「はっ!? クーちゃんを私好みに刷り込んで育てる………ジュルリ」
で、帰るならさっさと帰ってくんない?

「おやく束さんを捕まえなくていいの〜?」

アンタを捕まえるのかなり骨が折れそうだし、捕まえても阿礼みたいに脱走しそうでぶつちやけ面倒くさい。

「アレと同一扱いされるのは心の底から嫌だけど、追って来ないなら束さんは華麗に退

場させてもらうぜい☆ あ、そのうちまたちよつかい出させてもらうね〜」

ざけんな！ やっぱ捕まえr——

「バイビ〜♪」

はあ………疲れた。

学園のシステムハッキングも部隊の襲撃も全部囿で本命は俺の能力を探るためだったとはな。

あの子も可哀そうに、たったそれだけの為に囿役にされて

ま、俺には関係ない事だ。

…帰ろ

次の日、出会って5秒で会長さんの飛び蹴りを喰らわされた。

いや、なんで？

〈頑張れ楯無さん!!〉

「シャル、君は本当に悪い子だな」

「う、うん。僕ほ本当に悪い子でイケナイ子なの。だから一夏に、ご主人様にオシオキされたんです。僕の「自主規制」にご主人様の大きな棒を捻じり込んで欲しいです!!」

だったら、お望み通りぶつ?といのを突っ込んでやるわ!!!

「んぎやああああああ!!!」

はあはあ…これで最後ね。!!

言峰君に「姉妹での共同作業になるのにやらなくていいのか?」って丸めこまれて、簪ちゃんと地下施設に向かったのだけど、そこには既に織斑一派が電腦ダイブしてたわ。

専用機取り上げられてるのにどうやったのかしら?

簪ちゃんの調べだと、深い眠りについているみたいで自分たちの力で帰ってこれないみたい。取りあえず、電脳空間で会ったら連れて帰る方針にしたのだけれど……

デュノアちゃんは主従プレイしてるし、篠ノ之ちゃんは織斑君と真剣で殺死愛してるし風ちゃん血まみれの教室で織斑君の生首を抱いてニタニタしてるし、織斑ちゃん織斑先生は「おままごと」してるし、織斑君は織斑君で一時期出回った時雨君との薄い本みたいなことしてるしでホンットこつち側に来たのを後悔してるわ。

「お姉ちゃん♡」

はいはい、幻乙

本物の簪ちゃんはもう私の事を“お姉ちゃん”って呼ばないわ。

声もそんな甘えた声じゃないし、私の願望丸出しなのは良いけれど所詮は幻想よ。全然ときめかないわ

それに今頃本物の簪ちゃんは今まで出てきた私の願望の姿（裸エプロン、ワイシャツ一枚、犬耳に首輪など）を見て絶対零度の眼差しを向けてるのよ!!

24時間いつでも背筋がゾクゾクよ!?

はあ………さっさと終わらせて帰りましょ。

次の日、バツタリ会った言峰君に思わず飛び蹴りした私は多分悪くないわ!!

進級後の話

へ 噂 へ

ねえ、聞いた？

例の先輩でしょ？ 聞いたわ。

なんでも姉の七光で候補生になったとか

専用機もおねだりして貰ったんですって

それでいて卑怯な手を使って女の子の顔も平然と殴るんでしょ？

私知ってる！ 権力を振りかざして木刀を振るったり、ISで生身の人間を攻撃したりしてるんだって！

流石、元テロリストね。

何でそんなのが学園に居るのかしら？

ホント、最低よね。

言峰時雨つて人

2年に進級して暫く、新入生の間で「言峰時雨Ⅱ最低クズ野郎」という噂が立っているらしい。

別に否定する気は無いが何でそんな噂が立ってるんだ？　ここ最近では表立って暴力沙汰を起こしてないんだが…

「ひ、否定しないんだ」

外道師匠の弟子の時点で否定なんて出来ないさ。

どれだけの絶望とした顔を見て来た事か……フフツ

「（うわっ絶対悪い事考えてるよ……）」

さて、噂が立った件だがどうやら原因は学園の裏掲示板らしい。

こういった掲示板はだいたい速くても入学から1月くらいたってから見つけるのが定番だが、IS学園には国や企業の問題で早くから学生寮に住んでいる生徒がいる。

彼女らはまだ正式には入学してないことから立入禁止エリアも多く、折角早くに来た

のに遠くからしかISを見れないと暇を持って余していたそうだ。

そんなとき、ある生徒らが裏掲示板を探し当て閲覧すると――

“姉の七光で候補生になった生徒がいる”

“例の男子は最低野郎”

“木刀を振るう生徒がいてマジで危ないんだけど”

“美少年転校キタコレ!!”

“ドS兄妹降臨!!”

“臨海学校で下着泥棒!?” 犯人は……”

“例の男子は元テロリスト”

“大した実力も無しに専用機を持つとかw r s”

――などと書かれていたらしい。

そこからどう捻じり曲がったのか俺は我儘で暴力を平然と振るう最低野郎と新入生に印象付けられたらしい。

半分以上は俺じゃないだが……ホント、何で？

「「見た目が悪役だからじゃない?」」

さらりと酷い事言ってる自覚ある君たち?

とりあえず噂の件は完全無視の方向にし、友人らにも気にしなくていいと伝えて置い

た。

といつても、谷本あたりは1月もしないで新入生に突撃しそうな気がするがな。

〈クラス替え〉

進級に伴いクラス替えも行われた。

去年は1組に専用機や企業、名家の子が集まるとあからさまにパワーバランスがおいしいからと今年はある程度生徒の希望は取るがそれでも均等になるよう山田先生が連日徹夜で調整したらしい。

女子寮の調整だけでなくクラス分けまでとか、もうこれ学年主任の仕事押し付けられてるな。

sonだけ働いても給料は一般職員と同じという社畜コース。お疲れ様です山田先生。さて、そのクラス替えの結果だが…。

1組：カレン・オルテシア、鈴木香奈、セシリア・オルコット、

2組：相川清香、鏡ナギ、相川清香

3組：言峰時雨、鷹月静寂

4組：更識簪、布仏本音、四十院神楽

……ドSとドMに挟まれた鈴木が不憫過ぎる。

2組に専用機持ち居ないんだからどっちかまわせばいいのに……鈴木の奴に何か恨みでもあるのかあの人？ と、思ったがDSとDMはセットにした方が制御が良いとの判断の結果らしい。

因みに俺じゃない理由はオルコット家に仕えるメイドさんから賄賂を贈ってまで同じクラスにしないでくれと嘆願されたとか。

それ以外の奴ら？ 知らん。

自業自得の話

〈Take1〉

噂に関しては放っておいていいと伝えてから数日たったある日の事だ。

「夏さんの名を語った偽物め！」

プレハブ小屋に帰る途中、赤毛の女の子が草むらから飛び出してきた。

その手にはそこらへんで拾ったであろう棒きれを持っていて、どこぞの不良みたいに振り下ろしてきている。

やり方が原始的だなくやどつかで見た事あるな〜と思いつつ横に避けると思いつき振り下ろした棒は地面へとぶつかり、その先端は折れてまさかの女の子の額に直撃。

額を押さえながら涙目でザコ丸出しのセリフを残して帰っていった。

……なんだったんだ？

〈Take2〉

廊下を歩いてたら、曲がり角に赤毛と人の手が視えた。

良く見ると地面にピアノ線の様な細い糸がある。

小さな溜息をつき、そのまま進むと糸がピンと貼られたのでソレを思いつき蹴り上げると直ぐ隣から小さな悲鳴と倒れる音が聞こえたが全部無視した。

〈Take3〉

訓練を終えてプレハブ小屋に戻ると全身黒タイツの赤毛がシスターに説教されてた。傍には針金らしきものがあつたので、ピッキングでもしようとしたのだろう。

〈Take4〉

生徒会の仕事を手伝わされた腹いせに食堂フリーパス券をパクって久々に食堂に行ったら何か見覚えのある赤毛が給仕してた。

渡されたスープに嫌な予感を感じたので、許可なく同席してきた織斑のと交換しておいた。

食後、織斑はトイレの住人と化したらしい。

〈Take5〉

今日は友人らしき連中と「食事に毒を盛って一夏さんを苦しめるなんて許さない!!」

と襲つてきた。

いや、盛ったのお前だろ。

つてツツコンでも無駄だろうな〜と思いつつ眼を閉じてスタングレネードを投下。

床でもがいてる連中を無視してその場を去った。

少しして、会長さんが苦情を言いに来たが一切話は聞いてない。

だつて聞こえないんだもん。

〈Take 6〉

前回のスタングレネードはちよつとやりすぎとの事で会長さんと話してたら遠くから「くらえく!!」と卵らしきモノを投げる赤毛が居た。

不意打ちの意味がまるでないな〜と揃つて呆れた顔をしつつ避けるとべしやりと山

田先生の顔に命中。なお、卵は腐っていた。

先生が眼鏡を取り外すよりも速く、俺と会長さんは窓から飛び降りて逃げだした。

その後、赤毛がどうなったかは知らない。

因みに話合いの件だが、音が煩かつただけで閃光弾や催涙弾はOKらしい。

〈Take7〉

6日前は不意打ち

5日前は待ち伏せ

4日前は不法侵入（未遂）

3日前は異物混入

2日前は集団暴行

昨日は廃棄物不法投棄

さて、今日は何が来るかなと思えば原点に帰つての不意打ちだった。

ただし、その前に「ISで」が付くが。

顔を真っ青にして慌てる上級生を横に当の本人は「ごめんなさうい。まだ不慣れで誤射しちゃいました☆」とか言ってきたので、

下手な鉄砲、数撃つても当たらないんだな♪

と爽やか笑顔で返したら顔を真っ赤にして「ハアツ!? んなのワザとに決まってるし解れよバカ!!」と勝手に誤爆ってくれた。

よし、言質も取つたし、勝負も向こうから吹っ掛けてきた。

これで心おきなく……

後から鏡らに聞いたら、この時俺は悪魔のような笑みを浮かべてたらしい。

そして新入生らの間で『悪魔降臨!! 悪逆非道は本当だった!!』と噂が流れ、より嫌悪の眼で見られるようになった。

解せぬ。

件の赤毛だが、普通なら退学となるところが織斑の懇願により特別クラス行きとなった。

赤毛は舞い上がる程喜んでいて、もしこれがアイツの狙い通りならとんだ策士だな。

まあ、こつちとしては織斑一派の権限を削れる上に新たにルールを課せられてバンバンザイだが…。

2年目のクラス対抗戦の話

〈一年の部〉

クラス代表に選ばれた候補生（専用機無し）によるふつーの戦いでした。

……いや、だってそれ以外に何を語れと？

んんん、敢えて言うならあれだな。マニュアル通りの戦術と操縦。

型破りも泥臭さも無いから熱意も面白みもかけている。

会長さんも「今年が良い子が多いみたいね」と呟いてた。

〈VSマゾリア〉

事前情報で武器を新調したと聞いてたので警戒してたらBT兵器がでかくなつてた。

砲門が増えてて一斉射撃だと結構ヤバイ威力だ。

さらに砲塔が動くタイプで真横に撃てるとかもう初見殺し過ぎだろ。

おかげで何発かダメージを負ったが、調子に乗ってバカスカ撃って弾切れになったところを猛スピードで駆け抜ける!! ……なんてあからさまな罠に引っ掛かるわけないだろ。

突っ込むふりをして弾道型B T兵器を発射する瞬間に合わせてトリケロス改から取り出した拳銃でミサイルを破壊し、弾道型B T兵器を誘爆させた。

その隙に今度こそ瞬間イグニッション・ブースト加速で一気に近づいて思いつきりぶん殴ってKO勝ち。殴った際に恍惚とした顔だったが気にしない。

〈V S 更識 簪〉

いつも通り思いつきりぶつかって最後に殴りあう。

…のは会長さんからNGを喰らったので適度にやる気を出して終了。

結果は俺の負け。ルールを制限されまくるとやっぱキツイな。

更識も似たような感じで不満一杯といった顔をしている。

それでも一般的には良い試合だったが1年からは「やっぱり所詮は男ね」と影で言われるようになったらしい。

…どうでもいいな。

後日、ちっこい先輩から「君に賭けてたのに何で負けてるんすか!!」と怒鳴られた。

知るか!! 文句あるなら「諸々の事情で本気出すな」、「格闘戦(殴りあい)NG」、「新生生でも理解できる動きで戦え」ってルール出した会長さんに言えや!

〈三年の部〉

ふつーに会長さんが優勝して

ふつーにちっこい先輩が準優勝

ただ、それだけ

〈表彰〉
エキゼンション

布仏の司会進行のもと各学年の優勝者が舞台上上がって表彰されている。

本来なら会長さんの仕事だったんだが、

自分で自分を賞賛とか痛いわゝ

と呟いたところ急遽布仏に変更。

慌てふためく布仏の抗議は、俺と会長さんの殴り合いによって流された。

ドンマイ

ゆつたりと癒されるような眠くなるような進行だったがそれも終わりを迎えた頃、
奴襲撃者が現れた。

ただし、
“地面から”がつく。

これには俺らもビックリ仰天。

外からの襲撃に備えて空を警戒してたのにまさかの地面から。

この為に上級生所詮敗退組&実力者組による海上警備や出力を上げたシールドの意味がまるで無くなった。

ここ暫くの俺たちの努力を返せと叫びたくなる。

しかも――

『空からだと思っただ？ 残念☆地面からでした♪』

とフリップボードを持ってサザエさんのように腰をクネクネしてるのが非常に腹立たしい。

あまりにもイラッとしたので俺と会長さんによるストレス発散によって数十分で無人機を撃破。

そして何事も無かったかのように司会進行する姿に新生はドン引きしたとか：

唐変木な男子の独白 ③

〈思考錯誤の末〉

時雨との関係が上手くいかない。

マドカの時の様に一緒に勉強や運動をしようとか誘ったり、飯を作ってアーンをしたり、一緒に風呂に入ろうとしたり、添い寝をしようとしたりと他にも色々試したけれど全滅だ。

いったいどうすればいいんだろうと考え抜いた結果、時雨の趣味趣向を真似してみることにした。

さっそく時雨が大好物だという麻婆豆腐に挑戦!!

食堂のおばちゃんに麻婆豆腐を作ってもらい、一口食べたらいつの間にか保健室で寝てた。

先生が言うには麻婆の皿に顔を突っ伏してたらしい。どうりで口の中どころか顔面が物凄くヒリヒリ……いや、むしろ痛い。あれって本当に麻婆だったのか？

行き成りアルティメットは無理だ。

徐々に慣れようと今度は辛さ控えめのを頼んだけどそれでもやっぱり辛い。

もう少し辛さを薄めようとソースをかけたら何でかまた保健室に居た。

しかも今度は後頭部がやけに痛いし、額も切れてる。

何でだ？

〈テレフォン〉

あれから幾度か試したけれど麻婆はダメだ。

他に時雨の趣味を知ろうとしても時雨はなかなか捕まらないし、その友達も用事があるとかでどっか行ってしまう。

どうすればいい…。

困り果てた俺は更識先輩に「男友達に相談に乗ってもらいたいから電話させてほしい」と頼み込んだけれどダメの一点張り。

けど、諦めず1週間くらいずっと頼み続けてたら、30分だけ生徒会室の電話を借りることが出来たぜ!!

条件として更識先輩の目の前で話すことって言われたけどそんな事気にしない。

早速、友人の五反田弾に連絡——あれ？ 弾のケー番ってなんだっけ？

結局、呆れた顔をした更識先輩がネットで五反田食堂を検索してくれてそこに電話することにした。

電話越しにだけど徐々に再会した弾に物凄く怒られた後何とか許してもらって相談に乗ってもらってただんど何でか途中で通話が切れたんだ。

もう一度連絡を取ろうと番号押したけど、何度かけても繋がらず。30回目くらいで更識先輩に「私も忙しいからもう帰って」と言われてしまった。

仕方ない、また今度電話させて貰おう!!

ところで、何で更識先輩は引きつった顔をしてたんだろう？

〈眞実は――〉

今日は土曜日で本来なら休みだけど俺たちのクラスは授業!! の筈だったんだけど、担当の先生が病院に行くとかで今日は急な休みになったんだ。

それならばとで時雨の家に行ったら時雨は留守で、代わりに義妹と名乗るカレンさんとダボダボな服をきた少女――のほほんさんが居た。

二人の話を聞いた限りだと、時雨は今日布仏さんのお姉さんとデートに出掛けてて、二人はその間時雨の家を借りて女子会をするらしい。

時雨がデートとな! ここは兄として時雨の恋人に相応しいかどうか見極めたい所だけれど、生憎と俺は学園の外には出られない。

せめてどんな人なのか聞いたら、のほほんさんのお姉さんとの仲はともいいいらし

く、「このまま結婚してくれたらカレっちは義姉妹になれるね」と騒いでた。話を聞いた限りだといいい人そうだな。お兄ちゃんはあるs——ん? ……待てよ。時雨とお姉さんが結婚したらのほほんさんと時雨は義理の兄妹の関係になる。ということとはだ。

のほほんさんかカレンさん!! 俺と結婚を前提につk——

気がついたら真夜中の森で寝てた。
頭がヤケに痛い。

……で、(こ)ど(こ)?

ツンデレ義妹の独白

〈ツンとデレ〉

ある日の土曜日。

お義兄様が朝から出掛けるこのことで部屋をお借りして丸一日女子k——ではなく、クラブ活動をする事になりました。

部屋のセッティングは私と布仏さんがし、買出は他の皆さんでする手筈になっています。

お義兄様の家を訪れると見慣れない私服姿で待っていました。

今日は愛しの方とのデートですものね。いつものカソックではなくそれなりにお洒落な服装なのは点数が高いでしょう。

似合ってるかどうかは全く持って別ですが!!

鍵を受け取る際に「せいぜいフラレないよう気を付けてください」と盛大に皮肉つてあげますとお義兄様は苦笑いを浮かべながら私の頭を撫でます。

……撫で方が雑です。もっと優しく丁寧になさい。女の子の髪はデリケートなんです。

それと何ですか布仏さん。そのニヤニヤした顔は？ 気持ち悪いです。今すぐ止めなさい。

〈眞実は—〉

お義兄様が出掛けた後、部屋のセツティングをしているとノックの音が聞こえました。

少し早い気もするのですがもう着いたのでしょうか？

そんな疑問を余所に特に確かめることなく布仏さんがドアを開けますと

「来ちゃった♪」

顔だけお義兄様とそっくりな織斑おバカさんさんが居ました。

来ちゃった♪ じゃねえですよ。何ですかそのテヘツみたいな仕種は？ 野郎が

やつても気持ち悪いだけですし、それが顔だけお義兄様と似た貴方がやると殺意が湧いてくるので止めてもらえませんか？

それともヤレと言う事ですか？ でしたら遠慮なく顔面を重点的にやらせていただきます。

「カレっち、カレっちもう殴ってるよ〜」

あら、私とした事が……

というか、どうしてこの人はここに居るのですかね？ 確か今日のこの時間帯も授業の筈ですが……

「あくそういえば担当の先生が外の病院に行くつて書類を見たようなく」

ストレスで胃に穴が開いたんですね。わかります。

私も現在進行形でイライラしてますから…。

それよりもそんな情報はもつと早くに教えてほしかったです。

そんな問口を布仏さんとしていると殴られ慣れているのか直ぐに回復した織斑さんはお義兄様が何処かと聞いてきましたので、留守で街に出かけていると伝えます。

その際、布仏さんが「お姉ちゃんデートで帰るのはきつと遅いよ」と居座ろうとする理由を削ります。

ナイスフオロっと言いたいところですが、遅くと言わず一泊すればいいと小声で呟いたのは聞き捨てなりません。

ちよつと奥で物理的なお話をしませんか？

そんな事を話してましたら、黙り込んでいた織斑さんが急に――

「のほほんさんかカレンさん!! 俺と結婚を前提につk――」

――と大変面白くない冗談を言いました、気付いたら布仏さんの手には赤く染まったスパナが、私の手には同じく赤く染まった聖書が握られてました。

「カレツち〜」

…なんでしよう布仏さん。

「お片づけしよつか〜」

…そうですね。

〈因果応報〉

夜遅くに帰って来たお義兄様のせいで女子会解散後も一人残った私はすっかり帰るタイミングを無くしたのでお義兄様の部屋に泊まることにしました。

勿論、布団は快く譲って貰い、お義兄様はソファアームですが何か？

翌朝、気分よく目覚めて朝食の準備をしますと、鍛錬を終えた兄が風呂場から出てきました。

上半身裸で：

一応兄妹とはいえ、人前で半身なのはよくありません。さつさと服を着てください!! とお義兄様を風呂場に押し返したときにふと気付きました。

背中に爪痕がある。

それも正面から抱きついて痛みを堪えるかのような痕が：

無言で愚兄の脛を蹴りましたが素知らぬ顔で、逆に私の方が痛かったです。

後日、皆で食事をしたさいに「愚兄の背中に爪痕が…」とつい口を零してしまいました。後で愚兄は散々にからかわれればいいとかそんな邪な気持ちなんてこれっぽちもありませんよ？

ええ、本当です。我らが主に誓って：

このままお義兄様をからかう流れになるだろうと思つたのですが、予想と反して皆さん顔を朱くして黙り込んでしまいました。

布仏さんに至つては「グスツ、お姉ちゃん。おめでと〜」と大泣きで、終いには「案外速くに姪っ子ができるかもね♪」やら「いやいや、それより先に義姉が増えるんじや」やら「おねくちゃん♪」って私に甘えてもいいんだよ〜」と逆に私が弄られる対象になつてしまいました。

これも全部愚兄のせいです!!

逆に散々弄られ続け、すっかり疲れ果てた私は愚兄の家に突撃して暴れまわり、いつの間にか眠つてしまっていました。

私が寝てる間にあんな事が起きているとは露知らずに――

神に祈らずただ駄弁ってお菓子を食べる会

お菓子大好き：——つてことがあってね

サマーデビル：うわゝマジか：

——時雨さんが入室しました——

〈暴れ疲れて義兄に抱きついて眠る義妹の写真〉

時雨：ナウ!!

部屋替え希望：え？ え!?

委員長：急な言峰君の参加と思いきや爆弾投下!?

サマーデビル：ジューズふいちやつたじゃないのよ!! どうしてくれるのありがとう
ごぞいます!!!

陸上部員です：癒子が欲望に充実過ぎる件

お菓子大好き：わゝカレっち可愛い〜♪

かんちゃん：どうしたの？

時雨：何か急にきて胸元叩かれまくって最後には泣きだしてそのまま寝た

サマーデビル：あー

委員長：あー

陸上部員です：あ、あれかな：

時雨：？

お菓子大好き：うん、まゝ頑張つて義兄ちゃん♪

時雨：は？

陸上部員です：と、とここで言峰君。ガラケーなのにどうしたの？

委員長：あ！ 確かに：

サマーデビル：お姉さんとのデート中にやっぱ買い換えた？（笑）

時雨：いや、PCから疑的にアクセスしてる

時雨：IDは前に布仏から貰ってた

サマーデビル：なぐる。だから返信が速いのね

委員長：言峰君にメール送ると帰ってくるのいつも遅いもんね

かんちゃん：確かに：

時雨：悪かったな

陸上部員です：で、でも!! いつ連絡がつくか解らない状態つてのも何だか良いと思

うよ!!

委員長：おや？　これはまさか：

サマーデビル：まさかのまさか：

陸上部員です：え、いや、これは、ちがつ

時雨：ごめんよ。君の事は友達としか思っていないんだ

陸上部員です：

かんちゃん：ここまでたったの2秒

委員長：ナギく生きてる？

お菓子大好き：かんちゃんのコメントが辛辣すぎる件

かんちゃん：？

部屋替え希望：無自覚か

サマーデビル：辛かったわねナギ。わかるわ：

サマーデビル：泣いてもいいのよ

サマーデビル：さあ、私の胸元において（*・Д・）ハアハア

陸上部員です：警備員さん、この人です

委員長：警備員さん、この人です

時雨：シスター、この人です

部屋替え希望：警備員さん、この人です

お菓子大好き：警備員さん、この人だよ

かんちゃん：さり気なくシスターが混ざってる

かんちゃん：警備員さん、この人です

サマーデビル：ちよ!?

時雨：あ、そうだ。悪い、話変わる

時雨：更識か布仏、会長さん召喚してくれないか

かんちゃん：？

お菓子大好き：いいよ

—お菓子大好きさんが会長さんを招待しました—

—会長さんが入室しました—

会長：あら、何かしら？

〈暴れ疲れて義兄に抱きついて眠る義妹の写真 ②〉

時雨：これがお宅とウチとの兄妹仲の差さ

会長：コロ ス

時雨：(・●???) ドヤア

会長：表でろや!!

―時雨さんが会長さんを退会させました―

部屋替え希望：うわあ：

陸上部員です：ひ、酷い：

委員長：3年寮の方から奇声が聞こえたんだけど：

お菓子大好き：ことみくお嬢様を虐めちゃメツ！　だよく

時雨：虐めて無い。遊んでるんだ！！

サマーデビル：安定の鬼畜外道ね

時雨：どういたしまして

サマーデビル：褒めてないわ

陸上部員です：褒めてないかな

委員長：褒めてないよ

部屋替え希望：褒めてないです

かんちゃん：褒めてない

お菓子大好き：褒めてなよく

時雨：……………。

サマーデビル：ところで背中の爪痕についてだけど

―時雨さんが退出しました―

部屋替え希望：あ、逃げた：

麻婆シスター：おい、ちよつと

麻婆シスター：これはどういう事ですか!!

麻婆シスター：既読ついているのは解ってます!!

麻婆シスター：写真、消せ

麻婆シスター：今すぐに消せ

嫌々ながら戦う話

……どうしてこんなことになったんだろう。

「行くぜ、時雨!!」

「「「頑張れ(つて)、一夏(織斑先輩)!!!」」」

ああ、全部織斑関係のせいだったなちくしょう!!!

ことの始まりはある噂がきっかけだった。

今年は例年通り個人戦によるトーナメントとなり、去年と違いに2年生では多少の困惑があつたものの自らが出せる全力を出し切つたと思う。

順位は俺、更識、カレン、オルコットとベスト4は専用機持ちや候補生が取つたが、上位陣の中に数名の友人が食い入り企業や国からオファーが来たとかで大会後のパーティはいつも以上に騒いで居た。

因みに三年の方は会長さんが優勝。

ちっこい先輩は準決勝前に会長さんに負けてベスト4入りを逃したらしい。

そして新入生の方が……お遊戯会？ってレベル。

去年の騒動のせいで訓練機の使用が難しくなったのに、この間の赤毛の一件でさらに厳しくなってまともに練習できる機会は授業くらい。

平均稼働時間が数時間たらずでまともに動かせるかと言われたら勿論ムリだ。

おかげで大会中に躓いて転ぶ生徒も居て『今年是不作』と言われていろいろらしい。

その評価に「搭乗時間が短いのが悪い」と規則に文句たれたり、規則をより厳しくさせた赤毛に陰口を叩いてるとか……

話を戻そう。

クラス対抗戦では準優勝だった俺が学年別トーナメントでは優勝したことで「外道先輩って本当は強いんじゃないか」、「ふん、どうせ卑怯な手を使ったに決まってるわ!!」といった会話がそこらであつたらしい。

他にも「専用機があるからよ!!」とか「同じ訓練機だったらかが知れてる」とか「同じ条件なら私でも勝てる」とかまあ若干腹がたつがほうっておいた。

そうしたらいつの間にか、

『同じ条件なら神父（笑）より一夏（織斑先輩）が絶対に勝つ!!』

にすり替わっていた。

……何となく、噂が流れた時点で嫌な予感がしたんだ。

案の定、どこからか噂を聞きつけた各国の政府や企業がデータ欲しさに「是非やってくれ！」と言い。

織斑信者が署名活動をしてくれやがったお陰で生徒会も無視できなくなり織斑と”同じ条件で戦う”羽目になったんだ。

さて、その”同じ条件”だが：

●織斑の専用機は用意出来ない為、両者共に学園の訓練機を使用する事。

●織斑が厳しい制限のせいであまりISを動かせない為、言峰は試合当日まで緊急時以外でのISの搭乗を禁止とする。

●1年生への訓練機での戦い方の見本も兼ねるので肉弾戦禁止とする。

●上記と同様の理由で機体のカスタマイズは禁止とする。

●上記と同様の理由で両者の機体は別々の物とする。

……そこまでして勝たせたいか？

なんかもう、色々恥ずかしいんだけど。

因みに、試合当日までの数日間ISへの搭乗が禁じられたが実技の授業が免除されたわけではなく、休みの日に纏めて受ける羽目になった。

先輩とのデートが延期……織斑、絶対に許さん。

あと、山田先生の休日出勤も確定し、暫くの間死んだ魚の眼で授業が行われていた事を追記する。

—— 閑話休題 ——

織斑のログ（襲撃当時を思い出してイライラした）を見直しながら迎えた試合当日。方や卑怯者を倒してと頑張つてと熱い声援を送る織斑派。方や無理やり付き合わされて盛り上がる気すらないその他大勢。うん、温度差が酷いな。

……で、何で無人機前はアリーナのシールド圏外で仁王立ちしてるわけ？
首から下げたフリップボードに『勝った方と戦う』とかエギビジョンのつもりか？
だったらそんなのいいからいつもみたいに乱入してイベントを台無しにしろお願いします!!

んでもって死んだ魚の眼で解説席で傍観してる会長さんは仕事しろ!!

「先手必勝!!」

試合開始のブザーが鳴ると同時に突っ込んでくる織斑。

織斑が乗っているのはラファール・リヴァイブ。

軽い・速い・武器一杯・扱いやすいと初心者向けとして指示が高い機体だ。逆に俺が乗っているのは打鉄。

重い・硬い・何か遅そうと初見の女生徒からはあまり人気の無い機体。

重い或いは遅い機体に対して一撃離脱はまあ悪くは無いだろう。

けどさ……

慣れない機体でそんな事やって、ちゃんと止まれるのか？

「どわっ?!?!?」

案の定、避けたらアリーナの壁に激突。

そして起こる織斑派からのブーイング。

俺、何も悪い事してないぞ？

「クソッ、もう一回!!」

お前は突撃しか能が無いのか？

今回はさつきよりも距離が近かったので予めコールしておいた大刀「葵」で受け止める。

暫くの間、鏝迫り合いを続けているのだが………隙だらけの腹とか超蹴りてえ。

まあ、そんなことしたら反則負けになるからやらないけど。

このままでは埒が明かれないと思ったのか織斑はスラストを吹かそうとする。

結果の見えるパワー勝負にバカ正直に付き合う気も無かったので、加速する瞬間に剣をズラすと機体バランスを崩して墜落しかけてた。

……なあ織斑、どうしてもわからないことがあるんだが

「つてて、何だよ?」

……何でラファールで「葵」使ってるの?

「葵? ああ、この剣の事か。何でつて前に乗ってた機体もスピード近接型で——」

そうじゃなくて、何で軽量型ラファール・リヴァイブの機体で「葵」重い武器を使ってるのかって事だ。

確かに前の機体は専用機もスピード型で武器も刀剣の類이었다。

だから、わざわざ「葵」を出したときは機体を弄ったのかと思つたが……

「なっ!!」チューニング カスタマイズは禁止されてるだろ!」

機体調整の事だよバカ!!

はあ……パワーバランスを崩して近接よりにしたわけじゃない。

葵での一撃離脱はフェイクで拵張領域パススロットから小太刀なりを取り出して連撃するの
かと思えばしてこない。

態々距離を開けてるのに拵張領域パススロットから射撃武器を取り出す傾向すら見えない。

ラファールの強みを悉く潰して何がしたいんだ？ いや、ホントに…

「何って時雨と戦うために決まってるだろ！」

はあ……こちとらずつと（嫌々ながら）ログを見直して対策練つて来たのに対戦相手
は無策で馬鹿正直に突っ込んでくるだけ。

この1週間の苦勞（主にストレス）はどうすればいい…

「…フフツ」

あ？ 何笑ってんだお前……

「いや…時雨にはずつと無視か適当にあしらわれてたからさ、だからこの1週間もの間
俺の事を考えてくれてたと思うと何だから嬉しくて／＼／＼」

……………

この時、会場に訪れていた誰しもが思ったことだ。

“悪魔が降臨なされた”

「ここからは解説&実況でお送りしよう。」

『言峰選手、ショート・イグニッション・ブースト近距離瞬時加速で一気に近づき織斑選手を斬ったあ!!』

『斬ったと言うよりも、アレは峰打ちだから打つに近いわね』

『そして機体を旋回して葵の峰で打って、打って、打って、打って、打って、打ちまくる!!』

『何処まで打ち上げるのかしら?』

『おっとここで脳天チョップならぬ脳天峰打ち!!』

『一度体を捻って回転の威力を載せてるから見てる以上に痛いわよ』

『織斑選手、ここで落下!? いったいどうした!!』

『さつき頭を強く打ってたから軽く脳震盪を起こしてるみたいね』

『それに対して言峰選手、手に持った葵に乗ったあ!? そしてそのまま瞬時イグニッション・ブースト加速で織斑選手を追う様に落下!! その様子はまさにギロチン!! これは恐い!!』

『まんま処刑ね』

『止めなくて良いんですか会長?』

『止めると思う?』

『ですよ〜』

この後、一人の男子生徒が胃の中をぶちまけることとなり、後に“ギロチン降ろし”と名付けられた戦法だが、公式・非公式問わず使用禁止となる。

そして無人機だが、

「機体乗^スり換^テえてくるからそこで待^イってろ」

『ギギ……（ア、ハイ……）』

ストレス発散の捌け口にされボロ雑巾のようになったとか…

次代の話 ①

〈変わった日常〉

つい最近まで陰口悪口を叩いてた後輩共^{速中}が途端に猫撫で声で「せんぱうい」と声をかけてくるのをどう思う？

ハッキリ言わせてもらおう。

ウザイ。

女子寮とプレハブ小屋は正反対の位置なのに家を出てすぐに「わっ先輩偶然ですね！

一緒に登校しませんか？」と待ち伏せてたり

昼近くになると「お弁当作ってきました♪」とクラスに突撃してきたり

図書館で調べ物をしてると「わからないところがあるんですけど良いですか？」と許可も無く隣に座って密着してきたり

アリーナに行くと「先輩、ISの操縦について教えてください♪」や「一度でいいから専用機に乗ってみたいです」とかわいこぶったりと代わる代わるやってくるのでほんつと〜〜にウザイ。

しかもこの事を布仏が先輩に報告したらしく電話で「若くて可愛い子に囲まれていい

ですわね」と冷や汗がダラダラ。

誤解だと数時間近く話したがそれから暫くの間連絡が取れなくなり、どうしたものかと布仏に相談したら疲れた顔で「爆発しろ」と言われてしまった。

何で？

〈呼び出し〉

先輩との誤解が何とかとけてから数日、会長さんから『昼に生徒会室に来てほしい』と連絡があった。

どうせまた人手不足&ストーキングで溜まった書類の手伝いだろう。

此方としても恩を売れるし、最近オーバーしがちな外出日数を誤魔化す為にとこれに了承。

で、昼に生徒会室に行ってみるとだ。

「生徒会長になりなさい」

うん、ヤダ。

〈理由〉

とうとう職務を投げ出したかと思つたがそうでは無いらしい。

長つたらしい話を要約すると

『卒業まであと半年だからそろそろ引き継いで残りは楽したいわ』

「楽したいとか言つてないわよ!!」

でも思つてはいるんだろ?

「……………」

沈黙は肯定ととるぞ。

とうとうか何で俺なんだ?

学園や他人生徒を護るつもりなんて無いし、そもそも人望がミジンコも無いから誰も言う

事聞かないだろ。

「言つて悲しくないかしら?」

いや、別に……俺なんかよりも更識の方が断然良いだろう。

あいつはクラスをよく纏めてるし普段の割と紳士的な行動から学年問わずに人望・信

頼・尊敬が厚い。

そして何よりも更識が後任に決まれば放課後の空き教室で二人つきりであれこれ指

導できるんだが……

「っ！」

勝ったな。

「……………甘いわ。蜂蜜よりも甘いわよ時雨君!!」

?

「既に前もって簪ちゃんに同じように話して『うわっこの駄姉、とうとう職務を実妹に押し付けるまで墜ちたか』って顔をされてるからそんな誘惑に負けないわ!!」

……………言つてて辛くないか?

「……………思つてた以上に傷ついたわ」